
インフィニット・ストラトス 絶望の海より生まれしモノ

高郷 葱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 絶望の海より生まれしモノ

【Nコード】

N5136U

【作者名】

高郷 葱

【あらすじ】

全ては『こんなはずじゃない世界』を変えるために

あらすじはネタバレになるのでこの程度で勘弁してください。

「現在更新速

度低下中

#00:すべてのハジマリ(前書き)

折角一日なので & 投稿を始めないと『書かなきゃ』意識の湧き
具合が鈍い為、始めちゃいました。

宜しければお付き合いください。

#00:すべてのハジマリ

かつて、人類を二分した戦争が起こった。

とある天才が発明・開発し、あっという間に兵器転用された宇宙開発用パワードスーツ>インフィニット・ストラトス。

『女性にしか使えない』という欠点を抱えた最強兵器は極度の『女尊男卑』という社会を生み出し、是正されないまま時が過ぎる。

その先に待っていたのは、『擬似IS』とも言える、パワードスーツの開発とそれを用いた一斉蜂起であった。

それは人類を『男』と『女』という二つの種族に分けての大戦争へと発展した。

その争いの中で、ISの中枢部品であるコアを作成できる唯一の存在を失った『女』は擬似的にコアの働きを代行できる人間を生み出した。そうし、

単独では代を継ぐ事が出来ない男もまた、その役割を担う存在を作りだしてゆく。

人が人を創るといふ、『倫理』が綺麗事にしかない世界でその

思いは生まれました。

『どうして、こんな事になったのだろうか』

篠ノ之束がISを開発したから？

ISが、女しか使えないまま放置されたから？

女尊男卑がまったく解消されなかったから？

それとも……………？

そして思いは集まり、『彼ら』は『こんなはずじゃなかった世界』
を変えるために動きだす。

そして、歯車をかけ違えるために一凧の風が旅立つ……………

#01：クラスメイトは『ほぼ』全員女(?) (前書き)

色々と伏線の為に事前情報はカットされていますので、突然湧いた単語が結構出てきます。

が、解説出来る範囲は後書きで解説を入れますので…

#01：クラスメイトは『ほぼ』全員女(?)

「side：織斑一夏」

『運命の女神とやらが、本当にいるのなら、ソイツは極上の性悪だ』
その言葉の意味を噛みしめながら、俺は二十九の視線ビームに晒されていた。

きつとピンク色であろうそのビームは俺の精神値をガリガリと削り、胃粘膜にダメージを与えてゆく。

正直、誰か代わって欲しい。

ついでに、六年ぶりに再会を果たした幼馴染、篠ノ之箒に視線で助けを求めたところ、視線を逸らされて、知らんぷりされた。

ちくせう、それが窮地に立たされた幼馴染への対応なのか？

「らくん、」

これがアキ兄だったらどうなるか……………

なんだろう、父親然として微笑んでる姿しか想像できない。

「斑くん」

ああ、アキ兄というのは

「織斑一夏くん!」

「ッ……は、はいッ！」

我に帰って見たらフルネームで呼ばれており、自覚するほど大慌てな俺は思わず大声で返事& a m p ;起立。

したら逆にびつくりした副担任の山田真耶先生はぺこぺこ謝りながら『自己紹介してくれ』と言ってきた。

そうか、今は自己紹介中だったのか。

「ボーっとしててすみません。自己紹介しますから、落ち着いてください。先生」

「本当ですね！？や、約束ですよ！絶対ですからね！？」

どう見てもテンパってる山田先生は俺の手を取って詰め寄ってくる。

さっきの『大声で返事』& a m p ;『起立』で余計に目立って注視度が上がってしまった上でこの仕打ちかよ

とりあえず、『自己紹介するから』と言って手を放してもらい、後ろを振り向く。

二十九対の『ピンク色の視線ビーム発振機』が俺に向いて絶賛照射中なのを真正面からみて、流石に引きたくなる。

さっき見捨ててくれた筈もこっちをちらちら見てるし。

目があつて、ぷい、と逸らされた。

あ、ちくしょう。また見捨てやがったぞ、この幼馴染。

万事休すか……………

仕方がない、腹をくくろう。

「えーっと、織斑一夏です。そこにいる、窓際一番前の席の篠ノ之箒は幼馴染で、苗字でわかるかもしれないけど織斑千冬は俺の姉です。まあ、よろしくお願いします。」

こんなもんで無難に済ませられるか？

突然巻き込まれた箒は非難の視線を向けてくるが無視。さっきこつちからの『ヘルプコール』を無視した仕返しだ。

儀礼的に頭を下げ、上げた期待のこもった視線と『もっと喋れ』的な空気が教室中に溢れかえっていた。

一部では『あの千冬様の弟！？』とか『いいなあ、代わってほしいなあ』とか言ってるのが居て、また一部は箒に『本当？』と話しかけているが。

こんなもんでいいだろ！？

行き成り趣味とか語られても俺、ドン引きするぞ？

それにあんまり喋る事無いし、同性にしか通じないネタばかりだと退屈させそうだし……………

ダラダラと背中冷たい物が流れる。

これで『以上です』だなんて言ったら一気に崩れそうだ。

「……………これ以上、何を喋れと？」

返事は無い。返事の代わりに期待に満ちた視線ばかりが増える。

うーむ、どんなネタがいいのか……………

パンツッ！

「いつ　　！？」

ネタに尽き、言い淀んでいたら背後からいきなり頭を叩かれた。しかも、手じゃなくて何か堅い板状の物で。

嫌な予感しかしないまま、恐る恐る振り向くと『(黒のスーツにタイトスカート) + (すらりとした長身) + (よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン) + (組んだ腕) + (狼を思わせる鋭い吊り目) + (よく知ってる打撃の威力)』…

「ち、千冬姉!?!」

パンツッ！

「織斑先生と呼べ」

トーン低めの声。

何故に職業不詳で月に一、二度しか帰ってこない俺の実姉がここにいるんだ？

「あ、織斑先生。もう用は終わられたんですか？」

「ああ、山田先生。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」
行き成り明るくなる山田先生と、俺はここ最近聞いたことがない優しげな声の千冬姉。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

山田先生に教卓前を譲られ、千冬姉がそこに立つ。

なんだか学校の先生というよりは士官学校の教官と言った方がしっくりきそうだ。

士官学校だなんてどんなふうなのか知らないけど。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言う事はよく聞け。いいな」

なんとという暴力的宣言。

これは教官というより鬼軍曹だ。

だが、そんな感想を抱いたのはこの教室の中で俺らしく……

「キヤー　　ッ！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様の為なら死ねます！」

e t c . e t c .

黄色い悲鳴を皮切りにしたきゃいきゃいという女子特有の騒ぎ声に千冬姉はかなり鬱陶しそうな顔になる。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。呆れを通り越して感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

と、本気で言う千冬姉。

普通だったら、『何、あの言い方』的な反感を買う。
少なくとも、俺ならこんな事を言う担任相手には、そう思う。

だが…ここはIS学園で相手は『世界最強』の名をほしいままにしたまま、突如現役引退をした『あの』織斑千冬だ。

「きゃああああ！お姉様っ！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけ上がらないように躡して！」

それすらも『格好良く』見えてしまい女子たち（一部例外有）は更にヒートアップ。

俺は自分のクラス担任が千冬姉だったことに混乱と驚愕の底に堕ちてた筈なんだが、女子の黄色い声に逆に落ち着いていた。

人間、自分より強い感情が近場にあると相対的な意思が働いて落ち

着くつて本当なんだなあ…

「で、挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「い、いや、普通にしたら『もつと喋れ』と無言の圧力を…」

パアン

「きょうし年上には敬語を使え」

「…はい、織斑先生」

ここで千冬姉と呼んでもう一撃はご免だ。

「さあ、ショートホームルームSHRは終わりだ。諸君にはISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後は実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても、返事をしろ。私の言葉には返事をしろ。」

うん、やっぱり鬼教官だ。

…ん？ドアの外に誰がいるのか？

「織斑先生？外に誰かいるみたいですけど…」

山田先生が気付いてツツコミを入れてくれた。

良かった。生徒の俺がやったらまず『スパアン』だろうから。

とりあえず座っておこう。

「ん？」

と、千冬姉が廊下にいる恐らく先生と二、三言葉を交わしたのちに弟である俺すら見た事のない『困惑と驚愕の混ざった表情』をうかべて戻って来た。

「織斑先生、どうしたんですか？」

「ああ、諸事情で遅刻した生徒が一人、いたようで… 入れ」

千冬姉の命令に従って、ドアが開いて外にいた『入学式遅刻者』が入って来た。

入ってきて、その途端に息を飲む声と緊張感が教室を満たした。

そして、その緊張感の糸は誰かの

「…男の子？」

という呟きを以って、ぶった切られた。

そう、そいつは俺と同じデザインの 男子用の制服を着ていたのだ。

”そいつ”、は千冬姉の横：教卓の横に立ち、俺たちの方を向く。

「……………き、」

「き？」

「きゃああああああああああああああああ！！！」

「男の子よ！二人目の男の子！」

「しかも可愛い系！」

「織斑君みたいなワイルド系なのもいいけどああいうのもいいよね」

「なんて名前なのかな」「可愛い系？それとも強そう系？」

「飛び級かな、それともリアル男の娘なのかな」

「これは、今年の”薄い本”のネタは決まりね！」

顔まではつきりと全員が把握した瞬間、黄色い悲鳴が大爆発を起
した。

それも千冬姉といい勝負の。

同時に、困惑と驚愕で混乱していた俺の頭は周囲の熱気に当てられ
て冷静になる。

冷静になれば成る程、その教卓前に立つ人物がとある人物にしか見
えなくなってくる。

「アキ兄？」

だいたい十歳くらい年上の、血のつながらない義兄^{あに}。

俺にとっては兄であり、父親でもある、千冬姉や篝の姉である東さんの兄貴分。

十年ほど前に、高校の交換留学で渡欧して、そのまま行方不明になっってしまった…

いや、待て。

確かにアキ兄はゴツイ系じゃなくてどちらかといえば美形タイプで千冬姉とかと似た、所謂中性的な顔だった　　と思う。

けど、当時三歳くらいだった俺が肩車してもらったら一八〇センチなら余裕で通れる敷居をくぐれなかった。

つまり、三歳児の座高を足しただけで一八〇を超えるほどの高身長だった、と言う事だ。

それに対して、目の前にいるそいつは女性としては大柄な千冬姉はともかくとして、小柄な部類に入る筈の山田先生よりも多少大きいくらいなのだ。

男子としてはかなり小柄な部類に入ると思う。

ぼーっと眺めていると俺の視線に気づいたのかニコリ、と笑いかけてきた。

優しげな、慈しむような笑み。

！

思わず『可愛い』と思ってドキッときた俺は悪くないと思う。

「きゃー！可愛いっ！！」

「はっはっはっ！」

「お持ち帰りしたいっ！」

ついでに、同射線上…つまり俺の左右の列の女子も琴線に触れたらしくかなりの反応。

千冬姉はやれやれ、と言わんばかりでその子も苦笑い、山田先生はオロオロ。

そうこうしているうちにチャイムが鳴る。

よくよく考えると自己紹介が『お』までしか終わって無いぞ？あとで適当にやっておけて事か？

「さて、バカ騒ぎは終わりだ。授業の支度をしろ。…千^{せん}凧は空いている席があるからそこに座れ」

ふーん、あの子『せん』って名前なんだ。

はてさてどういう字を書くのやら。

「それでは、授業を始めます。テキストを開いてください」

山田先生が教卓前に移り授業開始を宣言して初日の授業が始まった。

#02：エンカウント

「side：一夏」

「俺は織斑一夏。こっちは幼馴染の篠ノ之箒。えっと…せんな、でいいのか？」

まったくもってちんぷんかんぷんな一限と二限が終わった休み時間。

俺は箒と一緒に例の『二人目の男子』の所にやってきていた。

何故、箒も一緒かって？

箒も、気になるんだとき。

まあ、アキ兄は俺と箒と千冬姉と束さん、みんなの兄貴だったから当然といえば当然だけど。

「空。^{そら} 千風空^{せんなそら}だよ」

何というか、どこかで魔王とか、図書館司書長とか、無感情に見えて可愛い物好きかつ乙女な魔導杖使いとか、愛情表現が関節技な独逸帰りの帰国子女とかやってそうな声だな。

どうでもいい上に訳分からないけど。

「ああ、よろしくな。空」

”千に風ぐ”で”せんな”、”そら”はまんま空と書くらしい。

「よろしく。織斑くん、篠ノ之さん」

「水臭いから一夏でいいぜ。篝もいいだろ？」

「あ、ああ」

「なら、改めて。よろしく、一夏、篝」

ほにゃっ、と毒気のない笑顔に俺も篝も一瞬だけだけど我を忘れそうになった。

なんだろう、この可愛い小動物チックな笑顔は。

「不躰で悪いが、『マキムラアキト』という人を知っているか？」

と、篝が尋ねる。

これに関しては俺も気になる処だ。

「んー」

思い出そうとしてるのか顎に手を当てて上目になる空。

なんかいちいちそういうポーズが様になる。

主に可愛い系の意味で。

本当に同性なのが少し心配になるくらいに。

「ちょっとよろしくって？」

そこに、突然声が掛けられた。

三人そろって声の主の方を見るとそこにいたのはロールのかかった金髪の、白人系の女子。

まあ、ここには俺と空以外男子はいないけど。

その金髪縦ロールは白人特有の青い瞳を釣りあげさせて俺と空を睨んできていた。

「聞いてますの？お返事は？」

「あ、ああ。聞いてるけど、どういう用件だ？」

人が話してるのを態々中断させるほどの用件だろうか。そうになると、俺としてはまったく心当たりがない。

なんせこの女子、初対面だ。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光荣なのですから、それ相応の態度と言うものがあるんじゃないのですか？」

ん、日本語に間違い発見。

『光荣』って使いたいなら『光荣な事』と言うべきだな。

あと、丁寧な言葉遣いとしては『あるんでは』じゃなくて『あるのでは』だ。

まあ、それはともかくとして俺は『厄介なのに絡まれた』と内心で舌打ちをした。

ISが現れてから、世間は急激に女尊男卑に傾いた。そのせいでこう言う『女だから男より偉い』と思い込んでる手合いが増えた。

今では町で見ず知らずの、それこそすれ違っただけの女に使い走りにされる男も居るくらいに。

こう言う手合いは爆発物だ。だからと言って下手に出るのは俺の趣味じゃない。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

そもそもで自己紹介は『あ』から『おり』までしか出来ていない。知ってる方がごく少数だろう。

「わたくしを知らない!?このセシリア・オルコットを?イギリス代表候補生にして入試主席のこのわたくしを?」

へー、セシリアって言うのか。

「……………空、代表候補生ってなんだか知ってるか?」

俺は小声で空に尋ねる。

自慢じゃないがIS関連の知識なんぞ全く持ってない俺としては未知の単語だ。

「あ、あ、あ、あなたっ!本気でおっしゃってますの!?!」

「モンド・グロッシン国際大会に出場する国家代表の、その候補の事だよ。つまるところ

るの国を背負うエリートって事」

おお、成る程。だから『代表』の候補生なのか。そして大爆発したセシリア。どうやら聞こえていたらしい。

「し、信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

失礼な。

「で、そのエリートな代表候補生サマが何の用なんだ？」

「そう！エリートなのですわ」

…こいつ、人の話を聞かないタイプか？
ぴしっ、と俺に指を突き付けてくるセシリア。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることでも奇跡、幸運なのですわよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか、それはラッキーだ」

「……………馬鹿にしていますの？」

「一夏、嘘をつくならもう少しマシにやれ」

流石に筈からもツッコミが入った。

「大体、あなたESについて何も知らないくせに、よくこの学園に

入れましたわね。唯一男でISが操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っただけ、期待はズレてしたわね。」

「…俺に何かを期待されても困るんだが」

「まあ、でも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

へえ、イギリスじゃこう言うのを『優しい』と言うのか。

今度誰かがイギリスに行く時は教えてやれねば。

「ISの事でわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートなのでから」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「………は？」

確かそうだ。

がむしゃらに突っ込んできたからそれを避けて、振り返り際を狙うつもり。だったのに相手はそのまま壁に激突して自滅しちまった。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

驚きに目を見開いたセシリア。

どうやら向こうにとっては相当ショッキングだったらしい。

「女子では、ってオチじゃないのか？」

「っ、つまりわたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あ、あなたも教官を倒したというの!？」

「まあ、一応、多分。」

どちらかと言えば『自滅』だが。

「たぶん!？たぶんってどついう意味なのかしら!？」

「えーと、とりあえず落ち着けよ」

「こ、これが落ち着いて居られ」

キンコンカーンコン、

「あ、チャイムだ」

空の能天気な声。だが、その声が伝える内容は端的に言えば”時間切れ”だ。

三時限目開始のチャイム。

それはもつすぐ担当教員がやってくるという事だ。

「ッ　　!また後で来ますわ!逃げないことね、よくって!？」

全然良くない。

けど、それを言ったらまた怒りそうだから黙っておこう。

「一夏。一夏も席に戻った方がいいんじゃないのかな？」

「おっと、そうだった」

気付けば箒はもう自席についている。

このままじゃ千冬姉の出席簿アタックを喰らってしまう。
早々に戻らねば。

「それじゃ、また後でな」

それだけ言ってから、俺は自分の席に戻る。

丁度座ったタイミングで、千冬姉と山田先生が教室に入ってきた。

#03：火種投下

「side：篠ノ之箒」

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

始まった三時間目は今までの二時間と違って山田先生ではなく千冬さんの授業だった。

あの千風空という人物の事が気にならないでもないが、あの『アキトさんを知っているか?』という問に対する様子からして望みは薄いだらう。

だとすればまあ、普通の級友として付き合えばいいか。

「ああ、その前に来月に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬さんは言った。

「夏は例に漏れず『訳が分からない』という顔をしていて、空の方は相変わらずの微笑みを浮かべている。」

「クラス代表とは、まあ書いて字の如く、そのままだ。対抗戦だけではなく生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力を測るものだ。今の時点では大した差は無いが競争は向上心を生む。一度決まったら一年間変更は無いからそのつもりで。」

自薦他薦は問わないぞ。やる気のある奴はいないか」

「はいっ、織斑くんを推薦します」

「あ、私もそれがいいと思います」

「私は千凧くんを」

「あ、私もー」

途端に始まった推薦の嵐。

私としては誰がやっても構わないと思う。

だが、なんだろうか。

この、これからひと悶着ありそうな嫌な予感は……

「では、候補者は織斑一夏と千凧空。この二人でいいか？」

「お、俺!？」

立ち上がって妙な声をあげる一夏。

あいつの事だ。

大方、『織斑姓が自分以外に居て、そっちが推薦されている』とでも思っていたのだろうか。

「織斑、席につけ。邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら票決に移るぞ」

「ちよ、ちよっと待った！俺はそんなのやらないし、空だって突然言われたら」

「私は自薦他薦問わないと言った。選ばれた以上覚悟しろ」

「い、いやでも」

なおも食い下がろうとした一夏だが、その攻防は別の方向から幕はとじられた。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

机をバンつと叩いて立ち上がったのは、先ほど一夏に食ってかかってきていた、
確かセシリア・オルコットだったか。

「そのような選出は認められません！大体、クラス代表が男だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「…だったら自分が立候補すればいいんじゃないのかな？」

空の呟きが私の所まで聞こえてきた。

私の周囲で何人かがうんうん、と頷く。

私も同意見だ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然！それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までES技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

更に白熱してまくしたてるオルコット。

それにしても随分な言い分だな。

私は沸点はそれほど高い方ではないが決して低くは無い。
それでもふつつつと怒りが込み上がってくるのは解る。

今、オルコットがしているのは一夏個人を超え日本人全体に対しての侮辱だ。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれは入試主席であるわたくしですわ！」

興奮冷めやらぬ様子、いやますますいきり立つオルコット。

黙って言われるままになっている一夏も大分頭に来ているようだ。

私を含む日本国籍の生徒たちもオルコットに対して怒りの含まれた視線を投げかけている。

ただ唯一、千凧だけが黙って、目を瞑って聞いている。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはならない事自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

そして、我慢の限界に達しそうになった時

『ガンッ！』

ビクッ

不意に、私の斜め後ろで大きな音がした。

近場にいた者は皆、驚いて首をすくめ、演説を打っていたオルコットも突然の事に黙る。

千冬さんが驚いて意外そうな顔をして見開いた目に写っているのは、空。

女子と大差のない小柄な体の何処にあるのかが疑問なほどの迫力に気押されたのかオルコットは言い淀む。

「さて、Ms・オルコット。落ち着いた処で廻りを見てみようか」

「わたくしはれい　　ッ」

恐らく、冷静だと言いたかったのだろうが、思わず身を竦めるオルコット。

それも当然だ。

このIS学園における国籍としては日本人がおよそ五〇パーセント。さらに言えば担任が元日本代表、副担任が元日本代表候補生。

そんなクラスで『日本という国に対する侮辱』をしたらどんな事になるか。

当然、クラスの半数を占める日本人の生徒の**鬨聲**を買う。

今、オルコットには二〇余の敵意のこもった視線が向けられている筈だ。

そんな中で侮辱の続きができるのはよほどの日本嫌いか、役者くらいだ。

オルコツトは代表候補生であつても役者でもない。
ただ、熱くなつて言いすぎただけなのだろう。

だから、敵意をぶつけられて言い淀む。

中には空の放つ殺気じみた敵意も含まれていて、その射線上に居合
わせてしまった山田先生が涙目になっている。

「一夏、言いたいことがあるなら言つていいよ。あれだけ盛大に言
われたんだ。同じ事をされても文句は言えないよね、MS・オルコ
ツト？」

「あ、ああ。 イギリスだって、島国だろ。それに極東とかつて
地図の見方次第で変わるものじゃないのか。日本の地図じゃ、イギ
リスは西の端だぞ。」

ただ、淡々と並べる一夏。

だが、少しばかりくすぶつていたものに火がついたようだ。

「まあ、俺が猿呼ばわりは…まあ置いておく。実際、俺はISにつ
いてはここにいる誰よりも素人だからな。だがな」

一夏が、真つすぐオルコツトを睨みつける。

「千冬姉や篝たちを同じように扱われるのは我慢ならぬんだよ」

ドキリ、と鼓動が早くなる。

一夏のヤツ、あんな小恥ずかしいセリフを真顔で……………

「ッ

「！」

オルコットは、何も言えない。

「…わかったかな？自分が何をしでかしたのかを。まあ、僕からも言わせてもらえば『ISを使う』という条件が同じ時点で女だから強いとか男だから弱いだなんて、言えないんじゃないのかな」

そっだ。

何故、世間が女尊男卑に傾いたか。

それは女の側にISという従来の武力全てに勝る力があるからだ。

逆に言えば、男の側でも力さえあればパワーバランスは元に戻る。

むしろ、生身では男の方が強いだろう。

まあ、千冬さんという例外は居たとしても、彼女とて最初から強かった訳じゃない。

「っ…！け、決闘ですわ！」

「勝負は一週間後の月曜日。放課後に第三アリーナで行う。代表者決定の為の総当たり戦だ。三名とも準備をしておけ」

千冬さんがパン、と手を打って『話しはここまでだ』と言外に言う。話を終わらせるタイミングを見計らっていたのだろう、問答無用で終わらせて授業を始める支度を整えてしまう。

「それでは授業を始める。」

テキストを取りだし、ノートを開く。

春の日差しが差し込む教室は、二時間目までよりも温かく感じた。

#04: Girl meets " Sky ";

「side:一夏」

「うう、なんでごうもややこしいんだ……………」

放課後、俺は教室でぐったりとしていた。

何と言っても授業についていけない。

まあ、入学前に『必読』と書かれてた冊子（但しタウンページとい
い勝負の厚さ&一枚一枚はかなりのペラ紙）を間違って捨てた俺が
悪いんだけど。

「…空の方は空の方で『この程度、常識です（キリッ）』みたいな
顔してるし……………」

アレか？頭の構造が違うのか？

だが、教えてもらうには逆に都合だ。

よし、あとで空にISについて教えてもらえるように頼んでみよう。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

呼ばれて、声の主の方をみたら副担任の山田先生が書類片手に立っていた。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そういつて、部屋番号の書かれたメモと鍵を渡してくる山田先生。

「あれ？俺の部屋、決まってるじゃないんじゃないですか？前に聞いた話だと一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割を無理矢理に変更したらしいです。織斑くん、そのあたりの事って政府から聞いてます？」

最後の方は声を小さくして耳打ちしてくる山田先生。

そうか。やっぱり、国そのものが関わってるのか。

まあ、俺が男なのにISを扱えるって判った途端、監視と勧誘が凄かったからな。

ニユースで流されてから家にはマスコミと研究機関だの各国の大使だのがやって来て大変だった。

驚いたのは遺伝子工学だかの専門家が来て『生体を調べさせてほしい』だなんて言ったヤツが居ただけで、三日後くらいに斬殺死体になって東京湾に浮かんでたって事件があった事だ。

傷痕はどう見ても刀傷にしか見えないのがただ一つ。強引に俺を連れ出そうとしたヤツも何人か同じ目に遭っていたらしい。

二ユースでは『世界初の男性IS操縦者に害なす者を狩る現代の刺客現る』みたいに騒がれてたっけ。

それ以来、無茶な勧誘とかはなくなった。

誰も、俺に無茶なちよっかいをかけて斬り殺されたくはないだろう。まあ、結果的に事件は迷宮入りした。

国としても俺に無理な手出しをさせないいい口実になるからと捜査しなかったみたいだ。

ちなみにこの事件の話聞いた時、犯人候補に千冬姉や箒の姿が脳裏に浮かんだのは秘密だ。

「そう言う訳で、政府特命もあつて、とにかく寮に入れることを最優先にしてみたいです。一ヶ月もすれば個室が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「……あの、山田先生。耳がくすぐったいんですけど」

教室内外にあつたいいくつもの視線が興味津々と言わんばかりに向けられて物凄く居心地が悪い。

「あつ、いやつ、これはそのつ、別にわざととかではなくてですね！？」

「それは判ってますけど…荷物は一度家に帰らないと準備できないですし、今日もう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいてやった。有り難く思え。」

脳内BGM『帝国のマーチ』（ダースベイダーのアレだ）を引っ提
げて千冬姉登場。

ちなみにもう一曲、『ターミネーターのテーマ』も千冬姉のテーマ
として登録されている。

「ど、どうもありがとうございます」

…なんとなく、嫌な予感がした。

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があ
ればいいだろう」

「……タンスの中身をひっくりかえしたりしてないよな」

「……………」

スパアン

無言で頭を叩かれた。

どうやら、凶星らしい。

ああ、家に帰ったら部屋の片づけが待ってるのか…

モノによってはアイロンのかけ直しだし…

「じ、じゃあ、時間を見て部屋に行ってください。夕食は六時から
七時、寮の一年生用食堂で取ってください。あと、各部屋にシャワ
ーがあります。大浴場もありますけど、今の所は使えません」

「え？なんでですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂にはいりたいのか？」

「あー、すっかり忘れてました」

そついやここは国立ISS学園。

女子高ではないが、ほぼ女子しかない事実上の女子高だった。

空が居たから他にも何人か、男性職員とかいるかと思ってた。

「おつ、織斑くんつ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だつ、駄目ですよ！」

「そりゃ…普通駄目でしょう。倫理的にも。流石に諦めますよ」

変態認定をされて大浴場に入るくらいならそれくらいは仕方ないだろう。

「ええっ！？女の子に興味がないんですか！？それはそれで問題のようだな…」

あれ？この人、人の話を聞いてないぞ。

きやあきやあ騒ぐ山田先生の言葉が伝言ゲームよろしく伝播したのか電波の送受信が行われたのかは知らないけど廊下では婦（腐？）女子談議が始まっていた。

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら」

「それはそれで、いいわね」

「中学時代の交友関係を洗って！すぐにね！明後日までには裏付けをとって！」

「女の子にしか見えない千凧くんと織斑くん：ジュルリ」

「いいえ、攻め立てる千凧くんに”なかされる”織斑くんもアリじゃない？」

何の話だ

とはいえ、俺が寮に入れられたとなると空も寮暮らしになるのだから。う。

後で探してみるか。

結論 > 結局、見つからなかった。

仕方ないから明日にでも訊いてみる事にして部屋に行ったらシャワー後なのか、しつとりと濡れた黒髪が艶やかな箒に遭遇した。

もしかして、箒が同室なのか？

思わず山田先生に確認をしたら本当に同室だった。

……………もってくれよ、俺の理性。

「side：更識簪」

「判りました。打鉄式 はこちらで引き取ります」

突然の電話。

それは私の専用機 打鉄式式 の開発凍結を伝える連絡だった。

なんでも、開発元の倉持技研が、私の打鉄式式と別口で、別の研究所と共同で開発を進めていた機体の方を優先する必要があるが出てきたため打鉄に人を割けないとの事。

それだから、私は『未完成のISを引き取る』という選択をした。

ISを作るのは易しい事じゃない。
普通は出来ない。

けど、私が、私として…… 『あの人の妹』 じゃなくて 『更識簪』
として見てもらうには、これをやり遂げるしかない。

「……はい、量子データは明日届くんですね？判りました」

全ては明日から始まる。

私が、姉さんの影から脱却する為にも……

コンコン、

ふと、部屋のドアがノックされた。

この部屋はいまのところ私一人。
もう一人収容できるハズの部屋。

だからきつと同室の人だろう。

「…開いてます」

ガチャ、とドアが開く。

現れたのは、まるで女の子みたいな男の子だった。

彼が、噂になつてる織斑一夏なんだろうか…

「ああ、お邪魔するよ。」

「……………あなたは？」

「同室、なのかな。僕は、千風空。」

「えっと…更識簪。」

「簪さんね。それじゃあ、よろしく」

そう言つて、左手を差し出してくる。

握手なら、右じゃないのかな……………

「あ、ごめん。右手はちょっと訳有りで…まあ握ってもらえば判るけど…」

視線から悟つたのか今度はそう言いながら右手を差し出してきた。

その手は、生きてる人間の物とは思えないくらい冷たかった。

「え？」

「ちょっと、色々あってね。義手なんだ」

だから、左手を…

「…でも、そうは見えない」

義手だって、触るまで気付かなかった。

「まあ、色々気は使うからね。ベッドはどっち側を使えばいい？」

「あ、私は手前側を使ってるから奥のを…」

「了解」

鞆一つで引越し終了の彼。

ふと、私の目にとまったのは…

「それ、空中投射ディスプレイ？」

「そうだけど……………」

「お願い！それ、貸して！」

無茶な『お願い』だとは自分でも思う。

けど、ISの組み立てをやるとしたら、どうしてもあった方がいい。

「えっと、何か訳有り？」

よかったら話してごらん、という彼。

まだ、出会って数分しか経ってないけど、まるで頼れる先生とか先輩の前にいるような気分になって私は開発が事実上の中止になった打鉄式を引き取って自分で組み立てるという話をしていた。

「成る程ね」

そう、腕を組みながら言う彼。

「わかった。僕も協力させてもらつよ」

その答えにホッとする。

これで『身の程知らず』みたいな事を言われたら……って少し怖かった。

「とりあえず、ディスプレイは貸すよ。」

「本当に、いいの？」

貸してなんて言うっておきながら、本当に貸してもらえとなると逆にいいのか心配になる。

「いいよ。ただ、明日までまっけてくれるかな。データの移動とかを済ませてブランク状態にするから」

「そんな事は……」

「ISの調整か、組立てをしたいなら容量はあるだけいいからね。」

「……それじゃあ、お願い」

「委細承知」

幸先良くスタートした、私の打鉄の組立て。

同室の協力も得られて、本当に至れり尽くせりになってる。

それにしても………なんだろう、前にあった事がある気がする。

#04: Girl meets " Sky "; (後書き)

空の同室は更識簪さんです。

が？

とりあえず書きためた分の半分投げたので今日はここまで

………ちよつと簪をアクティブにし過ぎたよつな気が

#05: 訓練

に至るまでのいきさつ(前書き)

貯め込み分から投稿ですよー。

まあ、貯め込んでる理由が先の部分と整合性が取れてるかの確認とかの為だったりするんですけどね？

#05：訓練

に至るまでのいきさつ

「side…一夏」

「それでは千風さん、PICの説明をお願いします。テキストの右ページの上方ですよ」

「はい。PIC…『パッシブ・イナーシャル・キャンセラー』は物体にかかる慣性をゼロにする現象を起こす装置でこれによりISは飛行、滞空、停止、姿勢制御などを行っています」

「はい、ありが」と、テキストにはありますが、「え？」

「慣性をゼロにするだけでは浮上や滞空はおろか飛行もできません。少なくとも、重力と釣り合う程度には重力と真逆の方向への力が必要になります。そう言う意味ではスラスタ噴射なしで滞空させる事ができるPICは受動的慣性操作装置…『Passive Inertia Controller』と言うべきモノであると言えます。」

「えつと…千風さん？それって、どういうことなんですか？」

「言い方を変えれば、PICは飛び上がったISを落ちないように上に引っ張り上げ続ける装置ってところですか」

「ほえ…なるほどー。勉強になります。それじゃあ次の項目の説明をお願いします」

「……………あれ？」

…と、空が山田先生に代わってほとんど授業してる状態があったり、俺に専用機が用意されるとの通達があったり、箒が束さんの妹だっ
て話が広まって大声をあげたりしつつ授業が終わって昼休みがやっ
てくる。

セシリアとひと悶着のあと、俺は箒と空をさそって食堂に行く事
にしたのだが、

「私は、いい。二人でいけばいいだろう」

「まあ、そう言っつなよ。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おい！私は行かないと　う、腕を組むな！」

昔っから、箒はたとえやりたいことでも誘われると拒否するヤツだ
ったからな。

こうやって多少は強引さを加えて行動すれば正解だ。

「なんだよ。歩きたくないのか？なんならおんぶしてやるぞ」

「なっ……………!?!」

流石にこれならついてくるハズだ。

「は、放せッ！」

「学食についたらな」

「い、今放せ！ ええいつ」

箒の腕に絡ませていた腕が、肘を中心に曲げられ、一瞬だけ痛いと思ったら突然、腕に絡んでいた箒の腕がするりと抜けた。

「え？」

そして、何故か目の前に降って来る箒。

それを俺はなんとかキャッチ。

流石に鍛えていても腕の上に人が墜ちてきた衝撃は効く。

「さ、行くよ」

何事も無かったかのように歩きだそうとする空。

俺も一瞬ポカーンとしてしまったが声を掛けられて我に帰る。

「お、おう！」

俺が教室を出た辺りで放心していた箒が我を取り戻し暴れ始めた。

「お、降ろせッ！」

「どつちにしろ暴れるな。墜ちるぞ」

流石に、高校生にもなってお姫様だっこは恥ずかしいらしい。

まあ、当然といえば当然か。ということ、箒が落ち着いて動き

を止めたところで降ろす。

その時に物凄く残念そうな顔をされたけど、どうしてなんだ？

そんなこんなで学食についた処、既に空が三枚の食券を買っていた。

日替わり定食と生姜焼き定食と焼魚定食。

見事にバラバラにしてある。

「さて、二人は席の確保をお願いしようかな。それじゃ」

と、調理場の方へと空は行ってしまふ。

取り残された俺と篤は言われた通り、席を確保して待つ。

待ってる間、妙な沈黙が気まぎれなくなった俺は口火を切る。

「お前、友達できなかったらどうするつもりなんだよ。高校生活、暗いとおまらないだろ」

「私は……別に、頼んだ覚えはない！」

「俺も頼まれた覚えはねえよ。けどな、幼馴染で同門なんだ。これくらいのおせっかいは焼かせろ。」

むすっ、とした顔になる篤。

そのまま視線を天井に逃がす。

前からこうだ。俺やアキ兄が見てないと、すぐに集団から浮くんだよな。

「そ、その……ありがとう……」

「別に、礼を言われる事をしたつもりじゃねえよ」

お互いに言いたいことが終わって沈黙。

「はい、お待ち」

けど今回は気まずくなる前に空が三人分の定食を大きなトレーにのせて持ってきてくれた。

「おお、うまそうだ」

「さ、好きなのを取って。」

「あ、ああ……」

と返事をしつつ財布を取り出す筈。

けど、

「ほら、気にせず食べな。これくらい、年上の甲斐性だよ」

頑として受け取る気ゼロな空。

確かに、言ってる事と雰囲気は年上っぽいけど、どうも見た目的な意味では年下っぽく見えてしまう。

「年上つて…お前も同じ年ではないのか？」

「ふっふっふ。少なくとも、二人よりは年上だよ。四月生まれだから」

成る程。箒が七月で俺が九月。

そう言う意味では一番の年上だな。

「ほら、冷めたらおばちゃんたちに失礼だ。」

そう言われて俺は生姜焼き定食を、箒は日替わり定食を受取る。

「そんじゃ、頂きます」

食べ始めた処で、俺はとある『頼みごと』をする事にした。

「なあ、箒、空。俺にISの事教えてくれないか？正直言って今のままだと為すすべなく負けそうだ」

昼飯に二人をさそつた理由はコレだ。

二人とも、少なくとも俺よりはISに詳しい。

「うん？僕は構わないよ。箒は？」

「…私も、構わない」

「助かる。」

よし、これで何とかなるか？

「それじゃあ、箒には一夏に剣の稽古をつけてもらえるかな」

は？

「別に構わないが…どうして剣の稽古なのだ？」

俺の疑問をそのまま代弁してくれた箒。

俺も理由を知りたい。

「ISも肉体の延長だからさ。操縦者が剣術を使えば、ISにもある程度フィードバックできる。織斑先生のようにね」

そう言われると、多少納得がいく。

千冬姉は生身でも十分強いよな。

「それに、銃について頭に詰め込むよりも、中学剣道の全国大会優勝者の実力を生かした方が遙に建設的さ。」

「…中学剣道の、全国大会優勝者………？一夏が？」

「あ、ああ」

実は、そうなのだ。

箒が優勝した全国大会。

あの大会に俺も男子の部で優勝してたりする。

本当はバイトするつもりだったんだけど、千冬姉に止められた。『家の事は気にするな。アキト兄さんが言っていただろう。学生時代は好き勝手にやれ。支えるのが年上の仕事だと。』
って、言われて。

それだから中学の三年間もしっかりと剣道をやっていた。

「まあ、あの大会は男子と女子を別の日にやるから、用心深く新聞とかで確認しないと判らないか。」

「そ、そうだったのか………それにしても、よく知っていたな」

「まあ、僕も昔は剣道をやってたからね」

「昔、と言う事はもう辞めてしまったのか？」

「一時期、忙しくてね」

むう、なんと勿体ない。

「とにかく、一夏に剣の稽古をつけてもらう理由は判ってもらえたかな」

「ああ。だが、私でいいのか？」

「男子と女子の優勝者同士ならいい勝負になるだろうし、剣の間合いつかを確認する意味でも十分だよ。座学に関しては僕が教えるから心配しないでいい。場所は一夏の部屋でいいよね？」

「あ、ああ。」

「それじゃあ、決まりだ。ご馳走さま。さて、残りの時間で次の授業のダイジェストをやってあげよう。食べながらで良いから聞いていなよ。」

「…おう」

食事時間中くらいは忘れたかったのだが、始まる講義。

よくもまあ、テキストとか無しで次の授業の内容が出てくるもんだな。

しかも、判りにくい専門用語とかはそのたびに解説してくれるからけっこう判り易い。

これならなんとかついていけそうだ。

そういえば、午前中の授業で何故か空が授業を進行してたりもしたよな。

と、気がついたら俺たちの廻りは人だかりが出来ていた。

『千風先生のIS講座』…ってか？

#05:訓練

に至るまでのいきさつ(後書き)

今回の冒頭部で出てきたP.I.Cの話は純粹に自分が思った事だった
りします。

『キャンセル』零にする』なので、それだけじゃ急停止しかできな
いのでは？

と思った故の改変部分です。

ふと、アクセス解析をしてみる

7月1日	p v : 8 4 2	ユニーク : 1 3 0
7月2日	p v : 6 8 8	ユニーク : 1 0 9
7月3日	p v : 1 2 1	ユニーク : 1 7

..... 流石、有名どころの二次創作。

前にオリジナル書いてた時のp vは一日目62、二日目31、三日
目92だったのに.....ッ

まあ、多い時は3100 p vありましたけど...

#06：クラス代表決定戦（前編）（前書き）

— 応補足を……………

「side：」 「俯瞰視点（要は誰の視点でも無い場合）」

#06：クラス代表決定戦（前編）

「side：」

剣道場に、竹刀と竹刀がぶつかり合う音が響く。

剣道部の面々が感嘆の声を上げながら向ける視線の先では二人の一年生がハイレベルな戦いを繰り広げていた。

去年度の全国中学剣道大会女子部の優勝者、篠ノ之箒。

同じく去年度の全国中学剣道大会男子部の優勝者、織斑一夏。

現在十五歳である少年少女たちの中で、剣道に於いては最強である二人の試合は高校生である剣道部の面々からしても得るものが多いものだ。

激しい打合いから鏝競りになり、双方の動きが止まったかのように変わる。

ただ、攻防が動的なものから静的な物に切り替わっただけで激しい攻防が繰り広げられる。

瞬間、一夏が動く。

箒の息継ぎの一瞬を狙って押し込み、僅かながらできた隙に引き面を見舞う。

だが、その一瞬が狙われているなぞ、箒は百も承知だ。

故に、

パン

二つの打突音が、同時に剣道場に響く。

一夏の竹刀が箒の面を、箒の竹刀が一夏の胸を捉えていた。

「相討ち、か」

「ふん、全国優勝の男子というのはこの程度なのか？一夏」

「冗談」

防具に隠されて顔ははつきりとは見えないが、二人とも笑みを浮かべる。

「そろそろ本番と行こうか」

「ああ。準備運動はここまでだ」

物騒な笑みを浮かべて正眼に竹刀を構える二人。

「いざ、勝負！」

そして、激闘が再び始まる。

暦の日付はIS学園の入学式からまもなく一週間が経とうと
していた。

* * *

「side：一夏」

放課後は箒と稽古をし、夕飯後に三時間ほど空に座学系を見てもら
い、最後に小テストをやって満点取れなかったら翌日の稽古に掛り
稽古追加という中々にハードな生活すること六日。

遂に月曜日：対決の日を迎えた　　のだが：

「遅いな」

「そうだな」

俺に用意されたという専用機はごたついで到着していない。

そう、試合開始を目前にした今もまだ来ていないのだ。

「まあ、第二世代型くんれんきでもやり様はあるけどね。用意できれば、だけ
ど」

そついや、空には専用機が用意されてないよな。
同じ『ISを操縦できる男』なのになんでだろ。

「織斑くん、織斑くん、織斑くん！」

第三アリーナのAピットで待ち惚けていた俺たちのところに山田先生が息を切らせて駆け込んできた。

「落ち着いてください、山田先生」

空が山田先生の背中をさする。

「あ、ありがとうございます、千凧さん」

そういえば、山田先生はなんで空の事をさん付けで呼ぶのだろうか。

「で、そんなに慌ててどうしたんですか？」

「届いたんです！織斑くんの専用IS！」

「織斑、時間が無い。すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているのだからな」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ。一夏」

「え？え？なん」

「」「早く！」「」

千冬姉と山田先生と筭の声が重なる。

「織斑先生、ISの所まで行けなければ急ぎようがないですよ」

空の至極まっとうなツッコミを受けて”ゴゴゴ…”と重々しい音を

立ててピットの搬入口が開く。

その先には、『白』が居た。

「これがお前の専用機…>白式くだ」

「これが……………」

千冬姉に急かされるままに俺は白式に搭乗する。

まるで、こうなる事をずっと待っていたかのように見えた>白式あこぼし
は俺に合わせて装甲を閉じる。

【関節部ロック解除】

【ハイパーセンサー 正常稼働】

【ネットワーク構築】

様々な情報が投射ディスプレイに表示される。

その総てが『早く飛ばせろ』と言わんばかりに感じられる。

「問題はなさそうだな。一夏、気分はどうだ？」

ごく僅か、ハイパーセンサーあってこそ判別できる程度の声の震え。
…心配してくれてるんだな

「大丈夫だ、千冬姉。行ける。」

「そうか」

「一夏、ちょっと時間貰うよ」

そう空が言って何やら手持ちの端末からケーブルを刺す

【データリンク構築中……………完了】

十秒も立たずにディスプレイは消え空はケーブルを外す。

「これでよし」

「空、何をやったんだ？」

「ちょっとね」

悪戯っぽく笑う空。

「い、一夏っ！」

追及しようとしたら今度は篤が声をかけてきた。

こっちも、なんだか普段と様子が違う。

「行け。行って、勝って来い」

決心したように言う篤。

「…ああ！」

PICを起動させ僅かに浮かび上がる。

そのままアリーナへと続くカタパルトに接続し勢いをつけて飛び出す。

カタパルトの先には、『蒼』が居た。

* * *

「side: 第」

『あら、逃げずに来ましたのね』

ピットのモニターで私たち：私と織斑先生、山田先生は試合の様子を見ていた。

唯一、空だけは空間投射ディスプレイに囲まれたままなにやら作業をしている為モニターに視線を向けていない。

『最後のチャンスをおげますわ』

『チャンスって？』

『わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげない事も無くってよ』

『寝言は寝て言えよ。大体、国の侮辱したのも決闘を言いだしたのもお前の方だろ。』

『そう、残念ですわ。それなら』

オルコットのIS　空が言っていた名前だと>ブルー・ティアー
ズくだったか？　がその手に持つ長大なライフルを一夏に向ける。

『お別れですわっ！』

閃光。

それを一夏は上昇することで回避する。

続けざまに放たれるレーザー。

それを一夏は避けることに専念して、なんとかかわし続ける。

『さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットと>ブルー・
ティアーズくの奏でる円舞曲ワルツで！』

その宣言と共にブルー・ティアーズの腰のフィンアーマーが四つ切り
離され、自立飛行を始める。

五つに増えたレーザーの銃口を前に、一夏は懸命に飛びまわっていた。
た。

「篤、ちよつといいかな？」

「なんだ？」

不意に、空に呼ばれて私が振り返ると空が片手で何かを投げてきた。

これは…インカム？

「それで一夏と通信できるから、『焦るな』って言ってやってくれないかな。『チャンスは、絶対に届けてみせる』って、伝言を頼みたいんだ。」

すぐに両手を作業に戻した空。

視線すらこちらに向けられていないが、それは目の前に集中をしているからだ。

「わかった。任せてくれ。一夏、聞こえるか？」

『ほ、篝？』

「空からの伝言だ。『焦るな、チャンスは必ず届けてみせる』だ」

『…ありがとな、篝。』

「そんな事より周りを見る。」

『おおっとー！』

モニター上の一夏が慌てて身をひねるとそれまで一夏の上半身があった場所を数本のレーザーが通過する。

「通信、切るぞ」

『ああ、篝の声、聞けて良かった』

「なっ！？」

『おかげで、色々思いついた』

モニター上の一夏がそれまで何も武装させていなかった白式に近接ブレードを呼びだして装備させる。

どうやら白式の唯一の武装があれらしい。

まさか空はこれを見越して私に剣の稽古をつけさせたのか？

『中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて、笑止ですわ！』

『笑いたきゃ笑ってる。』

言いながら、一夏は白式をアリーナに接地させた。

右足を半歩前に出す、正眼の構え。

剣道における基本中の基本。

体に染みついたそれは、一夏を白式という鎧をまとった武士もののふに昇華させる。

『さあ、来い！』

宣言する一夏はなんとというか…物凄く、格好良かった。

* * *

『二十五分…まあ、よく持った方ですわね。褒めて差し上げますわ』

『そらどーも』

試合開始から二十五分。

宙を舞うブルー・ティアーズと地面にどっしりと構える白式の闘いは、ある種対照的だった。

空がモニタリングしているらしい白式のデータを見る限りでは、シールドエネルギーの残量は二〇〇ほど。

三分の二は削られてはいるが直撃はかなり少ない。

それは、一夏が回避と攻撃パターンを読む事に専念していたからだろう。

地面に着いた事で足元という死角をなくしたのもその為だったのだろう。

” 剣の道は見の道である ”

相手を動きを見て、学んで、自分の動きにフィードバックさせていたのだ。

『このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね』

言いながら、オルコットは自分の周囲に従わせている自立機動攻撃端末を撫でる。

一夏がオルコットに対して一度も攻撃をしていない故に、その姿は二十五分前となら変わりはない。

対して一夏は地面を駆け回り、転がりを繰り返した為か白式の純白

だった装甲は土埃とかすったレーザーによる破損で大分姿が変わっていた。

『ですが、そろそろ終幕フィナーレにさせていただきますわ』

オルコットが左手を振り、ビットが猟犬の如く一夏に向かってゆく。

『ソイツを待ってた!』

『えっ!?!』

ちょうど、一夏の背後に廻ったビットがレーザーを放つと同時に、一夏は全身を回転させてかわし、一足でビットとの距離を詰めて斬り伏せた。

『一つ!』

『なっ!?!』

着地し、再び地面を蹴りオルコットが驚いている為に操作がおろそかになっているビットを斬る。

『二つ!』

『なんですって!?!』

二つの爆発を背に、上段刺突の構えでオルコットに向かって地面を蹴り、飛びあがる一夏。

『くっ...!』

オルコットは下がりながらビットを向かわせる

『ベジットばかり気にしてたら、本体がおろそかになっちまうぞー！』

『へー！』

「じいじ、一夏の逆襲が始まった。」

#07：クラス代表決定戦（後編）

「side：籌」

「はああ…凄いですね、織斑くん」

モニターを眺めていた山田先生が溜め息混じりにつぶやいた。

確かに、一夏はISの起動が二回目とは思えないほどの健闘を見せている。

だが、私は苦い顔をし、千冬さんは忌々しげな顔をしていた。

「あの馬鹿者。」

「一夏め。」

「「浮かれているな」」

私と千冬さんの声が重なった。

「えっ？どうして分かるんですか？」

山田先生の追及に、私と千冬さんは二、三目配せをしたのち、千冬さんから言うことになった。

「さつきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれはアイツの昔からのクセだ。あれが出る時は大抵簡単なミスをする。篠ノ之、お前はどうしてそう思った？」

「クセもありますけど、先ほどまでは無かった無用の被弾が増えます。ビットを落して、攻撃に意識が偏ってるんでしょ。」

「なんだか」肉を切らせて骨を断つ」と言わんばかりの戦闘に私はハラハラとしていた。

馬鹿者め。ISは肉を斬シールドられたら終わりだというのに、何をやってるのか。

「へえ…さすがご姉弟と幼馴染ですね。そんな細かいところまでわかるなんて」

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな」

「あー、織斑先生。照れてるんですか？照れてるんですね？ほえ？」

ギリギリギリギリ

千冬さんのヘッドロックが山田先生の頭を掴まえて締めあげる。

「いたたたたたたっ！！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！わかりました、まかりましたから放し…あっうう
！！」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ山田先生とそれを無視して絞め続ける織斑先生は置いておいて、私はモニターに視線を送り続ける。

一夏……………

嫌な胸騒ぎを覚えたその時、試合が大きく動いた。

オルコットに接近を果たした一夏が残る二機のうちの二機を斬り伏せ、その返す刃でもう一機を撃破。

本来なら振り抜かれてしまうソレをPICの慣性操作で止め、オルコット本人に向けて刃を返す。

ライフルは長すぎる銃身の為に向けることはできず、攻撃端末は全てが撃破された。

『かかりましたわね。』

そんな一夏にとって絶好のタイミングで、オルコットが嗤った。

「一夏っ！ 罠だ！」

思わずインカムに向かって叫ぶがもう遅い。

『お生憎様。ブルーティアーズは六機あってよ』

オルコットの腰部スカートアーマーの突起が外れてその先端を一夏に向ける。

『ッ!?!』

急な軌道変更で回避しようとする一夏に、一発の弾頭型ビットが追いつく。

ドガアアアアン…

赤を超えて白く見える爆炎に白式がつつまれた。

「一夏っ!」

黒煙が少しずつ広がり、オルコットは勝ち誇った表情を見せている。

確かに、あの直撃を貰えば一気にシールドエネルギーは消耗する。

「…ふう。なんとか間に合ったみたいだね」

思わず私が一夏の名を呼んだ時、背後から二十数分間沈黙したままだった空の声がした。

何が間に合ったのか。

「ふん。機体と、千凧に救われたな、馬鹿者めが。」

千冬さんの顔に安堵が微かながら混ざった。

モニターの向こう側では、黒煙が一気に吹き飛ばされて”白”が真

の姿で現れた。

* * *

「side：一夏」

ミサイルの直撃を喰らって、『あ、墜ちた』と思った瞬間、それは起こった。

『First shift Complete . . . Sorry
to be late』

メッセージログが表示されたと同時に、意識にデータが流れ込んでくる。

そして、ボロボロになりながらも俺の剣であり続けてくれる白式が光の粒子になって弾けて消え、再構築されてゆく。

新しく形成された装甲は、最初の白さを超え、薄ぼんやりながら光を放ち続けている。

まるで、冬を超えたつぼみが、春に花開いたかのように。蛹の中で春を待っていた蝶が、羽化するかのように。

ようやく、白式は本当の意味で俺の相棒になった。

「ま、まさか……ファーストシフト一次移行！？あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

どこか工業製品的な凹凸があり、直線的だった白式の姿はなめらか

な曲線と鋭角的なラインで構築された、どこか騎士の鎧を思わせるデザインへと変わっていた。

「さて、ここからが本領発揮だ！」

生まれ変わった刀　近接特化ブレード>雪片式型くを握る手に力を込める。

その刀身は『ブレード』と銘打たれているが日本刀、どちらかと言えば太刀に近い。

好都合だ。今の俺に、刀以外の武器は使えない。

「俺は、世界で最高の姉さんを持ったよ。…いや、姉さんだけじゃないか」

雪片。

かつて、千冬姉が現役時代にふるっていた愛刀。

そして、その雪片を十全とは言えないまでも、振り回されない程度に扱えるように、剣の感覚を失わないように稽古に付き合ってくれた筈。

足りない知識面を補ってくれた空。

本当に、いろんなものに恵まれたな。俺は。

「だから、俺は…俺も家族を、仲間を守る」

ずっとアキ兄と千冬姉に守られ、支えられてきて、筈や弾、ここに来てからは空にも支えられてきた。

だから、今度はこっちが支える番だ。

「は？あなた、何をいって……………」

「とりあえず、今は想いに答えなきゃな。」

篤も、空も、千冬姉も。

みんな俺の勝利を願ってくれてる。

勝こたえてなきゃ、男が廃る。

「だからさっきから何の話を……………ああもう、面倒ですわ！」

弾を再装填したミサイル搭載型のビットがセシリアの命令に従って飛んでくる。

だが…

「ここだっ！」

発射される寸前のミサイルのうち、一発だけを斬りはらって一気に詰め寄る。

爆発。

その爆発に巻き込まれて他のミサイルが誘爆する。

その爆発を背に、俺は宙を蹴る。

ここ一週間、ずっとやり続けてきた踏み込みの要領で勢いをつけて跳ぶ。

空は言っていた。PICは『慣性を操るモノだ』と。

ならば、前に向かって全力で働かせればそれは急加速になる。

踏み込み。

背中 of 爆発も合わせて勢いをつけた俺は一気にセシリアに肉薄する。

「い、イグニッション・ブースト!?!」

慌てるセシリアに薄青く輝く刀身で逆袈裟払いを放つ。

「これで、終わりだアアッ!」

* * *

「散々持ち上げておいて、この結果か。この大馬鹿者」

試合が終わり、ピットに戻った俺を迎えたのは千冬姉の辛辣な言葉だった。

セシリアとの試合はどういう訳か俺の負けだった。

おかしいな。シールドエネルギーはまだ一二〇くらいは残ってた筈だし、攻撃は喰らって無かったのにな。

「武器の特性を考えずに使うからあなるのだ。身を以って分かっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いな」

「……………はい」

頷く。頷くしかない。

なんせ、あそこまで大見得切って負けたのだから。

「えっと、ISは今、待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せはすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

どきっ。

そんな重々しい音を立てて『IS起動におけるルールブック』が俺の前に置かれた。

「何にしても今日はこれでお終いだ。帰って休め」

「それじゃあ、織斑くん、篠ノ之さん、千凧さん。お疲れ様でした」

千冬姉と山田先生がピットから出て行き、残される俺たち三人。

「それじゃあ、簡単に反省会といこうかな」

にっこりと笑ってる空。

ただ、無性にその笑顔が怖い気がする。

「とりあえず、『何故負けたか』なんだけど…これは単純に一夏がシールドエネルギーを『使い切った』からだよ」

「シールドエネルギーを…」

「使い切った？」

俺と篤は訳が分からずにオウム返しのように復唱する。

「そう。それが白式の装備、雪片式型の特殊能力だと思ってくれていいよ。」

『思ってくれていい？』 どういう事だ？

それよりも…

「はい、先生。その特殊能力って何なんですか？」

つい、ふざけてではないが空を先生と呼んだ。

まあ、この場ではそんな立ち位置だから間違いないと思う。

「シールド無効化。相手のシールドを無視して攻撃をする事ができる、ある意味では最強クラスの攻撃力を持つ能力だよ」

シールド無効化、シールドを無視。

それはつまり、攻撃が当たれば絶対防御が発動するってことか。

「但し、その為には莫大なエネルギーが必要になるんだ。そのエネルギーは何処から調達されているかと言うと…」

「そうか、シールドエネルギーか」

俺の答えに空は満足そうに笑う。

「そう。雪片の能力はシールドエネルギーを攻撃に転化し、相手のシールドを無視してダメージを与える。そういうものなんだ」

「だから、シールド残量を食いつぶしてこの大うつけは負けた訳だぐさり。」

箒の言葉が刺さる。

「そう言う事だね。まあ、代表候補生相手にギリギリまで喰らい付いたんだから、腐らずに研鑽を積みめば何時かは勝てるよ。と言う訳で、箒はしっかりと手綱を握っておくこと」

「ああ。」

手綱って…俺は馬かなにかか？

「二人は先に戻ってて。データを纏めてから僕も戻るから」

「それじゃ、言葉に甘えさせてもらっわ」

空に促されて俺と箒はピットを出ることにした。

* * *

翌朝、あり得ない事が起こった。

「では、一年一組の代表は織斑一夏君で決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね」

嬉々として喋る山田先生と盛り上がるクラスの女子たち。

一方で空は疲れ果てているような様子。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けて、なおかつセシリアと空の試合もまだやってないのになんで俺が代表になってるんですか？」

「それは「それはわた「オルコットが辞退し、千凧は代表に不適切」という判断が下されたからだ」「」

山田先生のセリフにかぶせるようにセシリアが言い始め、そのセリフを千冬姉が遮った。

無然とするセシリア。

けど、今はそれどころじゃない。

「空が代表に不適切？」

技術系の授業の時は山田先生の代わりに授業やってた空が？
クラスの中で、早くも委員長的な立ち位置になってる空が？

「千凧の所属する組織は少々特殊だな。クラス代表との掛け持ちは不可能と判断されたからだ」

そんな特殊な組織って…どんなところなんだよ。

「詳しい事は機会があれば教えてやる。とにかく、クラス代表は織斑一夏で決定だ。異存はないな？」

「はい」

俺や返事をする余力すらないらしい空を除くクラスメイトたちほぼ全員の返事。

団結は良い事だが、俺にとっては全然良くなかった。

…それにしても空、大丈夫かな

「さて、授業に集中しろ。この大馬鹿者」

パン！

#07：クラス代表決定戦（後編）（後書き）

ここで一夏を勝たせようか、空を戦わせようかと悩みましたが、
敢えてどっちも外す事にしました。

『空がクラス代表に不適』な理由はまたいずれ……

#08：暴走するモノ（前書き）

初登場からしばらく出番のなかった彼女の出番です

ついでに、こじらせちゃったあの人も。

#08：暴走するモノ

「side…」

「ようやく、形が見えてきたってところかな」

「うん。これも千凧くんのおかげだよ。」

一組のクラス代表決定戦が行われてから数日。

空と簪は寮からの道すがらで簪の専用機 打鉄式式の組立ての進捗状況について話していた。

「とはいえ、まだまだ先は長いよ。第三世代兵装が全くの手つかずつてのが痛いね」

「……そうなんだよね」

状況としては先は長いが真つ暗では無い、と言ったところ。

機体そのものは空が持つてきた『打鉄ベースの改造機』のデータを参考に全天周対応型として組立てが進んでいる。

一応、右腕の部分展開が可能な程度には。

問題は武装 特に第三世代型兵装ではあるが、『二日で半歩、六日で二歩』と、遅々として進んでいないように見えるくらいゆっくりだが開発は進められている。

「まあ、気長にやって行こう。行事系は訓練機の打鉄を使えばいいし 確信犯的体調不良でもいいし」

ちなみに、『確信犯的体調不良』につくルビは『サボリ』である。

「千凧くん、二つ目は駄目。」

「オフレコ、オフレコ。」

「まったく…」

簪はくすり、と笑う。

「まあ、やれるだけやってみれば良いんじゃないのかな。最初から何でもできる超人なんて、居る訳ないんだから。簪さんの頑張り次第だよ」

「…うん！」

空は一組、簪は四組であるが故に教室前で別れることになる。

「それじゃ、また夜に」

「…うん」

名残惜しい気持ちを抱きながらも簪は教室に入ってふと思う。

どうして、こんなに無抵抗に『甘え』られているのだろうか…と。

* * *

「そういえばさ、もうすぐクラス対抗戦^{リーグマッチ}だけど、うちの代表、勝てるかな」

「そういえば更識さん、専用機持ちだった筈だよ？」

「どんな機体なんだろうね」

昼休み、四組では他愛のない会話が交わされていた。

「…その話なんだけどさ、噂があるんだよね」

「どんな噂？」

「更識さんのIS、開発元の事情で開発が中止になっちゃったから一人で組み立ててるって」

「あはは、何それ。会長の真似？」

「ISを独力で作るって…そんなの無理でしょ」

「天才の真似事じゃないの？」

「会長みたいな天才と同じ事出来る訳ないのにね」

「言い方悪いけど…身の程をわきまえた方がいいんじゃないの？」

「そうそう。会長に追い付こうだなんて、無理だよね」

談笑をしていた彼女たちは知らない。

壁を挟んだ向こう側 廊下にその『張本人』が居る事、そして無表情に駆け去って行った事を……

* * *

「side:簪」

「はあ…はあ…はあ…」

思わず逃げ出してしまった私の脳裏に、教室で言われた言葉が繰り返し響いていた。

会長に追い付こうだなんて、無理

「はあ、はあ……………ッ！」

なんども繰り返されるその声に、胸が絞めつけられる。

けど…

「そんなこと、判ってる……………っ」

最初から、判っていた。

姉さんに、追いつけるはずがない事くらい。

ただ、少しくらいの夢を見たかっただけ。

自分でも、出来るんだという…私が、更識簪^{わたし}として認めてもらえるという、夢を。

「うつ、うええっ…うええ…」

ボロボロとこぼれてくる涙。

ふと頭の隅に浮かぶ、千凧くんの顔。

彼はどうして、私に手を貸してくれていたんだろうか。

……私を憐れんで？

それとも、姉さんに近づいたために？

そんな事無いと、そんな人じゃないと言いきれるハズなのに疑念が次々と湧きあがってくる。

……きつとそうだ。

手を貸してくれるフリをしてきつと、晒ってたんだ。

『出来もしない事をやって』なんて…

「簪さん！」

急に呼ばれて、声の主の方を向いたら、千凧くんが居た。

けど、一体何の為に？

「……………何しに来たの？」

「そりゃ、簪さんが心配で」嘘ッ！」「」

心配して、追い掛けて来てくれた。

そう、判ってるのに私から出た言葉は拒絶の言葉だった。

「嘘じゃない」

「……どうせ、千風くんも私のこと身の程知らずだっと思ってるんでしょー!」

止まらない。

「私は所詮、更識楯無ねえさんの妹できそこないでしかない!」

湧きあがってくる、黒いナニかが止まらない。

「私は、ただ……更識わたし簪を見てもらいたいだけなのに……誰も見てくれない! 誰にとっても、私は『更識楯無の妹』でしかない!」

「……………そうだね」

「ッ!」

否定してくれると思ってた。

けど、肯定された。

トウシテ?

「簪さんが、『自分は更識楯無アツシの妹アツシでしかない』と思ってる限りはその通りだよ」

…私が、自分の事を？

「一晩、ゆっくり考えてみるといいよ。自分の事を」

それだけ言ってから、千凧くんは私に背中を向けて歩きだす。

「ああ、言い忘れてた」

「…何？」

「僕は簪さんじゃないから、『判る』とか『一緒に背負う』とかは言えない。けど、転びそうになった時、支えるくらいなら、多分出来るから」

それじゃ、と今度こそ千凧くんは立ち去ってゆく。

「私が…自分を…」

どう思っているのか。

答えは、少しだけだけど見えてきていた。

* * *

「side…」

翌日の放課後、空は突然呼出されて第三アリーナに来ていた。

そこで待っていたのは殺気と敵意を撒き散らすどこか簪似の、しかし決定的に印象が違う二年生

「突然呼び出したりして、ごめんなさいね」

感情が欠落しているように聞こえる声に空はいえいえ、と気付かないふりをして答える。

「一応、自己紹介させてもらっわ。私は生徒会長の更識楯無。あなたの同室の更識簪の姉よ」

「生徒会長殿が、入学して一ヶ月経ってない一年生に何の用ですか？」

「そうねえ…端的に言わせてもらっわ」

楯無の纏う雰囲気の変化に空は身構える。

「簪ちゃんを誑かし、かつ泣かせた罪での処刑？」

刹那、部分展開された楯無のISの武装　ランスに仕込まれたガトリングガンが火を吹いた。

普通ならば、その時点で対象は対IS用の弾丸によって命中すれば吹き飛び、掠れば引き裂かれて血の池を作るハズだ。

「まったく、僕が一般生徒だったら間違いなく死んでますよ」
だが、空は無傷のまま立っていた。

正確には、楯無が狙った辺りから数メートル離れた場所に立っていた。

「あら、『一般生徒だったら』って、まるで一般じゃないみたいと言いかたじゃない」

怒りとか嫉妬とかいろんなものが入り混じってこんな凶行に至った楯無だが、理性や知性はちゃんと残っている。

故に、妹の件は別として『要注意』の部類に分類しての言動に切り替える。

「まあ、残念ながら」

ぽりぽり、と頬をかく空。

「ならば、どんなところが一般じゃないのか、おねーさんに教えてくれるかな？」

そんな姿に楯無は自身の専用機

ミステリアス・レイディ
霧纏の淑女

を展開する。

「まあ、答えられる範囲なら」

答える空も、量子展開の光に包まれた。

* * *

「side:簪」

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、」

私は第三アリーナを目指して走っていた。

何故か。

それは生徒会が、姉さんが何やらそこで暗躍しているようだったから。

確かめたら第三アリーナは生徒会が貸し切りにして立ち入り禁止にしてあった。

…そういえば、千凧くんを呼び出す放送があったし、本音や虚さんが何やら動いてみたいだった。

「はあっ、はあっ、はあっ、」

息が切れて立ち止まった場所は第三アリーナのピット入り口。

鍵が閉まっていなかったそこに、私は入っていく。

更衣室を抜け、アリーナへの入り口に入ったら…

「あ

爆発の中から、水色と灰色が落ちて行くところだった。

「ッ…」

居ても経っても居られなくて私はアリーナ上に急いで降りた。

* * *

「まったく、無茶しますね。」

「無茶はどつちよ。乙女の顔面に杭打ち機バイルバンカーなんて撃ち込むだなんてまだくらくらしてるわ」

私がアリーナに降りたら頭を押さえる姉さんと相変わらずの千凧くんが居た。

「で、どんなところが一般じゃないのか教えてくれな、いッ？」

素早く千凧くんの背後に廻り込んで腕に関節技を決める姉さん。

「ははは、参ったなあ」

それでも余裕な千凧くんが私に気付いたのか

「あ、簪さん」

「えっ!?!」

私を呼び、姉さんが過剰反応。

「……………姉さん、何やってたの？」

「あの、ええと、簪ちゃん。これは……………」

わたわたと慌て始める姉さん。

その次の瞬間、

「あれ？」

姉さんが空を舞っていた。

お手玉みたいに、ぽーんと。

「よつと。」

そしてそれを体の前で受け止める千風くん。

…お姫様だつこだなんで、なんて羨ま げふんげふん。

姉さんは突然の事に何が起こったのか判らないでいるらしく、ぽかーんとしている。

ぽかーんとしてたけど、私の視線に気づいたのか身を竦める。

身を竦めて、傍から見るとお姫様だつこされた上に甘えてるかのよつな構図に……

なにかが『ぷちん』と軽い音を立てた気がした。

「姉さん」

「は、はいっ！」

「とりあえず、離れて」

「は、はいっ！」

飛び退くくらいの勢いで千風くんの腕から降りてさささっ、と背後

に隠れる姉さん。

「…何、そんなに怯えてるの？」

「だ、だって……………」

私の中で、完璧超人だった姉さんの像がガラガラと音を立てて崩れていく。

「まあ、いいや。で、姉さん。ここで、千風くんは、なにしてたの？」
「おしえて」

「びい！」

ガクガクブルブルと震える姉さん。

「妹の事が気になって仕方ない姉の、シスコンの暴走じゃないのかな」

カチ

『生徒会長殿が、入学して一ヶ月経ってない一年生に何の用ですか？』
「…そうねえ…端的に言わせてもらおうと」
「…ガガガガ……………」
「…やんを誑かし、かつ泣かせた罪での処刑？」
「…ガガガガ……………」
「…」

千風くんがどこから取り出したレコーダーが再生される。

個人的には最後に入ってる銃声も気になるけど…

「な、なにかな、簪ちゃん」

私は姉さんの前まで行く。

手を振り上げ…

「お姉ちゃんのバカ！」

ぱあん

「もう知らないっ！」

それだけ言って、私は駆けだしていた。

* * *

「side…」

簪に引つ叩かれ『もう知らない』と突き放された楯無は…

「……………」

絶賛、鬱状態だった。

アリーナの地面に両手をつき絶望するポーズ。

正に『orz』状態。

周囲には黒い縦線が何本も生えてきていて、もうひと押ししたら自殺しかねないくらいの状態。

そんな楯無だが

「簪さんの方は僕がなんとかしときますから、言いたいことの整理しといてくださいよ」

言われて、がばっと起き上がった。

「本当!？」

「嘘ついても何の得もありませんよ」

実際の所、姉としての威厳とか、生徒会長としてのアレとか、更識の現当主としてのコレとか、色々とブチ壊しになるのだが空はあえて黙っていた。

そんなもん、妹に怯えた時点でボロボロなのだ。

これ以上、いくら傷ついても大差はない。

「それじゃあ、失礼しますよ。会長」

立ち去ってゆく空。

見送った楯無はふと思う。

「結局、何も教えてくれてないのね」

(でも、どこかで知ってるような気もするのよね)

うっーんと楯無は考え込むが思い出せず、生徒会が借り切った時間

を超えていた為に他の生徒が入ってきてからアリーナを後にした。

………余談だが、楯無はしばらくの間先端恐怖症になり、その克服後もパイルバンカー恐怖症は残ったそう。

#08：暴走するモノ（後書き）

書き終わって、読み返してみte思った。

『あ、黒簪降臨だ』

ついでに、シスコンをこじらせた会長もビクビクと最愛の妹に怯える人になっちゃいました。

やりすぎたかなという気もしますが、書いてて面白いのでま、いいか。

ブラック簪の進化先は、^{シャイン}光か、^{ダーク}闇か？

………基本白、時々黒になる気がする。

#09：東の間の平和（前書き）

サブタイトルは『つかのまのへいわ』ですから。
『たばね』じゃありませんからね

#09：東の間の平和

「side…」

「さて、こつちの姉妹はこんなもんでいいか」

小さな声で呟いた空の視線の先には二つのベッドを無理矢理隣接させて作ったダブルベッドに寝る、楯無と簪の姿があった。

模擬戦の後、空の手引きで食堂で出会った一行（簪、楯無、空）はそのまま簪の部屋へ。

しばらくは沈黙に部屋が支配されていたが、『とあるきっかけ』から双方本音の言い合いになり、最終的に仲直りした。

但し、某『消毒液の親戚』の力を借りていた為そのまま二人は寝てしまったが。

ちなみに、盛ったのは空でオレンジジュースに混ぜて飲ませた。

「ふたりとも、いい夢を」

小声で言って部屋を出た空は屋上を目指す。

「……………さて、お仕事でも始めますかね」

屋上で、IS用のライフルを構える空。

そのスコープの先には人工島^{メガフロート}である学園の敷地に正規以外のルートで入ろうとする上陸艇の姿があった。

「はい、その人たち。重戦車を一発でスクラップにする威力のある狙撃銃で狙われてるから動かないで」

至つて能天気、空は警告を発する。

それは十分に相手に届くように拡声されて上陸艇まで届いた。

それでも動こうとする一団に空は容赦なく引き金を引く。

ダアン

その瞬間、紅い華が咲いた。

* * *

「side：一夏」

四月も下旬、遅咲きの桜もみんな散った頃。

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、千風。試しに飛んで見せる」

俺たちは今日も千冬姉の授業を真面目に受けていた。

そういえば、空って専用機を持ってたんだ。
初めて知ってたぜ。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」
俺は千冬姉に急かされて意識を集中する。

俺の白式の待機状態は右腕のガントレット。
普通はアクセサリーらしいんだけど、俺のは何故か防具だ。

…なんでだろうか。

「集中しろ」

次は無いぞと最後通告を受けてる気になって俺は右腕のガントレットを左手でつかむ。

このポーズが一番イメージしやすい。

来い、白式

心の中で呟くと同時、右手首から膜が全身に広がって行くような感覚。

コンマ七秒かけて放出された光の粒子がまとまってISの本体とし

て形成されてゆく。

ふわり、と体が浮かぶ。

展開が終わってPICが起動したらしい。

見ればセシリアもブルー・ティアーズの展開を終えてあとは空だけだが…

「どうした、千凧。早く展開しろ」

「すみません。換装式固定武装が多いので解除に手間取りました」

謝りながらも全身に光を纏った空はあつという間、瞬き一回の間にISの展開を終えていた。

全体として訓練機である打鉄に似たシルエットにところどころラファールっぽさのある、ライトグレーのIS。

「それが、空のISなのか？」

「そうだよ。ジャンク品の打鉄とラファールからでっち上げた再生品だけだね」

………それ、専用機って言うていいのか？

「まあ、武装試験機だからね。機体の性能は重視されてないよ」

「そうなのか？」

「三名とも、準備が終わったな。では、飛べ」

それからの行動は早かった。

セシリアが急上昇を開始し遙か上空で静止する。

俺も遅れて飛び上がるがセシリアに比べると遅い。

『何をやっている。スペック上の出力は三機の中で一番上だぞ』
千冬姉のキツイお言葉。

これでも練習はしたんだけどなあ……………
PICで『上に勢いよく引っ張り上げるイメージ』で急上昇は出来
たけど…イマイチ速度が足りないらしい。

『オルコット、お前も第二世代型の改修機に追い抜かれるな』

……………ん？

セシリアも怒られてる？

そう言えば……………

「空がないぞ？」

「あら？」

俺の眩きがセシリアにも届いたらしく二人でキョロキョロと探す。

おかしいな、見当たらないぞ？

『何をやっている、馬鹿者ども。上だ、上』

千冬姉の声に上を見た。

「や。」

俺たちよりも数百メートル上に、空はいた。

機体の背中に、細身の翼を生やして。

判り易く例えるなら某『歌で全て解決』なアニメの、『操縦桿兼射出シート兼強化外骨格型パワードスーツ（軍用）』なアレだな。

「なんて加速性能　　本当に第二世代型なんですか？」

「そうだけど？」

「あり得ませんわ……………」

セシリアが落胆していると

『よし、三人とも、今度は急降下と完全停止だ。目標はオルコット

と織斑は地表十センチ。千凧は…そうだな、接地しないギリギリだ。砂埃が動いたら接地とみなすぞ』
なんて千冬姉の命令が下った。

うわ、空の難易度高っ！

「了解です。では、お二人とも」

セシリアが先に降下を始め、みるみるうちにその姿が小さくなってゆく。

「うまいもんだなあ」

そして完全停止も難なくクリアしたらしい。

…よし、俺も！

今度は勢いよく高いところから飛び降りるイメージ。ついでに下へと引っ張るイメージもオマケだ。

勢いよく降下を始めぐんぐんと地表が近付いてくる。

よし、あとは停止すれば

そこで思い出した。

『急停止』のイメージはあるんだけど、完全停止のイメージがイマイチはつきりとしていなかった事を。

やべえ…

そう思ったのと激突寸前に『がくん』と衝撃があつて

「おぶうつ!?!」

顔を地面にぶつけそうになっただけで白式は停止した。

「なにをやっているか、馬鹿者。千凧が手を打っていなければグラウンドに墜落していたぞ」

「……………すみません」

俺が千冬姉に怒られていると空が降りてきた。

注文通り、着地するかしないかという微妙な高度に砂利ひとつ動かさないで。

そして、空の”打鉄モドキ”の右腕には巨大な釣り竿用リールみたいなパーツが追加されていた。

それを収納する^{クローズ}ると俺の腹に巻きついていたワイヤーも消える。

なるほど、ウィンチランチャーとでもいうものなのか？

「次は武装の展開だ。織斑、やってみろ。それくらいなら自在にできるだろう」

「は、はい」

「よし、では始める」

言われて、人がいない方向に向き直ってから、白式を展開した時のように着きだした右腕を左手で握る。

来い！

極限まで高まった集中力。

掌から光が放出され、それが形として成立する。

よし、必ずできるようになったぞ。

これもイメージが難しかった。

昔、見せてもらったたり触らせてもらった真剣のイメージとか色々やっても中々に出来なかったのだ。

「遅い。〇・五秒で出せるようになれ」

ぐあ……………

血のにじむような練習の成果の総括が『遅い』かよ

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

今度はセシリアか。

名指しされたセシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を付きます。

一瞬、爆発的に光っただけ。

それだけでその手には特殊レーザー狙撃銃《スターライトmk-I II》が握られていた。

展開が終わった時点でマガジンは接続済み。視線を送るだけでセーフティが外れた。

一秒も立たずに射撃可能になっていた。

「流石だな、代表候補生。ただし、そのポーズは辞めろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ。」

「ですが、これはわたくしのイメージを纏めるために必要な直せ。いいな」

「……………はい」

「次だ。近接用の武装を展開しろ」

「えっ、あ、は、はいっ！」

行き成り振られて反応が遅れたセシリア。

きつと内心でぶつくさ文句を言ってたんだろっ。

ともあれ、銃を収納し、新たに近接用の武装を展開しようとするが

……………

「くっ……………」

光は放出されてるけど、中々に像を結ばない。

「まだか？」

「す、すぐです。 ああ、もう！《インターセプター》！」

武装名を半ばやけくそになって叫ぶセシリア。

それによって武器としてようやく構成される。

「何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらったつもりか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題は

「ほう、織斑との試合では初心者相手で、簡単に懐を許していたように見えたか？」

「あ、あれは…その……………」

「ごにょごにょとどもるセシリア。

「ふん。では千凧……………そうだな、武装リストを寄越せ」

興味を無くしたかのようにセシリアから視線を外した千冬姉は空にそんな事を言った。

「どござ」

とモニターが展開されて千冬姉の前に浮かぶ。

「ふむ。では千凧は私が言う、番号通りに武装を展開しろ。リストの一番上が一番だ。遅れるな。……………一！」

一瞬だけ、ちかり、と光ってアサルトライフルが展開される。

「二ー！」

展開が終わったかと思っただら千冬姉が次を言う。

その瞬間に空はアサルトライフルを収納し近接用ブレードを展開。

「三、四！」

今度は二つ同時。

近接用ブレードが収納され、右手にショットガン、左手には短銃身のサブマシンガンが展開。

それから、千冬姉が番号をランダムに言えば空が武装を変えるところ状態が繰り返される。

「ふむ、中々だな。セシリア、織斑。お前たちも千凧を見習え。

さて、残り時間は何をしようか」

「はいっ！」

勢いよく手を挙げるセシリア

「なんだ、オルコット」

「千凧さんとの決着をつけさせてください」

「馬鹿者。そこまでの時間はないし、アリーナでもないのに模擬戦が出来るか。だが、まあ教材代わりにはなるだろう。次回の授業でできるように手配してやる」

「ありがとうございます」

「よし、では今日の授業はここまでだ。各自、復習はしっかりとしておけ。専用機持ちは研鑽を怠るな。解散！」

千冬姉の宣言で俺たち専用機持ちはISを収納し他の生徒たちもめいめいに散ってゆく。

「一夏」

そんな中、俺に声をかけてくる空。

「なんだ？」

「今日の放課後、第三アリーナで急降下、完全停止の練習をしようか。大丈夫、出来るように調教しんぎょうしてあげるから」

ぞくり、と背筋に冷たい物が走る

「オ、オテヤワラカニオネガイシマス」

空の朗らかな笑顔が、今は逆に怖かった。

* * *

「side：」

ちょうど、同刻

「ふうん、ここがそうなんだ」

IS学園の正面玄関。

そこに小柄な体に不釣り合いに大きなポストンバックを抱えた少女がいた。

#09：東の間の平和（後書き）

なんかIS関係に関してハイスペックな空くん。

果たして隠された謎は一体？

………こんなんじゃないのかな？とか思った答えがあったら感想の所んでも予想を書いてみてください。

当たり外れは言いませんけど。

#10：転校生はセカンド幼馴染／副々担任は……（前書き）

久々に更新！

まあ、この#10その物は一週間くらい前に書き終わってた分ではあるんですけど。

整合性チェックと修正となんか変の三拍子で保留にしてみました

#10：転校生はセカンド幼馴染／副々担任は……

「side：一夏」

「織斑くん、おはよー。ねえ、転入生の噂聞いた？」

セシリアと俺が授業でフルボッコにされ、俺のクラス代表就任を祝う（ちつともめでたくない）パーティーと言う名の騒ぎの翌日

「転入生？今の時期に？」

ようやく扱いが珍獣からクラスメイトになって来た事を実感しながら俺は話にのった。

「そう。なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

そういうクラスメイト女子A（まだ名前は覚えていない）。

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

代表候補生という単語に反応して、セシリアが腰に手を当てたポーズを決めながらこっちに来た。

どうでもいいけど、ほんと様になってるよな。

イギリス人はこのポーズがよく似合うように出来てるのか？

「このクラスに転入してくるわけでは無いのだろう？別段、騒ぐ事でもあるまい。」

更に、今さつき自分の席に戻って行っただばかりの篤も戻ってきて参戦。

やっぱり篤も女子。

噂話には敏感なんだろう。

「どんなヤツだろうな」

「む、気になるのか？」

「ん？ああ。少しな。」

「むう……」

ちよつとむくれた篤。

なんだか最近情緒不安定だぞ？

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があると言っのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。来月のクラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ」

クラス対抗戦。

読んでそのままなクラス代表によるリーグマッチで、スタート時点の実力を測るため、アンド、クラス単位での交流およびクラスの団結の為のイベントだそうだ。

『めんどい』と流されてしまう事を防ぐために一位クラスには優勝

賞品として学食のデザートフリーパス（有効期間：六か月）が配られる。

確かに、女子を釣るにはもってこいのネタだな。

「まあ、やれるだけはやってみるさ。」

最近の基本操作の習得に手間取っているから『実戦的』な事は殆ど出来ていない。

故に、勝てるかどうかは怪しい。

けど、ここであっさり引き下がるのも癪だと思っからの答えが『やれるだけやる』だった。

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるもの、そのような弱気でどうする。」

「織斑くんが勝つと、クラスみんなが幸せだよ！」

そんな俺の心中を知ってか知らずか…多分知らないで好き勝手に言ってくるクラスメイトたち。

空は『近接戦闘に必要な勘とか距離感はあるんだからそれをIS用に発展させれば大丈夫だ』とか『基礎ができれば化ける』って言うてくれてたし…頑張るしかない。

聞けば、ISの操縦がセシリアよりも上手い（少なくとも、俺にはそう見えた）空ですら、伸び悩んだ時期があったという。

空曰く『操縦者も一次移行ファーストシフトしないといけない』。

『ISは、操縦者に機体を合わせる。だから、操縦者も機体に体を

合わせてやらなくてはならない。』という意味らしい。

「俺も、ファーストシフト一次移行しないとな」

「織斑くん、頑張つてね」

「フリーパスの為にもね！」

そんな俺の咳きは集まって来た女子の声に掻き消されて誰にも届かない。

「今の所、専用機を持つてるクラス代表は一組と四組だけだから余裕だよ」

丁度その時だった。

「その情報、古いよ」

教室の入り口の側から声が聞こえた。

それもなんか、すげー聞き覚えのある。

「二組も、専用機持ちが代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝をたててドアにもたれかかっていたのは

「…鈴？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンヤン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たって言

う訳。」

ふっ、と小さく笑みをもらし、トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れる。

それにしても……………

「何、かっこつけてんだよ。すげえ似合わないぞ」

「んなっ！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

「そうそう。それでこそ鈴だ。久しぶりだな。鈴、後ろ」

「おい」

「何よっ！？」

振り返った瞬間、鈴の顔面に出席簿がめり込んだ。

バシン、と響いた音はなんとも痛そうだ。

「もう、SHRの時間だ。教室へ戻れ。」

「ち、千冬さん…ッ」

バシーン

「織斑先生、だ。さっさと戻れ。それと入り口を塞ぐな、邪魔だ」

「す、すみません……………」

「すすごとドアから退く鈴。
完全に千冬姉にビビってる。」

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

二組に向かって猛ダツシユする鈴。

「っていつか、アイツ、IS操縦者だったのか。」

初めて知った。

「……………一夏、今のは誰だ？えらく親しそうだったが、知り合いか？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で」

「箒にセシリア、その他クラスメイトからも質問の集中砲火が始まるが…」

ああ、馬鹿　　鈴が追い返された理由を忘れたのか？

「席につけ、馬鹿ども」

千冬姉の出席簿が火を噴いた。

叩かれた頭を抱えるクラスメイト達。

……………それにしても不思議なもんだ。

こつも知り合いばかりと再会するなんてな。

出席を取り終わったから、授業の準備をしようか。

確か一時限目はISの基礎技術論だったはず。

テキストを机の上に引っ張り出して山を為す。

お、山田先生が来て……………教卓の前をスルーした！？

そのまま空席になったままの空の席に座る山田先生。

「それじゃ始めようか」

至極明るく入って来た空が教卓の前に立つ。

「あれ？…どういう事？」

誰からともなくこぼれた眩き

「ああ、言い忘れていた。」

答えるのは千冬姉

「ISの技術関係の知識は我々よりも千風の方が充実しているのでは。特例として講師扱い、副担任補佐として授業をする事になった。しっかり学べ。」

……………それでいいのか？IS学園。

* * *

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休み、俺の所にやってきた箒とセシリアの開口一番は俺に対する文句だった。

「なんでだよ」

この二人、午前中に山田先生から注意三回、千冬姉に二回叩かれています。

更に空にも注意二回、出席簿アタック一回をそれぞれ貰っている

全部合わせたら注意五回、出席簿三回ずつだ。

とりあえず、千冬姉の出席簿アタックと同等くらいの音と痛みが

うだったただけ言っておく。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……ま、まあお前がそついうのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げない事も無くってよ」

「おーい、空。学食行こうぜ」

次に誘うは空

だが、返事がない。

「…空？」

したら

「千凧くんなら、昼休みになってすぐに出てったよ？」

と、クラスの女子 確か相川さん が教えてくれた。

成る程。もうどこかに行ってるって事か。

「しゃーない。行こうか」

篤とセシリア、他数人と一緒にそろそろと学食へ移動した。

学食で注文するのは俺は日替わりランチ、篤はきつねうどんでセシリアは洋食ランチといういつものラインナップ。

毎日日替わりランチを注文してる俺が言うのもなんだけど、他のメニューも試してみようぜ？

『 で、あるからISでの近接戦闘は 』

ふと、聞き覚えのある声。

声の方向に視線を向けると食堂に設置されたモニターがあつて、そこで空がISでの近接戦闘についての講義をしていた。どういふ訳か、制服じゃなくてスーツっぽい格好で。

なんだか本物の教師っぽい。どれくらいかかって言うと、山田先生よりも教師っぽい。

成る程、だから昼休みになってすぐにいなくなったのか。

あ、端っこに『千凧先生のIS講座』ってテロップが入ってる。提供は…… IS学園教務課と放送部か。

なんだか通信制の大学みたいだな、とか思っていたら

「待ってたわよ、一夏！」

俺たちの前にどーん、と立ちふさがる小さめの影。

言うまでもなく噂(?)の転校生にして新たに二組の代表になった中国の国家代表候補生。

鳳鈴音。まあ、俺は略して鈴と呼んでるが。

「まあ、とりあえずそこをどいてくれ。食券が出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。判ってるわよ!」

うーん、それでも気配り無しに立ちふさがるんだからあんまり判ってなさそうだな

しかも、ラーメンの乗ったお盆を持ったままだとは…

「ラーメン、伸びるぞ」

「わ、わかってるわよ!大体、アンタを待ってたからでしょうが!なんで早く来ないのよ!」

エスパーでもない俺にどうやってタイミングを合わせると?

とりあえず食券をおばちゃんに渡す

「それにしても、久しぶりだな。ちょうど一年ぶりになるのか。元気してたか?」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病氣しなさいよ」

「どっついつ希望だよ、そりゃ…」

なんでか俺の廻りの異性はこつもアグレッシブな人ばかりかな。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンツ！一夏さん。注文の品、できてましてよ？」

大げさな咳払いをした箒とセシリアに会話は一時中断。
注文した日替わりランチのトレーを受け取る。

おお、今日は鯖の塩焼きか。うまそうだ。いや、『うまそうじゃなく
くてうまいんだよ（by食堂のおばちゃん）』だったな。

「ええと、向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

鈴も含めた十人余が大移動してテーブルに着く。

「鈴、いつ日本に帰って来たんだ？おばさん、元気か？」

「質問ばかりしないでよ。あんたこそ、なにIS使ってるのよ。
ニュースで見てびっくりしたじゃない」

まる一年ぶりの再会とあって普段以上に話しかけていた俺。
やっぱり、幼馴染という長い時間を一緒に過ごした相手の空白期間
は気になる物だ。

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだから」
「そうですね！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしや
るの！？」

箒とセシリアが多少とげのある声で聞いてきた。

他のクラスメイト達も興味津々と言わんばかりに頷いてる。

「べ、べべ、別に私は付き合ってるって訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ？ただの幼馴染だよ」

そう言ったら鈴から睨まれた。

「？ 何、睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

行き成り怒った。変なヤツだな。

「幼馴染………？」

怪訝そうな声で返したきた篤。

「ああ、そういえば篤が引っ越していったのが小四の終わりだったよな。鈴が越してきたのは小五の頭だよ。それから中一の終わりに国に帰ったから、会うのは丁度一年ぶりだな」

そういえば、鈴は篤と面識がないんだったな。

ちよつど入れ違いになる感じで引っ越してきた訳で。

「で、こつちが篠ノ之篤。ほら、前にも話したろ？幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘。」

実際の所はアキ兄を長男にして長女千冬姉、二女東さん、三女が篤で二男が俺（誕生日的な意味で）って言える兄妹みたいなもんだっただけ。

いや、アキ兄は父親ポジだな。で、俺が繰り上げ長男。

「ふうん。そうなんだ」

鈴がじろじろと箒を睨みつけ、箒も負けじと鈴をにらみ返す。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう、挨拶を交わす二人の間に火花が散ったような気がした。

思わず視線を机の上に展開されてる講義放送に向けてしまったのも仕方ないと思う。

ふむふむ。近接戦闘のキーポイントはいかに間合いに入り込むか、と如何に相手の得意レンジから脱するかなのか。

「ンンンっ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

「……………誰？」

「なっ！？わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですてよ！？まさかご存じないの！？」

「セシリア、それ俺んときもやった会話だぞ」

代表候補生なんて他国じゃ全く取り沙汰されないって。

「うん。あたし、他の国とか興味ないし」

「なっとなっとなっ………!？」

そして、鈴も相手を逆上させるような言い方しなくてもいいだろ。

『ふうん、よろしくね』と無難に流すって手もあつたらうに

「い、い、いっておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ!」

「あ、そ。それでも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど、強いもん」

「……………」

「い、言ってくれますわね……………」

自信満々に言いきった鈴は何食わぬ顔でラーメンをすすり、箸は無言で箸を止め、セシリアはわなわなとふるえながら拳を握りしめた。

んあ、俺？

講義を見てるぞ、食いながら。

「一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「おう。成り行きでな」

「ふーん」

どんぶりを持ってごくごくとスープを飲む鈴。

レンゲとかを使えばいいのに『女々しいから嫌』と使わない。

女々しいって…お前、女だろうが。

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど?」

俺から顔をそらして、視線だけを向けて言ってくる鈴。

「ああ、でも今は空に指導してもらってるんだよな…」

正直言っつて、今の所は空の指導についてくのがやっとだしなあ…

「誰よ、『空』って」

「ん」

俺が指さすのはモニターで教鞭を振るうスーツ姿の同級生（同性）。

モニターを親の敵かのように睨む鈴。

「アンタ、教師を呼び捨てにしてるの?」

「クラスメイトだぞ。」

「はあ!?!」

そついや、鈴は空の事知らないんだよな。

俺だつてIS学園に来て初めて会った訳だし。

「千風空って言って同じ一組の生徒なんだ。専用機持ちで、なんだかんだで授業も持ってるぞ」

しかも判り易いんだな、これが。

「なんだかんだって、どういう理由よ」

俺だって知らん。

「それよりさ、今日の放課後、時間あるわよね？久しぶりだし、どこか行こう。駅前のファミレスとか」

「あー、あそこ去年つぶれたぞ。」

「そ、そう。じゃあ学食でもいいから、積もる話もあるでしょ？」

うーん、俺としてはコレと言ってないんだが。

強いて言えば全国大会の話くらいか？

「一夏。放課後は空に実機訓練を見てもらっ予定だろう」

「そ、そうですね！クラス代表戦に向けての特訓がありますわよ！」

「ここぞとばかりに『訓練』の予定を押し立ててくる篤とセシリア。

教えるのはお前らじゃなくて空だろ？

なんでそんなに強く推すんだ？

「じゃ、それが終わったら行くから。空けといてね。それじゃあね、

一夏！」

一気にスープを飲みほした鈴は片づけに行ってしまう。
もちろん、そのまま学食を出て行ってしまった。

返事はしてないが、断れても居ないからこれは待つしかないな。

「一夏、稽古も忘れるなよ」

へいへい。

#10：転校生はセカンド幼馴染／副々担任は……（後書き）

とりあえず、『それでいいのか、国立ISS学園』

生徒を教師にするなんて許されるのか？なんて思いながら書いてたんですけど、『ISS学園だから』で押し通す事にしました。

案の一つではあったんですよ？ 15歳の副担任も

#11：去りゆく平穩（前書き）

大分溜まって来たので放出タイムです

#11：去りゆく平穩

「side：一夏」

「さて、今日は完全停止　「それよりもわたくしと実戦的な訓練を致しましょう。この国の言葉で『百聞は一見に如かず』という言葉が有りますでしょうか?」…」

アリーナでいつも通り教師役をやってくれる空の言葉を遮ってセシリアが前にずいつ、と出てきた。

「実践の中で得られるものは少なくないハズですわ。なにせこのわたくし、代表候補生であるセシリア・オルコットとの戦闘訓練なのですから」

押しつけられた空は憮然とした表情になる。

「接近戦対策はどうする気かな?」

「それはあちらの篠ノ之さんがやってくれますわ」

セシリアが指さす方向には訓練機　打鉄　を着装した筈。

なんというか、『ザ・サムライ』と言わんばかりに似合っていた。

「だから安心してひっこんでらっしゃいませ」

「なるほどね。それじゃあ、どっちが先に戦闘訓練の相手をするの

かな？」

空の言葉に二人は『何、きまりきった事を聞くのだろう』と言わんばかりの顔で

「それは当然」

こう言った。

「私だ」「わたくしですわ」

それにしても見事なシンクロだ。

「……………」

そして、二人の間に沈黙が横たわる。

「あら、篠ノ之さん。接近戦の訓練を幾らやっても接近出来なければ意味がないのではなくなつて？」

「ふん。接近戦とは自分の間合いに相手を入れるところからだ。問題は無い」

「剣術稽古もやってらっしゃったんだから接近戦対策は十分なのではなくなつて？」

「ISと生身では勝手が違うだろう。生身の修練の成果をIS用に組み替える為の時間は必要だ」

言い合いを始める筈とセシリア。

「というか、箒の言い分の八割は空の受け売りじゃないのか？」

「ならば、どちらが一夏さんの対戦相手にふさわしいか、勝負ですわ！」

「良かろう。その一滴、刀のさびにしてくれろ！」

「訓練機相手に負けるほど、わたくしはやさしくなってますよ！」

箒が斬りかかり、セシリアはそれをあらかじめ呼び出してあったシヨートソード インターセプター で受け止め、レーザーライフル 《スターライトMk - III》を至近距離射。

それを箒はセシリアに体当たりをかけて回避し間合いをさらに詰める。

「さて、あの二人は放っておいて完全停止の訓練を始めようか。安定して出来るようになったら次に入るから心してかかるように。」

「お、おう。いいのか？あの二人を放っておいて」

「構わないよ。いい実戦訓練だからね」

にこりと笑う空。

その左腕にはスターライトMk - IIIといい勝負にでかい対IS用狙撃銃が展開されていて、その銃口はびたりとある一点を捉え続

けていた。

そう。筈と激しい戦闘を繰り広げるセシリアの頭に。

「さて、一夏。急加速して急停止。徐々に発展させて最後は瞬間加速から完全停止といこうか。」
イケニッション・ブ

「お　「あぁっ！千凪さん、抜け駆けはゆる」たぁん、たぁん、たぁん、たぁん」

俺の返事と同時に気付いたセシリアが声を上げ、セリフを言いきる前に空の狙撃銃が火を吹いて黙らせた。

セシリアはISのシールドと絶対防御のおかげで傷一つないようだけど、三発も頭に叩き込まれたせいでシールドエネルギーは絶対防御で使い果たし、ブルー・ティアーズは地に墜ちてゆく。

「オルコットおおおおお！」

まるで戦友を目の前で殺された兵士みたいな反応だな、筈。ほら、映画とかでよくありがちな。

まあ、その叫び声の残響が消えるよりも早く

たぁん、「ぐっ！？」たぁん、「がっ」たぁん、「あっ」

セシリアと全く同じ方法で撃墜される筈。

まったく同じように落下して行って、脳震盪でも起こしてるのか中

々起き上ってこない。二人とも。

「さて、それじゃあ実戦あるのみだよ」

「お、おう」

何事も無かったかのように朗らかに笑う空。

ただ、その左手にまだ銃口から湯気の上がる大型狙撃銃をもったままという姿で。

「それじゃあ、始めよう」

その笑顔は、どこか某世界最強を彷彿とさせる物騒な笑みに感じられた。

* * *

「ぜえ…ぜえ」

「ひー、ふー」

「それじゃあ、今日はここまでにしようか。」

「お、おう」

空の背後に復活したはいいけど、何度も撃墜されたセシリアと箒が疲労困憊していた。

ある意味では、空は俺と箒とセシリアの三人に訓練をつけていた事になるのか。

内容は俺は完全停止でセシリアは狙撃戦の、箒は弾幕による接近防御に対する戦闘法と言ったところか。

「な、なんなのだ。弾をバラまくのが仕事のサブマシンガンでこうも命中させるとは……」

「うう、化け物ですわ。なんで回避運動を取っているのに当たるんですの?」

ぐったりとあせだくになった箒とやや虚ろな瞳になりつつあるセシリア。

…そういうば、こんどの授業で空対セシリアの模擬戦をやるんだっけ?

「夕飯後にはいつも通り座学をやるから、授業で判らなかつた処のピックアップは忘れないように」

「了解、空先生」

冗談めかして俺が言ったら

「馬鹿者。教師への返事は『はい』だけだ」

なんて言ってきた。

なんというか、千冬姉っぽくなんだろうけど、物凄く背伸びしてる

感がある。

「ぷっ、ははは。似合わないぞ、そのキャラは」

「百も承知」

空の方も完全に冗談だったらしく笑いながらそう返してきた。

「それじゃあ、そっちはよろしく」

と空はぐったりしたままのセシリアを抱え上げて反対側のピットへと飛んでゆく。

ついでに、箒の使ってた打鉄も空が持つていった。

取り残される俺と箒。

箒の事を任されてしまった俺は恐る恐る箒に近づいてみた。

汗に濡れた箒の姿は独特の艶っぽさを持っていて、少しドキリと来た。

『少し』だからな。

「おーい、大丈夫か？」

「こ、この程度……………」

なんとか立ち上がろうとするが打鉄のアシストがない状態ではかなりキツイらしい。

たちあがってすぐにふらついていた。

「箒」

「な、なんだ」

「ちよつと動くなよ」

見ていられなかった俺は箒に無理に動こうとさせずに横抱きに持ち上げた。

白式のパワーアシストのおかげで全く重くない。

まあ、生身でも持てる程度だし。

「なっ！？ば、馬鹿！降ろせ！」

「はいはい。ピットに着いたらな」

「い、今すぐにだ」

「少しは自分の状態を考えてから言おうな」

こんな口論（？）をしているうちにピットに到着。

そつと降ろしてやると何故か少し残念そうな顔になる。

降ろして欲しかったのか、欲しくなかったのかイマイチ判らない。

「ああ、セシリアたちと同じ側のピットの方が良かったか？」

「い、いや。こちらで構わない」

ふと気付けば筈と二人きりだ。

まあ、今はお互いに疲れててそれどころじゃない訳だが。

ISを展開解除してから体が重い。

パワーアシストが切れて、疲労がしつかりと押し掛かってくる。

「ふー、疲れた」

ロッカーの一つを開けるとそこにはボトルが一つとタオルが数枚。

ボトルの中身はぬるめのスポーツドリンク。

運動後の熱を持った体に冷たいドリンクを流し込むなど自殺行為に等しい。

確かに気分爽快かもしれないが。

ここ最近、空にしごかれるときは死ぬ気でやらないといけないから自前のを用意してるのだ。

まあ、今日に限っては俺よりも筈の方が必要そうなので譲る事にするが

今日は俺はとにかく『加速 急停止』の繰り返しだったから、それほどきつくは無かったんだよな。

「ほら、これでも飲んどけよ」

「ああ、すまない」

俺のボトルを受け取ってゆつくりと飲み始める筈。

途中、いきなり赤くなって咽たので『大丈夫か?』と聞いたところ『大丈夫だ』と帰って来た。

まあ、焦って気管に入ったんだろう。

「あと、汗は拭いとけよ。風邪ひくぞ。タオルはここに置いとくからな」

それだけ言って、俺は着替えを持ってロッカーの影に移り制服に着替える。

汗は拭いてあるが、やっぱりシャワーは浴びたいものだ。

「それじゃ、先に部屋に戻ってるぞ」

手荷物を確認。足りないのは筈に渡したボトルとタオルだけだな。

スライドドアが開いて俺が廊下に出ようとする同時、小柄な影が突っ込んできた。

「おうわっ!?!」

「きゃうっ!」

当然、俺とその飛び込んできた誰かはぶつかった。

「っと、大丈夫か?鈴」

ぶつかつたが、跳ね飛ばす前に掴まえて大事を避ける。

「あ、ありがとう……って！突然出てくるんじゃないわよ。びっくりするじゃない」

「それはこっちのセリフだ。」

「ま、いいわ。」

「立ち話もなんだ。食堂に行くか。篝、先に食堂に行ってるぞ」

ピットの中に一声かけてから俺は鈴と食堂に向かって歩き始めた。

その道すがら、お互いに一年間の話をし、食堂が比較的近くなってきた頃

「一夏さあ」

鈴が俺の前に廻り込んできた。

「やっぱり私が居ないと寂しかった？」

やけににやにやとしている鈴は見透かすような目で俺を見てくる。

「まあ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろ」

「そっじゃなくってさあ」

にっこりこと上機嫌な鈴。

う・む、昔になにか訳の分からない映画のチケットを掴まされた時に似た顔だな……………

ハッ！？まさかまた何かを売りつける気か？

「鈴」

「ん？なにになに？」

「何も買わないからな」

ずるっ、という擬音と共に姿勢を崩す鈴。

あれ、違うのか？

「アンタねえ……………久しぶりにあった幼馴染なんだから色々と言う事があるでしょうが」

言う事ねえ……………

「まあいいわ。そういえば一夏。アンタの部屋ってどこ？遊びに行くから」

「ああ、1025号室だけど」

「1025号室ね。わかった。それじゃまた後でね」

「 筭が同室だし、夜は空に座学を教えてもらってるから時間が

とりにくいぞ?」

途端、鈴は目に見えて不機嫌になった。

「幕って、この間の子?」

「そうだぞ」

「それって、寝食を共にしてるってこと?」

「まあ、そうなるか?」

「……………」

「まあ、同室が幼馴染でよかったよ。これが赤の他人だったら緊張で寝られそうにないからな」

「……………ったらいいわけね?」

「?」

「幼馴染だったらいい訳ね!」

俯いたかと思ったら突然頭を上げる鈴。

危つく頭突きをくらうところだったぜ

「わかった、判ったわ。ええ、よくわかりましたとも」

何故か勝手に納得を始めた鈴。

何が判ったのか判り易く説明して欲しい。

「一夏っ！」

「お、おう」

「幼馴染はあの子だけじゃないって事、覚えておきなさいよ！」

「別に言われなくても忘れていないが…」

「じゃあ、後でね！」

そう言っつて、鈴は駆け出して行つた。

…今年の流行語大賞は『後で』に決まりだろうか。
まだ四月だけ。

「うーん、何を考えてるのか、良く分かん。」

最近、幼馴染たちが良く分からない。

とりあえず、一人取り残された俺は一度部屋に戻るべく歩きだす事にした。

#11：去りゆく平穩（後書き）

筭が咽た理由〃いつも一夏が使ってるボトルだから

乙女な筭さんはふと気付いてしまったんですよ。

#12：やって来た火種

「side：一夏」

「　　と言う訳だから、部屋代わって」

「ふ、ふざけるなっ！何故私がそのような事をしなくてはならないっ!?!?」

場所は寮の部屋、1025号室。
時間は夕食も終わった午後八時。

部屋にやって来た鈴と箒が互いに火花を散らしていた。

「アレ、止めなくていいのか？」

俺が思わず空に言ってみると

「今は放置。必要なら手を出すよ。それよりもこの部分だけど前のページの欄外に説明があるから」

と、目の前の勉強の方に戻ってしまった。

「おお、本当だ」

成る程。何処にも記述がないと思ったら欄外にあったのか。

今度からは本文以外の場所もしっかりと読む事にしよう。

「「一夏っ!」」

「ん、どうした？」

呼ばれたので勉強を中断して振り向く。

したら、怒り心頭な鈴と箒が居た。

「アンタ、無関係を装ってるんじゃないわよ！」

「お前からこの女に言っただれ。」

…俺が何と言おうとも『我が道を征く』な鈴と人一倍頑固な箒との確執は解決できる気が全くしない。

「鈴」

「うん？」

「荷物はそれで全部か？」

「そうだよ。あたしはポストンバックひとつあればどこでも行けるからね」

相変わらず、フットワークの軽い事で。

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「ふ、ふざけるなっ！出て行け！ここは私の部屋だ！」

「『夏の部屋』でもあるでしょ？じゃあ問題ないじゃん」

そう言つて、二人して意見　　というか賛同を求めるように俺を見る、というか睨みつけてくる。

「俺に振るなよ……」
頭が痛い。

「学内規則……」
ぼそり、と空が咳く。

そういえば生徒による勝手な部屋の交換は認められてないんだつたな。

もし変えて欲しければ正式に理由を書類にして寮監に提出して監査を通る必要があつたはずだ。

「とにかく！部屋は代わらない！出て行くのはそちらだ。自分の部屋に戻れ！」

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

「む、無視するな！ええい、こうなつたら力づくで……」

激昂した箒がベッドの横に立てかけてあつた竹刀を握る

「あ、馬鹿　　」

俺が止める間もなく、冷静さを失つた箒は防具も何もつけてない鈴に向かつてその竹刀の切っ先を振り下ろした。

バシィンッ！

「あゝあ、やっちゃったよ」

物凄い音と、空の呆れた声。

つて、呆れてる場合かよ！

「鈴、大丈夫か!？」

「大丈夫に決まってるじゃん。今のあたしは 代表候補生なんだから」

箒の、確実に脳天を捉えていた打撃はISが部分展開した右腕によつてしっかりと受け止められていた

「ッ!」

それには箒が驚いていた。

ISの展開が幾ら早くとも『人間の反射限界を超えられない』という限界がある。

素人ならば為すすべなく打ちのめされていたであろう一撃を受け止めたという事は鈴自身はかなり強いという、単純明快な証明になっていた。

「ていうか、今の生身の人間なら本気で危ないよ?」

「うっ…」

怒りにまかせて自制心を失ったという指摘が効いたらしく、箒はバ

ツが悪そうに顔を俯けた。

「ま、いいけどね」

鈴は部分展開していた右腕を解除して俺の方に向いてきた。

「で？」

と俺に問いかけてくる鈴。

どうやら先ほどの『約束』の答えを待ってるらしい。

「約束……ええと、アレか？」

「お、覚えてる……よね？」

顔を伏せて、ちらちらと上目遣いで俺の方を見ってくる。

約束、約束……鈴との約束か……

一つ思い出せたのは『鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を作ってくれる』だ。

だが少し待て。

確かこの約束には続きに当たるやりとりがあったはずだ。

……確か小学生の頃

思い出した。

俺が『まるでプロポーズみたいだな。中国じゃ味噌汁じゃなくて酢豚なのか?』って言ったたら鈴は『そんなわけないじゃない』って、真っ赤になりながら慌てて否定してたんだ。

その後に『冗談に決まってるでしょ』って言ってきたからこれは違うだろう。

「うーん、思い出せん」

「……………それ、本気で言ってるの?」

「ん?ああ。　「おっ!?!」」

俺の返事に対する鈴の反応は、強烈なボディブローだった。

それこそ、常人じゃ最悪内臓破裂もあり得そうな位に強烈なヤツ。

俺は悶絶して蹲る。

流石にコレはキツイ。

なんとか鈴の方に視線を向けた。

肩を小刻みに震わせ、怒りに充ち満ちたまなざしで俺を睨んでいる。しかもその瞳には涙がうつすらと浮かんでいて、唇は涙がこぼれないうちにきゅっと結ばれていた。

「最ッ低!女の子との約束を忘れるだなんて!男の風上にも置けないヤツ!犬に噛まれて死ぬ!」

床に置かれていた鞆をひつつかんで部屋を出て行く

「つか、何だ？」

俺はそんなに大事な約束を忘れてるのか？

あの鈴が泣くくらいだ。よっぽど大事な約束だったんだろう。

だが、今はそれどころじゃない。

「づぶっ…」

腹を強打されたせいで、酸っぱいものが上がってきてる。

正直、我慢も限界に近い。

その後、俺は空に付き添われながらトイレと医務室をはしごし、医務室で一夜を明かすことになった。

翌日、生徒玄関前の廊下に大きく張り出された紙があった。
表題は『リーグマッチクラス対抗戦日程表』。

一組代表…つまり俺の一回戦の対戦相手は二組代表

鈴だった。

#12：やって来た火種（後書き）

うちの一夏くんは原作よりも少しだけ、鈍さの度合いと方向性が違ってます。

#13：閑話 ある日の事（前書き）

ちよつとだけ本筋から離れて、久しぶりに彼女が主役になりますよ

13 : 閑話 ある日の事

「side:簪」

二組に中国からの転入生が来た次の日の夜…

気の抜けたノック音の後に

「千凧くん、更識さん。いますかー？」

と間の抜けた声がある。

この声は確か…一組の副担任の山田先生？

「はい」

返事をしたら『お邪魔しますね』と山田先生が入って来た。

「あれ？千凧くんは…」

「空なら、多分一組の織斑くんのところで勉強を教えられていると思います」

「そうですか。それじゃあ伝言をお願いしますか？」

…伝言？

「大丈夫ですけど…」

「それでは、『部屋の準備はできました』と伝えておいてください
ね」

「…部屋？それってどういう事なんですか？」

「ええと、千凧くんがお昼休みに放送講座をやったり放課後に一組
で補習講義をやってるのは知ってますよね？」

「はい」

昼休みのは、一応。でも放課後の補習は初耳だった。

明日は放課後、一組に行ってみようかな。

「それに昨日から一組での授業を外部講師の扱いで受け持つ事にな
ったんです」

「はあ」

それも初耳。

というか、そんなんでいいんだろうか。国立IS学園。

「その関係で、副寮監室に千凧くんが引越す事になったんです。」

…つまり、講師扱いになるから生徒と一緒にするのではなくて別の
部屋を用意したって事？

「織斑くん関係で部屋割の組み直しが終わるまでしばらく一人部屋
になりますけど、そこは我慢してくださいね」

「まあ、それはいいですけど」

「それじゃあ、伝言をお願いしますね。必ず伝えてくださいよ」

「はあ…」

『絶対ですからね』と言い残してから、山田先生は引き揚げて行った。

…とりあえず、伝言しなきゃいけない内容は『部屋の準備ができた』って事だけ。

で、それを伝えたら千凧くんはこの部屋から引越しになって副寮監室で寝泊まりする事になる。

それって、つまり……………

『伝言を伝える』この（同棲）生活の終わり』…？

うん。黙っていよう。

で、山田先生に伝えたかどうか聞かれたら『忘れてました』って誤

魔化そう。

うん、決定！

* * *

結論 無駄なあがきだった。

どうやら織斑くんの部屋から戻ってくる最中に会って直接話を聞いたらしい。

テキパキとタンスの中身とか机の中身とかを片づけてゆく姿を私は呆然と眺めるだけ。

ふと、私のデスクの上に置いてある空間投射ディスプレイの基部が目に残る

「あつと、千凧くん。」

「何かな」

「ディスプレイ、返すね」

無理言っ借りたモノだから返さなきゃ…

そう思ったけど

「ああ、それはまだいいよ。」

と、あっさりと受け取りを拒否された。

「でも…」

「部屋こそ変わるけど同じ寮の中なんだし。」

「でも」

「それより、もう同室になって一ヶ月近く経つんだからそんな他人行儀じゃなくてもいいのに」

他人行儀っていうのは、名前で呼ばずに苗字で呼ぶ事。

姉さんとの和解が出来た次の日には『名前呼びにしてくれ』って言われたんだけど

「あう………」

今の所、恥ずかしくて一度も言えた事がない。

「まあ、機会があったら副寮監室に遊びに来ればいいよ」

「う、うん。」

荷物を纏め終わった千凧くんが鞆を肩にかけた。

「それじゃあ、また明日」

「うん、また明日。おやすみ、そ………空くん」

やった………ッ！

空くんはちょっとびっくりした後、にっこりと笑って

「おやすみ、簪さん。良い夢を」

パタン、と静かにドアが閉まって、私はベッドに飛び込んだ。

やった！

遂に、名前で呼んじやったよ！

きつと真つ赤な顔を隠すように枕に押しつける。

あ、なんかいい匂い。

……………ふと、思い出す。

私が飛び込んだベッドはさっきまで椅子の代わりにしてた場所で、ちょうど片づけをする空くんの背後。

つまり、奥側のベッド。

そっち側は私が使ってたベッドじゃなくて……………

「~~~~~!~!~!」

完全な自爆。

うん。自覚してる。

私は、たぶん、空くんの事が好きなんだ。

下手をすれば同性に見えなくもない彼が、ありのままの私を見てくれた彼が。

……この気持ちかホンモノなのかは判らないけど、もし本物ならば
私は

とりあえず、一つだけ。

今夜は寝れそうにない。

* * *

翌日、脳内麻薬的なモノがダダ漏れになって生まれた脳内ドラマ『君と出会った春』それは同室から始まった』(全467話 総計934時間 続編製作決定)の作成&・脳内上映によって殆ど一睡もできなかった私はようやく訪れた強烈な眠気に襲われていた。

「ふあ……わふ」

なんだかクラスメイトの視線が生温かいような気もするけど、あんまり気にせずに私は机に突っ伏す。

ホームルームが始まったら起こしてもらえるように頼んだから安心して……

「はい、それじゃあ授業を始めるよ。テキスト出して」

その瞬間、私の意識は完全に覚醒していた。

がばっ、と飛び跳ねんばかりに起き上るとみんなの視線が集まってくる。

教壇に立っているのは、空くん。

「あれ？なんで空くんが…？」

もしかして、コレは夢なんだろうか。

覚醒したと思っただけで夢の中でも居眠りしてただけなんじゃ……………

ばこん

「あつ」

混乱してたら出席簿で頭を軽く叩かれた。

その感覚でしつかりと目が覚めた。

うん。これは現実だ。

「目は醒めたかな？」

「う、うん……………でも、なんで空くんが四組の教壇に立ってるの？」

「うん？この時間を担当する先生が風邪で休んでるから代理だけど
？」

『今は授業中だから先生と呼ぶように』なんて言ってきた空くん。

「それじゃあ、目ざましついでにテキストを読んでもらおうかな。

項目は

「
そうして始まった授業。

代表候補生である私からすれば事実の追認作業でしかなかった授業
がやけに楽しく感じられた。

……………とりあえず、脳内ドラマの脚本は書き変えないと。

ぱこん

「あつっ
」

「集中するのはいい事だけど、今は授業に集中しようか」

「……………ハイ」

後に聞いた話だけど、一組の、織斑先生の授業の時は悶絶級の威力
の出席簿アタックが飛に事が良くあるらしい。

この時ばかりは四組で、織斑先生の担当クラスじゃなかった事に感
謝した。

#13・閑話 ある日の事(後書き)

千風先生、ついに他クラスに進出ス

そして簪がちよっと駄目な子に……………

簪の作り上げた脳内ドラマには元ネタがあるのですが……………判るか
な？

13・5：対決 セシリア vs 空（前書き）

先に謝っておきます。

オルコツ党の皆さん、ごめんなさい。

はつきり言ってテストだ課題だ会議だガイダンスだと忙しくて、壊れかけた状態で書いたが為にこんな事に……

#13・5：対決 セシリアvs空

「side：」

中国の代表候補生鳳鈴音の転入の数日後……

「これより、オルコット対千凧の試合を始める。両者、準備はいいか」

授業内の模範演武的な扱いになる筈だった二人の試合が、全校に公開という形に代わり行われようとしていた。

噂になっている『教員化した男子生徒』、その相手が第三世代型ISを擁する代表候補生ということでアリーナにはかなりの人が入っていた。

「はい」

「いつでもどうぞ」

審判兼管制官を務める千冬の声に返事をする二人。

それぞれ己が相棒せんぼうを展開して開始線についている。

モニターに簡単なデータが表示されているが、それによると空のISは『雑風』というらしい。

第二世代型で打鉄に似た外見を持つバランス型。それが表示されたデータの全てだった。

（相手は第二世代型。とはいえ、加速性能は第三世代型をよりも上のようですし……油断は禁物ですわね）

打鉄をベースにした改造機を纏った空と対峙するセシリアは自分に言い聞かせるようにして浮かびあがってくる慢心を押さえこむ。

慢心は勝負においてかなりマイナスな要素をもたらす。

それが原因で、素人かつ初心者：IS総搭乗時間三〇分未満の一夏に首の皮一枚残すギリギリまで追い詰められた。

先日の筭との戦闘でも訓練機で近接戦闘を主とする相手であったにもかかわらず互いに『負けなが勝てない』という膠着状態に持ち込まれてしまった。

まあ、筭との一戦は互いにクセの読みあいと牽制をやっていたら空に撃墜されたので落とすもなにもない、というのがあるが。

（見た目はなんの代わり映えもしない打鉄タイプにしか見えませんが……）

セシリアの脳裏に実習の模範飛行の時に一夏を吊り上げた腕部固定型のウインチランチャーの事を思い出す。

最初に展開された時は装備されていなかったものだ。

（固定武装の換装。……厄介ですわね）

固定武装というのは交換が難しいか取り回しに難のあるものが大抵だ。

だが、その取り回しの悪さや手持ち武装化ができない代わりに特殊な攻撃方法が使えたり、手持ち火器よりも高火力であったりする。

特殊なモノならばセシリア自身のBT兵器、ブルー・ティアーズ。高威力ならばラファールタイプによく使われる六九口径回転式連装型パイルバンカー『グレー・スケール灰色の鱗殻』が好例だろう。

（少なくともウインチ以外にも何か装備は持っている筈：固定武装の変更をさせずに封殺するのが一番：かしら）

セシリアは『試合開始』の聲がかかるまでの僅かな時間を使って戦術を組み上げていた。

とはいえ『何を持っているのか』が判らない以上かなりあいまいなモノにならざるを得ない。

それも、固定武装の変更が持つ強みなのだろう。

「それでは

」

始め。

千冬の声と試合開始を告げるブザーがアリーナに響いた時

「へっ？」

セシリアの視界は巨大な尖端で埋め尽くされていた。

「なっ!？」

強引に体を横スライドさせてその尖端から逃れると同時に、ズドンという轟音と共に直径十センチ余という極太の杭が数瞬前までセシリアの頭があつた場所を通り過ぎた。

回避に成功したとはいえ、セシリアは自分の血の気が引いていくさあつ、という音を聞いた気がした。

「外したか」

続けざまに放たれる、空が左手に保持するアサルトライフルからの射撃を回避しつつセシリアは距離を取る。

「あ、危ないじゃないですよ!」

あんな凶悪なモノ、喰らったら死んでしまう。

そんな思いがセシリアに抗議をさせるが

「ああ、心配無用。ちゃんと絶対防御を抜かないように炸薬量は調節してあるから。死なない、死なない。まあ、精々脳震盪でしばらく動けなくなるくらいかな。流石、一〇五ミリ。」

「そういう問題ではなくてですね、ていうか、十センチもあるんですの!？」

蛇足な上に繰り返しになるが一般的に使用される有名どころのパイランカー『グレー・スケール』の口径は六九ミリである。

一〇五ミリと言えば最早戦車砲の砲弾レベルの口径だ。

事実、陸上自衛隊が使っていた七四式戦車の主砲が一〇五ミリライフル砲であった。

つまり、戦車砲と同じ口径の杭を絶対防御を抜かない程度ギリギリの炸薬量でぶっ放す訳である。

取り回しの悪さ、反動の大きさ、どちらも最悪レベルだろうが威力だけは確かそうだ。

「とりあえず、コレはもうお終いかな」

そう言っクローズてパイルバンカーを収納した空。

次に現れた武装は

* * *

「チエーンソー？」

「んー、チエーンソーって言うよりは、チエーンソー・ブレードって処じゃないのかなあ」

「尖端怖いセンタンコワイせんたんこわい……………」

空がパイルバンカー装備になった途端に錯乱し始めた楯無は放置して、簪は幼馴染にして従者である布仏本音と一緒に分析していた。

「なんとというか、傍から見てる分には普通のブレードの方がいいんじゃないかと思うけど…」

『いやあああつー!』

『当たっても切れないで削れるだけさ。当たり続けると削り斬られるけどね』

『舞え、” 薙風 ”。その名の如く!』

『こつちこないでえええ!』

「…十分、効果あるかも」

実際、簪としても自分があのソー・ブレードを使われたら泣き叫んで逃げ回る自信があった。

ぎゃりぎゃりという刃が回転する音と何故か響き渡るエンジン音。

そしてそれを振り回すイイ笑顔の空。

その笑顔は千冬の『獲物を見つめる目』と同じなのだから、ああ怖い怖い。

「確かに、せつしーの心が折れそうだよな。ベキって」

そういえば、本音と今回対戦している二人は同じクラスだったと思
い出す簪。

それからしばらくしたら突然、エンジン音が止んだ

『ん？燃料切れか』

心底残念そうな空の声に幾人もが冷や汗を流す。

対してセシリアは心の底からホツとしたような顔になる。

『よし、次と行こうか』

チエーンソー・ブレードがクローズされて次に呼び出された武装は………棘付の鉄球だった。

『さーて、次はこれだ』

『もういやあああ！』

執拗に顔面を狙う空。

それを必死になって避け、逃げるセシリアという構図は当分崩れそうになかった。

* * *

「なんとというか、俺、空と戦う事にならなくてホントに良かったって思ってる」

「ああ。そうだな。オルコットはその事を身を以って証明してくれた。アイツは…皆の為に犠牲になったんだ」

合掌しそうな勢いの一夏と篤。

多くの生徒がセシリアに同情を寄せるか、冥福を祈っていた。

その彼女らの眼前では右腕に大きな缺のようなモノを取りつけてセシリアに迫る空の姿があった。

恥も外聞もなく逃げ惑うセシリア。

彼女の辞書からは『無様』や『卑怯』といった言葉が抜け落ち、そのスペースには『いのちはだいじ』とか『三十六計逃げるに如かず』という逃げる事の正当性を訴える言葉が書き込まれていた。

試合開始からすでに十数分。

その間にセシリアの身を襲った珍兵器たちは以下の通りだった。

最初の一〇五ミリ径回転装式パイルバンカーに始まり次に出てきたのはチェーンソー・ブレード。その次は人の頭ほどの大きさの鉄球。当然、棘付きで鎖につながれた、某ハイパーなハンマーみたいなアレだった。

それで終わりかと思いきや、土木作業で岩を砕くために使いそうな巨大なハンマー、次は塹壕戦における最強兵器である歩兵の友スコップ。

そこらへんの近接武装が終わったら今度はベアリング弾をバラまくクレイモア・ランチャーの弾幕に晒され、それをなんとか耐えきった後に今の銃が来ている。

はっきり言おう。

ほぼ全ての武装が浪漫のみを追い求めたとしか思えない凶悪な武装であった。

数少ない例外はパイルバンカー使用後の隙を埋めるために使ったアサルトライフル、
あとは今現在左腕に装着されているチェインガンくらいだ。

だが、その色モノ兵装たちによってセシリアは心身ともにズタボロにされていた。

ブルー・ティアーズの装甲は到る所が傷つき、その名前の所以たる自動攻撃端末も一機残らず撃破されている。

「…ていうか、こんだけ強いなら空が代表になれば」
「一組最強伝説の出来上がり、だろうな。そしてやる気をなくした他クラスの成績が墜ちる。」

「だから、千冬姉は空を代表にしなかったのか」
「まあ、想像だがな」

「でもいい線だと思っぞ」

「そ、そうか」

そして…

「「あ」「

会場にいたほぼ全ての生徒の声が重なった。

自爆覚悟でミサイルを超至近距離から放ったセシリアが、遂に鉄に捉えられた瞬間だった。

その細い胴をがちりとホールドした鉄にシールドエネルギーはガリガリと削り取られてゆく。

『ひやあああああ！』

そして、セシリアの精神が限界に達した時

かくり、

ビー

『そこまで。勝者、千風空』

精神限界を超えたのか意識を失ったセシリアとシールドエネルギーを全て失ったブルー・ティアーズが機能停止するのは同時だった。

余りに当然すぎる宣告が下され、試合は終わった。

但し、後に残ったのは勝負事の後の高揚感では無く、一方的な殺戮劇を見た後の沈痛な、葬送曲が似合いそうな沈んだ雰囲気であったが。

後日、セシリア・オルコットはこう語った。

『私が、馬鹿だった。』と。

13・5：対決 セシリア vs 空（後書き）

バイルパンカー
杭打ち機は男の浪漫！
スコップは友達！

………つい勢いでやった。反省も後悔もしてないがやりすぎたとは思ってる。

#14：決戦、クラス代表戦！（前編）（前書き）

ようやく投稿できました。

#14：決戦、クラス代表戦！（前編）

「side：一夏」

五月。

セシリアが空に見事にまで弄られ、もてあそばれた上で撃墜されたあの日から数週間経ったその日。

翌週からクラス対抗戦リーグマッチが始まる関係で最後のアリーナ練習の日となる筈のその日に俺はやってしまった。

その場の勢いというか、売り言葉に買い言葉というか…

鈴に対して、つい『貧乳』と言ってしまったのだ。

その結果、当然の如く鈴は大激怒。

クラス対抗戦で俺を半殺しにするとかなんだとか宣言したらさっさとその場を立ち去ってしまった為に謝る事も出来ずに迎えてしまったリーグマッチ当日。

第二アリーナの第一試合。

俺は、専用機『甲龍シェロン』を纏い、俺を射殺さんばかりに睨みつけてくる鈴と対峙していた。

鈴の甲龍は非固定浮遊部位アンロゼック・ユニットが特徴的で棘付き装甲がやたら攻撃的だ。

アレで殴られたら、痛そうだな。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて俺と鈴は空中で向き合う。

その距離五メートル。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

そこに、鈴が開放回線オープン・チャンネルで声をかけてきた

「雀の涙くらいだろ。いらねえよ、全力で来い。」

俺は、真剣勝負で手を抜くのも抜かれるのも嫌いだ。

勝負は全力でやってこそ、そこに意味が生まれるモノだ。

「一応言っておくと、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破できる攻撃力が有れば本体にダメージを貫通させられる。」

「知ってるよ。身近にそう言うのを持つてるヤツがいるからな」

「あつそ。」

『それでは両者、試合を開始してください』

ブザーが鳴り、それが切れる瞬間に俺と鈴は動いた。

ガギイン！

瞬時に展開した雪片式型が物理的な衝撃ではじき返された。

習って間も無いクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回をどうにかこなして鈴を正面に捉える。

「ふうん。初撃を防ぐなんて、やるじゃない。けど」

鈴が手にした異形の青龍刀。

まるでバトンのように両側に刃のついた…と言うよりは刃の中心に持ち手があるかのようなそれは正に縦横無尽に、縦、横、斜めと自在に角度を変えながら俺に襲いかかってくる。

筭相手に対二刀の戦闘訓練はしたけど、コレはこれで勝手が違う。

どうしても俺が守勢に回り、一方的に削られて行ってしまう。

一度、距離を取って…

「甘いつー！」

鈴の肩アーマーが開き、中心の球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に殴り飛ばされた。

「今のはジャブだからね」

ジャブの次は？

ストリート
本命に決まっている。

ドンっ！

「ぐあっ！」

目に見えない衝撃に殴り飛ばされて、俺は地表に打ちつけられる。

シールドバリアーを超えてずきり、と痛みが届く

ダメージは七六。これは…かなりマズイ。

* * *

「良くかわすじゃない。衝撃砲《龍咆》は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

そう、鈴は賞賛してくるが俺はそれどころではなかった。

砲身も弾丸も見えない衝撃砲を回避する為に、鈴の視線とハイパーセンサーが告げる空間の歪みや大気の流れに全神経を集中させている。

目は口ほどに物を言う。

衝撃砲を撃つ前には必ず鈴の視線が攻撃予定の場所に数秒間固定されるから、それを合図に回避してるけど…

正直、このままじゃじり貧だ。

どこかで流れを変えないと、削り切られる。

この対抗戦までにやって来た事は全て基礎的な移動技能の習得だ。第との剣道の稽古は刀の特性と間合いの再確認、そして相手の行動を見て読む事の練習になった。

『剣の道は見の道である』とは、よく言ったモノだ。

とはいえ、付け焼刃でしかない俺に対してそれぞれの基礎動作をかなりのレベルで統合してこなす事の出来る鈴。

俺と鈴との間にある格の差は依然として大きい。

同じく代表候補生であるセシリアにギリギリまで食らいつけたのはセシリアが驕り、油断してくれたからだ。

本来のセシリアは戦闘中冷静で、詰将棋のように相手を追い詰めてゆくタイプだ。

事実、あの一戦以来何度か模擬戦をやったが見事に封殺されて負け続けた。

そんな俺が、代表候補生に食らいつくためには『絶対に勝つ』という意志の力で勝る以外に光明を見出すチャンスは無い。

「鈴」

俺は切り札の切り場所をここと定める事にした。

出来れば温存しておきたいが、使いどころを間違えれば無意味に手札を晒すだけになる。

だからと言って、使わないまま負けるのも宝の持ち腐れだ。

「な、なによ」

真つすぐと見つめる俺、気後れしたのかあいまいな表情を浮かべる鈴。

「本気で行くからな」

「な、なによ。そんな事、あたりまえじゃない。と、とにかく、格の違いつてのを見せてあげるわよ！」

バトンのように両刃青龍刀を一回転させて構え直す鈴。

その衝撃砲の砲火が放たれる前に距離を詰めるべく加速姿勢に入る。

『イグニッション・ブースト
瞬時加速』

国家代表時代に千冬姉が使っていた技であり、この技と雪片で世界最強の座に着いた。

瞬間的に最高速度まで上げるそれは使いどころを間違わなければ十分に代表候補生……いや、国家代表相手でも通用するモノだ。

はつきり言って初見殺しの一撃だ。

だからこそ、雪片式型のバリア無効化攻撃と組み合わせで一撃必殺を狙うしかない。

「うおおおおッ！」

踏み切る。

急激なGに意識がブラックアウトしそうになるがISSの操縦者保護機能が働いてそれを防ぐ。

瞬時に鈴との距離を詰め、俺の刃が届く、その瞬間前。

ズドオオオオオ………オン!!!!

突然、大きな衝撃と轟音がアリーナ全体を揺らした。

鈴の衝撃砲じゃない。

範囲も威力もケタ違いだ。

「な、なんだ!?!」

『一夏、試合は中止!鳳さんを連れてすぐにアリーナを脱出!』

オープンチャンネルを通して、管制室にいるらしい空から声がかかった。

いきなり何を…そう思った瞬間、ハイパーセンサーが緊急告知を行ってきた。

『 フィールド中央に熱源。所属不明のISと推定。ロックされています』

「 なっ!?! 」

ISのシールドと同種のもので出来てるアリーナのシールドをぶち破れるだけの攻撃力を持った機体が乱入、こちらをロックしている。

要約すれば『ピンチ』の三文字だ。

「 ー夏っ! 」

「 うおっ!?! 」

鈴の声で反応した俺はその場を逃れるとその直後にその場所を熱線が通り過ぎた。

「 アンタは逃げなさい。 」

「 お前はどつするんだよ 」

「 時間を稼ぐわ。別に最後までやり合わなくても学校の先生たちが来るまでくらい持たせるわよ 」

「 ツー!鈴、危ないっ! 」

余裕を見せていた鈴を抱きかかえてさらう。

その直後に再びあのビームが通り過ぎた。

「ビーム兵器。それもセシリアのISより出力は上か…」

ハイパーセンサーが告げるビームの出力に冷や汗が出てくる。

「ちょ、ちょっと！馬鹿！放しなさいよ」

「お、おい！暴れるな　　って、殴るな！」

「うるさいうるさいうるさい！だ、だいたいどこを触って」

「ッ！来るぞ！」

煙を晴らすかのようにビームが連射される。

どうにかかわすと射手たるISが浮かびあがって来た。

深い灰色をした、異形のIS。

異常に長い腕はつま先よりも下に伸びていて、首がない。

何よりも全身を装甲で覆っている。

フル・スキン
全身装甲。

通常はシールドエネルギーで守られている為に装甲は見た目ほど重

要では無い。

それ故に装甲は部分的にしか展開されない。

もちろん、防御特化型ならば物理シールドを持つ事はあるけれども、露出が全くないISというのはまず存在しない。

巨体には姿勢制御用なのかスラスタークが全身に見てとられ、頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並んでいる。

腕には先ほどのビームの発射口らしき孔が左右合計で四つほどあった。

「おい、お前何者だよ！」

「……………」

当然ながら、返事は無かった。

『織斑くん、鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに教師部隊がISで制圧に向かいます！』

そこに割り込んできたのは今度は山田先生だった。

こころなしか、いつもより声に威厳がある。

「いや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます。

いいな、

鈴」

「だ、誰に向かって言ってるのよ。それより離しなさいってば。動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

俺が腕を離すと鈴は自分の体を抱くような格好で離れて行った。

そんなに嫌だったのか？ 嫌ならそいつは悪かったが緊急事態だ。勘弁してくれ。

『お、織斑くん！？だ、駄目ですよ！生徒さんにもしものことがあったら』

敵ISが体を傾けて突進してきた。

単純な突進チャージはそれほど苦なくかわせるが相手の巨体故に回避も一苦労だ。

「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

俺と鈴はそれぞれの得物を構える。

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさい。武器、雪片それ式型しかないんでしょ？」

「その通りだ。じゃあ、行くぞ」

キン、と互いの武器の切っ先をぶつけあい、それを合図に即席のコンビネーションながらも飛び出した。

* * *

「side :」

「もしもし！？織斑くん、鳳さん！聞いてます？聞こえてますか？」

ISのプライベート・チャンネルは声を出す必要など全く無いのだが、失念するくらいに真耶は焦っていた。

「本人たちがやると言っているのだ。やらせてみてもいいだろう」

「お、織斑先生！何をのんきな事を言ってるんですか！」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「織斑先生もどうぞ。砂糖を少し多めに入れてありますから」

「ああ、すまないな」

空にマグカップを差し出され千冬と真耶は受け取る。

中に満たされたコーヒーは、確かに甘かった。

「山田先生。パイルバンカー用の炸薬の用意をお願いしますか？」

「出来ますけど…どうするんですか？」

「雑風に装備されている一〇五ミリパイルバンカーは威力抑制の為に炸薬量を減らしてますが最大威力でやればシールドか、ロックさ
れている扉の物理破壊ができます」

雑風 空の専用機であり、武装試験機である為に固定武装を換装
することができる規格外な機体である。

確かに、アレに装備されているモノならばシールドエネルギーをぶ
ちぬく事も、閉鎖されている扉を破砕する事も出来るだろう。

「ですが…」

「それに、奥の手もあります。確実に、シールドを抜けるだけの威
力のある一撃が」

「判った。手配するから準備を急げ」

「了解」

何か言いたそうな真耶を横に千冬が許可を出して整備課に炸薬の手
配を依頼する。

管制室を出てゆく空と入れ替わりで、今度はセシリアがやって来た。

「先生！わたくしにISの使用許可を！すぐに出撃出来ますわ！」

「そうしたいところだが、コレを見る」

ブック型端末の画面を数度叩いて第二アリーナのステータスチェッ
クを呼びだす。

「遮断シールドがレベル四で固定？…しかも全ての扉がロックされ
て あのISの仕様ですの！？」

「そのようだ。これでは避難も救援も出来ん」

実に落ち着いた様子で話す千冬だが、その手は抑えきれない苛立ちに画面をせわしなく叩いていた。

「で、でしたら、緊急事態として政府に助成を」

「既にやっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中、千風も物理的に障壁破壊をするために準備している。突入口が出来次第すぐに部隊を突入させる」

言葉が続けながらも、ますます募る苛立ちに千冬の眉がピクリと動く。

それを危険信号と取ったセシリアは頭を押さえながらベンチに座った。

「はああ……結局、待っている事しかできないのですね」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって!？」

「お前のISの装備は一对多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる。味方を誤射するのがオチだろう」

「そんな そんな事ありませんわ!このわたくしが邪魔だなどと……」

「連携訓練はしたか？したなら、その時のお前の役割はなんだ。ビットはどう使う？味方の構成と敵のレベルはどのような想定だ？連続稼働時間は」

「わ、判りました！もう結構です」

「ふん。判ればいい」

セシリアは両手を揺らして『降参』のポーズをとった。

「はあ…言い返せない自分が悔しいですわ」

『こちら千凧。ロックされているドアの破砕に入ります』

モニターの一角に空からの通信が入る。

ISを装備し、その右腕には大型のパイルバンカーがその威容を晒していた。

（確かにアレなら扉を破砕して物理的に突入口が開く。だが、体の方が持つまい）

千冬が懸念と心配の混ざった感情をもてあましている間に、ドアに向かって空はパイルを発射待ち状態にする。

『行きますっ！』

轟音。

離れている管制室にすらこつまで響くとなればかなりの威力だろう。

一発目で扉が歪んだ。

二発目で扉が盛大に凹んだ

三発目で扉がひしゃげかけた。

四発目、五発目。

そして六発目で、扉が吹き飛んだ。

『山田です。千凧くんが扉の破砕に成功。ピット内に進入します』

真耶からの報告を受けて、ホッと一息が入った。

『腕の方が持たないのではないだろうか』という懸念が杞憂に終わったからだろう。

だが…

『ああっ！』

「どうした。山田先生」

『遮断シールドです。シールドがアリーナ側のピットの入り口を封鎖しています。これでは……………』

「くっ……………用意周到な事だ」

千冬は苦虫をかみつぶしたような顔になる。

たとえば、物理破壊で侵入口を作ったとしても無駄なあがきだったのだ。

シールドを抜ける威力を持った武器はたった今使い切ってしまった。と言う事は、クラックが成功しない限り手出しができない

『え？千凧くん？』

『一発だけの、とっておきを使います。後ろには立たないでくださいよ。』

ピット内を監視するカメラの映像で空がシールドに向かって残弾数〇のハズのパイルバンカーを構える。

何故か、右腕のみを部分展開した状態で。

「おい、千凧！弾切れのパイルバンカーなんかで何ができる！」

『一発限りですけど、対人使用禁止されたヤツが使えます』

千冬はハッ、とした。

以前の授業で空に高速展開ラピッド・スイッチを実践させた時にみた武装リストには「一〇五ミリ口径パイルバンカー」の行に続きがあった。

使用禁止とされていたそれは

『いつけえええ！』

腕力でシールドに叩きつけられたパイルから杭状のエネルギー波が撃ち出された。

『零距离破碎衝撃波動砲』

エネルギー・パイル
非実体杭を生成し、それを指向性を持たせて一気に解放する事で発生した衝撃波を叩きつける、文字通りの実体を持たないパイルバンカー。

但し、試験運用の際にいとまたやすく絶対防御を抜き、対象を徹底的に破壊した為に対人使用が禁止されたいわくつきの武器である。

その威力は、シールドエネルギー如きで止められるほど、優しくない。

バキーン！

その破碎音と同時に遮断シールドが破壊され、同時に雑風の腕だけが飛んだ。

「ッ！」

千冬も、一瞬だけが我を失った。

ただ一人、右肩腕を失ったが瞬時に展開された雑風だけが、ただ一

陣の風となって駆けだす。

「総員、突入！」

千冬の声で我に帰ったISを展開した教師たちが慌ててアリーナへと飛び込んで行く。

「これで……」

『「夏あつー！」』

安堵の息をつく間もなく千冬は頭を抱えなくなった。

いつの間にかピットから姿を消していた幕が中継室を占拠していた。

#15：決戦、クラス代表戦！（後編）

「side：一夏」

「鈴。あとエネルギーはどれくらい残ってる？」

「一八〇ってとこ。…正直、ちょっと厳しいわね」

鈴がそう言うのもエネルギー残量一八〇というのは純粋に残エネルギー総量であって、攻撃の為に消費されるモノだからだ。

俺の場合は雪片式型の仕様のせいで更に削れている。

「現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止に追い込めるのは確率的に一桁台ってとこじゃない？」

「ゼロじゃなけりゃ十分だ」

「あつきた。あんたって、よく分からないところでジジくさいけど根本的には宝くじ買うタイプよね」

「諦めが悪いだけだ。『諦めたらそこで試合終了だ』って、何処ぞの先生も言ってるぞ」

ちなみに宝くじは買わない。

基本的に俺は賭けごとには弱いし、いざという時の為に運は取っておきたい。

「ま、いいわ。で、どうすんの？」

「逃げたきや逃げていいぜ」

「なっ!? 馬鹿にしないでくれる!? あたしはこれでも代表候補生よ。尻尾巻いて退散だなんて、笑い話にもならないわ」

代表候補生の選定条件の一つに『プライド』ってあるんじゃないか? と思いたくなるような発言。

「そうか。それじゃあ、お前の背中くらいは守って見せる」

「え? あ、う、うん。ありが」

何故か紅くなった鈴の横をビームがかすめる。

油断してた訳じゃないが集中がちよっと甘くなってたようだな。

「……………なあ、鈴。あいつの動きって何かに似てないか?」

「何かって何よ。コマとか言ったら殴るわよ」

「それは見たまんまだろ。あー、なんて言うかな。昔、自動車メーカー作った人型ロボットがいたろ?」

「いたっけ?」

うーん、姿形は出てるんだけど名前が出てこない。

アから始まるってのは思い出せたんだけどな…

「で、それがどうしたのよ」

「なんつーか、そいつと似てる気がするんだよ。動きが機械じみてるって言うか…」

「ISは機械よ」

「そうじゃなくて…あれ、本当に人が乗ってるのか？」

「はあ！？人が乗らないとISは動かな」

鈴が言い返そうとして、止まった。

どうやら鈴も気付いたらしい。

「…そういえばアレ、さっきからあたしたちが話してる時ってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いてるような…」

何時に無く真剣な顔になる鈴。

おそらく今までの戦闘を振り返っているんだろう。

「うっん、でも無人機なんてあり得ない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そう言うものだもの」

だが、『あり得ないはあり得ない』。

たとえば、ISを世に送り出した張本人ならば裏道を知っているかもしれない。

俺の脳裏に千冬姉と一緒にあってアキ兄と並ぶ『あの人』の姿が浮かんでくる。

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「何？無人機なら勝てるっていつの？」

「ああ。人が乗って無いなら容赦なく攻撃しても大丈夫だしな」

雪片式型の攻撃力は全力解放されたら恐らく操縦者を殺傷してしまうほどの物の筈だ。

雪片使用時に発動している『零落白夜』が何なのかはまだよく分からないが。

…策も、一つある。

「全力もなにも、攻撃自体が当たらないじゃないの」

「次は当てる」

「言いきったわね。じゃあ、そんなこと絶対にあり得ないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましょうか」

鈴がにやり、と不敵に笑った。

「で、どうしたらいい？」

「俺が合図したらアイツにむかって衝撃砲を撃ってくれ。もちろん、最大出力だ」

「……？…いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ。当たらなくても」

俺は突撃姿勢に入ろうとした瞬間

『「夏あつ！」』

ハウリングが尾を引く声は筈のものだった。

「な、なにしてるんだ、お前！」

音源を探した結果、中継室に筈はいた。

審判とナレーターが倒れ伏す部屋で一人、肩で息をしていた。

『男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！』

「……………」

マズイ。

あの全身装甲フルスキムは今の館内放送、その発信者に興味を持ったらしい。

至近にいる高脅威である俺たちからセンサーレンズをそらし、中継室　そこにいる箒をじっと見ている。

「箒、逃げ
」

言って間に合う筈がない。

俺は突撃姿勢に移行し、瞬時に加速を開始する準備をする。

視線の先で敵ISが砲口をついた腕をいやにゆっくりと箒に向けようとしている。

「鈴、や
」

その瞬間

バキイイーン!!

轟音を立てて、何かが割れる音がした。

ターン、と続いて射撃音がして敵ISの腕を地面に向けさせられた。

地面に向かってビームを放つ敵IS。

「一夏っ!!」

「応！鈴、やれっ！」

「判ったわ！」

俺に掛けられた声に俺は再度突撃姿勢を取り直して加速。

鈴は最大出力での砲撃を行うために補佐用の力場展開翼を展開する。

そして、俺はその射線上に踊り出る。

「ちょ、ちょっとバカ！何してんのよ！どきなさいよ！」

「いいから撃て！」

「ああもっつ…どうなっても知らないわよ！」

衝撃砲という『高エネルギー』を背中に受け、俺は瞬間加速を發動させる。
イグニッション・ブースト

足りないなら、外から持ってきてほしい。

イグニッション・ブーストは後部スラスタから放出したエネルギーを再度取り込み、圧縮して再放出する。

それによって生まれた運動エネルギーを慣性エネルギーに変換して爆発的な加速を行う。

ならば、外部からのエネルギーをイグニッション・ブーストに使う事も可能だ。

ドンッ！

と、背中に巨大なエネルギーがぶつかるのを感じる。
みしみしと体がきしむ音を聞きながら俺は、一気に加速し最高速度に乗った。

空の牽制射撃が止み

「　　おおおお！！！」

右手の雪片式型が強く光を放つ。

中心の溝から外部に展開したそれは一回り大きなエネルギー刃を形成していた。

『【零落白夜】を使用可能。エネルギー転換率九〇%オーバー』

その情報^{メッセージ}を俺は聞くのではなく理解していた。

俺は………千冬姉を、箒を、鈴を、空を………関わる人全てを守る！

俺の必殺の一撃は敵ISの右腕を斬り落とし、敵ISは俺に反撃の左拳を叩きこんだ。

さらに接触面から熱源反応。

○距離でビームを叩きこむつもりらしい

「「一夏っ!」「」

箒と鈴の叫びが聞こえる。

けど、俺は慌てる事は無い。

俺の策は、俺が考えていたモノよりももっと凄い形で成立しているのだから。

「……狙いは?」

『完璧ですわ』

よく通る声。

「全機、攻撃開始!」

観客席から放たれたレーザーを皮切りに上空に展開した先生たちからの一斉射撃が敵ISに襲いかかった。

全員が狙撃銃タイプの武装で狙撃しているのは俺がすぐ近くにいるから巻き添えを食わせなためだろう。

セシリアもその事を理解してか、あえてブルー・ティアーズを使わずにスターライトMk・IIIIでの攻撃に限定している。

ボン！ と小さな爆発を起こして敵ISは地上に落下する。

シールドバリアが無くなったところに対IS用ライフルによる一斉射撃だ。

回避が難しいようにほんの少しずつだけ射点がずらされているのだ。銃弾の檻に閉じ込められたも同然。

これならばひとたまりもないだろう。

俺が破壊する予定だった遮断シールドを、それ以前に誰かが破壊してくれたおかげで、二対一が三対一になり、相手に気取られる事無く多数対一に持ち込めた。

人間なら予測が出来、機械にはできない、認識外からの攻撃。

発想の自由さが人間の最大の長所であると言った偉人がいるらしいが、その通りだ。

人間は狡猾に裏をかく。機械には真似できない、発想の自由さを生かして。

「織斑くん、鳳さん、無事ですか？」

と、ラファールを装着した山田先生が俺たちの居る高度まで降りてきた。

観客席から飛び出してきたセシリアも一緒のようだ。

「あ、はい。大丈夫です。見ての通り、ボロボロですけど」

「無事でなによりです。けど、あんな危ない真似しちゃだめですよ。今回は千凧くんが遮断シールドの破壊に成功したから良かったものの…」

へえ、シールドをぶちぬいたのは空だったのか。

ってことは、あの轟音は空の仕業なのか？

一体、どんな手段を使ったのか、興味があるが、なんだか怖い気もする。

「それじゃあ、二人はピットに戻ってください。あとは私たちが

「「危ないっ！」」

敵ISの再起動を確認！警告、ロックされています！

警告が発せられた刹那、セシリアが誰かに突き飛ばされ、ぶつかられた山田先生が鈴を巻き添えにして、俺は鈴に押しつけられた。

「うああっ…」

結果として、それまで俺たちが立っていた場所をビームが通り過ぎる。

俺たちを突き飛ばして助けてくれた誰かを直撃して。

ISが強制的に解除されて落下していくのは……………空。

「ッ、この野郎ッ！」

雪片を再展開し俺は敵ISに斬りかかる。

片方だけ残った左腕を最大出力形態に変形させた敵ISが再度俺に狙いを定めて砲口に光を収束させる。

迫りくるビーム。

俺はそれに跳び込む形になるが、真っ白な視界の中　確かに刃が装甲を切り裂く手応えを感じた。

#16：戦の後に……

「side：一夏」

「うっ……」

全身の痛みに呼び起され、俺は目を覚ました。

状況が判らない。

周囲を見回すと、どうやら保健室らしかった。

カーテンで仕切られたその狭い空間は息苦しさと同時に安堵を与えてくれた。

ぼんやりとした頭で考える。

ええと、空が俺たちを庇って墜とされて、俺がああISに斬りかかって……

恐らく、倒せたハズだ。

倒せたハズだし、倒せなかったとしても先生たちが居た。俺たちなんかよりもずっと格上の操縦者である、先生たちが。

「気がついたか」

しゃっ、とカーテンが引かれて現れたのは、千冬姉だった

「体に致命的な損傷はないが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうが、まあ慣れる」

「はあ……」

まだぼーっとする頭で千冬姉の言葉を聞く。

「それにしても、無茶な事をする。衝撃砲の最大出力を背中から受けたんだぞ。しかも絶対防御をカットした状態で。…よく死ななかつたものだ」

今一つ、身に覚えがない。

確かに衝撃砲の最大出力をイグニッションブーストに流用はした。

けど、絶対防御をカットなんてしたのか？

そもそも、そんな事出来るのか？

「まあ、なんにせよ無事でよかった。家族に死なれるのは、もう御免だからな」

そう告げる千冬姉の表情はいつもよりずっと柔らかかで、辛そうだった。

今や唯一の肉親である俺にしか見せない、見せなくなった表情。

「そつだ、空は？」

俺たちを庇って、撃墜された筈だ。
大事に至って無ければいいんだが……

「千凧は、まあ無事だ。撃墜こそされたが絶対防御と操縦者保護機能フルに働いたおかげで命に別条はない。」

「そっか」

「心配なら見舞いにも行ってやれ。学園の医療センターの方に搬送された筈だ」

「わかった。千冬姉」

「ん？なんだ？」

「いや、その 心配かけて、ごめん」

俺の言葉にキョトンとした千冬姉は小さく笑った。

「心配などしてないさ。お前はそう簡単には死なない。なにせ、私の弟だからな。」

千冬姉の照れ隠しに俺も小さく笑う。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、もう少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

それだけ言い残して千冬姉は颯爽と保健室を出て行った。

仕事は真面目な千冬姉は、確かに俺の『理想の大人像』の一つだ。

「あー、ごほんごほん！」

千冬姉と入れ替わりに誰かが入って来た……というか、わざとらしい咳払いと声で誰だかすぐわかる。

箒だ。

じゃっ、と半開きになっていたカーテンが全開にされる。

別に関ける必要ないんじゃないか？

「よっ、箒」

「う、うむ」

腕組みしてふん、と鼻息を漏らした箒は怒ってる訳でも上機嫌と言
う訳でもなさそうだった

「あ、あのだなっ。今日の戦いだが……」

「ん？ああ。そう言えば試合はどうなったんだ？やっぱり無効試合
か？」

「当然だろう。あんな事件が起こってはな」

まあ、それもそうか。

もし再戦があるとすれば体が治ってからだと有り難いな。
治る前でもやれるだけやるつもりだが。

「お、お前は何を考えているんだ！」

「へっ？」

いきなり怒られた。

「勝てたからいいようなモノを……あのような事故、先生方に任せておけばいいだろう！」

いや、怒ってるように見えるがコレは怒ってるわけじゃなさそうだ。

これは、別の感情を隠す為に怒ったふりをしてるように見える。

「過剰な自信は身を滅ぼすという言葉を知らんのか!？」

「勝ったのか？俺」

「あんなのは『勝った』とは言わん！」

まあ、相討ちだろうな。

それにしても……

「心配かけたみたいだな」

「なっ！ 私は心配などしていない！」

夕日とは関係なしに真っ赤になった筈。

「ああ、そうだ。明日、空の見舞いに行こうと思っただけど、箒も行くか？」

「わ、私はいい。」

そっか。そりゃ残念だ

「先に部屋に戻る。」

ぶい、と顔をそむけて俺に背中を向ける箒

「……………一夏」

「ん？」

「その、だな。戦ってる時のお前は……………か、かか、かかか、」

壊れたラジオみたいに『か』を連発する箒。

蚊でもいるのか？

「か、格好良かったぞ」

ぼそり、となんとか聞きとれるレベルの呟きを残して箒は逃げるような早足で保健室を去って行った。

ドアもカーテンも全開のままだ。

出来れば閉めて欲しかった。

疲労のせいか瞼が重い。

急激に襲い来る睡魔に俺はさして抵抗もせずにベッドに横たわる。

覚醒状態と睡眠状態の境目を漂う、心地よいまどろみ。

.....

どれくらい時間が経っただろうか。

なんだか人の気配を感じて俺の意識は覚醒へと傾いた。

「
一夏」

声で判った。

この声は...

「鈴？」

「ッ!？」

俺が目を開けたら、なんとびっくり鼻先三センチの場所に鈴の顔があった。

「なにしてんだ？お前」

「おっ、起きてたの!？」

「お前の声が聞こえたから、起きたんだよ。で、どうした。何をそんなに焦ってるんだ？」

「あ、焦ってなんかないわよ！勝手な事言わないでよね、この馬鹿」
「!」

そう言うのなら、そう言う事にしておいてやる事にしよう。

「あー、鈴？」

「何よ」

「色々、すまなかったな。悪かったよ」

試合は無効になった。

とはいえ、非は俺にある。

少なくとも、俺は一つ謝らなくちゃならない事がある。

「ま、まあ、あたしもムキになってたし…いいわよ。もっ」

「そっか。ありがとな」

ふと、懐かしい光景が脳裡によみがえって来た。

「そういえば、昔こんな風に夕暮れに二人ってなった事あったよな」
確か、小六の時だ。

場所は教室。

「あんときは驚いたぜ。『料理が上達したら毎日あたしの作った酢豚を毎日食べてくれる?』なんて言っただけさ。」

「え?あ?う……な、なによ……覚えてるんじゃないの」

しどろもどろになって視線はあちこちを泳ぎ、俯く鈴

「お前はすぐに冗談だっただけで、言われた瞬間はプロポーズされたかと思っただぞ」

その途端、鈴の表情が絶望一色に染まった気がした。

「ああ、小六当時のあたしの馬鹿!」

「り、鈴?」

行きなり壁に頭をぶつけはじめた。

どうした？何があったんだ？

「ところで鈴。」

「ん、なに？」

「明日の放課後、空の見舞いに行こうと思ってるんだが、鈴も来るか？」

「そうね。余計なお世話とはいえ、助けてもらった訳だし」

「それじゃ、明日の放課後に教室で待っていてくれ」

「りょーかい」

さてと、そろそろ部屋に戻ろう。さすがに腹も減ってきたしな。

俺は鈴と一緒に寮までの道を、懐かしい話や最近の話をしながら歩いた。

* * *

「side :」

一夏が鈴と一緒に保健室を出た数分後

「一夏さん、具合はいかがですか？わたくしが看病に来て
あはっ。」

やって来たセシリアを待っていたのは、無人の保健室だった。

「一夏さんは何処に？」

行き先を知らないセシリアは訳も判らないと言った風に首をかしげるしかできなかった

* * *

「side：一夏」

部屋に戻って、幕の作ってくれた夕飯（なんと味の全くしないチャ―ハンだ）を食った後、鈴と和解した事を話したら疑わしい物を見る目で見られて事情説明が大体終わった時

「あのー、篠ノ之さんと織斑くん、いますかー？」

と、気の抜けたノック音を携えて山田先生が部屋にやって来た。

「どうしたんですか？」

「あ、はい。お引越しです」

引越し？

誰が、何処に？

教員である山田先生が既に二人入ってる二人部屋に引っ越してくるなんてあり得ないだろうし…

「……先生、主語を入れて喋ってください」

「は、はいっ。すみませんっ」

箒が鋭い視線を向けるものだから、山田先生は小動物みたいにびくっ、と身を竦めた。

「うらら、いじめるな。」

「えっと、引越するのは篠ノ之さんです。部屋の調整がついたのでそちらに移動です」

そういえば、俺と箒の同居も部屋の都合故の一時的なものだったな。

二ヶ月近くも一緒だったから忘れかけてたぜ。

「えっと、私もお手伝いしますから、すぐに準備をしちゃいませう」

「ま、ま、待ってください！流石に今すぐは……」

手伝うと言ってきた山田先生に箒はストップをかける。

山田先生はそんな事言われるとは思ってもみなかったのかぱちくりと目を瞬かせる。

「ですけど、いつまでも年頃の男女が同室というのは問題が有りませんし、篠ノ之さんもくつろげないでしょう?」

「わ、私は……」

まごついた言葉を返しながら俺の方をちらつ、とみてくる。

このパターンは、アレだな。
しゃーない。助け舟を出してやるか。

「山田先生」

「なんですか? 織斑くん」

「山田先生は秘密にしたいことってありますか?」

「それは、当然ありますよ」

「それじゃあ、もしそれが部屋にあったとしたら、部屋の片づけを誰かに手伝ってもらったりします?」

「うーん、少なくとも秘密にしたいものは先に自分で……ああ、そう言う事ですか」

「そういう事をお願いします」

俺が言いたいののは、筈が秘密にしたいことがこの部屋にあるとしたらそれを暴くような事はしないで上げて欲しい、と言う事だ。

本当に秘密にしたいことがあるのかどうか知らんけどな。

「では、部屋の番号は教えておきますから、なるべく今夜中、消灯時間前にはお引越しを済ませてくださいね」

それじゃあ、おやすみなさい。と、箒の引越し先の部屋番号を告げた山田先生は去っていく。

「ふう。どうだ、箒。これでいいか　　ふべえっ!?!」

何故か殴られた。

なんでだ？

「お前と言っちゃは……………」

なんだよ。人が善意で『無理に急げない理由』をでっち上げたというのに。

「あれでは私が見られたくないものを部屋に隠しているようではないか!」

「だから『そう言う事にしておいてくれ』って言ったんだよ」

便利だよな、この言葉。

事情は聞かないでくれて言うてるようなものだからな。使いだころを間違えると大惨事だが。

「さて、消灯時間まであと何時間かはあるな。引越し準備、手伝うぞ」

「い、いらん。」

俺が申し出たら突っぱねられた。

ので、仕方ないから作業の様子を眺めることにする。

……む、

「箒、ちゃんと畳まないとしワになるぞ」

「う、うるさい！お前は私の母親か！」

「一応、織斑家の主夫だからな。ほら、貸せよ。畳んでやるから
そんなこんなで俺が衣服を畳み、箒は箒で私物を纏めてゆく作業を
進める事おおよそ一時間弱。」

「これで全部か？」

「ああ」

箒の荷物はすっかりまとまってポストンバックに詰め込まれていた。

「それじゃ、同室のヤツと仲良くしろよ。喧嘩して、飛び出してき
ても泊めないからな」

「よ、余計なお世話だ」

「それじゃ、また明日な」

「ああ。また、明日」

箒を見送り、俺は部屋に入る。

箒の私物が無くなった部屋は妙に広く、まるで面積が倍になったかのような錯覚に陥る。

「まあ、なんだかんだで寂しいもんだな。一人部屋って」

とはいえ、同じ屋根の下にクラスメイト達が沢山いる事はある。全員女子だけど。

「さて、とつとと寝ちまうか」

部屋着⇨寝間着な俺に死角はない。

このままベッドに入ってしまえばそれでオーケー

ドンドンドンドン！

ドアがノック…というより盛大に殴られる音がした

「はいはい、どちら様？」

と、扉を開けたら今さっき出て行ったばかりのハズの箒が荷物を持ったままそこにいた。

まさか、もう喧嘩して飛び出してきたのか!?

「どうした?忘れものか?」

「い、いや。そうではない」

「ならどうしたんだよ。相手が部屋に居なかったとか?とりあえず入れよ」

「い、いや。こじでいい」

変な箒。

「……………」

「用がないなら寝るぞ?」

「よ、用があるから来たのだ!」

あ、左様ですか。

「で、用件は?」

「ら……………あ……………」

「らあ?」

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……………」

それは確か、完全に自主参加制の個人戦で、学年以外の制限はない
そうで、専用機持ちが圧倒的に有利だ。

けど、時々大番狂わせが起こるらしく個人参加もそれなりに多いと
いう。

それがどうしたんだ?

「わ、私が優勝したら……………」

箒は頬を紅潮させ、何が恥ずかしいのか目は俺を見てるようで明後
日の方向を向いている。

びしっ、と箒の人差し指が俺に突き付けられた。

「っ、付き合ってもらおう!」

「……………はい?」

「で、ではな!」

そして逃げるように去っていく筈、取り残される俺。

何がなにやらよく分からないが、宣戦布告されたようだ。

「……………寝るか」

とりあえず、筈が優勝したら何かにつき合う必要があるようだ。

* * *

「side…筈」

あああああ、言ってしまった。

だが、これで……………私が優勝さえすれば……………

「ハッ!？」

ふと気付けば目的地である部屋に辿り着いていた。

部屋の番号と鍵の番号を確認してあつてゐる事を確かめ、ノックする。

コンコン

『はい?』

べつちやら、新回室は中にいるらしい。

「新しく同室になった者だ。今、入っても問題ないか？」

『どうぞ』

がちやり、と鍵の開く音がしたので遠慮なくドアを開く。

「篠ノ之篤だ。よろしく頼む」

「篠ノ之？ もしかして、篠ノ之博士の？」

ドアの影から出てきた、物静かそうな眼鏡の少女の言葉に私は顔をしかめる。

大分慣れた事ではあるが、やはり比べられるのは癪だ。

私が胸を張れる部分は、姉さんと全く違うからな。

「……………篠ノ之束は私の姉だ」

「あ、ごめんなさい。私は更識簪。」

私那不機嫌になった事に気付いたのか、彼女、更識は謝って来た。

「気にするな。もう慣れっこだ」

「そっか 出来すぎた姉を持つと、妹って大変だよね？」

ぼそり、と呟いた言葉に私はハツとして、全てを悟った。

彼女は、私の同類だ、と。

更識、更識………確か、IS学園の生徒会長の苗字も更識だったな。

IS学園の生徒会長とは学園の生徒の中では最強である事を意味する。

…確かに、な。

「お互い、苦勞をしているようだな」

「うん。理解してくれる人が一人いれば一気に違っけどね」

あはは、ははは、と乾いた笑いがこぼれる。

「まあ、よろしく頼む。簪」

「うん。よろしく、簪」

瞬時に判り合えた故、出来すぎた姉のせいで『出来ない妹』のレッテルを張られてきた同士として、名前で呼び合う。

彼女とは、仲良くやれそうだな。

#16：戦の後に……（後書き）

オルコツ党のみなさんごめんなさい part 2

そして箒と簪がなんか判り合いました。

部屋の移動は

空と簪 空が副寮監室へ移動

一夏と箒 箒が簪と同室へ

一夏 一人

と、いう感じに。

だったら最初から『一夏、空』『箒、簪』にしてしまえばよかったのでは？

とは言っていないませんよ

#17：一時の別れ（前書き）

ー夏に死亡フラグもどき&トラウマフラグが成立しました。

#17：一時の別れ

「Side：一夏」

ISによる襲撃の翌日。

「今日から暫くの間、千凧が休学する事になった。知ってると思うが昨日の一件が原因の、怪我の療養だ。授業は山田先生に担当が戻るので……………担当教諭は間違えずに授業をするように」

肩を震わせる千冬姉。

視線の先にはすっかり生徒に紛れて馴染んだ山田先生が空の席に座っていた。

ちなみに授業の時間になっても、山田先生は気付かずに『休講ですかねー』なんて言っていて、千冬姉に頭をすぱーん、とやられていたりする。

授業担任が山田先生なことに文句を言った連中も同様にすぱーん、だ。

で、そんな悲劇的喜劇を越えて放課後。

俺と鈴、結局ついてきた筈と機会がなくて言えないでいたセシリア、それに元は空の、今は筈の同室の更識簪さんの五人で空の見舞いにIS学園の医療センターに来ていた。

医療センターというのは保健室じゃ対応できない大怪我や病気になった生徒や教員の救護施設だ。

下手な病院より施設は整ってるが、あくまで救急救護が目的である為に入院施設は一フロア分しかない。

受付で確認したところ病棟入ってすぐ、一号室とのことで実際にすぐに見つかった。

「おい、空。見舞いに来たぞ」

「一夏？　　っ！今はダメ」

「へ？」

がらっ、

空の制止は間に合わず俺はドアを開けてしまった。

「ん？」

視界に飛び込んできたのは、なんとというか白かった。

白くてまるで絹布のようにキメの細かいそれは滑らかな曲線を描き、決して大きい訳ではないが確かな存在感を放っている。

そしてその曲線の頂点はほんのりと桜色で

それが何なのかを頭が理解するが先か、否か

「いちかの、ばかあ！」

そんな、聞きなれた空の、聞き慣れない必死な叫びと同時に全身五ヶ所に鈍痛が走って視界が暗転した。

きゆう……………

* * *

「side…」

「いちかの、ばかあ！」

空の叫びで我に返った彼女たちの行動は早かった。

空の着替えを介助していた女性の正拳が眉間を突き、鈴が右膝、箒が左膝を蹴り抜く。

上体を押され、膝を前に押された一夏は、当然の如く後ろへと倒れる。

そしてその倒れてくる一夏の後頭部をセシリアは膝で激しく迎へ、
簪が止めと言わんばかりに体重の乗った肘を鳩尾へとめり込ませる。

どこかに『5 hit』『5 chain』『5 combo』と
いった類の表示がされそうなくらいに見事に極まった連撃だった。

「失礼しました。一度出直します」

と箒が代表して言うてから、一夏の襟首を引き摺って一度部屋を出

る。

とりあえず一夏は廊下に打ち捨てて、箒、鈴、セシリア、簪の四人で緊急会議の開始だ。

「まさか、空が女だったとはな」

箒はしっかりと確認した姿を思い出してみる。

確かに、はっきりと『女性である』と主張する胸があり、一夏に見られた事を恥ずかしかっていた。

「確かに、全然男らしくないわよね」

「同性故の気安さに近いものが有りましたものね」

鈴とセシリアも思う思うの意見を出して危機感を募らせていた。

今、一夏に一番近い位置にいるのは空である。

なんせ、同性だと思っていたのだから当然の如く付き合いの深さは気を許しやすい方に近づくのは当然だ。

今までは同性だから大丈夫だと思っていた彼女らからすれば空の存在は予想外の強敵であった。

一方で黙り続ける簪も簪で悩んでいた。

(どつしよつ……いろんな意味で壁が大きく……)

いきなりそんな事を考えている辺り、簪も大分色々と毒されつつあるようだ。

「お待たせ。もういいわよ」

そうこうしているうちに、介助していた女性が呼びにきてくれた。

「あ、はい」

そして、改めて部屋に入る一行。

部屋に入ると顔はまだ赤いがいつも通りの制服姿な空に戻っていた。

ベッドに腰かける空

いつも通りだが、何かが違う。

男子制服を女子が着ている訳だからそれは当然と言えば当然だが。

「それじゃあ、空ちゃん。車を回してくるからそれまでね」

「はい」

と、介助をしていた人は部屋を出てゆく。

「ねえ、あの人って、何者？」

尋ねる簪。

(母親…と言う訳ではなさそうだけど……………)

「えっと、あの人は榎村実奈まきむらみなさん。僕の所属研究所、榎篠技研の副所長だよ」

「へー。そうなんだ」

「ええっ！榎篠技研!？」

「それなら、教員顔負けなのも納得がいきますわね」

空の答えに興味なさそうに答えた鈴と、驚いた簪、納得するセシリア。

「なに？そんなに有名なの？」

「有名って……………鳳さん、あなた……………それでも第三世代型ISの操縦者なんですの!？」

「榎篠技研と言えば第三世代型兵装の基礎理論を完成させ、イメージインタフェースの雛型である『思考による火器管制補助(イメージ・フィードバック・ファイア・コントロール)システム』を開発した研究所だよ!」

鈴に詰め寄る簪とオルコット。

「へー……………って、それ本当？」

「ッ！」

それには、研究所の話で盛り上がっていた面々も言葉をつまらせる。

「…なんて謝っていいか解らないけど…、俺のせいで……………」

「あ、左腕以外がないのは生まれつきだから。義手と義足のソケットが破損したからその交換しないといけなくなってます。」

それに雑風の修理も、と笑う空。

「だから気にしないで。反省と後悔も、得難い失敗の経験なのだから」

そついい微笑む空はずっと大人びてみえた。

まるで人生の辛酸、世間の清濁、甘いも苦いも経験しつてこるした大人の顔だ。

一夏にもそつ見えたらしくキョトンとしている。

その顔がほんとうに極僅か、微かに顔が紅潮しかけていることに気付いたのはこの場で何人だろうか。

簪はむっとして微かながら頬を膨らませているから、気付いたようだが。

それから、とりとめもない話を二、三交わしたのち、鈴が思い出したかのように言った。

「気になってたんだけどさ、なんで女だったこと隠してたの？」

「別に隠してたないよ。ただ性別のことを聞かれなかったから言わなかっただけ」

「そりゃ全員が全員…一部例外はありとはいえ殆ど全員が『男』だと思っていたのだからいたしかたない。」

「まるで詐欺ですわね」

「人聞きの悪い。書類は全部『性別：女』で提出してるし、織斑先生は判ってたみたいだよ？」

「世界最強を比較対象に出す時点で色々間違ってるぞ」

「そうかなあ」

「そうだよ」

「そうだよ」

「そうですわ」

「そうよ」

返事は、ほぼ同時だった。

「でもまあ、空がいなくなると寂しくなるな」

「…うん」

残念そうな顔になる一夏と簪。

「一ヶ月もしないうちに戻ってくるよ。その時は、改修された相棒で成長具合を見てあげるからね」

そんな二人を宥めるように言う空。

「…おう、お手柔らかに頼む」

「だーめ」

「ううっ」

きつとポコポコだろうなあ…

トラウマ、植え付けられなければいいなあ…

そう遠くない日を思い、一夏はどんよりとした空気を纏い始める。

「簪さんも、打鉄式式の組立て頑張つて。メールで送ってくれれば相談にも乗るよ」

「うん。頑張る」

「皆も、体には気をつけて」

「ああ」

「ええ」

「そのままそっくり返すわよ」

ちょうど、そのタイミングでドアが開き実奈が現れた。

「はい、丁度キリも良さそうだし、ここで切り上げにさせてもらおうよ」

センターのスタッフも一緒だからすぐに引き払う気満々なのが見て取れる。

「あ、はい。それじゃあな」

「うん、それじゃ」

追い立てられるように一夏たちは部屋を追いだされる。

その後は待っていても仕方ないので寮に戻る一行。

一方で空は実奈が回した研究所の公用車に乗せられてIS学園を離れていった。

#18：ボーイ・ミーツ・ボーイ（前書き）

久々に投稿しますよ

夏休みに入り、色々忙しい部分が終わったので、調整不要な部分だけですけど。

とりあえず、原作二巻相当部分に突入です

#18：ボーイ・ミーツ・ボーイ

「side：一夏」

六月の頭の、日曜日。

俺が久々に外出し中学入ってすぐからの腐れ縁である五反田の家に
行って、帰って来た時。

「ああ、織斑。お前宛で小包が届いて居るぞ」

寮監の千冬姉に何やら包みを渡された。

「はあ、ありがとうございます」

誰からだ？

と調べてみる。

差出人には『榎篠技研』とだけ書かれていた。

……………また、どこかからの勧誘だろうか。

とりあえず、部屋に帰ってから開ける事にしよう。

「ただいまー」

と部屋に帰ってきて、ついそう言ってしまったからふと思い出す。

「…って、箒はもう別室だったな」

先週末ではそこに居て、こうやって声をかければ返事を返してくれていた箒は今は元、空の同室だった更識簪さんの部屋だ。

『姉が超^{リアルチート}高性能過ぎてやってられない妹の会』なるものを結成し、和気あいあいとやっているらしい。

…出来る事ならば『世界最強』な姉を持つ俺も入れて欲しいのだが、『妹の』とある通り弟である俺には参加権はないそうだ。

それにしても…なんで箒はあんな行動をとったんだろうか。

部屋がえの当日、俺に宣戦布告をして脱兎の如く逃走。そのまま引越し先の部屋へと行ってしまった。

それ以来、遭遇するたびに逃げられるか、あいまいな返事しか返してくれなくなった。

流石に多感な年頃とは言え幼少期を共に過ごした幼馴染だ。

俺の方に非があれば直さないといけないし……昼にでも誘って、改善を図るか？

うむ、とりあえず包みを開けてみる事にしよう。

机に向かって封を開ける。

中身は……………

「これは…本？」

本のタイトルには『今更聞けないIS用語辞典』とある。
それなりに厚い、一般的な国語辞典くらいの厚さのあるそれを適当にめくってみる。

うん、この一冊が入学当初からあれば大分楽だったかもしれないな。

「お、千冬姉発見」

辞書の項目に『織斑千冬』を見つけた。

とはいえ、『第一回、第二回モンド・グロツソにおける日本代表。第一回優勝、第二回決勝まで上がるも棄権』としか書いてないが。

ふと、何か挟まっていたのに気付く。

なにになに？

「『織斑一夏。織斑千冬の弟で世界初の男性IS操縦者。朴念仁を超えた朴念神』……………って、なんだこりゃ！」

辞書の項目っぽく書かれたその内容は俺についてだった。

ていうか、朴念神ってなんだよ。

「ん？裏に何か書いてあるぞ？」

何かが映り込んでいるようだったので裏返して見た。

『Meet soon』
すぐ会える？

どういう意味だ？

誰と会えるんだ？

ふと、脳裏には空の姿がよみがえる。

本人は生まれつきで義肢が壊れただけだと言っていたけど、俺のせいで義肢を壊してしまったと言いつけ換えられる。

俺が弱かったばかりに、ツケを立替えさせてしまった少女。

「まあ、後でゆっくりと読んでみるか」

時間も時間だし、メシにしよう。
それからだ。

* * *

月曜日の朝

「やっぱり、ハツキ社製のがいいなあ」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど高いじゃん」

クラス中の女子が手にカタログを持ってワイワイと賑やかに談笑していた。

「そういえば、織斑くんのISスーツってどこのやつなの？見た事ない型だけど」

「あー、特注品だとき。男のスーツは無いから。どっかのラボがイングリッド社のストレートアームモデルをベースに作ったって聞いているぞ」

それにしても、よくもまあすらすらと出るようになったものだ。

自習もしてるが、空に教えてもらった基礎と、この間届いた本をよく読んだ成果だな。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知する事によって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止める事が出来ます。あ、衝撃は消

えまさんので悪しからず」

すらすらと説明しながら現れたのは山田先生だった。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見なおした！」

「今日が、皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習して来てあるんです。……ってや、山ぴー？」

入学から二ヶ月。

山田先生には八つくらい愛称がついていた。

慕われてる証拠……というか、空が授業を受け持った関係で山田先生が生徒に混ざっていた影響というか…

「あの一、教師を渾名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん。一緒に授業受けてたんだし」

「まーさんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーさんって……」

「あれ？マヤマヤの方が良かった？マヤマヤ」

「そ、それもちょっと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてくださいっ！」

どうやら山田先生は『やまや』という渾名に何やらトラウマでも抱えてるらしい。

珍しい事に明確な拒否の意思表示だ。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生をつけてください。判りましたか？判りましたね？」

はい、とクラス中が返事をするが完全に言ってるだけだ。これからも渾名は増えて行くんだらう。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

それまでざわついていた教室がいきなりびしっと礼儀正しい、上官を前にした一卒兵の集団になったかのように変わる。

一組担任にして我が姉、織斑千冬先生の登場だ。

……ほんの少しだけ、普段より嬉しそうな感じがするのは俺しか気付いてないな。あれは。

俺がこの間帰宅した時に出しておいた夏物スーツを着て、教壇に君臨する。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるが、ISを使用しての授業になるので各人は気を引き締めるように。各人

のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。もし忘れた者は学校指定の水着で受けてもらおう。それも無い者は、まあ下着でも構わんだらう」

いやいやいや、構うだろ絶対！

男の俺がいるんだぞ？下着姿はマズイだろ、下着姿は！

ちなみにIS学園の指定水着は何故か紺色のスクール水着である。

絶滅危惧種だと言われていたが、こんな最先端の塊みたいな場所で生き延びていたとは……

ついでに言えば体操着も同じく、絶滅危惧というかほぼ絶滅したと思われるブルマーだった。

俺は短パンなので違うが。

そういえば、空は体育は長袖長ズボンのジャージ姿、水泳は始まる前だったな。

今考えると、あれは義肢を隠す為だったんだな。

さらにオマケで学校指定のISスーツはタンクトップとスパッツをつなげたようなシンプルなヤツ、空のはそれを七分袖長ズボンにした感じだった。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ！」

いや待て。空みたいに女子が男子と同じ格好してるだけってのもあり得るな。

さて、どんな自己紹介をしてくれるのやら……

#19: Sunny Boy / Ice Girl (前書き)

タイトルの直訳: 日向の少年 / 氷の少女

#19: Sunny Boy / Ice Girl

「side:一夏」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼した。

あつげにとられて誰かが呟く

「お、男………?」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて本国より転入を

」

人懐こそうな顔、礼儀正しい立ち振る舞い、中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪で黄金色なそれを首の後ろで丁寧に束ねている。スマートで……言い換えればとても同性とは思えないくらい華奢。

印象は『貴公子』と言った感じだろうか。

嫌みのない笑顔が眩しい。

「き………」

「はい?」

前兆を察知して俺は耳を塞ぐ。

シャルルはなんだか判らないらしく首をかしげている。

ああ、馬鹿。早く耳を塞げ。
でないと大変な事に

「きゃあああああああッ!」

耳を塞いでなお、耳を衝く黄色い悲鳴。

窓ガラスがビィン、と共鳴を起す。

「男子!三人目の男子!」

「しかも、うちのクラス!」

「美形!しかも護ってあげなくなる系の!」

「可愛い系の千凧くんがいなくなっちゃったけど、これで勝つる!」

「地球に生まれて良かった」

皆さんお元気な事で。

ちなみに、空は女子だと知っているのは俺と箒とセシリア、鈴に簪
さんに千冬姉ほか教職員のみ。

クラスメイトたちは今だに男子だと思ってる。

そういえば、隣のクラスや他学年から誰も来てないな。
おそらく教職員の皆さんが頑張っているんだろう。

みなさん、お仕事お疲れ様です。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」
そんな女子たちを抑えようとする千冬姉と山田先生。

『正直、面倒』という態度を隠さない千冬姉と勢いに負けてる山田先生。

俺はもう一人の転校生に意識を向ける。

輝くような銀髪。白くも見えるそれを腰近くまで下ろしている。
左目にはとても医療用とは思えない黒眼帯。

眼帯に隠されていない右目は赤色を宿している　　が、その温度
は限りなくゼロに近い。

「……………」

今だに口を開かず、腕組みをした状態で教室の中の様子を下らなそうに一瞥して、今はその視線を千冬姉に固定している。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなりたたずまいを直して直立で素直に返事をするラウラ。

その変化にクラス一同ぼかん、とする。

対して異国の敬礼を向けられた千冬姉はさっきとはまた違った意味でめんどくさそうにした。

「ここではそう呼ぶな。私はもう教官ではない。ここではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ぴしっと伸ばした手を体の真横に付け、足は踵であわせて背筋を伸ばしたその姿からどう見ても軍人、もしくは軍関係者だ。

千冬姉を『教官』と呼んでる所からして間違いなくドイツの。

…とある事情で千冬姉は一年ほど、ドイツ軍のIS部隊で教官をやっていた。

その後一年間を開けてから今のようにIS学園で教師を始めたとか。

……出来ればこの事実を本人から聞きたかったんだけど、聞けたのはついこの間。

山田先生を始めとする学園関係者から。

まあ、色々事情はあるんだろうけど……

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

名前だけ名乗って黙ったラウラ、その先を待つて黙るクラスメイト達。

「あ、あの、以上ですか？」

その空気に居たたまれなくなった山田先生が出来る限りの笑顔で声をかけるが無慈悲な即答に撃退される。

ああ、泣きそうになってるよ…まったく、先生を虐めるなよな。

ふと、ラウラとばっちり目があつた。

「！貴様がっ
」

つかつか、と足音をたててこちらにやってくるラウラ。

むっ！？

すかっ

俺が身を引くと同時、目の前をラウラの手が通り過ぎた。

「ッ！？」

避けられた途端、恥ずかしいのか顔がどんどん紅くなっていくラウラ。

元が白いから良く分かるな。

今度は反対の手が動いた。

今度は避けれそうにないから机の上に置いてあった例の『今更く用語辞典』の背でガード

べちっ

「ッ~~~~!!」

痛々しい音と共に手を引っ込めるラウラ。

涙目になって手を庇いながら俺を恨めしそうに睨んでくる…が、全然怖くない。

「あー、やった俺が言うのもなんだが、大丈夫か？」

「ふん！私は貴様があの人の弟であることなど、認めないからなッ！」

思わず尋ねてみたらラウラはそっぽを向いて空いている席へと…っ
て、そこ空の席じゃないか!?

「あー、ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドへ集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。

解散！」

パンパン、と手を叩いて千冬姉が行動を促す。

色々と腑に落ちない部分もあるが、今は急いで教室を脱出、更衣場所まで行かなければならない。

今日は…確か第二アリーナの更衣室が空いていたな。

「おい、織斑。デュノアを面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

おっと、忘れるところだった。

「君が織斑君？初めまして、僕は」

「ああ、いいから。今はとにかく移動が先だ。女子が着替え始めるからな」

説明と同時に俺はシャルルの手を引いて教室を出る。

女子は男子オレが居てもお構いなしに着替え始めるからな…

「とりあえず、俺らは空いてるアリーナの更衣室で着替え。これから実習の度にこの移動になるから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

なんだ？落ち着かなそうだな。

「トイレか？」

「トイレ…ッ違うよー！」

「そうか。それは何より」

とりあえず階段を駆け下り一階を目指す。

早くしないと

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑くんと一緒！」

HRが終わり、解き放たれた女子たちが現れるのだ。

各学年各クラスから派遣された情報収集の為の尖兵たち。

彼女らに捕まったら最後、質問攻めにされて授業に遅刻。

めでたく鬼教官に怒られ特別カリキュラムが課せられるだろう。

それだけは何としても避けねばならない。

「いたっ！こっちよ！」

「者共、出会え、出会えい！」

「って、ちょっと待て！ここは何時から武家屋敷になったんだ！？」

ホラ貝でも持ちだして

『ぶおー』

「ホントに持ちだしてきた!？」

つい、突っ込みを入れてしまう俺だが移動速度はまったく落としていない

「織斑くんや千凧くんの黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド」

「きゃあッ！見てみて、あの二人！手！手繋いでる！」

「日本に生まれて良かった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

「そこは毎年ちゃんとしろっ！」

居る親は大事にするもんだぞ。

「な、なに？なんでみんな騒いでるの？」

状況が飲み込めないシャルルが困惑顔で訊いてきた。

「そりゃ、男子が俺たちだけだからだろ」

「……？」

「珍しいんだろっさ。ISを操縦できる男が。今の所、俺たちしかないからな」

「あ、ああ！うん。そうだね」

「それと、アレだ。この学園の女子は男子と極端に接触が少ないから、珍獣状態なんだよ。ウーパール パーみたいな」

「うーぱー…何？」

「昔、流行ったんだと。」

「ふうん」

と、そんなどうでもいい話をしてる場合じゃない。
今はこの包囲網を突破する方が先決だ。

「しかしまあ、助かったよ」

「何が？」

「いや、やっぱり学園に男一人は辛いからな。」

「…あれ？もう一人いるんじゃないの？」

おっといけない！

本人は隠してる訳じゃないらしいが廻りはそう思ってたんだ。

「そう言われてるヤツは今入院中だからな。やっぱり居てくれると心強いもんだ」

「そうなの？」

どつちやらシャルルにとってはそうではないらしい。

「ま、なんにしても、これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「うん。よろしく、一夏。僕のことシャルルでいいよ」

「わかった、シャルル」

と、自己紹介をしているうちに最後の直線に差し掛かった。

ここを駆け抜ければ校舎の外に出れる。

「待てえッ!」

「ゲッ!?!」

追いついてきた!?

マズイぞ。

このままじゃ特別カリキュラム決定だ。

「ねえねえ、おねーさんたちにきみの事をおしえ
?」

へぶうッ!

ドタドタドタッ!

盛大な音と共に追手が一齐に転んだ。

そして転んだ前列に足を取られて更に転ぶ追手たち。

放っておくのはなんだか気が引けるが助けた途端、即捕縛だろうかから見捨てる。

「今のうちだ、逃げるぞ！シャルル！」

「う、うん！」

その後、追手の悲鳴らしき叫びが聞こえてきたのが不思議だったが、俺たちはどうにか第二アリーナの更衣室へと辿り着く事が出来た。

「さて、急いで着替えないとまずいぞ」

言いながら制服のボタンを一気に外してベンチに投げ、勢いでＴシャツも脱ぎ捨てた。

「わあっ！？」

「？」

なんだ？

「荷物でも忘れたのか　って、なんで着替ええないんだ？急がないと遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃもう時間に厳しい人で　」

「う、うんっ？き、着替えるよ？でも、その…あっちむいてて、ね」
「????まあ、着替えをじろじろ見るつもりはないが………そういうシャルルはこっちをじろじろ見てるよな」

「み、見てない！別に見てないよ!？」

両手を突きだして慌てて床に顔を向けるシャルル。

なんでこいつはこんな反応をするんだ？

まるで男子が着替えてる教室に踏み込んでしまった女子みたいだぞ？

「……………」

なんだろう、視線を感じる

「シャルル？」

「な、なにかな!？」

視線を向けるとシャルルはこっちにちょこつと向けていた顔を慌てて壁の方向に向け直し、ISスーツのジッパーをあげた。

「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあるのか？」

空が言うには『最初から着てればいい』との事だが、どうも落ち着かないんだよなあ…

「い、いや、別に……って、一夏まだ着てないの？」

着替え終わったシャルルとは違い、俺はまだISスーツを腰まで通したところで止まっている。

「これ、着る時に裸ってというのがなんか着づらいんだよなあ。引っかけた」

「ひ、引っかけたって？」

「おっ」

「……………」

ん？なんでシャルルは顔を赤くしてるんだ？

「よっと。よし、行くうぜ」

「う、うん……………」

お互いに着替え終わって、俺たちはグラウンドへ急ぐ。

急ぎながらも

「そのスーツ、なんか着やすそうだな。どこのヤツなんだ？」

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほとんどフル・オーダー品」

「デュノア？……………そういえば、シャルルの苗字もデュノアだよな。」

「親戚か何かか？」

「親戚じゃなくて、僕の家だよ。父が社長をしてるんだ。一応、フランスで一番大きなIS関連企業だと思う」

「ああ、そーいちゃ訓練機のラファールもデュノア社製だったな。凄いいじゃないか」

「そ、そーかな」

俺が正直に言ったらシャルルはちよつと恥ずかしかつたのか顔を俯け気味にする。

「道理で、どこか俗世離れしてるっていうか、気品があるっていうか…うん、貴公子然としてる訳だな。『いいところ育ち』って感じか？」

「いいところ…ね」

シャルルが視線を逸らしてきた。

どうやらこの話題はご法度らしいな。以後気をつける事にしよう。

「それより、一夏の方が凄いよ。あの、織斑千冬さんの弟だなんて」

「ははは、こやつめ」

「へ？」

「 いや、なんでも無い。まあ、あれだ。お互い地雷を踏んで一機ずつ減ったって事で」

「 ??? 良く分からないけど…」

「 っつて、こんな事してる場合じゃない！急ぐぞ、シャルル！」

ふと、急いでいた筈が歩いていた事に気付いた俺はシャルルの手を取って走り出す。

「 わっ！い、一夏、急に引っ張らないでよ！」

「 悪い！遅刻するかの瀬戸際だ。勘弁してくれ！」

見えてきた第二グラウンドでは、鬼が腕組みして待っているように俺には見えた。

#20: V S やまや (前書き)

タイトルだけで内容の要約に……

#20:VSやまや

「side:箒」

「遅いつ！」

授業開始のチャイムに少し遅れて一夏はやって来た。

そしてそれを千冬さんの怒声が迎える。

「す、すみません……………」

「じ、ごめんなさい……………」

素直に謝る一夏と転入生。

「まあ、事情は聞いているから今回は不問にしてやる。」

「へ？」

千冬さんの温情に一夏が素っ頓狂な声を上げる。

「デユノア目当ての連中に襲われたのだろう　　なんだ、その

顔は。特別カリキュラムをそんなに受けたいのか？」

「滅相もない！」

慌てる一夏

「なら、早く並べ。」

「はい」

一夏が一組の列の端に加わるとちょうどその隣にいたオルコットが話しかけているようだった。

…まったく。

そこに二組の鳳も加わった様子。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生に叩かれかけましたの」

「はあ！？一夏、アンタなんでそうバカなの！？」

私は内心で溜め息をついた。

『ああ、馬鹿。声が大きい』と。

「安心しろ。バカは私の目の前にも二人いる」

バシーン

案の定、千冬さんの出席簿が火を噴いた。

* * *

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する。」

「はいっ！」

「くうっ……。何かというとすぐに人の頭をポンポンと……」

「……一夏のせい、一夏のせい、一夏のせい……」

オルコットと鳳はなにやら呪詛やら文句やらをこぼしつつ、頭を押さえて涙目になっていた。

どがつ。

む、鳳が一夏に八つ当たりでもしたのか、それとも一夏が余計な事を考えたのか…恐らく後者だな。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子も居る事だしな。鳳、オルコット！」

「な、なぜわたくしまで!？」

諦めろ、オルコット。

千冬さんはこう言う人だ。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前が出る」

「だからってどうしてわたくしが…別に一夏さんでも……」

「一夏のせいなのになんであたしが……」

聞こえるようにしてボヤク二人、耳を塞いで聞こえないふりをする一夏。

「お前ら…少しはやる気を出せ」

「「ッ……!!」」

ん？千冬さんが何か二人に耳打ちをしている？

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね。専用機持ちの！」

何故かいきなりやる気が天井破りに近い勢いで出た二人。

…大かた、『一夏にいいところを見せられる』とでも言われたのだろうな。

……私にも専用機があれば…いや、『アレ』は私が担い手としてふさわしくなるまでは……

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるな、馬鹿ども。対戦相手は」

キイイイイ……ン

なんだ、この空気を裂くような音は……

私の耳には墜落音にしか聞こえないのだが

「あああーっ！ど、どいてくださいーっ！！」

「え？なに？俺？　　つて、うわあッ！？」

空から降って来た、訓練機”ラファール・リヴァイヴ”を纏った山田先生が一夏に激突する寸前にそのままの姿勢で急停止した。

驚いた一夏が尻もちをついたりはしたが。

「なッ………あれはっ！？」

もう一人の転入生、ボーデヴィツヒが驚いている？

「はぁ…何をやっているんだか。　　織斑、そこを退け。」

千冬さんの指示通り、山田先生の落下コース上から退避する一夏。

そして

「もっいいぞ」

千冬さんがどこかにインカムで声をかけたと同時に、まるで見えない

何かに支えられていたかのように滞空停止していたラファール・リヴァイヴが地面に墜ちた。

顔面から。

だが、激突寸前に山田先生は回転するかのような動きで頭を上に戻して軟着陸を果たす。

「さて、始めるぞ。対戦相手は山田先生だ」

「だ、大丈夫なんですか？」

「ああ。こう見えても山田先生は元代表候補生だ。」

「ですが、二対一では…」

「安心しろ。今のお前ならすぐに負けるだろう」

負ける。

そう言われて困惑に染まっていた二人の目に闘志が戻って来たようだった。

「では、始め！」

「手加減はしませんわ」

「速攻で落とす！」

「い、いきますー！」

言葉こそいつも通りの山田先生であっても、その目つきは鋭く冷静な…獲物を狩る猛禽のような鋭いものに代わっていた。

先制攻撃はオルコット・鳳ペアであったが、山田先生は簡単にそれを回避した。

「さて、今の間に……そうだな。丁度いい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試みせろ。」

「あつ、はい」

目前で繰り広げられている空中戦を見ながら、デュノアがはつきりとした声で説明を始めた。

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。」

滔々と続く説明を聞きながらも私は山田先生の動きを目で追い続ける。

巧い。

確かに、山田先生の戦い方には華こそないが堅実で『負けない』戦い方をしている。

ラファールが扱いやすくポジションを選ばない機体である事を差し

引いても山田先生はしつかりとラファールを使いこなしている。

オルコットと鳳の互いが互いを邪魔と思うような位置取りで堅実に削り取っている。

「でも、知られています」

「ああ、いったんそこまでいい。…終わるぞ」

山田先生の射撃に誘導されたオルコットが鳳と衝突。

ちょうどそのタイミングでグレネードが投げ込まれ爆発。

爆煙から二つの影が地面へと落下していった。

言うまでも無い。
オルコットと鳳だ。

「くっ…うっ……。まさかこのわたくしが…」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」
「り、鈴さんこそ！無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「それはこっちのセリフよ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐぐ……！」

「ぎぎぎぎ……！」

……最大の敗因は、オルコットと鳳が協力して戦うつもりがなかった事だろうな。

あれが空と一夏ならば撃墜とまではいかないまでも善戦はできるだろう。

空はオルコットよりも上手な操縦者であり、一夏との仲も悪くない、むしろいい方だ。

周囲のクスクス笑いが始まるまで、二人はいがみ合い続けた。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接すように」

ぱんぱん、と手を叩いて千冬さんが意識を切り替えさせる。

「専用機持ちは……織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳か。では八人グループになって実習を行う。グループリーダーは専用機持ちだ。では、別れる！」

千冬さんが言い終わるが早いか否か、

あつという間にニクラス分の女子（私と専用機持ち除く）は一夏とデュノアの元に大集合をしていた。

「……八人ずつと言われたのを聞いて居なかったのか？」

状況を見かねたのか千冬さんは面倒そうにひたいを指で押さえなが

ら低い声で告げた。

「このバカどもが。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通りだ！次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンドを百周させるぞ！」

千冬さんの脅しもあり、群がっていたクラスメイト達はそさくさと散ってゆく。

さて、私の組は……一夏の所か。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一機取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『ラファール』が二機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

山田先生の指示が飛ぶ

「……………」

むっ…

一夏の視線が、山田先生に…？

ぎゅむ

「いつてえー！」

とりあえず、足を踵で思いつきり踏んでおいた。

まったく、デレデレおって。

.....私のはまったく気に入らないけれど.....

2 1 : M e m o r y / S c a r (前 書 き)

「タイトル訳：思い出／古傷」

#21: Memory / Scar

「side:一夏」

なんだかすごく不機嫌だった筈だが、『昼食を一緒にどっだ』と誘った処、一気に上機嫌になった。

それこそ、打鉄を装着したまま小躍りするくらいに。

まあ、小躍りと言うよりは演舞に近かった気もするけど、それは置いておく。

それにしても、流石は筈。

歩行も難なく出来たし、演舞までやってのけるとは。

「うっし。屋上行くか」

着替え終わった俺はシャルルに食堂の場所と昼休みの時間を伝えてから屋上を目指して歩いていった。

きつと食堂ではシャルルが大変な事になってると思うが、俺としてもここ最近妙に疎遠になっている幼馴染との関係修復をしたいので生贄になってもらおう。

と、あと一フロアで屋上という処まで来た時

「いったー！」

「うぎゃっ！」

「あうっ！」

唐突に駆け抜ける嵐。

そして駆け抜けた後に残るのは頭を抱えてうずくまる女子の群れ。

「まったく。バカどもめ」

「ちふ　　織斑先生」

「まったく、手を焼かせるな。織斑、お前が面倒を見ると言っただろっ」

「え？でも……」

スパアン

「あ痛ッ！」

「口答えするな。」

「　　はい、織斑先生」

物凄く、理不尽です。

しっかり面倒見るよ、と言い残して立ち去ってゆく千冬姉。

説教（但し肉体言語で）をもらった女子たちは渋々散ってゆく。

「なんか、ごめんね？」

物凄く済まなそうにしてくるシャルル

「いいさ。シャルルが悪い訳じゃない」

そう言いながら無意識に、俺の手はシャルルの頭にいつていた。

「わっ……」

おお、撫で心地は中々にいいな。

と、為されるがままになってるシャルルの頭を鳥の巣状態にする作業をしていると……

「一夏っ!!」

「一夏さん!!」

「……………なんで私まで？」

鈴とセシリアと簪さんがいた。

と言っても、簪さんは鈴とセシリアに拉致されてきた様子。

強制はいかんど、強制は。

「お昼休みだというのに、どこに行かれるおつもりなんですの？」

「そうよ！あたしや転入生の事も放っておいて、一夏のくせに何さまのつもり？」

世界初の男性IS操縦者の一夏様 なんて思ったらきつと蹴られるんだろっな

どげっ

「あんだ、なんか物凄く下らない事考えたでしょ」

ご明察。

そして予想通りの反応をありがとう

「お前な……」

つといけない。

これ以上待たせると筈の機嫌がまた急速落下だ。

俺は行くぞ。

「ちよつと！何処行く気!?!」

「逃がしませんわよ!」

「あっあっ」

「一夏、待ってよー」

結果：全員、屋上まで付いてきた。

* * *

「……………どういう事だ」

屋上に着いた時、一瞬だけ表情が華やいだ後に一気に不機嫌顔になった筈はドスの効いた声と殺気のコモった視線を俺に向けてきた。

「…俺が知るか。」

「ご、ごめんね？」

「僕が一夏に助けを求めちゃったから…」

簪さんとシャルルは筈に謝り、

「ふん」

「ふふふ、抜け駆けは許しませんよ。筈さん」

「ぐぬぬ……………、だが今回は一夏に誘われたのだぞ、私は」

「あり得ないわね」

「あり得ませんわ」

むっ、なんでだ？

「だって、あの一夏よ？そんな甲斐性あるわけないじゃない」「酷い事をさらっと言っ鈴。そして頷くセシリア。」

……………泣いて、いいよな？

「っといけねえ。」

「どろした、一夏」

「いや、コイツを忘れてた」

俺は皆で付いてるテーブルに用意してきた弁当を乗せる。

食堂のおばちゃんに頼んで貸してもらった二段の重箱に納められたそれは今日千冬姉に渡した弁当と一緒に作ったものだ。

いや、これを作ったついでに千冬姉にも弁当用意した、というべきか。

「これは……？」

「弁当。俺が作った」

「「「ええっ!?!」「」」

驚くセシリア、簪さん、シャルル。

「一夏さんて、料理できるんですのね」

「おう。千冬姉が働きに出た分、家の中の事は俺がやってたからな」

最初は下手だったが、文句は言っても残さず食べてくれた千冬姉にいい物を食わせてやりたくて猛練習したからな。

料理はそこそこに自信がある。

「さて、あとは食べながらだ。昼休みが終わっちまうぞ」

「そうだね」

シャルルの同意を得て、俺は弁当箱のふたを開ける。

中身は片方には俵型のおにぎり（おかずがあるから塩結びだ）、もう片方には出汁巻き卵、アキ兄直伝の若鳥の唐揚げ、ひじきの五目煮、ほうれん草の胡麻和え、アスパラガスと人参のベーコン巻等々…定番な弁当のおかずを詰めてある。

でも六人分にするには大分少ない。

「しょうがないわね。私もこれ分けてあげるわよ」

と鈴がタッパーをだしてきた。

「おっ！」

「酢豚よ。思ったったから作ってみたの」

「そりゃ楽しみだ」

「えっと、わたくしも、サンドイッチを作って来ましたのよ。宜しければ…」

と、今度はセシリアがバスケットをテーブルの上に置く。

「あ、ああ…。あとで貰うよ…」

言いたくはないがセシリアに料理の適性は皆無だ。

見た目こそ問題はないが、味は『酷い』の一言に尽きる。

その証拠に鈴は『うげっ』と小さくつぶやき、箒と簪さんは引き攣った苦笑いを浮かべている。

「では……」

めいめいが弁当に手を伸ばし　あ、誰一人としてセシリアのサンドイッチに手を出さなかったが。

「あ、おいしい」

「そりゃよかった」

食べた途端、箒、セシリア、鈴の三人が落ち込みだした。

「ど、どうしたの？」

「……………理不尽ですわ」

「……………負けた」

「……………また、腕を上げたんだな、一夏」

困惑して声をかけた簪さん

返ってくる答えは、なんとというか何か色々なモノが砕けたような感じがする

「もしかして口に合わなかったか？」

俺自身、自分で作ったから味は判ってるが…冷めて不味くなってないか不安になって、三人が食べたヤツの味を再確認する。
うむ、これなら問題は無い筈だ。

…ということは、アレか？

俺や千冬姉の味覚に合わせて作ってるからな。

筈は別としても鈴やセシリアにとってはイマイチだったのかもしれないな。

うむ、精進せねば。

「そ、そんなことないですわ!」

「う、うん!とつてもおいしいわよ!ね?」

「そ、そうだな!」

む?どつちなのか判らないな。

「あ、そうだ。筈、ちよっとコレ食べてみるよ」

一口大に箸で切った唐揚げを箸で持ち上げる。

「な、なに?」

「だから、いいから食べてみるよ」

「い、いや、だが…しかしな……」

箸の先を見たり視線を外したりしながらしどろもどろする筈。

「……………」
「……………」

そしてその隣と更に隣から『じとー』と睨んでくるセシリアと鈴

唐揚げはまだあるし……………なんで睨む？

「ほら、食べてみるって」

「い、いや…そのだな…あー……………」ほんほん

表情が緩んで締まって、無表情になったかと思えばまた緩む

……………今の幕の心理状態はどうなってるんだ？

「あ、これってもしかして、日本ではカップルがするっていう』はい、あーん』っていうやつ？仲睦まじいね」

シャルルがそんなことを言って納得したように微笑む。

そして、その一言で虎仙人と戦女神に変容する鈴とセシリア。

「だっ、誰がつ！なんでこいつらが仲いいのよ！？」

「そっ、そうですわ！やり直しを要求します！」

シャルルに食ってかかる二人。

「そ、それじゃあ、みんなで食べさせあいっこならどうかな」

「ん？別に態々そんな事しなくても……………」

突き刺さる視線が二つ。

その物理的干渉力を持つてるとしか思えない視線に俺は屈した。

「ま、まあ、それでいいと思うぞ」

「ま、まあ、一夏がそれでいいって言っなら、付き合ってあげてもいいわよ」

「わたくしも。本来ならばそのようなテーブルマナーを損ねるような行為は良しとは致しませんがこの日本。『郷ゴイングに入っゴては郷に従え』ですわね」

セシリア、英語で『郷に入っゴては郷に従え』は『When in Rome do as the Romans do』(ローマではローマ人がするようにせよ)『だぞ。』

…………… 大丈夫か英国人。

「じゃ、さっそくもーらいつー！」

いきなり鈴がそういつて俺の箸から唐揚げをかつさらう。

「あ、こらー！」

「もぐもぐ……………うん、イケるわねこれ」

まあ、鈴の口にもあつたらしい。

さて、仕方ないからもう一切れ……………って

「唐揚げがもう無い？」

「……………」ごめんなさい。おいしくてつい……………」

顔を紅潮させて俯く簪さん。

「まあ、美味しく食べてもらえたなら作り手としては嬉しい限りだ」

さて、困った。

是非にとも箒には唐揚げの感想を聞きたいのだが残っているのはさつき俺が味見で齧って半分になった唐揚げが一個。

「あー、悪い。唐揚げがもう売り切れた。…俺が半分齧ったヤツは流石に嫌だろ？」

「べ、べつにかまわないぞ」

「そうなのか。それじゃあ、はい、あーん」

俺は手元に確保されていた半切れをつまんで差し出す。

「あ、あーん」

箒はぎこちないながらもそう言いながら口を開け、唐揚げを頬張る。

流石に恥ずかしかつたらしく頬が赤い。

「いいものだな……………む？」

「どうした、箒」

「この味は…アキトさんの……………」

「っしゅあっ！」

箒の咳きに思わず歓声をあげてしまった。

「ようやく再現できたぞ。アキ兄の唐揚げ」

「本当か!？」

「ああ。アキ兄の遺したノートの『適量』としか書かれてなかった漬けタレの調合。ようやく見つけたぜ!箒にも確かめてもらいたかったんだ」

アキ兄が俺たちに作ってくれた唐揚げ。
醤油をベースに生姜とおろしニンニク。そこにコシヨウと隠し味に大根おろし。

但し、ノートには『適量』としか書かれていなかった分量をようやく見つけたのだ。

「ねえ、『アキ兄』って誰?アンタ姉弟は千冬さんだけでしょ?」

喜ぶ俺と箒に鈴が疑問成分百パーセントで尋ねてきた。

「ああ、鈴は知らなかったか……………そりゃそうだよな。アキ兄が

いなくなったのは俺らが小学三年の時だったもんな」

「『いなくなった』?」

「ああ、高校の交換留学の為にフランス行ったら向こうで事件に巻き込まれたらしくてさ…結局、帰ってこなかったんだ。推定死亡。葬式もちゃんとやったんだが……………」

「…あの時の千冬さんは見てられなかったな。」
あこのころの千冬姉は、本当に荒れていた。

道場破りを繰り返し、町の不良集団を幾つも潰滅に追い込んだりもした。

まあ、その手の破壊活動を二、三週間続けたら不良集団が枯渴えむのしたのか、荒れ狂う姿は見せなくなったが……………」

代わりに、東さんと一緒になって何やらやり始めた。

今思えば、一緒になってISを作っていたんだろう。

千冬姉がテストパイロット、東さんが作成者として。

そして、その一年後に二人は『白騎士事件』を起こした。

「……………ごめん、一夏。」

「いや、もう昔の事だからな。 さて、俺はそろそろ行くかな」

「何処へいくんですの?」

「アリーナの更衣室。確かこの時間帯は第一アリーナが空いてた筈だな」

「ん？一夏つてもしかして実習で毎回ISスーツ脱いでんの？」

「着っぱなしでも問題ないとは言われてるんだけど、どうも落ち着かないからな。弁当箱は俺の机にでも置いておいてくれ」

俺はご馳走さまでした。と言ってから席を立つ。

余り食べていないが、この空気の中で食事するのは俺には無理だ。

「……………思い出したらアキ兄のこと思いっきりぶん殴りたくなってきたな」

その一発には、全てを込めて。

#21・5：閑話 とある昼下がり／とある放課後（前書き）

最初は#22の冒頭に挿入しようかと思いましたが、書いていたら文字数が結構増えたので独立させる事にしました。

組合長 様の感想を受けて、書く事にしました。

想像と違つと思われるかもしれませんが……

#21・5：閑話 とある昼下がり／とある放課後

「1」

千冬が待ちに待った昼休み。

久々な愚弟の手料理に表向きはいつも通り、内心では鼻歌交じりにスキップしそうなほどに浮かれていた。

茶を淹れ、弁当を職員室の机に広げる。

一段分のおかずのラインナップは出汁巻き卵にアスパラガスと人参のベーコン巻、ひじきの五目煮、ほうれん草の胡麻和え、そして唐揚げ。

当然ながら、一夏が筈たちに振舞った弁当と同じおかずである。

「さて、頂くとするか」

茶を一口啜ってから、ほうれん草の胡麻和え、ひじきの五目煮を一気に食べ、ご飯と茶で流し込む。

……『嫌いなモノはさっさと流し込むように食べ、後から好きなモノをゆっくり食べる』。

これが、千冬の昔からのクセだった。

矯正が繰り返された結果、『残す』ではなく『先に処理する』に進歩し、そこから先には進めずに大人になってしまった結果である。

ご飯の半分ほどと茶で二品を処理した千冬はここからが本番と言わ

んばかりに出汁巻き卵、ベーコン巻と箸を進めてゆく。

「ん。一夏のやつ、また腕を上げたな」

千冬の好みにあった味　　ここでは織斑家の家庭の味と言つべきだろうか。

そして、大好物である唐揚げに箸を伸ばし

ぱくり、と口に放り込んで噛みしめた途端、何故か涙が出てきた。

おかしいな。

そう思つて袖で拭うが拭つたそばから涙で歪む視界。

幸い、生徒の目は無い職員室であり、そこに居る教員たちはそれぞれ自分のことで忙しそうにしており、千冬の様子に気付いていない。

唐揚げ一つに泣く要素などありはしない。別に辛い訳でも苦い訳でもないのだから。

だが、涙が湧き出てくる。

……それは、千冬の側に理由があった。

『懐かしい』

アレは何時だったろうか。

両親が、千冬とまだまだ幼い一夏を残して姿を消してから間もなくの事だった筈だ。

小学校最後の遠足で、千冬は弁当をアキトに作ってもらった。その当時、一夏はまだ二歳。家事など家庭科の授業でちょこつとやっただけの千冬も同様に出来なかった。

その時に入っていたおかずは甘い卵焼きに、人参とブロッコリーとソーセージの炒め物に、ピーマンの醤油炒め、唐揚げとレタス。出来物を買っしかない諦めかけていた分、余計にその『手作り』の味が嬉しかった。

……… 当時はまだ好き嫌いが酷く、ブロッコリーと人参、ピーマン、レタス みとめたくないかし 要は野菜類を残してこっぴどく叱られ矯正されたのは最早黒歴史である。

そういえば、一夏の奴も大分アキト兄さんに似てきたな

料理の腕も、洗濯や掃除の技量も、その信念や諦めの悪さも。

それも当然だろう、と千冬は思う。

一夏にとって、『兄』であると同時に『父親』でもあったのだから。「もう、七年か」

七年。

長いようで短くもある間に、いろんな事が起こった。

『織斑千冬』という少女が『世界最強のIS操縦者にしてIS学園の教師 織斑千冬』となり

『織斑一夏』という少年が『世界初の男性IS操縦者 織斑一夏』

になった。

『篠ノ之束』という少女が『ISを開発し世界を変えた天才科学者
篠ノ乃束』となり、

『篠ノ之箒』という少女が『IS開発者の妹 篠ノ之箒』になった。

七年前、千冬と束はまだ高校三年生、一夏と箒は小学三年生だった。
それが、今や社会人と高校一年生。

『七年前に戻れたら』

そう、時々思う。

思っ、『バカらしい』と自嘲する。

『バカらしい』と自嘲しながらも、『もし戻れたら』を想像してしまふ。

もし、戻れたら……

「あ、織斑先生。珍しいですね、お弁当ですか」

背後から声を掛けられて、千冬は内心慌てて『IS学園の教師、織斑千冬』の仮面をかぶる。

声をかけてきたのは同僚にして副担任の山田真耶だと声で判った。

「ああ。と言っても自分で作った訳ではないがな」

「と、いうと……織斑おしいとみくんの手作りですか。」

「今朝、弁当を作ったから持って行けと押しつけられてな」

じいー、と見つめられて千冬はたじろぎそうになる。

じいー

「……………一つ、味見してみるか？」

結局、千冬は折れた。

「そうですね、それでは遠慮なく……………」

目力で押し通した真耶は唐揚げに手を伸ばした。

「んー、おいしいですね。」

「そうだろう」

自慢げな千冬。

「……………時に山田先生。」

「はい？」

「今日の放課後、空いているだろうか」

「はあ、まあ空いてますけど……………」

真耶は底知れぬ不安に襲われた。

何故、こんな事を聞かれているのだろうか……………と。

そしてその不安は

「ならば、ISの模擬戦闘に付き合ってもらおうか」
最悪の形で、的中した。

「えっ!?!」

真耶はその時自分が地雷を…それも対人用のセンサーを使った対戦車地雷（爆薬増量版）を踏んだ事に気がついた。

残っていた唐揚げは、『お楽しみ』としてとってあったものだったという事に。

「なに、ちよつとばかり勘を取り戻しておこうと思ってな
逃げるなよ」

「ははははは、はいッ!」

正に狼に睨まれた子ウサギ状態。

真耶は、明日の朝日が拝めるか不安になった。

* * * * *

「2」

放課後、夕日に橙に染められた教室で

ぐう……………

「はあ……………腹減ったな」

一夏は空腹に悩まされていた。

ただでさえ運動量の多いES操縦者をやっている男子高校生の胃袋が『昼に食べた量が少なすぎる』と抗議してきているのだ。

だからと言って、学食は既に営業終了、寮の食堂は夕食の準備中で購買ももうロクなモノが残っていない。故に夕飯まで我慢するしかないのだ。

ぐう……………

「……………水でも飲んで何とかしようか」

「一夏」

立ち上がるうとした処を箒が呼び止めた。

「ん？なんだ、箒」

ずずいっ、と近づいてきた箒に一夏は若干引く。

「来い」

一夏の腕をつかんで移動を始める箒。

一夏は為されるがままに引き摺られて行った。

そして辿り着いたのは営業終了し、談話コーナーと化した食堂だった。

その中でも一番奥まった場所に一夏を連れ込んだ筈は包みを突きだす。

「な、なんだ？」

「……………弁当だ」

消えそうなくらいに小さい眩き。

「弁当？」

「ああ」

実はこの弁当、筈が昼に一夏に食べさせる為に作ったモノである。

一夏を昼に誘ってこの手作り弁当をふるまうつもりだったのだが、逆に昼に誘われ、手作り弁当を振舞われてしまった。

一夏の弁当と献立がだいたい被っていた為に出すに出せないままになってしまい、自分の分は自分で食べたが、一夏の分が残ってしまったのだ。

「いいのか？」

目を輝かせた一夏の間に、筈は無言で頷く。

「！それじゃあ遠慮なくいただくぜ。ありがとな、箒」

「ふ、ふん！」

紅潮した顔を隠すように一夏から顔を逸らす箒

だが、『旨い旨い』と弁当を食べる一夏に頬が緩む。

「うん？」

「どうした？」

ふと、一夏の箸が止まり箒は心配そうになる。

何か失敗でもしたのだろうか。

そう不安になる箒。

だが、

「この唐揚げ、確かにアキ兄のヤツに似てるけど……ちょっと甘めなのか。砂糖じゃない……みりんか？うん、どっちかって言つとこっちの方が好きだな。俺は」

うんうん唸りながら箸を動かし始める一夏。

対して呆気にとられた箒。

（一夏は……アキト兄さんのよりわわわ、私の方がいいと言つのか
！）

文面だけだと中々に危ないが、料理の好み的な意味である。

嬉しそうに弁当を食べる一夏と向かい側に座って顔を真っ赤に、落ち着き無くそわそわしている筈。

そんな初々しい光景はもう十分ほど続いた。

#21・5：閑話 とある昼下がり／とある放課後（後書き）

なんだか千冬さんが可愛くなってしまった気が……

そして、#21で鈴とセシリアは酢豚とサンドイッチを出したのに
筈が『原作では持っていたのに出さなかった』のは持ってなかった
からじゃないんです。

持ってたけど、出せなかったんです。

その結果がこのイベントですが。

#22：ブルーデイズ（前書き）

タイトルは原作第二巻、第三話の前半分だから、タイトルの／の前まで。

#22：ブルーデイズ

「side：一夏」

シャルルが転校してきた日から五日が経った。

案の定というか、当然ながら同室となった俺はシャルルと意気投合。日課であるISの訓練にもこうして付き合ってもらおうようになった。

その日は射撃武装について 俺一人ではどうしようもなく、擬音語満載な筈、精神論の鈴、複雑すぎる理詰め of セシリアの指導では理解できない部分をシャルルに教わっていた。

で、教官をお役御免となった三人はそれぞれ、自主練を行っている筈である。

…………… 所謂いえばいつの間にか名前呼びになってたな。

うむ、男にとって『女』というのは本当に理解出来んものなんだな。

で、訓練として使用許諾をしてくれたアサルトライフルを撃っていた。

そしてちょうど一弾装分…十六発を撃ち終わった頃

「ねえ、ちよつとアレ……………」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……………」

アリーナがざわつき始め、俺はその注目の的に視線を移した。

「……………」

そこにいたのはもう一人の転校生。

ドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

転校初日以来、誰とも一緒にいる姿を見た事が無い、孤高の女子。俺に平手打ちをかまそうとして、避けたせいで羞恥心から顔を真っ赤にして手を振り回すという可愛い姿を晒しましたが……

「おい」

オープンチャンネル
開放回線で届けられる声は確かにラウラのものだ。

「……………なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

俺が渋々返事を返すとラウラは言葉を続けながら飛翔してきた。

それにしても、行き成り『私と戦え』だなんて…バトル脳なのか？

「断る。俺はこの後授業の復習をしなければならんだ」

「貴様の都合など知ったものか」

何故にラウラがこつこつ俺に食ってかかってくるのか……………まあ、大体予想はついている。

第二回モンド・グロツソの時のゴタゴタだろう。

千冬姉が誘拐・監禁された俺を助けるために決勝戦を投げ出したあの……

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を為し得ただろう事は容易に想像できる。だから、私は貴様を　　貴様の存在を認めない」

「でも、俺が誘拐されなければ千冬姉はドイツに借りを作る事も無く、ドイツで教導する事も無かった。違うか？」

それは矛盾だ。

偉業を為し得なかったが故に千冬姉の教えを受ける事になった。言い方を変えれば、俺が誘拐された事で、教えを受ける事ができた。つまり、『俺という存在を認めない』という事は『自分が教えを受ける事ができた原因を否定する』という意味であるということ。

「…………ツ」

どうやら、考えないようにしていたらしい。

とにかく『千冬姉の経歴に傷を付けた事が許せない』その一心で。

「それじゃあな」

「ふん、ならば

戦わざるを得ないよつにしてやる！」

言うが早いか、ラウラはその漆黒のISを戦闘状態へとシフトさせ、左肩に装備された大型実体弾砲が火を吹いた。

「ッ！」

ギャンツ
！

「まったく、危ねえな！こんな密集空間でそんなバカでかい砲ぶっぱなしじゃって」

その瞬間、アリーナが凍った

「い、一夏……何やったの？」

そんな中でシャルルが恐る恐ると言った風に尋ねてきた。

「ん？ああ。弾丸をたたつ斬った」

最初は防御手段の一つとして練習してたんだが、ふと気がついた。エネルギー弾には『零落白夜』を発動させれば対応できるが、連射された実体弾や散弾相手では切り払う意味が無い。

一発切りはらつても、他が命中する連射系とばらまかれる弾を喰らう散弾。

だから切り払いは諦めて普通に回避運動を選んだ。

……やりたかつただけだな。

『踏み込みが足りんっ！』ってなんでも切り払うの。

セシリアのビットの時は無我夢中で言えなかったし、最近は切り払

われてくれないし。

「これくらい、千冬姉は余裕で出来るだろうし、筭も少し練習すれば出来るだろうし……動体視力さえそこそこにあれば誰でも出来ると思うぞ?」

「いや、普通出来ないからね!？」

むう……………

「ああ、アキ兄だったらマシンガンでも切り払えそうだな、撃たれる前に銃ごと。ちなみに狙撃銃だったら弾丸を斬り払い、すぐに狙撃手を狩ると思う。」

「なにそれこわい　　って、『アキにい』って誰!? ていうかホントに人間?」

失礼な。

「……………」

俺たちが漫才同然の会話を繰り返していると興を殺がれたらしくラウラが立ち去ってゆく。

「今日はもう上がるのか。そろそろアリーナの閉館時間だし」

「そうだな。銃、ありがどな。色々参考になった。」

「それならよかった」

にっこりとほほ笑むシャルル。
だが、問題はここからだ。

「えっと、じゃあ先に着替えて戻ってて」

また来た。

そう、いつもこういうのだ。

シャルルは転校初日の一回以降、一度も俺と着替えをしたがらない、
というかしない。

オマケに部屋でシャワーを浴びて上半身裸のまま出てくると『も
っとちゃんとしなきゃダメだ』と怒る。

妙に恥ずかしがるし……なんというか、感性が女寄りな気がする。

まあ、『シャルル・デュノアは女である』と言われた方が納得でき
そうだ。

実際、空という『男子と同じ格好をしていた女子』はいた訳だし。

でも、自己紹介では確かに『男だ』って言ってたな。

まあいい

「おう。それじゃあ、また後でな」

隠したい事があるなら無理に踏み込まないでおこう。

ただ、疑念として心の隅に置いておく事は忘れないでおくとしよう。

……さて、着替えるか

着替え終わったすぐ後、山田先生がやってきて『大浴場が週二日、使用日ができた』と教えてくれた。

ついでに、白式の正式な登録書類の件も一緒にやってきたので、職員室へと連行になったが。

しかし……つい山田先生の手をとって熱心にお礼を言ってしまったが、妙にシャルルが不機嫌だったな。

それも筈とかセシリアとか鈴とかが向けてくるタイプに似てる気がするのは気のせいだろうか……

* * *

「はー、終わった終わった」

シャルルと別れて職員室で書類書きをしに行った俺だが、枚数自体は多いが名前を書くだけのものばかりだったので予想以上に早く終わった。

これで、俺は正式な白式の登録者となった訳だが、事務的な、書類上での意味しかないらしく、特に変わる事も無いらしい。

「よし到着。ただいまー って、あれ？」

部屋に戻ったら先に戻った筈のシャルルの姿が無かった。

シャワールームから水音がしてる。

成る程。シャワー中か。

そういえば、昨日シャルルが『ボディークリームが切れた』って言うてたな。

いつも俺が先に入るのその時に補充すればいいと思っていたのが裏目に出てしまったか。

思い出した俺はクローゼットから予備　　というか詰め替え用のボディークリームを取り出す。

使えるボトルがあるのにボトルごと買ったなんて、言語道断だ。

恐らく、現在進行形で困っているであろうから届けた方がいいだろう。

まず、俺は洗面所兼脱衣所のドアをノックする。

この間の空の一件以来、こつ言つところには用心するようになっているのだ。

反応がないし水音はまだ続いている。

なら大丈夫か？

そう思つて俺は脱衣所へと入る。

「おーい、シャルル」

声をかけるが早いかな否か、キュツという蛇口を閉める音がして俺は嫌な予感に脱衣所からの離脱を図ろうとした。

ガチャ

………が、手遅れだった。

頑なに俺との着替えを拒否してきたシャルルなのだから、何かしら理由があつて見られたくないのだろう。

それを見ないようにと思つたが、俺が脱衣所から逃げ出すよりもシャルルが脱衣所に入ってくる方が早かった。

「い、い、いち………か？」

「悪いッ！」

俺は慌てて『見覚えのあるような気のある金髪の子』に背中を向けた。

「覗くつもりは全く無かった。ただ、代えのボディソープを届けて来たただけだ。一応、脱衣所に入る前にノックはした！」

「あ、う、」

「ボディソープはここに置いておくから、ボトルに詰めておいてくれ。無理だったらパッケから使って、そのまま棚に置いておいて

くれればいいから」

「う、……うん」

「じゃ、じゃあ、俺は出てくから」

可及的速やかに脱衣所を出て、俺はバクバクと音を立てる心臓と緊張で詰まっていた呼吸に深呼吸を繰り返した。

大体落ち着いてきたところで俺は考え始める。

おかしい。

先に部屋に戻ったのはシャルルだ。

つまりその前に部屋に入る事が出来るのはマスターキーを持つ寮監の千冬姉のみ。

あの千冬姉がマスターキーを無くすとか盗まれるハズはないから、あり得るとすればシャルルの持つ鍵が盗難されたパターン。

だが、それならば俺にも話は来るだろうし、鍵の交換をすれば俺の鍵も交換される。そもそもでシャルルが部屋に入れない。

だから、これも無いだろう。

それにシャルルはいつもぼやぼやしてるように見えるが意外としっかり者だ。

となると、一番可能性が高いのは…… 『シャルルが女だった』 だろう。

突拍子もないように思えるが一番可能性が高い。むしろ、納得がいく。

『女子だから』 男である俺と着替えようとしな。

『女子だから』 男である俺の裸に顔を赤くして慌てる。

『男子にしては小柄』 なのも 『女子としては標準』 になるのだから。

「でも、理由がねえ」

シャルルが態々男だと偽ってくる理由が思い浮かばない。

強いて言えば俺の、『世界で唯一の男のIS操縦者』のデータだろうが、そんなのは別の方法でも手に入れる事は出来る。

確かに、男子と偽った方が近づきやすいし同室になるだろうから入手するチャンスも増える。

だが、『良くて退学、悪ければ偽証罪で逮捕』と、バレた時のリスクが大きすぎる。

しかも国の名前を背負った『代表候補生』が、だ。

確かに中途転入は代表候補生くらいしかできないが、俺がIS学園に入学するという話は昨年度末には公表されたも同然だった。時期的にも微妙過ぎる。

「やっぱり、本人に聞くしかないか」

情報が少なすぎる上に推測が多すぎて考えがまとまらない。

それに、深く考えると網膜に焼きついているさっきの裸姿が浮かんで来てしまう。

今の所は『何故』を考えるようにして思い出さないようにしていたが、もう限界に近い。

うー、心頭滅却、煩惱退散ッ！

ガチャ

控えめながらも静寂に支配された部屋の中では大きく聞こえるドアの音。

「あ、上がったよ……………」

「……………おっ」

背中越しに聞く声は、やはりシャルルのものだった。

さっきの光景が目には浮かんで来て再び高鳴る心臓。

可能な限りそれを意識の外に追いやって、俺は振り向いた。

そこにいたのは、紛う事無く女子だった。

#22：ブルーデイズ（後書き）

ちよつとばかり一夏の強化をし過ぎた感があります。

実際、超音速の砲弾を斬り払える人間が居たらシャルルのセリフではありませんが『なにそれこわい』としか言いようない気が……

でも千冬さんがやると『ああ、流石は世界最強』で通ってしまいそ
うな気がする罫

#23：告白／疑念（前書き）

8916文字、.txtファイルなのに17KBに達してしまった回

ちよつとだけ……

#23・告白／疑念

「……………」
「……………」

それから一時間ほどの時間が沈黙と共に去った。

その間に俺はさっきの裸を思い出してしまっただけは振り払うを繰り返して、確認できたのは『彼女』がシャルルである事だけ。

ああ、もう！

黙りっぱなしだとどうにもならん

「茶、淹れてくる」

俺がそういつて立ち上がるとびくっ、と身を竦めるシャルルらしき女子。

電気ケトルで湯を沸かして急須へ注ぐ。

「……………」
「……………」

茶葉が開くまでの時間、また沈黙が続く。

俺はその沈黙を茶葉の事だけを考える事でなんとか乗り切った。

「…こんなもんか。ほれ」

「あ、ありがとう　　きゃっ」

湯呑みを渡す時に指先が触れあい、シャルルは慌てて手を引っ込める。

「あちちっ!」

思わず落としそうになった湯呑みを握り直した反動で茶が手にかかる。

「水っ、水!」

急いで水道の所まで行き、だーっと流れる水で冷やす。

火傷は平気そうに見えて深刻な事になるからすぐに手当てできて何よりだ。

「ご、ごめん!大丈夫?」

「ま、まあ、大丈夫だろう。すぐに冷やしたから火傷にはならないで済みそうだ」

「ちょ、ちょっと見せて。……ああ、赤くなってる。ゴメンね?」

軽くパニックに陥ってるらしいシャルルは俺の側に来ると強引に手を取って茶のかかった場所を痛々しげな表情で見つめる

「すぐ水を貰ってくるね!」

「ま、待て!その格好で外に出るのは不味いだろ。後で自分で取っ

てくるよ」

シャルルの格好はいつも通り、部屋着として使っているシャープなラインのスポーツジャージだ。

今までは胸を隠す為のコルセットを使っていたのだが、俺にバレてしまった為に今は付けていない。

その結果、今のシャルルは一発で女子と判る格好になってしまっているのだ。

「でも」

「それより、その………さっきから、胸があたってるんだが………」

俺だって健全な十五歳男子だ。

気になって仕方ないのをなんとか抑え込んでいる状況は色々辛い。

「……！」

言われて気付いたのか、シャルルは俺から飛び退くように離れると胸を隠すように自分の体を抱きながら俺を睨んできた。

女子特有の抗議の眼差し。

「……心配してるのに………一夏のえっち」

「づぐっ………」

どちらかと言えば俺が『される』側だったのに何故か悪者扱いになっている。

役得と思わないでもないが完全に冤罪だ。

しかし……シャルルの眼差しは抗議だけではなくどこか恥ずかしそう
な、それでいて嬉しそうな感じが混ざっているのは何故だろうか。
好きでも無い男に裸を見られたり触られたりするの嬉し
い女子はいないはずだ。いたらそれは間違いなく『変態』とかいて『しゅく
じょ』と読む部類だ。

「ま、ここまで冷やせば問題ないか。それじゃ改めて」

「う、うん」

今度はちゃんと湯呑みを受け取ったシャルルは茶を一口、口にす
る。俺も一口啜ると推論の一番の疑問点を聞いてみる事にした。

「なんで、男のフリをしていたんだ？」

「それは、その…実家から『そうしろ』って言われて…」

「うん？実家っていうとデュノア社の」

「そう。僕の父親がその社長。その人からの直接の命令なんだよ」
実家の話を始めた途端に曇ったシャルルの表情。

…どうも違和感が拭えない。

「命令って……親だろ？なんでそんな」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

「ッ」

シャルルの告白に、俺は絶句した。

それがどういう意味なのか判らないほど世俗に疎い訳でもないし、純情でもない。

「しかも、その事を隠そうとしてた。僕が『デュノア』を名乗るようになったのも、IS学園にくる事になってからなんだ」

それから、シャルルは笑みを浮かべた。

但し、歪んだ、歪な、悲しみと苦しみに満ちた笑みを。

「変だよな。二年前……お母さんが亡くなった時から、僕の事をテストパイロットとしてデュノア社に所属させておいて、娘だって認知したのはついこの間なんだよ？」

それから、シャルルは言いたくない事も健気に喋ってくれた。

俺は黙って聞く事に専念する。

「父に会ったのは二回だけ。それもテストパイロットになった時と、IS学園に行く事になった事を伝えられた時だけ。…会話は数回かな。」

俺の中で、ふつふつと理由の判らない怒りが込み上がってきて、それを堪えるために拳をきつく握り締めた。

「僕がテストパイロットになって少し経った頃にデュノア社は経営

難に陥ったの」

「え？だってデュノア社は量産機シェアの世界第三位なんだから？」

「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ。ISの開発には物凄くお金がかかるんだ。殆どの企業は国からの支援があつてやっと成り立つてる処ばかりだよ」

そうだったのか…

「フランスは欧州の統合防衛計画『イグニッション・プラン』^{ヨーロッパ}から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの。国防の事もあるけど、資本金で負けてる国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨な事になるんだよ」

……そういえば、第三世代型の開発に関して、セシリアがいくつか言っていた事を思い出す。

『現在、欧州連合では第三次イグニッション・プランの次期主力機の選定中なのですわ。今の所トリアルに参加しているのは我がイギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、それにイタリアのテンペストEE型。今の所、実用化ではイギリスがリードしていますわが、まだ難しい状況なのです。その為の実稼働データを取るために、わたくしがIS学園に送られましたの。第三世代型の基礎理論の発展のさせ方は国によって様々ですから、どこの国もデータ取りに必死ですわ』

だからIS学園には第三世代型さいしんえいきが集まっているのだろう。

ドイツからの転入生、ラウラの転入の事情もそのあたりが絡んでき

ている筈だ。

「話を戻すね。それでデュノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。データも時間も圧倒的に不足していて…なんとか形になりかけたと思ったら問題が発生して。結局、政府からの通達で予算は大幅カット。次のトライアルで選ばなければ援助は全面カットで、ISの開発許可も剥奪するって話の流れになったんだ。」

「…なんとなくの話は判った。が、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに」

シャルルは俺から視線を逸らし、どこか苛立ちを含んだ声で続けた。

「同じ男子なら、日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう…ってね」

「それは、つまり」

「そうだよ。白式のデータを盗んで来いって言われてるんだよ。僕は、あの人にね」

話を聞く限りでは、二、三腑に落ちない点があるが大方ではその父親がシャルルを利用しているとしたか思えない。

だからだろうか。シャルルは父親の事を話す時はやけに他人行儀になっっているのは。

「…とまあ、そんなところかな。でも、一夏にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ…つぶれるか他企業の傘下に入るか、どの道今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいい事かな」

「……………」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘をついていてゴメン」

深々と頭を下げるシャルルを、俺は気が付いたら肩を掴んで顔を上げさせていた。

「いいのか、それで」

「……え？」

「それでいいのか？いいはずないだろ。親が何だって言うんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろ、そんなのは！」

「い、一夏……？」

シャルルが戸惑いと怯えの表情をしている。

けれど、ああ、言葉が、感情が止まらない。…止められない。

「親がいなけりゃ子供は生まれえない。そりゃそうだろうよ。」

『I was born. (私は生まれた)』

そこに、生み出された側の意思はない。

「でも、だからって親が子供に何してもいいだなんて、そんなバカな事があるか！生き方を選ぶ権利はだれにだってある筈だ。それを、親なんかには邪魔される言われなんてない筈だ！」

言っていて気付いた。

これは、シャルルの事を言ってるんじゃない。自分の事を言ってるんだ。

そして、その事で苦労した千冬姉やアキ兄の事を思わずには居られない。

「ど、どうしたの？一夏、変だよ」

「あ、ああ…悪い。つい熱くなっちゃまって」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺は　俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ……………」

恐らくは資料で知っていたであろう『両親不在』の意味を理解したらしく、シャルルは申し訳なさそうに顔を伏せる。

「その……コメン」

「気にしなくていいさ。俺の血のつながった家族は千冬姉だけだ。ど、アキ兄もいたし、別に今更両親に会いたいなんて思いもしない。

「
そもそも、俺に両親の記憶はない。」

俺にとって、父親代わりは篠ノ之の小父さんとアキ兄、母親代わりは篠ノ之の小母さんだ。

特にアキ兄は俺が物心着いた頃まだ高校生だったというのに俺たちの面倒を見てくれた。

「それより、シャルルはこれからどうするんだよ」

「どうって……時間の問題じゃないのかな。フランス政府もこの事の真相を知ったら黙っていないだろうし……僕は代表候補生を降ろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「それでいいのか？」

「良いも悪いも無いよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ。」

そういつてシャルルが見せた微笑みは、絶望さえ通り越した諦観に染まった、痛々しい微笑みだった。

俺は苛立っていた。

シャルルに、あんな顔をさせるあらゆる存在に……

何よりも、友人一人救えない自分の無力さに、腹が立っていた。

「……だったら、ここに居る」

「え？」

「特記事項第二十一。本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

これは使える。

そう思うと途端に頭が冷えてきて、暗記していたテキストの文章が気持ち悪いくらいにすらすらと出てきた。

「つまり、この学園に居れば、少なくとも三年間は大丈夫だ。」

…所詮、コレは問題の先送りでしかないのは判っている。

「それだけ時間があればなんとかなる方法だって見つけれらるぞ。別に急ぐ必要はないだろ？」

今の俺じゃ、なにも出来ない。

出来たとしても白式のデータを渡す位が精々だ。

けど、誰かの力を借りれば…あるいは

「一夏」

「ん、なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」

「……勤勉なんだよ。俺は」

「そうだね。ふふっ」

ようやく、シャルルが笑った。

その表情は屈託のない、年相応 十五歳の少女そのものだった。

俺は心臓の高鳴りを自覚する。

改めてみると、シャルルは顔立ちもいいし、優しげな雰囲気がある。

そのせいか、俺の目にはとても可愛く映ってしまった、今更ながらにその無防備さに心臓の鼓動が早くなってしまった。

「と、とにかく、決めるのはシャルルなんだ。考えてみてくれ」

「うん。そうするよ」

照れくさくなって早々に切り上げてしまったが、もうひと押しくらいしておいた方がいいのだろうか。

そう思う心に押されてシャルルに視線を向けると、ちょうど目があつた。合ってしまった。

「ん？どうしたの？」

「あ、いや……………」

俺の内心を知ってか知らずか、シャルルは身を乗り出して顔を覗き込んでくる。

無防備な襟元から僅かに見えた胸の谷間に心臓は益々早鐘を打つようになる。

「と、とりあえず、なんだ。シャルル、一回離れてくれ」

「？」

「いや、その……胸元か……」

指摘されて、シャルルはかあつと頬を赤らめた。

「い、一夏、胸ばかり気にしてるけど……みたいの？」

「な、あつ!?!」

予想外の展開に俺は妙な声を上げた。

「……………」
「……………」

そして、お互いに黙り込んでしまった。

さっきとは違った気まずさが漂う。

「そ、そついえばさ、一夏。」

「な、なんだ？」

耐えきれなくなったらしいシャルルがなにやら話を切り出してきた。

「一夏が『アキ兄』って言ってる人のフルネームはなんていうの？」

「『マキムラ アキト』だけど……それがどうかしたのか？」

シャルルはアキ兄のこと、知ってるのか？

「ねえ、どんな人だったか教えて」

「んーとな……一言で言えば『父親』だな。親に捨てられた俺たち姉弟の面倒を見てくれたし、篝や束さんの事も可愛がってたし。」

「そっか」

にへら、と笑うシャルル。

「なあ、どうしてアキ兄の事を？」

「昔ね、僕がまだ小さくて、お母さんと暮らしてた頃に日本から来た学生のホームステイを引き受けた事があつたんだ。」

ふむふむ。

「でね、その時に来てくれた人が『手の焼ける、それでもって優しい弟が居る』って。その人の言ってた人物像がなんだか一夏の事みたいになつて、今思い出した。」

へー。

「で、その人の名前も『マキムラさん』だったから、もしかしてっ
て思っ。ねえ、その人は今どうしてるの?」

屈託のない表情での問。

今度は俺が表情を曇らせる番だった。

「多分、死んでる。俺が小学三年の時に、フランスに行
つて、それつきり帰ってこなかったんだ」

確か、前にアキ兄が行ったホームステイ先に後輩の受け入れをお願
いするのに同行したんだっけ。

「あ……………ゴメン…そういえばこの間の昼休みに言っ。たよね……
…行方不明だっ。て…」

シャルルの表情に後悔が混ざった。
そんな気がした。

「いや、いいんだよ。 なあ、そっちにいった時のアキ兄の
こと教えてくれないか?」

「え? 大分昔だからあやふやになってる部分もあるけど…いいの?」

「ああ。覚えてる範囲でいい」

「そっ? それじゃあ……………」
「コンコンコン」

シャルルが話し始めようとした時、部屋の扉がノックされた。

「っ！シャルル布団の中に入ってる」

「う、うん」

バタバタと慌てて布団にもぐりこむシャルル。

ドアの側に背中を向けて居ることを確認してから俺はドアを開けた。

そこにいたのは、セシリアだった。

「よ、よお、セシリア。なんだ、どうした？」

「ごきげんよう、一夏さん。 デュノアさんは？」

「ああ、シャルルなら今日は疲れてるからもう寝るって」

「そうですか。 好都合ですわ……ところでご夕食はもうとられましたか？」

途中、なにやら呟いているようだがうまく聞こえなかった。

「いや、まだ。これから行くのかなって思ってたところだ」

「あ、あら、そうですか？では、わたくしもちょうどまだですし」「一緒にしましょう」

セシリアは急に上機嫌になった様子でシャルルの方に割り振られる注意は無きに等しくなった。

「さあ、一夏さん。参りましょう」

「ちょっと待って。鍵閉めない」と

セシリアに腕をとられそうになり俺は慌てて回避する
『シャルルが中で寝ている』という設定なのだ。施錠しておかない
とな

ガチャリ、と錠の落ちる音を確認してセシリアの方に向き直った処
で、するつと腕をとられた。

セシリアに抱かれるようなかたちになった俺の腕。
そこに伝わってくる感触の事を俺は頭の中で素数を数えて考えない
ようにした。

部屋の前から移動し、階段を降りたところで叫び声と出会った。

「なっ、なっ、何をしている!？」

廊下の端からずんずんと早足でやってくるのは篝だ。
そして篝が居た辺りにはルームメイトである簪さんが取り残されて
呆気にとられていた。

「あら、篝さん。これからわたくしたち一緒に夕食ですよ」
妙に『一緒に』を強調するセシリア。

…女子間でなにか意味のある暗号かなにか何だろうか。

「それと腕を組むのとどう関係がある!？」

「あら、殿方がレディをエスコートするのは当然ですわ」

俺、てつきり強制連行されてるのかと思ってた。

…ああ、篝がこっち睨んでるよ。

「一夏っ！お前もお前だ。私が食堂で待っていたというのに、どういふ事だ！？」

「どうもごうも……待つ前に連絡の一つでも寄越してくれないとどうしようもないぞ？」

そうでもなきや、勝手に動くだろうで自分のペースで動くのが普通だ。

「ともかく、わたくしたちはこれから夕食ですので失礼しますわね」

「ま、待て！それなら私も同席しよう。ちょうどこれから夕食だったのではな」

ん？そうなのか？

「あらあら、篝さん。一日四食は体重を加速させますわよ」

「心配は無用だ。あまりにも一夏が遅いので迎えに行くところだったのだ。それにカロリーも運動で消費しているからな。」

ああ、あの殆ど顔を出してなかった剣道部か？

先輩、泣いてたぞ。『全国レベルの新入生なのにまったく練習に來ない』って。
泣いてるついでに泣きつかれて、週に二度、俺が剣道部に顔を出すようにすることで箒を部活動に誘導することになってしまった。

まあ、生身での剣さばきの訓練になるし基礎体力も維持できるからやってるけど。

「それに、実家からこれを送ってもらった。今日もあとで居合の修練をするから何も問題は無い」

そう言つて箒が見せてきたのは 日本刀だった。

「名は緋宵。かの名匠、明動陽晩年の作だ」

その刀は鞘に入っているが確かに見覚えがある。

世にも珍しい『女性用』の刀で『相手よりも早く抜き放ち、その最速の一太刀を以つて必殺と為す』をコンセプトにした、居合に向いた刀だ。

刀身が細長く、鞘の滑りと体の円運動、それに踏み込みが組み合わさる事で通常の刀よりも早く抜刀し一撃を加える事が出来る
と、いうものだった筈だ。

それはそうと、立派な銃刀法違反なのだが………ここはIS学園で相手は箒だ。どうにでもなってしまう気がする。

「で、では行くとするか」

何故か俺の隣にやつてくる箒。

つて、おわあっ!?!?

なんでお前まで腕を絡めて来るんだ?

「……………箒さん、何をしてらっしゃるのかしら?。」

「『殿方がレディをエスコートするのは当然』とは、誰の言葉だったかな?。」

「ぐっ……………」

エスコートつて……………寮の食堂に行くだけだぞ?

左腕をセシリア、右腕を箒にとられている俺は相当に通行の邪魔になっっているだろう。

ああ、ほら注目を集めてるよ

「ああつ、いいなあ……………」

「両手に花つてやつね」

「幼馴染つてズルイ」

「専用機持ちつてズルイ」

……………あれ?

箒とセシリアに向かっている羨望の視線ばかり?

「あのだな」

「なんだ?。」

「なんですか？」

「……………やっぱりいい。思い違いだった」

すっごく歩きにくいのだが、それを素直に言ったらかなり危険な事に気がついて辞める。

腕をとられているという事は俺は一人にわき腹を見せているという事だ。

そこを痛打されたら流石に俺も悶絶してその場で崩れ落ちる自信がある。

「そうか。今日の焼魚定食は鯖だ。美味だぞ」

右側でむにゅ。

「洋定食は半熟玉子のカルボナーラと聞いて居ますわ。一夏さんもどうかしら」

左側でもむにゅ。

「あ、ああ。うん、そうだな。どっちもいいな」

表向きそうは応えるが　本音はどっちでもいいし、それどころじゃない。

三人横一列歩行は通行の邪魔、といことで二人とも俺に身を寄せて歩いている。

その結果、その一歩一歩ごとに、その　女子特有の柔らかい

膨らみがあたって、考えまいとして素数を数え続けても意識してしまおう。

「どうした、一夏」

「どうしましたの、一夏さん」

むにゅ、むにゅん

二人揃って俺の顔を覗き込んできて、また密着度が上がった。

その体の間で服越しの胸が形をゆがめるのを、腕が生々しい感触を受け取っていた。

「ななな、なんでもない。なんでもないぞ。何でもないんだ。何でも無いに違いない。なんでもないにきまつてる」

活用して急速に剥離してゆく理性をなんとか繋ぎとめる。
いや、なんか間違ってるな。一応五個あるけど。

その日の夕飯は、味どころかメニューさえうる覚えだった。

#23：告白／疑念（後書き）

ちよろつとだけ、原作と違います。
主にシャルルの扱いが。

#24：シャルルの初体験（前書き）

切りどころに迷った結果、#23から分離しただけの部分。
ほぼ原作通りな上にかなり短い……

#24：シャルルの初体験

「side：一夏」

「た、ただいま……………」

「あ、一夏おかえり。 って、どうしたの？なんだかふらふらしてるけど」

「ああ、いや、気にしないでくれ。」

理性と本能の熾烈な戦いに疲れただけだから。

「大丈夫だ。それよりお腹すいたろ。焼き魚定食貰って来たんだが食べられるか？」

「うん。ありがとう。頂くよ」

につこりと笑ってトレイを受け取るシャルルだったが、テーブルに置いたところで表情が固まった。

「？ どうした？」

「え、えーっと……………」

「魚、苦手なのか？」

「そうじゃないけど……………」

シャルルの視線を追ってみるとその先にあったのは…箸。

「ああ、そうか。箸じゃなくてスプーンとフォーク貰ってくるべきだったな」

確かに、シャルルが箸を使っているところは見た事がない。

そもそもで箸を使うメニューを注文してすら居なかったと思う。

「気が効かなくて悪いな。すぐ貰ってくる」

「い、いいよ！これで頑張ってみるから。」

ぎこちない笑みを決意の表情に変えたシャルルは焼魚定食に箸を手に立ち向かい……

ぽろ

「あっ」

ぽろ、ぽろっ

「あっ、あっ」

おかずを落しては情けない声をあげるシャルル。

魚の身をほぐすところまでは問題ないのだが、『つまみ上げる』から先の動作に問題があるらしい。

落下先は皿の上なのでもったいなくは無いのだが、このままでは食事が進まない。

「スプーンとフォーク貰ってこようか？」

「ええっ？いいよそんなの。なんとか頑張るから」

「そうは言ってもなあ。難義だろ。遠慮するなよ」

無遠慮、無茶振り、傍若無人は子供の特権だ。

「で、でも……………」

「シャルルはあれだな。もうちょっと他人に甘える事を覚えた方がいいな。遠慮ばかりは損するぞ」

「うう……………」

「俺なんかじゃ頼りないかもしれないけどさ、寄りかかる程度なら支えられると思うぞ」

「……………一夏、」

しばらく迷っていたがシャルルは観念したかのように口を開いた

「じゃ、じゃあ、あの……………」

「おう、なんだ？」

恐らく、『初めて』に近いんだろう。

シャルルは思い切り言いにくそうにどもりながら

「え、えつと、ね。その………一夏が食べさせて」

予想外の事を『お願い』してきた。

流石にこの展開は予想できなかった。

「あ、甘えてもいいって言ったから………」

あごを引いた上目使いで言葉を重ねてくるシャルル。

どこかずれてる気がするが、『一に遠慮、二に辞退』のシャルルのようやく出てきた『お願い』だ。

「そ、そうだな。よし、じゃあそうしよう」

…ただ、あの上目遣いは反則だ。

捨てられた小型犬が雨の降りしきる中、段ボール箱から送って来るかのような眼差しをしているのだ。

コレを断れる奴が居たら悪魔か魔王だ。

IS操縦者としてそういう二つ名がつくならまだしも、こんなことでなりたくは無い。

俺はシャルルから箸を受け取り、さっき取り落とした分と合わせて鱈の身をつまんだ。

「じゃあ、あーん」

「あ、あーん」

まさかシャルルとまで『はい、あーん』をやる事になるとは思わなかった。

もぐもぐ、と咀嚼するシャルルの頬は心なしか赤い。

「うまいか？」

「う、うん。おいしいね」

「そうか」

「じゃ、じゃあ次は『ご飯がいいな……』」

「おう」

女子の一口分ほどの量を取り、手を受け皿にシャルの口へと『ご飯を運ぶ』

「あーん」

「ん……」

もう気分は手のかかる娘を持った父親だ。

そういえば風邪をひいて起きるのも難しいくらいになった千冬姉がアキ兄に食べさせてもらってたっけ。

あの時のアキ兄の気持ちも、こんなのだったのかな。

蛇足ながらその時、束さんは千冬姉の廻りで騒いでいた為にアキ兄の拳骨制裁を貰って部屋の片隅に沈んでいた。

「つ、次は和え物がいいな」

「わかった」

こうして、最後まで俺が食べさせる事になった。

だんだんとお互いの口数も減っていった…というか、俺がシャルルの視線で次に何を食べたいのかを予測していたから言葉が要らなくなったと言っべきか……

食事が終わると俺は食器を返しに行き、帰って来たときにはシャルルはもうぐっすりと眠っていた。

その寝顔は無垢な幼子のようでつい微笑みがこぼれる。

「おやすみ、シャルル」

軽く頭を撫でてから、俺も自分の布団にもぐりこむ。

……今日はいろんな事が起こり過ぎて、肉体的にも精神的にも疲れ果てていたようで、俺の意識は布団に入るとすぐに眠りに落ちて行った。

* * *

某所

「お嬢から連絡があった。『箱を開ける』だ」

「よし、オペレーション、パンドラ発動」

「パンドラの箱　ギガ盛り、希望抜き一丁！但し返却は断る」

#24：シャルルの初体験（後書き）

実は最後の数行が本命だったり……

#25：レッドスイッチ（前書き）

原作第二巻の第三話の後半部分ですよ

#25：レッドスイッチ

「side：」

『学年別トーナメントに優勝すれば織斑一夏と交際できる』

そんな噂で学校中が軽く騒ぎになったり、箒がそのことについて頭を抱えたり。

千冬に食ってかかったラウラとのやりとりを一夏が偶然聞いてしまった日。

つまるどころの翌日。

「「あ」」

二人揃って間の抜けた声を上げてしまった。

時は放課後、場所は第三アリーナ、人物は鈴とセシリアだった。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

二人の間に見えない火花が散っていた。

どつやらどちらも狙うは優勝らしい。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはつきりさせとくつてももの悪くないわね」

「珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではつきりとさせましようではありませんか」

二人ともメインウェポンを呼び出すとそれを構えて対峙する。

「では」

「いざ」

と、いきなり声を遮って超音速の砲弾が飛来する。

「!?!?」

緊急回避を行い、成功したところで、鈴とセシリアは揃って砲弾の発射地点の方向を向く。

そこにはあの漆黒の機体がたたずんでいた。

機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』。

登録操縦者名

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

セシリアの表情が苦くこわばる。

その表情には欧州連合のトライアル相手以上のものが含まれていた。

「どづいつつもり?いきなりぶっ放すだなんて、いい度胸してるじ

「やない」

連結させた《双天牙月》を肩に預けながら鈴は衝撃砲を準戦闘状態にシフトさせる。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データでみた時の方がまだ強そうではあったな」

いきなりの挑発的な物言いに鈴は口元をひきつらせ、セシリアは苦い表情を浮かべる。

「何？ やるの？ 態々ドイツくんんだりからやってきてボコられたいだなんて、大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

イグニッション・プランにイギリスが提出している『ティアーズ型』のデータはセシリアのものではない。

セシリアにブルー・ティアーズが渡される前にBT兵器を含むティアーズ型のテストをしていた人物の、最大稼働時のデータがカタログスペックに乗せられている。

「セシリアはまだそのデータを超えていない。つまりカタログスペックに負けているのだ。」

「セシリア。あんた、黙って無いで言い返しなさいよ！」

侮辱されて黙ったセシリアを訝しみ、鈴が発破をかける。

「が、セシリアには言い返す要素がまだ見つかっていない。」

「……………」

故の沈黙。

「はっ……。二人かかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

ぶちっ

「ああ、ああ、わかった。判ったわよ。スクラップが御望みな訳ね。

セシリア、どっちが先にやるかじゃんけんしよ」

「まずは落ち着くべきですわ。鈴さん。怒りは実力を損ねますわよ」

一夏と戦った時は驕り、山田先生と戦った時は見栄で身を滅ぼすと学んだ。

空との時は……。プライドというものは儂く脆いものであるという事を学んだし、徹底的に叩きつぶされる経験もした。

挑発も策の一つであり、冷静さを失うと言う事は判断力を失うと言う事も知っている。

故にセシリアは内心では激怒しながらもなんとか感情を制御していた。

傍らに激怒している鈴が居るのも感情が抑制される理由になっていた。

「はん、臆病者め。面倒だ、二人がかかりで来い。一足すーが二になるかも判らん、下らん種馬をとり合うようなメスに、この私が負けるものか」

「今、なんて言った？ あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「この場にはいない人間の侮辱をするなど…国家の品度を疑われますわよ」

得物をきつく握りしめる鈴とそれとなく戦闘用意だけはしておくセシリア。

冷やかな視線でそれを流したラウラは僅かに両手を広げて自分側に向けて振る。

「とつとと来い」

「上等ッ！」

「ああもう、援護しますわ」

* * *

「side：一夏」

俺とシャルルと箒と簪さんの四人は訓練の為に第三アリーナへと向かっていった。

最初は俺とシャルルでだったんだけど、途中から箒と簪さんが合流した形だ。

使用機は俺とシャルルがそれぞれ専用機。

箒と簪さんは訓練機の打鉄だ。

突然の爆発。

驚いてその方向に視線を向けると、ボロボロになった鈴とセシリアが吹き飛ばされたかのように飛び出してきて床に叩きつけられた。

あの一撃は、自爆同然のタイミングでセシリアがミサイルをつかったからなのだろう。

「鈴！セシリア！」

ISのシールドと同じ、特殊なエネルギーでできたシールドによって観客席に影響は無いが、同時にこちらの声も届かない。

苦しそうな二人。

だが、煙が晴れてきて、殆どダメージを受けている様子のないラウラのシュヴァルツェア・レーゲンを見て絶句していた。

ほとんど無表情なラウラ、悲壮な表情のセシリアと鈴。

そこから先は、一方的な暴虐だった。

鈴とセシリアが蹴られ、殴られ、至近距離の砲撃を受け、残る装甲部分も破壊されてゆく。

あっという間にシールドエネルギーは削られて行き、レットセンサー機体維持警告域を超え操縦者生命危険域へと到達する。

これ以上のダメージを受け、ISが強制解除されるような事があればそれは冗談でなく生命の危険だ。

それでも、ラウラは攻撃の手を緩めない。

確かに、止めを刺すまで気を抜いてはいけない。

だが、競技においてそれは心構えの話だ。

決して、本当に止めをさす必要はない、いやさしてはいけない。

「くそっ」

ラウラが、愉悦に歪んだ笑みを浮かべた瞬間、俺の中で何かが振り切れた。

「一夏？」

シャルルの疑念の声を振り切って、俺は白式を展開、零落白夜を発動させ雪片式型を展開する。

ISのシールドと同じエネルギーでできているピットのシールドを、この雪片は切り裂ける。

「おおおおッー」

シールドを切り裂き、その隙間を突破する。

そのまま最大出力で接近。

ラウラがこっちに気付いたと同時に俺は雪片を力の限りを込めて投げつけた。

ISのパワーアシスト付きで投擲された雪片は真っすぐラウラに向かって飛び、見えない力に捕まる。

だが、そのおかげで鈴とセシリアを拘束していた手は二人から離れる事になった。

「よしっ！」

ISが解除され、ぐったりとした様子の二人を拾い上げて、離脱しようとした瞬間、俺は金縛りに遭った。

「ふん。飛んで火に入る夏の虫、とはまさに今の貴様の為にあるよ
うなことわざだな」

ちっ…油断した。

白式唯一の武器である雪片は今、シュヴァルツェア・レーゲンの足元に突き刺さっていて、俺の手元にはない。

今、俺はラウラに背中を向ける状態になっているから顔は全く見えないが、恐らく勝利を確信しているのだろう。
きつと歪んだ笑みを浮かべている筈だ。

超至近距離で、シュヴァルツェア・レーゲンの左肩に装備されてい

るカノン砲が俺に向けられる。

砲口から俺の背中まで僅か数メートル。

「さあ、教官の栄光を汚した罪、その命で購え」

大口径カノン砲の砲口が俺の背中に突きつけられる

この至近距離で、あの高火力砲。

直撃を貰えばタダじゃ済まないが今の俺には回避手段すら存在しない。

どうにかしないと……

「一夏ッ！」

スナイパーライフル
狙撃銃の狙撃がラウラに襲いかかる。

「くっ、ザコがあッ！」

その狙撃でラウラの注意がシャルルに向かう。
プライベートチャンネル
個人間秘匿通信でシャルルが声をかけてくれたおかげで、その一瞬の際に合わせて俺は一気に加速し二人を安全な場所へと移動させる。

その間、シャルルが両手に構えたアサルトライフルで弾幕を張ってラウラを足止めする。

「う……………一夏？」

「無様な姿を、お見せしましたわね……………」

「喋るな。シャルル、二人とも意識はある。俺もすぐに向かうから持たせてくれ」

ピットの入り口の所に、箒と簪さんが待っていた。

「二人を頼む」

「ああ、すぐに保健室に、だな」

「今、先生を呼んだから…すぐ来ると思う」

セシリアと鈴を二人に任せて俺は足止めを続けるシャルルの援護に向かう。

と言っても、唯一の武装である雪片式型はアリーナに突き刺さったままで、まずはその回収からだ。

速射性に優れるアサルトライフルを弾切れになるそばから武装の高速交換で入れ替えて弾幕を絶やさないシャルル。

とはいえ、相手は第三世代型。

世代差が全てとは言わないが、大きなアドバンテージには成りえる。ラウラが姿勢を低くかがめ、地表付近にいたシャルルに向かって加速しようとする。

イグニッション・ブースト
恐らく瞬時加速を使う気だろう。

せめてシャルルの盾に。

そう思って俺はシャルルとラウラの間に割って入り、ラウラが飛びだそうとして……何かに縛り付けられたかのようにピクリとも動かなくなった。

「なッ!? なんだコレは!」

慌てるラウラ。

俺とシャルルは何がなんだか判らなくてただ呆然としてしまった。

「はい、そこまで」

ごりっ、とラウラの頭に銃口が押しつけられる。

銃身というより砲身と言った方がよさそうな長さのソレの引き金を握るのは、三連回転式スコープセンサーのついたバイザーが特徴的な、ライトグレーのISだった。

顔こそバイザーに隠れて見えないが打鉄やラファールの面影の中にシュヴァルツエア・レーゲンらしき要素も持ったその機体に、俺はどこか懐かしさを感じていた。

「そっちの君たちも、動かないでよ」

じゃきっ、と俺たちの方にガトリングガンが向けられて俺は思わず息を飲む。

「貴様、何者だ。何故そのISはA I Cアクトイザサキヤルセラを装備している!」

ラウラが吼える。

「……………」

「答える!」

沈黙を以って返されて、銃口が頭に押しつけられているにも関わらず激昂するラウラ。

それに対する答えは……………

「正座」

「……………は?」

「正座ッ!」

「な、わぁッ!?!」

見えない手に膝裏を押されたかのように姿勢を崩し、その場に正座で座らされるシュヴァルツェア・レーゲン。

正座するISだんて:…なんだかすごくシユールだ。

相変わらず頭に大型ランチャーの砲口が突き付けられたままだが。

「自分の立場を理解してないみたいだね」

「な、何をッ!?!」

言い返そうとするラウラだが、砲口に黙らせられる。

「まあ、一応ヒントはあげるよ。『AICのテストは外注だった』」

「?」

そんな混沌とした空間を壊す、キーパーソンが現れた。

「鎮庄、御苦労。」

「いえ、それが依頼じゆんですから」

苦笑を浮かべていそうな声で千冬姉に返すそのISの操縦者。

「さて、随分とハデにやらかしたようだな。」

俺たちに向き直る千冬姉。

「模擬戦をやるのは構わん。自主練習も大いに結構。だが、アリーナのシールドを破壊するような事態や病院送りが出るような事態は教師として黙認しかねる。…この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか。」

「教官がそうおっしゃるなら……」

「織斑とデュノアもそれでいいな」

「あ、はい」

「僕も構いません」

ラウラは素直に従い、俺もシャルルも異議は無い。

その事を確認した千冬姉は改めてアリーナ内の全ての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散ッ！」

パン、と千冬姉が強く叩く。

その音はまるで銃声のように鋭く響いた。

見えない何かによる拘束が解かれたラウラは飛び退くようにその場を立ち去って行き、

「やれやれ。困った奴だ。」

と千冬姉は灰色のISを連れてどこかへ去ろうとする。

「あ、織斑先生」

「なんだ、織斑」

「そちらの方は……？」

なんだか俺はアレを知っている気がする。

そう、声も聞いた事があるし、ISも同型機を知っているような気がする。

「……………まあ、問題はないだろうし、構わないだろう。」

千冬姉が呟くところり、と頷くライトグレーのISの操縦者。

顔の上半分を殆ど追おうバイザーを上によけると……

「空……？」

「久しぶりだね、一夏」

おおよそ数週間前ぶりとなる千凧空がそこにいた。

#25：レッドスイッチ（後書き）

派手に負けたセシリアは精神的な面でちよろつと成長しています。その分、激情に任せて暴れまわれなくなりましたが。

そして、ついに！

空が表舞台に戻って来ました！

戻し所は二、三考えていたのですが、ここを逃すと色々面倒な上に簪が出せないのここで帰還させることにしました。

#26: Come back (前書き)

お待たせしました。

26 : C o m e b a c k

「side:簪」

「全身に打撲。まあ、大した事がなくて良かったな」

「うん。ISはだいぶ損傷が酷いけど…これだったら予備パーツで組み直した方が早いかも…」

私と箒でセシリアさんと鈴さんに声かけをしていた。

と言っても二人は完全に落ち込んでいて、中々効果が見えてこない。

やっぱり、織斑くんが居ないと駄目か……………

と、思ったとほぼ同時。

コンコン、とノックの後に

「鈴、セシリア、大丈夫か？」

「とりあえず、二人が無事で良かったよ」

織斑くんとシャルルくんが保健室にやって来た。

二人にもコレと言って怪我はないみたい。

「それにしても、本当に危ないところだったな」

「別に助けてくれなくても良かったのに」

鈴さんが痛い、とそっぽを向きセシリアさんは俯く。

「お前なあ…………でもまあ、怪我が大した事なくて良かったぜ」

「こんなの怪我の内に入らな　　いたたたた！」

無理に動こうとした鈴さんが激痛に襲われた。

「はいはい。今は体を休めないかね」

私が触らないようにしながら寝るように促す。

まあ、本当に寝なくてもいいけど横になって体を休めておかないと、すぐ治るものも治らないし。

「で、セシリアはまだ落ち込んでるのか？」

「落ち込んでなどいませんわ。先ほどの一戦を顧みていたのですわ。どうすれば、勝てるのか」

「で、結果は？」

「今のわたくしでは、勝てませんわ」

セシリアさんはため息とともにやけにあっさりと、敗北を認めた

「ですが、必ず食らい付いて、撃墜おとして見せますわ」

ぐっ、と握りこぶしを振り上げるセシリアさん。

ああッ、そんなことしたら…

「ッうう！」

痛みに襲われて固まるセシリアさん。

「だ、大丈夫か？」

「こ、この程度の痛みにまけてられませんわ」

「そ、そうか。無理するなよ」

「……………なんだ、この音は。」

筈が何かに気付いて、私や織斑くん、シャルルくんも耳を澄ませる。

……………確かに『ドドドド……………』という感じの音がしてる。

「……………地鳴り？」

その音はだんだんと大きくなってくる。

「何か近づいて来てるのかな」

バッファローの群れ？

それとも一四個の眼を持った巨大な団子虫の親戚みだいのも居るのかな？

その音は廊下の方から聞こえてきていて……

『ぎゃあッ!?!』

どだあッ!

物凄い音と悲鳴を境にまったく聞こえなくなった。

「……………何だったのだ?」

「……………さあ」

箒と織斑くんのやり取りがこの場に居た私たち全員の心を代弁していた。

コンコン、とノックされて不可解な状況に困惑していた私たちが現実には引き摺り戻された。

ガラッ

ドアが開いてやって来た人物は私の予想外で……

「……………ッ!」

思わず、駆け寄って思いつきり抱きついてしまった。

「空くんっ！」

他の皆が唾然とする中で私は空くんをぎゅっ、と抱きしめる。

クラス対抗戦の時に大怪我して、入院してるって聞いていたからこんなに早くに再会出来るだなんて思っていなかったから。

「久しぶりだな、空」

「お久しぶりですわ、空さん。」

「久しぶりじゃない。」

皆も再会に笑顔が戻ってくる。

そんな中で…

「あれ？なんで皆、千凧先生の事を名前で呼んで、そんなに親しげにしてるの？」

シャルルくん、ただ一人が『訳が判らない』と言わんばかりに困惑していた。

「ああ、空はクラスメイトで五月に行われたクラス対抗戦の時に大怪我を　　って、先生！？」

篤が説明しようとして、素っ頓狂な声を上げた。

私も抱いてる空くんから少し離れてみる。

空くんの格好は、織斑くんと同じIS学園の男子用制服　じゃ
なくてダークブルーのスーツだった。

ネクタイピンがIS学園の校章と言つところが芸が細かい。

……………あれ？

「入院中に暇持てあまして技研のスタッフと一緒に辞書作つたら、
なんか気に入られちゃつてさ。補助教材として採用されたついでに
僕自身も講師扱いで教職員にされちゃつたんだよ。ちなみに正式の
着任は明日から」

ハハハと笑う空くん。

「辞書？」

「そ。『今更聞けないIS用語辞典』つて奴」

「成る程。つてことはアレは空が送ってくれたのか？」

「うん？ああ、そう言えば一夏には一冊送ったっけ。朴念神の項目
を追加して」

「やっぱり、空の仕業かつ！」

織斑くんは空くんの本を持っている

簪 選択肢

『そう、良かったね』

『頼む、譲ってくれ!』

『メ儿』

『く木又しても奪い取る』

と、私がちよつと危ない事を考えていたら

「近いうちに配られると思うよ。とりあえず一年生向けで」

こうして、織斑くんは本人の預かり知らぬ場所で命を狙われ、そして救われた。

…殺^やろうとした私の言えるセリフじゃないけど。

「ああ、忘れるところだった」

と、空くんがなにやら一枚のプリントを差し出してきた。

「? ……なに、コレ」

「学年別トーナメントのルール変更のお知らせ。例年と違って今年は二人一組形式ツーマンセルに変わったからね」

そのプリントは学年別トーナメントの申込書だった。

うんぬんかんぬんを置いておいて、二人組で申請をしなかった者はランダムで組まされるらしい。

「一夏さん!」

「一夏さん!」

「空くん！」

私は空くんに、箒とセシリアさんと鈴さんは織斑くんに詰め寄って行く

「ああ、オルコットさんと鳳さんはISの損傷度ダメージレベルがCを超えていたから参加エントリーその物が不許可。あと、僕も教職員だから出れないよ」

ちえ

「うぐっ………仕方ないわね」

「まあ、致し方ありませんわね」

あの二人も大人しく引き下がる。

「では一夏、私と組もう」

ずい、と前が出る箒

「あー。悪い、箒。俺はシャルルと組むつもりなんだ」

「何故だ！ そんなに私とが嫌なのか？」

「い、いや、そう言う訳じゃなくて………」

そのままの勢いで『シャルルくと組む』と宣言した織斑くんに詰め寄って行く。

「えーと、ほら。俺と箒は戦闘スタイルが似てるだろ？」

「それがどうした」

「コンビとしてはバランスが悪いと思うんだよ。箒、銃は使えないだろ？」

「うぐっ……」

うん、そうだね。

箒は私と練習してる間、ずっと刀ブレイドだもんね。

「だから俺はシャルルと組む。判ってくれ、箒」

「…仕方ないな。では、箒。」

「うん。いいよ」

打鉄式式はまだ第三世代型武装が完成してないけど、高機動ハイマニューバミサイルと拡散弾頭スプリットミサイル、あとは小型弾散布式クラスターミサイルの面制圧武装で代用して『第二世代型IS』として完成させた。

今後は第三世代型武装の完成を目指すんだけど、その前に現段階での機体バランスの確認とかの戦闘も必要だし、何よりも私自身の経験になる。

「それじゃあ、申込書はここに置いておくからあとで職員室に提出に来るように。」

そう言って、二枚の申込書を置いてから保健室を出てゆく空くん。

「ああ、空」

そこを織斑くんが呼び止めた。

「明日からは『千凧先生』と呼ぶように。で、何？」

「ちょっと相談したい事があるんだが……」

真剣な顔になる織斑くん。

その表情に筈とセシリアさんと鈴さんの顔がちょっと赤くなる。

「判った。二十時以降は一年寮の副寮監室に居るから、その時に」

「ああ、頼む」

………何の相談なんだろ。

不安そうな顔してたからデユノアくん絡みなのかな。

まあ、私も今度打鉄式式の事で相談　　って名目で遊びに行こうと。

#26・Come back (後書き)

ちょっと簪がはっちゃけ過ぎた気がしないでもない。

#27：似たもの同士(?)

「side：一夏」

「空、入るぞ」

「お、お邪魔します……」

夕食後、俺はシャルルを連れて空の部屋 副寮監室にやってきていた。

「ん、いらっしやい。」

出迎えてくれた空に案内されて俺たちは部屋の奥へと進んでゆく。

おお、副寮監室には風呂があるのか。

しかもリビングにしっかりとしたキッチンもある。

所謂『LDK』リビングキッチンと言うヤツだな。

で、そのスペースに空の私物が殆ど見当たらない処を見ると寝室も別にあるようだ。

くうつ、羨ましい つと、本題を見失うところだった。

「ああ、寮監室は生徒指導室も兼ねるからこう言う作りなんだよ。もちろん、防音だからこの部屋の外に音が漏れる事は無いよ」

どうやら、俺の考えてる事は空にも見抜かれてたらしい。

そこに座って待ってて、と促されて俺とシャルルはテーブルに備えられた椅子に座る。

「二人とも、煎茶でいい？デュノア君は紅茶の方がいいかな？」

「あ、僕もセンチャで」

「ん」

そして湯呑みを三つ持って、俺たちの前に置いた空が俺たちの向かい側に座った。

「で、相談したいことって何？」

ずばっ、と本題に遠慮なく斬り込んでくる空。

俺はシャルルに目配せし、シャルルが頷いてから話し始めた。

「僕が一夏に取次ぎをお願いしたんです。……実は」

シャルルは男として来ているが本当は女であること。

生まれが特殊な為上司である父親と仲が悪い事。

学園には俺のデータを盗んでくるように命令されたから来たと言っ事。

大体は俺が聞いた話と一緒に内容をシャルルは空に語る。

話を黙って聞く空は微動だにしない。

そして、全てを語り終え……

「で？」

心底つまらなそうに、ひどく面倒そうに空は言った。

「『で？』って……それだけかよ」

思わず俺は空に食ってかかる

「それだけだよ。そもそもで一夏。」

「なんだよ」

真っすぐに俺の目を見てくる空。
俺も負けじと見返す。

「甘えるのも、程々にして欲しいな。」

「なッ!？」

「人助けしようとして、自分の手に余るかどうかを判断できないならいっそ助けられない方がいい。共倒れになるよ」

「」

冷たい空の言葉に俺は声が出なかった。

だけどそれは 真実。

「まあ、筋金入りのお人よしな一夏にとっては『話すだけでも楽になれるだろうから』って相談を受けちゃうんだらうけど」

「あ、確かにやりそう」

はあ、と溜め息をつく空。
確かに、と納得顔のシャルル。

「うぐ……否定しきれない……」

そんな二人に対して俺は何も言い返せないでいた。
だって、事実だもん。

「あ、そういえば」

「ん？どうした、シャルル」

「千凧先生って、『世界で二人目のISを使える男性』ですよね？」

…そういえば、学園中の生徒ほぼ全員が勘違いしたまんまだっけな。

「いや、男じゃないから」

「え？」

ちよいちよい、とシャルルを手招きして奥に進む空。

べんぢぢら、『論より証拠』で行く気らしい。

「？」

ほいほいと付いて行ってしまおうシャルル。

程なくして

「え、えーッ!?」

そんな、『<驚愕する』みたいな声が防音の行きとどいた副寮監室に響き渡った。

ここで『どうしたんだ!』と、飛び込んだりしてはいけない。

……もし飛び込んだらその先に待ってるのは………恐らく『死』
だろうから。』

お、二人が戻って来た

「シャルル、どうだった?」

何の気なしに尋ねた俺。

けど…

「うん。あんまり大きくない、標準的な大きさだけど形は綺麗で…
………って!何言わせるのさ。一夏のえっち」

「冤罪ッ!?俺は納得がいったかを聞きたかった」

「成る程。僕の胸には全く興味がない…と」

「……………ッ!」

ああ言えばこう言う、売り言葉に買い言葉。

ああもう、どうすればいいんだ?

ついでに、この際だから言わせてもらおうと 『興味ない訳ないだ
ろー!』

……俺だって、色々溢れる十五歳男子なんだよ?

今、こんな環境だから半ば禁欲生活状態になってるけどさ。

「とまあ、一夏を弄ぶのはこれ位にしておいて

って、おい

「デュノア君の件については放っておく事をお勧めするよ。」

「え?」

「『親の心子知らず』。…僕が言えるのはそれだけだよ」

「…?」

「デュノア君」

「はい?」

「先生としてじゃなくて同い年の同性としても相談には乗るから
ね。」

「…うん。ありがとう。」

おや、空とシャルルが随分と仲良くなってるな。

同じ一人称が『僕』な男装女子同士だからか？

「一夏が悪さしたら迷わず織斑先生の所に。居なかつたら僕でも構わないけどさ」

「うん」

「おいおいおい。ちょっと待て」

「あと、割と強引な処と人の話を聞かない処もあるから」

「なるほど……」

「ぐぬぬ………それに関しては否定しきれん………」

それからシャルルと空の世間話（八割のネタが俺）に付き合わされ、二人に散々弄られた。

………俺、そんなに酷く鈍いのか？

割と鋭い方だと思うんだけどな

「…一夏の場合、鋭いんだけど鈍いんだよ。特定の場面に限って。」

むう、何故考えてる事がバレるんだ？

* * *

「side:シャルル」

僕が千凧先 空と話してたら『先に戻ってシャワー浴びてる』と

一夏は先に部屋に戻ってしまった。

それにしても、空ってすごいな。
同い年なのに凄く大人っぽいし、先生だし、一夏のこと良く知っているし。

それに…凄く、強い。

「僕も、ああなりたいな」

なんとなくだけど僕と似てる部分がある。
だからこそ、目指したくなる。

うん。まずは空に追い付こう。
追いついたら、次は一夏と

「って、何考えてるんだろ、僕は」

もうすぐ本国に強制送還されるかもしれないのに…

『居場所なんて、いくらでもあるんだよ。ただ、それに気付くかどうか、だよ。』

居場所なんて幾らでもある、と空は言ってくれた。

『だったら、ここにいろ』

居場所なら作ってやると、一夏は言ってくれた。

「ホント、敵わないな」

他人に対して降りかかった理不尽すら認めず、蹴散らしていることとする二人。

その姿は気高くて、貴くて……凄く格好良かった

だからだろうか。

僕が『この学園』で『どうして اینجاか』を考えているのは。

「つと、いけない」

危なく部屋を通り過ぎるところだった。

「ただいまー」

がちや…

部屋に入ったら電気は付いたまま。

「一夏あー……あ。」

まったく、一夏ったら

「寝ちゃってる」

しかも掛け布団の上に。

寝転がったらそのまま寝てしまったというところかな。

頼りになるのに、こつ言つ姿を見ると凄く微笑ましく思えて仕方がない。

「…さて、僕も着替えて寝ようかな」

今日は色々あったけど、明日は普通に授業があるし…

そういえば空はどんな授業をやるんだろうか。

楽しみだな

「 シャルル……」

不意に、一夏に呼ばれた。

「びくっ!?!」

あまりに突然の事に変な声を上げてしまう。
同時に胸が一気に高鳴る。

一夏は寝てる。

つまり、僕が夢に出てる？

一体どんな夢を見てるのかな

「……………そっちは駄目だ。三年生に食われるぞお……………むにゃむにゃ……………」

「……………一体どんな夢を見てるのさ」
別の意味で、気になった。

「一夏が朴念神だったことは空の話で理解したつもりだけどさ……………」
理不尽ブレイカーたる一夏こそが一番の理不尽なんじゃないかな、
と思う。

部屋の照明を落としてから、僕は一夏が掛け布団の上に寝てる事を
思い出した。

このまま放っておいて風邪でも引いたら大変だし…………

「あ、そうだ」

一夏にはヤキモキさせられた分の仕返しをしよう。

そう決めて、僕は自分の分の掛け布団を一夏にかけた。

そして、僕もそこに入り込む。

幸い一夏は寝がえりでベッドの端に寄ってるから十分寝れるスペース

スがある。

明日の朝、きっと驚くだろうな

「おやすみ、一夏」

小さくつぶやいてから僕は急激にやって来た眠気に身をゆだねた。

暖かい何かに包まれたような感覚はくすぐったくもあるけどすごく
落ち着く……………

* * *

翌朝、僕は一夏の悲鳴で目が覚めた。

#28：トーナメント、開戦（前書き）

ちよつと無茶な処があるかもしれません……

#28：トーナメント、開戦

「side：一夏」

さて、六月も最終週になった。

いよいよを以って学年別トーナメントが始まり授業はすべて休講。

生徒たちは会場整理や来賓の応対誘導、その他雑務に駆りだされていた。

ちなみに俺とシャルルは『その他雑務』に配置され千冬姉や空の手伝いに当てられていた。

で、それらから解放されたら大急ぎで各アリーナの更衣室へと走る事になる。

俺とシャルルが一か所更衣室を占拠してしまっているから、反対側の更衣室は大変な事になっているのだろう。

「しかし…こりゃすごいな」

更衣室のモニターからは観客席の様子がうかがえるのだが…

普段は生徒で埋まっている観客席は各国の政府関係者らしきスーツの集団や研究所員らしき集団（何故か白衣を着ている）。
企業のエージェントなんかもかなりの数が居るだろう。

「三年生にはスカウト、二年生には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来てるからね。一年生は今の所は関係ないみたいだけど、上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん。御苦労なこった」

もちろん、その『チェック対象』には俺が含まれているのだろう。なんせ入学前には『解剖させてくれ』とやって来た輩すらいるくらいだ。………そいつらが三枚におろされたが。

が、今の俺にとってはそんな事よりもラウラとの対決の方が重要だ。

「一夏はやっぱりボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まあ、な。」

鈴とセシリアは結局ISの修復が間に合わず出場禁止になってしまった。

一応、空が『イギリスと中国の当局に事情は伝えてある』と言っていたが…正直、二人にとって大きなマイナスになるだろう。

先日の騒ぎの事を思い出して、無意識に左手を握りしめていたらしい。

シャルルがさりげなく添えた手でほぐされて気がついた。

「あんまり思いつめちゃだめだよ。冷静に行かないと。…恐らく、彼女は一年の中での最強だろうから…」

「ああ、判ってる。いつも通り頼むな」

「うん。まかせて」

練習の間、基本的に…というか俺が前衛タイプの足止めをしている間にシャルルが後衛タイプを撃破。

そのあとで二対一に持ち込んで畳みかけるといふパターンを基本形にするのが一番という結論に達した。

「よし、最終チェック完了つと。そっちはどうだ？」

「うん。僕も大丈夫。そろそろ対戦表決まる筈だよな？」

「俺はAブロック第一試合って決まってるから、相手が決まるだけだけだな」

これも空情報なんだが、各国の政府要人やら研究員やらの要望で俺の出番が一番最初に固定になったそうだ。

だから最初から『一年の部 Aブロック 第一試合』に関しては片側が決定済みなのだ。

他の生徒については従来のシステムがうまく動かないから今朝大急ぎで生徒が作ったクジで決めていた。

「今更仕方ないけど、第一試合だなんてね」

シャルルの声色からすると『ツイてない』という風に取りれる。

が

「そうか？余計な事を考える暇がない分、やり易いと思うが。思い

切りよく、出たところ勝負は勢いが肝心だ」

どうしようもない分は運を天に任せるしかないからな。

「ふふふ、やっぱり一夏つてすごいな。僕だったら『一番最初に手の内を晒す事になる』ってマイナスにしか考えないよ」

「シャルルの言う事も一理あるけどな。お、対戦相手が決まったみたいだ」

モニターに完成したトーナメント表が表示される。

「えっ」

「……ッ！」

モニターの左端に表示された名前を見て、シャルルは驚いたような声を上げ、俺は無言で拳を握りしめた。

「シャルル、頼むぞ」

「う、うん」

一回戦の相手は　　ラウラのペアだった。

ペアを組む相手はどこかのクラスの代表でもない、一般生徒のようだ。

悪いが即行で退場してもらおう。…恨むなら、ラウラと組む事になった運の悪さを恨んでくれよ。

* * *

「side: 篇」

私と簪は出場できないセシリアや鈴と共に観客席にいた。

私たちのペアの試合はAブロックの第五試合。一夏たちが試合終了になったところで更衣室へ行けば十分、間に合うし第五試合の選手が今の更衣室に押しかけては邪魔になるだけだろう。

それ以上に、『第一試合を見逃したくない』という思いが強かった。

Aブロック第一試合が一夏対ラウラ・ボーデヴィツヒのカードなのだから。

ボーデヴィツヒとペアを組んでいるセラ・ダルキアンは簪のクラス
の生徒で、どちらかと言えば実技は苦手な部類に入るらしい。

『精々固定砲台がいいところ』とは四組代表の言葉だ

「一夏さん、大丈夫でしょうか……」

「結局、AICの対策って出来てなさそうだったけど」

AIC: アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。

ボーデヴィツヒの駆るドイツ製第三世代型IS、シュヴァルトツェア・レーゲンに搭載された『慣性をゼロにする』能力の第三世代型兵装。衝撃砲などと同様なエネルギー干渉型の武装と目される。

かなりの完成度を誇りボーデヴィツヒの腕と相まって、先日はセシ

リア、鈴の二人を相手にほぼ完封勝ちをして見せた。

奇襲による一撃必殺か、弾幕による封殺か。

私と簪で考えた『対ボーデヴィツヒ』戦術はそのどちらかに絞られた。

恐らく、一夏の取る手は前者だろう。

IS学園において『一撃必殺』は一夏の、白式の『零落白夜』の為にあるような言葉だ。

イグニッション・ブースト
瞬時加速からの一撃。

これに全てを賭けるのが私たちの出した一夏が出来得る技術と武装を使用しての『最善』の結果をもたらすパターンだった。

当然、一夏も考えているだろうが……

「あ、出てきましたわ」

セシリアの声には私は思考を中断させアリーナのバトルフィールドへと視線を固定させた。

勝てよ、一夏………！

* * *

[side…一夏]

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「同感だ」

試合開始を告げるブザーまでのカウントダウンが始まる。

五、四、三、二、一…〇！

「叩きのめす」

試合開始と同時に放たれた俺とラウラの言葉は奇しくも同じだった。

「おおおおッ！」

開始と同時の瞬間加速。イグニッション・ブースト

零落白夜と組み合わさる事で、正に一撃必殺となるこの技だが…

「ふん」

ラウラが右手を突きだしてくる。

「開始直後の先制攻撃か。判り易いな」

来るッ！

「シャルルッ！」

「任せて！」

PICを全開にして急停止、そのまま右方向へとイクニッション・ブースト瞬時加速をしてから再度、イクニッション・ブースト瞬時加速

ショート・イクニッション・ブースト短距離瞬時加速。瞬間的に加速し、すぐに停止する回避用の機動だ。急激な横運動であるために体にそれなりの負担はかかるが相手の横をすり抜けたい時とかには中々に便利な技だ。

これを発展させるとリボルビング・ショートイクニッション・ブースト連続短距離瞬時加速という急加速急停止の繰り返しによる機動もあるのだが、今の俺にそこまでの技量がない為会得出来ていない。

「先に片方を潰す、か。確かに有効な手ではあるが、私の前では無意味だな」

ラウラはそう言うがその直後から始まったシャルルの銃撃に否応なく足を止められる。

そしてシャルルがラウラの足止めをしている内に俺が狙うのは…

「でええええい！」

「えっ？あっ？ きゃああッ！」

ラウラの相棒。

彼女は打鉄にアサルトライフルを持たせたばかりというところで、まだ構えてすらいなかった。

ラウラに向かっていた俺が突然の方向転換をかけて襲いかかって来

た事に対処できなかつた相手に零落白夜を発動させた雪片式型の一撃を叩きこむ。

零落白夜の発動は踏み込みから残心までの間のみ。すぐさま第二撃を叩きこんで機能停止へと追い込む。

首打ちか兜割りができれば一撃で行けるかもしれないが、あいにくそれができるほど俺は精神的に強くない。

「よし。シャルル、すぐ行くからな」

オールラウンダー
全天周対応型のラウラの相手を中距離射撃型のシャルルが相手をするのはいかんせんキツイ筈だ。

雪片を構え直し、俺はラウラへと突っ込んで行った。

* * *

「side: 筈」

試合開始から五分、早くも形勢は一夏たちの方に傾いていた。

一手目で僚機を撃破し、それから目標との二対一戦闘に持ちこみ今に至る。

互いに目立った損傷こそないがボーデヴィツヒは一方的に出端を叩かれ続けている。

一夏をAICで取り押さえようとするとデュノアが大口径の銃でへ

ツドショット狙いの狙撃をする。

デユノアを狙えば一夏が装甲の隙間を狙って突きを放つ。

刺突は斬撃と違って点の技だ。

故に刀や腕を抑えるのは難しい。

だからと言って一夏の体をAICで抑え込もうとすればデユノアが待ってましたと言わんばかりに旺盛な銃撃を加える。

その銃撃を避けるなり防御なりすると一夏の拘束は解除される。

結果として、六本のワイヤーブレードと両手のプラズマ手刀だけで戦わざるを得ない状況を作り出された。

それでも着実に一夏にダメージが蓄積しているのは単純にボーデヴィツヒの力量故だろう。

完全な削り合い。

デユノアには一撃必殺の手段がなく、一夏は初撃の零落白夜と瞬間^{イグニッション}加速^{インブースト}、今までの削り合いでエネルギー残量が心許無い。ボーデヴィツヒは二対一の封殺戦法に対応せざるを得ない。

一夏が墜ちるのが先か、ボーデヴィツヒが墜ちるのが先か……勝負はそれで決まるだろう。

どっちが削り勝つか。

「あぁッ！」

会場のどよめきが強くなった瞬間、足に巻きついたワイヤーブレードが一夏をアリーナの外壁に叩きつけた。

「一夏ぁッ！」

倒した相手に興味は無いと言わんばかりにデュノアに襲いかかるボードヴィツヒ。

AICとワイヤーブレードでデュノアが拘束され、レールカノンが向けられて勝負がついたかと思った瞬間

ドウッ！

アリーナの壁から伸びた一筋の閃光が、ボードヴィツヒの背中を撃ちすえた。

その閃光の発生源は………一夏ッ！

「よかった………」

『シャルル、いけええッ！』

オープンチャンネルで叫ばれた、一夏の声。

シュヴァルツエア・レーゲンの至近距離に飛び込んだラファール・リヴァイヴ・カスタムEIIの左腕の盾が吹き飛んでその正体を現した。

現行の正規採用武装の中では最高クラスの破壊力を持つ、第二世代型において単純威力では最強の武装。

六九口径パイルバンカー《グレー・スケール灰色の鱗殻》、通称

「シールド・ピアース盾殺し」

先日 といつても大分前だが、セシリア戦で空が使った一〇五ミリ口径という規格外な代物バケモノに比べれば可愛いものだが、それでも当たり所が悪ければ一撃必殺になり得る。

勢いよく、叩きこむように突きだされたデュノアの左腕。

ズガアアンツ！

盛大な炸裂音と共に、ボーデヴィツヒの表情が苦悶に満ちたものに変わった。

装甲のない腹部に叩きこまれたそれは絶対防御を発動させた。それでも、衝撃が抜けたのだろう。

ガコン、と、杭の基部に付けられた回転式弾装リボルバーが次の炸薬を送り込む。

続けて放たれる第二撃。

「ぐあぁっ!」

ガコン、

そして、三発目が装填。

その一撃で勝負は決まる筈だった。

* * *

「side :」

「ふう……危なかつたぜ」

一夏は叩きつけられた壁際で両手で構えていたライフルを下ろし、グリップから放した左手でかいてもいない汗をぬぐった。

本来、射撃装備の無い……それ以前に雪片式型以外の武装を持たない白式が何故こんな代物を使えたかということ、実は空のおかげだったりする。

空の所属研究所、榎篠技研で開発した『武装一個分容量を持つ』拡張ユニット。

IS本来の拡張領域をPCのHDDとすると拡張ユニットは外付け式メモリかUSBみたいなフラッシュメモリに当たる、IS本体に依存しない武装追加の手段の一つとして開発された。

そこには今回は荷電粒子銃が登録されている。

荷電粒子銃も槇篠技研製で、一夏が頼み込んで借り受けた物だ。

試作版のコレは一発限りの使い捨て式だが威力は現行の光学武装の
数倍、

この銃の一発分のエネルギーで現行型光学武装の一弾装分くらいに
はなる。

そんな高威力高燃費な一撃と盾殺しを二発。シールド・ピラース

これならば大抵のISが機能停止に追い込まれるであろうがシユヴ
アルツエア・レーゲンは辛うじてではあるが耐え抜いた。

だが、連撃はまだ終わらない。三発目の炸薬が装填され、止めを刺
す用意が整う。

シャルルが止めの三発目を叩きこもうとした時、それは起こった。

（こんな……こんなところで、負けるのか……私は……！）

暗闇から生まれ、影に生きてきた少女は再び深い闇の底に突き落と
されそうになっていた。

（私は負けられない……負ける訳にはいかない！）

ラウラ・ボーデヴィツヒにとって、『おじむらいちぢか織斑千冬の弟』は害悪でしか
ない。

強く、凛々しく、堂々としている憧れの存在を、変えてしまう存在
は。

故に、

（敗北させると決めたのだ。アレを、完膚なきまでに叩きつぶすと）

だが、現実はずう。

叩きつぶされかけているのはラウラの方である。

（力が、欲しい）

叩きつぶし、完膚なきまでに壊しつくす力が。

『 願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？より強い力を、求めるか……？』

（言うまでも無い。力がそこにあるのなら、なんでもくれてやる。だから、私に力を……比類なき最強を……唯一無二の絶対を私に寄せせ！）

その願いは、楔を解き放った。

.....

Damage Level.....D
Mind Condition.....Uplife
Certification.....Clear

.....
《Valkyrie Trace System》.....boot
.....

#28：トーナメント、開戦（後書き）

今回でできた『荷電粒子銃』はRX-0の『ビームマグナム』がモデルです

中の人的なネタで。

#29：VTシステム

「side：」

『ああああああああっ！』

身を裂くような絶叫。

それは観察室でもその様子をつかがう事が出来た。

「な、何事ですか？」

「非常事態なのは確かだ。山田先生は全教員を招集。部隊を編成して突入準備を。千凧はISでアリーナ内へ先行して突入しろ。」

「はいっ」

「了解ッ！」

千冬の命令に真耶と空はそれぞれ駆け出してゆく。

モニターではシュヴァルツエア・レーゲンが解けて、別物になって行く様子が映し出されている。

それは、IS本来の形態変化：『スタートアップ・フィッティング初期操縦者適応』でも『フォーム・シフト形態移行』でもあり得ないものであった。

千冬はマイクを握り締めて全館放送をいれる

「非常事態発令！トーナメントの全試合を中止！アリーナ内にいる

全員はすぐに避難する事！繰り返す！」

モニターの向こう側では、一夏がなけなしのエネルギーを振り絞って戦おうとしてシャルルに止められていた。

『あいつ、ふざけやがって…ぶっ飛ばしてやる！』

* * *

「くっ……………」

筈は苦々しい表情でアリーナの一夏を見つめていた。

それはセシリアや鈴も同様で

「歯がゆいですわね」

「なんでこんな時に限って修理中なのよ！」

拳をきつく握りしめ、その手から血の気が引いている。

そんな中でただ一人、簪だけ

「あ

プライベート・チャンネルでの通信が送られてきた。

『簪さん、聞こえる？』

『空く…千凧先生？』

ここ数日、正規の授業担当となった空を『空くん』と呼んで出席簿で頭をぽか、とやられ続けた簪は流石に学習していた。

何処その男子とは大違いで。

『箒を連れて一夏たちの使っているピットまで来てくれないかな。』

『？』

『早く』

「は、はいッ」

思わず声に出して返事をしてしまった簪に周囲の訝しむ視線が刺さる。

羞恥に簪の顔色はみるみるうちに赤くなってゆくが、それでも頼まれた事は遂行せねばならないという思いでなんとか打ち勝つ。

「えっと、空くんから『箒と一緒にピットまで来てくれ』って」

「？ 何故だ？」

「知らないよ。言っただけだから。早く!」

空にいわれた事をそのまま使った箒の手を取り駆け出す箒。

「おい、いきなり引つ張るな。わわっ」

いきなり引つ張られて少々慌てた箒だがすぐに簪のペースに合わせて走り出す。

「今回は、任せるしかありませんわね」
「ホント、自分が情けないわ」

セシリアと鈴は自分たちが行っても邪魔になるだけだろうと悟り、ただ見送った。

* * *

「来たね」

ピットに入るとISSスーツ姿の空に二人は出迎えられた。

「これから二人にはちょっと手伝ってもらおうよ」

そう言いながらピットの奥へと進んでゆく空、ついてゆく二人。

「何をすればいいのだ？」

「一夏の強制退去、連行とデュノア君の離脱支援。ああ、ダルキア
ンさんの回収も必要だね」

「それなら私は足手纏いではないのか？」

箒はISSを持っていない。

専用機持ちの簪ならともかく、今の箒に役に立てる手段など無い。
そう、本人は思っていた。

「あつ」

ピットからアリーナ内へとゆくカタパルトデッキまで来たところで、三人の前に薄紅が現れた。

「あれは……………!?!」

「榎篠^{うぐち}技研の次世代型機のテストベッドとして用意された第二世代型機。銘は『舞梅^{まいつめ}』」

「……………舞梅」

薄紅色の装甲が、そこで主を待っていた。

「ほら、早く乗る!」

「は、はいっ!」

空に叱咤され、箒は舞梅に身を預ける。

「フィッティング機能はカットしてあるから、訓練機と同じ。打鉄とはちよつとクセが違うけど…それはその場で慣らして。すぐに行くよ」

空は雑風を、箒は打鉄式式を展開しカタパルトへと入る。

「織斑先生、こちら千凧。これより突入します」

飛び出してゆく空。

簪と箒はその後を追った。

* * *

「side：一夏」

俺は激昂し、シュヴァルツエア・レーゲンであった黒いISに殴りかかろうとしてシャルルに取り押さえられていた。

幾ら俺が男でシャルルが女と言えど、ISを装備しているとしていないでは力の差は圧倒的。

俺は為すすべなく取り押さえられていた。

「放せ、シャルル！」

俺はアイツが赦せない。

千冬姉の剣を、技を汚した、アイツを。

あの日、俺が千冬姉に教わった『命を絶つ武器の重さ』と意味を軽んじるアイツを…！

「駄目だよ。白式のエネルギーももうないんだから」

「白式が無くても俺は　　！」

「一夏あッ！」

戦う。

そう言おうとしたのだがオープンチャンネルで飛び込んできた筈の
声に遮られた。

俺の前に現れる三体のIS。

一体は空の薙風。あとは簪さんの打鉄タイプと、何故か筈が薄紅色
の装甲のISに乗っていた。

「織斑君、下がりなさい。」

何時に無く事務的で『反論を許さない』と言外に圧迫してくる空の
声。

「でも、俺は…」

「篠ノ之さん、織斑君をピットに強制連行。更識さんはダルキアン
さんを回収。デュノア君も下がりなさい」

「悪いな、一夏」

シャルルに代わって俺の事を取り押さえ、抱え上げようとする筈に
抵抗して腕をすり抜け俺は空に食ってかかる。

「俺にやらせてくれ！空、頼む！」

俺がやらなくてはならない。

コレばかりは、譲れない。

空は俺に目を合わす事無く、展開したライフルを撃つが、見事に全
弾切り払われていた。

「やっぱり、銃は駄目か」

空はライフルを収納し、今度は日本刀型のブレードを呼び出した。

「空っ！」

「ああもう、三分！三分間だけ待つからその間に準備を整えて来なさい！」

「…！ああっ」

「織斑先生、いいですね？」

『…仕方ないな。サポートは任せる、千凧先生』

オープンチャンネルで流れてきた千冬姉の声は、それだけで苦笑しているのが良く分かった。

「箒、ピットまで頼む」

「任せる。行くぞ、簪、デユノア」

箒に抱きあげられた俺は、箒ごしに千冬姉の模造品と戦う空の様子をうかがう。

その太刀筋には少しでもいろんな手を使わせようとしている、データ収集をしているかのような印象があった。

「篠ノ之さん、こっちですよー！」

山田先生がピットの出入り口の所で手を振っていた。

「その機体は…?」

ピットで俺を始めとして全員がエネルギーや弾薬の補充を受けている時、山田先生が興味津々と言った風で筈に尋ねた。

「ええと、空　じゃなかった。千風先生が技研で用意した次世代機のテストベッド用の第二世代型だそうです。一夏の連行用に先生に貸与してもらいました」

俺の連行用って……

「なるほど。そうだったんですか」

山田先生も元代表候補生だけあって、新型機には興味深々らしい。

説明を聞く限りでは『次世代機の為のデータ収集用機』らしいけど。

第二世代型の次世代ってことは、第三世代型ってことか？

あれ、でも榎篠技研って第三世代型の基礎理論を発表した処じゃなかったっけ？

「全機、補給完了」

「二分四十三秒」

先生の声に背中を押されて俺たちは視線をかわしあい、頷いてからアリーナ内へと飛び出した。

「待たせたな、空」

「今は、千凧先生と呼ぶべきだろう」

オープンチャンネルでの呼びかけに箒の突っ込みが刺さる

だが、空からの返事は無く、代わりにあるデータが送られてきた。

同時に、『薙風』を中心にした小規模ネットワークが構築される。

その途端、俺の元に届くデータの量が急増した。

「な、なんだこれは」

「凄い……」

「これだけのデータが有ればミサイルの誘導もかなりの精度でできるかも……」

どうやら箒、シャルル、簪さんも同じらしくオープンチャンネルで眩きが届いた。

『さて、とりあえずだけどアレは攻撃能力のある武器が攻撃行動に反応して戦闘するらしいんだ。その技量は一応織斑先生並』

空からのプライベート・チャンネルで声が届く。

『簪さんのミサイルの掃射、箒のブラスターとシャルル君の銃撃。それで盛大に気を引いた処で、反対側から一夏が強襲。零落白夜で片をつける』

ウィンドウが一つ展開されてそれぞれの配置図が表示された。

『手早く片づけるよ』

「おっ」

『ハイっ』

『了解』

『ああっ』

それぞれの返事と共に、それぞれの位置へと散ってゆく。

『ミサイル、行きますっ！』

斉射されたミサイルが襲いかかりエネルギー弾と実体弾の混ざった砲撃が繰り返される。

だが、あるものは切り払われ、あるものはかわされ、命中弾は一発もでない。

それでいい。誰一人として、命中させる気で撃っていないのだから。

そんな中で、俺はゆっくりと深呼吸をした。

よし、やるぞ。白式。

心の中で呼びかけると同時に零落白夜が発動。

本来の刃の倍の長さのエネルギー刀身を展開する。

これじゃ駄目だ。

俺の最速の一撃を叩きこむには、大きすぎる。

意識を集中させて、細く、鋭く尖らせてゆく。

一筋の光が闇の中に差すような、そんなイメージ。

そして、俺の思いが通じたのか雪片に変化が現れた。

それまでであった雪片の実体剣は完全に消え、柄だけになる。

その柄から伸びるのは、日本刀の刀身の形に収束したエネルギー刃だ。

よし、イケる。

その刀を俺は納刀した時の位置に持ってくる。

エネルギー刃は短めに、右手で柄を握り締め、左手を鞘を支えるように添える。

そして

『一夏ッ！』

空の声で俺は

「おおおおおおッ！」

一気に踏み切つて、イケニッション・ブースト瞬間的に加速。

相手に反応する暇を与えずに、斬るッ！

黒いISに肉薄。相手が振り返るが　もう遅いつ！

腰から抜き放ち、一気に展開させたエネルギー刃の一撃で雪片モードキをたたつ斬り、そのまま上段に構えを移してそのまま全力で振り下ろす。

これこそが、『一閃二断』。

ジジっ、と紫電が走り、黒いISが見事に切断された。

真つ二つになつたそれからこぼれおちてゆくラウラを拾い上げる。

こぼれおち行くラウラはまるで捨てられた子犬のような……弱り、迷つた目をしていたように見えた。

「……まあ、今回はこれ位で勘弁してやるよ」

その俺の呟きは聞こえているのかどうかは判らない。

それを知るのはラウラだけだ。

強さとは、なんなんだろうか……

『強さつツーのは、心の在処。己の拠所。自分がどうありたいかを思い、追い求める事なんじゃないかと俺は思つ』

……そう、なのか？

『そりゃそうだろ。自分がどうしたいのかも分らない奴は、強い弱いの前に歩き方すら判らね だろつさ』

……歩き、方……

『どこへ向かうか、どうして、向かうか』

……どうして、向かうか……

『やりたいことをやったもん勝ち。遠慮とか我慢とかは損するぞ？
まあ、俺の尊敬する人の言葉の焼直しなだけどさ。まあ言
わせてもらえば、やりたいようにやらなきゃ、人生つまらねえぞ？』

では、何故お前は強くあろうとする。何故強い？

『俺なんか全然強くなえよ。俺もすぐに熱くなる、所詮十五のガキ
だ。全然強くない。』

……理解できない。あれほどの力を持っているのに、何故…そう断
言できる？

『もし、俺が強いつていうなら、それは』

それは…？

『強くなりたいたから、強いしさ。』

ッ！

『俺には目標にしてる人が居る。その人みたいに強くなれたらやっ
てみたい事が有るんだよ』

やって、見たいこと？

『誰かを、守ってみたい。自分の全てを使って、ただ誰かの為にそ
の力を振るいたい』

それは、まるであの人のようだ。

『当然だろ。その、尊敬する人つてのは千冬姉の兄貴分でもあるんだぞ?』

なるほど

『俺はその人みたいになって、手の届く範囲の全てを助けたい。もちろん、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ。』

!!

#30・戦いの後で……(前書き)

黒兔編

#30：戦いの後で……

『守ってやるよ』

初めてそう言われて、初めての衝撃に私は襲われた。

早鐘を打つ心臓、高揚する気分……

それらが言ってくる。

『認めてしまえ』と。

そいつの前では私もただの十五歳の、ただの女なのだ。

教官、あなたの言う通りだ。

確かにこれは……抗い難い。

どうやら私は、惚れてしまったらしいな。

「side……ラウラ」

「……あ」

ぼやっとした光が天井から降りているのを感じて、私は目を覚ました。

「ああ、目が覚めたようだね」

その声には、どこか聞き覚えがあった。

確か、何かの授業を担当していた、『センナ』とかいう教師の声だ。どう見ても同じ年くらいにしか見えない、色々と不可解な点のある男のIS操縦者。

「残念だったね。五分前までは織斑先生が居ただけ」

「そう…ですか。 私は……………」

「全身に筋肉疲労と打撲。幸い、内蔵と骨に異常は無し。まあ、暫くは少し動くだけで激痛が走ると思うよ」

言われて、全身を覆う倦怠感に納得した。

納得して、本題に入れる。

「何が……………起きたのですか？」

なんとか体を起こそうとして激痛に襲われ、顔をしかめる。

センナ先生に制されてベッドに再び横たわる。

けれども、視線だけはまっすぐと相手に向けた。

「重要案件な上に、機密事項なんだけどね」

苦笑いしながら、先生は一枚の紙を差し出してきた。

私の名前が入った、『今回の件について知り得る情報を口外しない』
という誓約書だった。

つまり、教えてくれるという事が…？

「VTシステム。」

知ってる？と言外に尋ねられて、私は頷き 激痛に襲われた。

「はい、正式名称はヴァルキリー・トレース・システム。…過去の
モンドグロツソの部門^{ヴァルキリー}受賞者の動きをトレースするシステムで…で
すが、あれは……」

「そう。IS条約で全ての国家、組織・企業において研究・開発・
使用の全てが禁止された代物。それがシユヴァルツェア・レー
ゲンに搭載されていたようですね」

「……………」

「巧妙に隠蔽されていたけれども、操縦者の精神状態、機体ダメー
ジ、何よりも操縦者の願望をキーに発動するようになっていたら
しい。 今頃、織斑先生がドイツ軍の担当者を吊るし上げてるん
じゃないかな。そのうち、委員会の強制捜査も入るだろうし。」

私は、俯いてぎゅっとシーツを握りしめた。

教官につるし上げられる事になった担当者はご愁傷様としか言いようがないが、VTシステムの発動キーは……………

「私が、望んだから……………ですね」

おじむぢぢぢぢ
教官に、なる事を……………

ガラっ…

突如ドアの開く音がして、起き上ってその方向を窺うと同時、激痛に襲われ、悶絶しかけた。

「千凧、機密情報漏洩だぞ」

その声は 敬愛してやまない、織斑千冬教官の…

「大丈夫ですよ。誓約書書かせましたから」

「なら、構わないか」

「というか、恐らくはぐらかしても納得しないから誓約書書かせて知らせた方がいいと言ったのは織斑先生でしょう」

「ふん」

それまでセンナ先生が居た場所を譲られ、教官が私の前に立った。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

突然、名前を呼ばれて驚いて返事を返す。

「お前は誰だ」

「わ、私は……。私……………は……………」

ラウラ・ボーデヴィツヒです。

そう、言える筈なのに言えなかった。

「誰でもないなら、丁度いい。これからお前は『ラウラ・ボーデヴィツヒ』になればいい。何、時間は山の様にあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければならぬかなら。その後も、死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……………」

意外だった。

まさか、励ましてくれるだなんて

「まあ、悩み疲れたらそれをそこにいる千風にでもぶつければいい。ソイツも教師であると同時に十五の小娘だ。大人にし辛い相談もしやすいだろう」

「は!?!?」

思わず、変な声を出してしまった。

ついでに妙に筋肉を使ってしまったのか全身が激痛に襲われる。

悶絶しながらも、改めてセンナ先生を見る。

うん、どう見ても女顔だし、背丈だつてどちらかと言えば女子と大差ない。

童顔で、どう見ても成人してるとは思えない。

『十五の女』と言われた方が、なんか納得ができる。

「では、私は仕事に戻る。千風、ボーデヴィツヒを頼むぞ。」

そう言って、教官は立ち去ろうとし、ふと立ち止まった。

「ああ、そうだ。」

ドアに手をかけた処で、振り向く事無く教官は言う。

「お前は私には成れないぞ。アイツの姉は、こう見えて心労が絶えないのさ」

きつと、ニヤリと笑っているのだろう。

顔は見えないけれども、そうだと判った。

「…そんな某男子の姉の同僚の心労も絶えないんですけどね。」

ぼつりと、それでいてはつきりとした声で愚痴をこぼしたセンナ先生の声はまったく聞こえなかった事にされ、教官は立ち去ってゆく。

「ふ、ふふっ…」

なんだか急に可笑しくなってきた。

ああ、なんてズルイ姉弟なんだろうか。

二人とも、揃って言いたいことだけ言い逃げだ。

あそこまで言っておいて結局は『自分で考える』なんだから、ズルいことこの上ない。

「自分で考えて、自分で行動しろ、か」

笑いが漏れるたびに全身が引きつるように痛むが、それさえも嬉しく感じられた。

完敗。完膚なきまでの敗北。

けれども、それが今はたまらなく心地良い。

私は、ここから始まるのだから。

#31…さらやかなる晩餐(前書き)

とりあえず、二巻相当分のクライマックス行きますよ〜

#31：ささやかなる晚餐

「Side：簪」

「はー、終わった終わった」

教師陣の事情聴取から解放された私たちは盛大に凝り固まった体をほぐすべく聴取に使われた部屋の前で伸びをしていた。

長々としたものとは言え、『千凧^{ちんかく}先生の指示に従っただけ』、『織斑先生が容認した』という大義名分がある故に私たちに処分が下る事は無く、
むしろ『危ない事してんじゃないぞ』と言わんばかりの小言や注意が殆どだった。

箒がその『左手首にある薄紅色の珠のついた紅い紐』についてぐちぐち言われたのが唯一の例外。
…『舞梅』は切られていたハズのフィッティングを作動させ、『箒の為の機体』となっていた。

更に四人。

私と箒と織斑君とシャルル君。

その四人が全員が全員、聴取が終わるまで解放されなかった。

そんなこんなで食堂がそろそろ閉まりそうな時間。

「さて、飯食べに行こうぜ。そろそろ食堂が閉まりそうだし」と、織斑君が言ったその時だった。

「お、居たいた。おーい、そのキミたち」

「？」

突然呼び留められて私たちは振り返る。

そこに居たのは…

「えっと……榎村さん？」

榎篠技研の副所長さんだった。

「久しぶりね」

「どうしたんですか？」

「ああと、人探ししてるのよ」

「？」

「シャルル・デュノア君」

シャルル君を？

「シャルル・デュノアは僕ですけど…」

「ああ、丁度よかった。はい、これ」

シャルル君の手になにやら封筒が手渡される。

「確かに届けたからね。で、篠ノ之箒さん？」

「は、はい」

今度は箒。

やっぱり、『舞梅』の事かな…

「舞梅のこと、よろしくね。詳しい事は空から聞いて貰える？」

「は、はあ…」

「それじゃ、時間とらせちやって悪かったわね。」

「いえ…」

「それじゃあね。頑張りなさいよ」

颯爽と立ち去ってゆく榎村さん。

「何というか、嵐みたいな人だな。」

「うん、そうだね」

織斑君とシャルル君もあっけにとられていた。

かしや、かしや、かしや、かしやあん

その時、妙に時計の音が気になって壁に掛けられていた時計を見上げた。

「あ

そして、気付いた。

「どうした、簪

「時間

私が時計を指さすと皆も時計を見上げる。

そして

「」「あ

皆で気付く。

食堂の営業時間がたった今終了した事に。

「……………どうしようか

「購買も閉まってるだろうし……………」

「そつだ、副寮監室にはちゃんとしたキッチンがあったはずだ。そ

ここで食材と場所を借りよう」

なんて織斑君が言いだした。

なんで副寮監室の中の事をそんなに知ってるのか小一時間ほど問い詰めたい（当然正座）気持ちをぐっとこらえて、空腹を何とかする為に私は賛成。

箒とシャルル君も同様だったので私たちは副寮監室を目指して急いだ。

* * *

副寮監室に辿り着いて、返事がないけど鍵は開いてたから勝手にお邪魔したところ…

「ふーふー、あむ……もくもく……」

ずずつ……「千凧、替玉と卵」

ちゆるん…「あ、私も替玉お願いします」

ダイニングキッチンの、リビング側の台をカウンター席よろしく使い、スーツ姿の女性とワンピースの女性、そして銀髪少女（サイズボーデグウィットさん）のあつてないオレンジのチェック模様パジャマ着用中）が並んでなにやらずるとやっていた。

麵的な意味で。

「…どこの駅の蕎麦屋だ？」

筭が思わずそう言ったくらい、その光景は異質なのに不思議と違和感を感じさせなかった。

「あ、お品書」

私が見つけた壁の掲示物。

「前来た時はこんなの無かったぞ…」

「全然気付かなかった……」

織斑君とシャルル君はあとで『O・H・A・N・A・S・H・I』しようか。一人当たり四半日程度。当然、正座で。

抱き枕（純ケイ素製）が必要だね。

ああ、凹凸の凄くて鋭い洗濯板も用意しなきゃ。

「簪は何にするんだ？」

「へっ？ あ、ええと、そ、それじゃあ私はきつねづどんが
いいかな」

筭の声に現実に取り戻された私は相当慌てていた。

「？ 何をそんなに慌てているのだ」

「ううん、なんでもない」

「ならいいのだが…」

危ない、危ない。

ちよつと拷も O・H・A・N・A・S・H・Iに意識を裂きすぎてみたいだ。

それにこんな事が織斑君Loveな筈にバレたら私が殺されちゃうよ。

「ふーふー、あむ…むむむ、…むぐむぐ」

「あ、お稲荷さんください」

「千凧、熱爛」

「織斑先生、明日も授業があるんですから、一本だけですよ」

「判っている。」

…そんなのもあるんだ

その少し後に私たちの注文分が出来上がった。

私がつねうどん、筈はカうどん。デュノア君はたぬきうどん（スプーン&フォーク付き）で織斑君はかきあげ付きの月見うどん。

トッピングもすればよかったかな……

とりあえず、ククな食事となった夕食はとてもおいしかった。

それにしても……………

空くん、割烹着姿似合いすぎ。

「千凧、もう一本だ」

「駄目ですよ」

「熱爛を」

「だから駄目です」

「千凧、あ」

「駄目」

「千」

「出しません」

「…なら、ビールでいい」

「アルコールはもう打ち止めです」

「…………この部屋には、私から取り上げた酒類が有る筈だが？」

「織斑先生の部屋の環境と食生活の改善、酒量管理を任されていますからね。そうほいほいとは出せませんよ。どうせ『風呂上がりの一杯』って言うってビール飲むんでしょうし」

「……………そうか」

「だから諦めてください」

「……………山田君、一杯欲しくないかね？」

「ええと、私は……………」

「山田先生をダシにつかっても駄目なものは駄目です」

「ボーデヴィツヒ、一杯つきあ」

「未成年者飲酒はもっと駄目です」

「……………むう」

……………お母さん？

#31：ささやかなる晚餐（後書き）

千冬さんがダメな人化：

何気に空は家事の出来る子です

なのでお隣さんの部屋の管理も一手に引き受けていたり。

#32：『親の心』を子が知る時（前書き）

お待ちどうさまでした。

#32：『親の心』を子が知る時

「side：一夏」

空のところで夕飯をご馳走になったあと、俺たちはそれぞれ解散して部屋に戻った。

途中、筭がなにか言いたそうではあったが、俺から切りだすのは憚られたので黙っておいた。

なんとなく、筭自身の問題な気がするからな。

「ああ、そういえば。シャルル」

「どうしたの、一夏」

「山田先生が言ってたろ。今日は男子が大浴場を使えるらしいんだけど…どうする？」

「あー……」

俺が懸念しているのは先生方の認識ではシャルルも男子だという点についてだ。

男子同士だから、と俺とシャルルと一緒に風呂に入るのは、書類上問題ないが現実としては問題大アリである。

なんせ、俺は男でシャルルは女の子だからな。

「僕はいいよ。お風呂はそんなに好きって訳じゃないし、コレの中心を見てみようと思うから」

「…なんだそれは」

シャルルが手にしているのは、所謂携帯端末だ。

「うんとね、これはあの時に女の人に渡された者なんだけど…」

「あの時の女の人っていうと…事情聴取が終わった後の、榎村さんからか？」

「たぶん、その人」

でもおかしいな。

榎篠技研の榎村さんがなんでシャルルに届けモノがあるんだ？

まさかスカウトか？

確かに、シャルルの腕はかなりの物だし、あり得ない話じゃない。

「判った。それじゃあ俺は風呂に行ってくる」

「いつてらっしやい」

そんなやり取りの後、俺はようやく、よ・う・や・く、使える事になった大浴場を堪能すべく、鍵を持っているという山田先生を探す作業を始めた。

……多分、空の部屋だろうな

で、予想通り空の部屋にいた山田先生に大浴場を開放してもらい、俺は久々の風呂を楽しむ事と相成った。

「うおー！」

広い、とにかく広い！

大浴場には湯船（大）が一つ、ジェットとバブルのついた湯船（中）が二つ、檜風呂が一つ。

更にはサウナに全方位シャワー、打たせ湯まである。

なんというか、これは叫ばずにはいられない

「日本国直営万歳！」

日本に生まれてよかった！

うおおお、テンションが上がって来たぜえ！

「つと、落ち着け俺。このままじゃ挙動不審な不審者だ」

昂る気持ちを抑えつつ、体をお湯で流し、ボディークリームで身体を洗う。

…別に、手ぬぐいと石鹸でもいいのだがせっかくの備え付けだ。遠慮なく使わせてもらおうとしよう

体を洗って、湯船につかって、それからまた洗って、そしてゆつくりと浸かってから軽く上がり湯を浴びて上がる。

これが俺の風呂のルールだ。

別に守らなくてもいいのだが、その方が気持ち良く入れるので俺はいつもそうしてる。

全身を洗い終わったら待望の湯船（大）へ。

ゆつくりと身を沈めると

「ふうふううう………」

思わず声が漏れた。

疲労とか体の凝りとかが溶け出してゆくような虚脱感といい、熱気が連れてくる心地よい圧迫感&疲労感といい……

「やっぱ風呂はいいなあ……」なあ……なあ……なあ……

俺は特に何も考える事なく、ただただ風呂を満喫する事だけに集中した

そのままぼへー、と浸かっているとだんだんと眠くなってきた。

疲れていたのもあるし、この暖かさに包まれているという状況もある。

「 あー、このまま眠りたい」

本当にやったら、多分溺れ死ぬが。

流石に、『世界で唯一の男性IS操縦者、風呂でおぼれて死亡』なんて見出しで新聞に載るのは勘弁して欲しい。

しばらく眠さと気だるさに身を任せてぼへー、とし続けていたら…

気のせいか、『カラカラカラ…』という脱衣所の扉が開くような音がした気がした。

だが、今の俺の頭は思考停止放棄だ。幻聴というのもあり得る。

今度は『ぴたぴた』という足音。

うむ、このきれいな音の発生源はきつときれいなんだな。

音が綺麗ならば、発生源も綺麗と相場が決まっている。 ぼへ

……

「お、オジヤマシマス……」

「おう、なんだシャルル。結局きた……の……か……？」

………なんだろう、なんか物凄くスルーしてはいけない事をスルーしたような気がするぞ？

早く再起動しろ、俺の頭。

ポクポクポクポクポクポクポクポクポク………チーン

「って、シャルル!？」

「あ、あんまり見ないで。 一夏のえっち」

「す、すまん！」

あれ、なんで俺謝ってたんだ？

でもこういう場合、謝らなかつた方がかなり面倒な事になると俺の中のY因子が告げているので謝っておいて間違いは無いだろう。

大慌てで再起動を果たした俺の頭が下した命令でシャルルに背中を

向ける。

「どどど、どうした？なぜにどうしてやってきたんよ、シャルルさん」

「……僕と一緒にじゃ、イヤ？」

「そそそ、そんな事はないが……」

ひじょーに不味い。というか、困る。

俺だって健全な十五歳男子。

何度も繰り返す事になるが人並みにアレやらコレやらも持っている。

IS学園という、女の園において半ば禁欲生活を送ってはいるが興味がない訳ではないし、その、アレな色々を 頑張っ て抑えているだけなのだ。

「おおお、俺は上がるぞ。先に入ってたし、もう十分堪能した。あとはゆっくりたのしんでくれ。」

俺が湯船から出ようと立ち上がろうとした時

「ま、待って！」

シャルルに大声で止められた。

びっくりして思わず動作が止まり再び湯船に体を沈める俺。

はふう………やっぱり風呂はいいわぁ………

「そ、その……大事な話があるんだ。大事だから、一夏にも聞いて欲しい……」

「…判った」

俺はシャルルにしっかりと背中を向けて言葉を待つ。

ぴたぴた、ぴたぴた、ちやぷ……

嫌な予感。

いや、別に『悪い事』が起こる予感という訳ではないが、ひと騒ぎ起こりそうな予感がする。

ひたっ

「!?!」

俺の背中に、なにやら触れてきた。

くすぐつたいが同時になんだかすごく柔らかい。

「あのさ、一夏」

「お、おう」

湯船の湯とは異質な暖かさが背中に伝わってきて心臓がバクバクと

早鐘を打つ。

「あの、端末なんだけどね……お父さ　父からのメッセージが入ってたんだ」

「親父さん…デュノア社の社長からか？」

「うん」

俺は、ふと気付いた。

いま、シャルルは父親の事を『お父さん』と呼びかけた…と。

「僕が、男としてIS学園に送られた理由も、僕を『自分の子供だ』と認めなかった理由も、デュノア社のテストパイロットにした理由も……お父さんがお母さんの事をどれだけ愛していたかも……全部話してくれた」

「……そっか」

「全部教えてもらって……空の言ってた事の意味がようやくわかったよ」

「？　空の言ってた事？」

「『親の心子知らず』だよ。………どれだけお父さんが苦悩したのか、僕の事を守ろうとしてくれていたのか………」

シャルルの話を要約するところになった。

まず、シャルルの母親（コレットさんというらしい）と父親（こっちはリシャルルさん）は学生時代から付き合っていたらしい。

二人の仲は良好でコレットさんの親友であるエジェリーさんという人の後押しもあって卒業後は結婚まで一直線だろう……と、予想されていた。

だが、家同士の取り決めでリシャルルさんに拒否不可の縁談が組まれてしまった。

しかもその相手はコレットさんの親友であるエジェリーさんだったのだ。

リシャルルさんは当然反発したがデュノア社を潰す訳にはいかず、渋々エジェリーさんと結婚をする。

双方にとって望まぬ結婚を果たしたりシャルルさんだったが、エジェリーさんの後押しもあって結婚後もコレットさんとの付き合いは続いていた。

世間体としては不倫になってしまうのでエジェリーさんは知らないふりをし続けて二人の仲の後押しを続けた。

だが、事件は起こった。

コレットさんがリシャルルさんの子供（つまりシャルル）を身籠っ

た事を知ったエンジニアさんの親類の一部が暴走、危うくコレットさんは殺されかけるといふ事件が起きてしまったのだ。

事件は未遂に終わったけれどもリシャルさんはそれ以降コレットさんに会いに行く事も出来ず、ただただ生活に困らないように支援を蔭ながらしていく事しかできなかった。

時は流れて二年前、コレットさんは病死してしまい一人娘のシャルルが遺されてしまった。

リシャルさんはすぐさま引き取ろうとしたが、状況的にそれができなかった。

何故か。

丁度そのころ、第三世代型機の開発でひと悶着あったのだ。

……具体的には、最後発故のデータ不足を提唱元である榎篠技研からのデータ購入で賄おうとしたら国がストップをかけてきたというのだ。

理由は『独自に開発されて然るべき物に外国の影響を入れるなど言語道断』つまりフランス独自開発したものでなければ駄目というプライド。

補助金は大幅カットされ、購入を強硬した場合は経営陣と開発スタッフに国家反逆罪を適用すると脅され、子女に対する政府重鎮縁者との縁談まで用意された。

その為に、シャルルの事を娘と認める訳にはいかず、保護下に置く

ために『ISのテストパイロット』として雇う形を取らざるを得なかったという。

その後、榎篠技研で修行して帰国したフランス人技師たちの手によって持ち帰られたデータと図面を元にフランス製の第三世代型機の開発が進んだのだが、三か月前：

政府に、シャルルガリシャルルさんの実娘である事と、第三世代型機に使われたデータや技術が外国（この場合は日本の榎篠技研）から得たものだという事がバレってしまったのだ。

開発していた第三世代型機は封印され、危うくデュノア社取りつぶしの危機になったがそこで俺が登場した。

世界で唯一の男性IS操縦者。

そのデータか、もしくは身柄その物を得るためにシャルルは利用される事になった。

政府から『代表候補生』の枠が与えられて編入する事が決まり、男である方が近づきやすい。

むしろ生活を共にする可能性が高いという事から男装の上、男子と偽る事になった。

男装を後押ししたのはリシャルルさんだというが、それには理由がある。

男が男に籠絡の手を使う事は無いからだ。

何時まで経っても籠絡できないといわれても『男のふりをさせているのだから仕方がない』と突っぱねられる。

そして先日、俺にシャルルが女であるとバレた。
その上、俺が学園の教師に相談させた。

その事を知った政府はデュノア社に責任をなすりつけようとしたの
だが……それは失敗した。

先手を打って榎篠技研が匿名で『フランス政府がデュノア社を脅迫
した証拠』をマスコミやネットに一斉放出したのだ。

なんでも、技研に社員を頼むと言ったら嬉々として『潰させない』
と活動を開始したとの事。

その結果政府は非難の対象となりデュノア社擁護の機運が高まって
行き遂には政府の中から逮捕者がでるに至った。

そしてしがらみの大半が消えたりシャルルさんは全てをシャルルに
告白したという訳。

話を聞き終わって、『リシャルルさんが庇って無かったら俺、墜ち
てたかもな』と思った。

だって、俺は色々あり余る十五歳男子だぜ？

シャルルみたいな可愛い子に迫られたら抑えきれない自信は全くない。
なんとなくだが墜ちた数日後に俺の首が飛びそうだ。文字通り、物
理的な意味で。

筭と同室だった時だって、頑張つて抑え込んだんだぞ？
積極的に来られたら限界突破するっての。

「…それでね、今度フランスに帰ったら三人で一緒に墓参りしよう
って…」

「良かったじゃないか」

「……うん」

ちやぶ、と音がして背中に触れていたものが離れた。

そのままちやぶちやぶと音が続き

びと……

シャルルの手が俺の背中に当てられた。

「ッー」

そのまま手は俺を抱きしめるように動き、シャルルの華奢な体が俺
の背中に密着してくる。

……これはヤバい。

心臓が過労になりそうな位にバクバクいってるぞ……

「…それでね、お父さんが『嫌ならば学園を退学してもいい』って。フランスで、デュノアとは関係の無い『シャルロット』という一人の女の子として生きたいのなら、手は尽くすって…」

シャルロット…それがシャルルの本当の、おそらく母親が与えてくれた名前なのだろう。

「それで、どうするんだ？」

「僕は、学園に残るよ」

「そっか」

「一夏が、『ここにいろ』って言うてくれたから。僕は、そんな一夏の居る『ここに居たい』って思うから」

「そ、そっか」

そう言われると、なんだか気恥ずかしい。

「…それとね、これはお願いなんだけど……」

「ん？」

「僕の事は、シャルロットって呼んで」

「本当の名前で、か？」

「うん。お母さんが付けてくれた、大事な名前だから」

「判った。シャルロット」

「うん」

返事をしたシャルル　じゃなくてシャルロットの声は、なんだかとても嬉しそうで、いつもの屈託のない笑顔を浮かべているんだろ
うなど、顔を見なくても判った。

「と、ところでなんだが、こ、この体勢は正直色々とまずい事態が
起こり得るんだが……………」

今までは話の重さと意識を外せていたから大丈夫だったのだが、意
識し始めてしまった今は俺がこの二ヶ月の禁欲生活で培った堅牢な
精神で押しとどめている状態だ。

一般人ならば反応しまくりで大変な事になっているだろう。

「あ、ああつ、うん！そ、そうだね！」

シャルロットが慌てて俺から離れてゆく。

内心、惜しくもあるがあのままでは理性が決壊してしまいそうだ。

「俺は先が上がって涼んでるから。正直、逆上せそうだ」
もちろん、湯にはない。

「あ、うん。わかった。」

俺は極力シャルロットの事を考えずに脱衣所へと移動する。

「……………はあ、正直キツイわ」

背中にあたっていた柔らかさとか、温かさとか……
男としては嬉しい限りなのだが、

「俺、よく我慢したもんだな」

微かに鉄の匂いがするのはのぼせたせいだと信じたい。

十分に涼んで着替えを終えたのがその十分後、大浴場近くの自販機で飲み物を買って喉をうるおしている処にシャルロットがやってきたのがその更に五分後の事だった。

「お待たせ」

「おう、それじゃあ戻るか」

濡れた髪が妙に艶やかだとか、フラッシュバックしてくる感触やら曲線やらに悶々としつつもなんとか表情には出さないのでおく事に成功した。

一応教職員　千冬姉と山田先生は酔いつぶれていたので空に二人とも上がった事を伝えてから俺たちは部屋に戻った。

それから他愛もない話を少ししてから眠りに着いたのだが、疲労故かそのあたりの記憶はあやふやだった。

#32：『親の心』を子が知る時（後書き）

シャル関連のネタばらし回でした

オペレーション パンドラにおける『パンドラの箱 ギガ盛り希望
抜き』の送り先はフランス政府でした。

デュノア社の社長を悪人にする人も結構居ますんで、ウチのデュノ
ア社長と社長夫人は良い人に見えました。

オマケに正妻とシャル母は親友とか、妻公認の不倫とか、凄い事にな
ってますけど

#33：リ・スタート／修羅の降りた日

「side：一夏」

翌朝、朝のホームルームにシャルロットとラウラの姿が無かった。

ラウラは昨日の一件の怪我とか事情聴取とかだろう。

シャルロットは空に呼ばれたみたいで朝食のあと食堂で別れたんだが……

「みんな、おはよう」

と、そこにいつも通りにダークブルーのスイツにスラックス、水色（本人は空色だと言ってる）のネクタイにIS学園の校章があしらわれたネクタイピンという格好の空が出席簿片手に現れた。

「織斑先生と山田先生は少々体調がすぐれないそうなんで遅れてきます。」

俺は思う。

きつと、二日酔いだ。

「で、重大なお知らせが有ります」

「重大な……」

「お知らせ？」

ごくり、とクラス中が息を飲む。

空が廊下の方に目配せすると、すぐに教室のドアがノックされた。

もしかして、また編入生か？

と、思っていたら

「失礼します」

…あれ、おかしいな。

ここにはいないハズのシャルロットの声がしたぞ？

俺の耳がおかしいのか？

ドアが開き、スカート姿のシャルロットが教卓の横までやってきた。

スカートのから覗く足はなんと目の毒だ。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしく申し上げます」

俺を含むみんながぼかーん、とする中でシャルロットは自己紹介をして礼儀正しくぺこり、と頭を下げた。

「シャルル君はシャルロットさんでした。まあ、理由は馬鹿共の意地とかさういふかなり下らない話なんでここでは言いませんが。寮の部屋も変わるのでその時は出来れば手伝って上げるように」

空の捕捉が入ってようやく教室の中が動き始めた。

「え？ デュノア君が、女？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは」

「ちよつと待って！ 昨日って確か男子が大浴場使ったよわね！？」

一気に喧騒に包まれる教室。

あつという間に教室全体に伝播したそれは異様な熱気を放っていた。

……………なんか物凄く命の危険を感じるぞ

と、タイミング良く

『ばしーん』とドアが吹き飛んだ。

漫画みたいに、勢いよく吹っ飛んだそれは空への直撃コースをたどっていたが空は難なく受け止めた。

「一夏ッ！」

吼えるように俺の名前を呼びながら現れたのは二組クラス代表にして中国国家代表候補生。

俺のセカンド幼馴染である鳳鈴音。

その表情は烈火の如き怒り一色。背後には昇龍が見える。

「死ねえええッ！」

ISアーマーが展開され同時に両肩の衝撃砲がフルパワーで解放される。

これ、死んだな

ある意味では数秒前に感じた危険が正解だったので喜べるのだが、正直自分の死を喜ぶほど終わってはいいない。

明日の朝刊の見出しはきつところだろう。

『哀れ、高校一年生男子。同級生女子に殺害される。』
そして続く文面はこうだ

『死体は原型をとどめておらず、目撃したクラスメイトは口ぐちに悲しみの声を漏らした』
『ミンチでした』『トマトケチャップでした』『地面に落ちた柿でした』『あるいはイチジクでした』『むしろザクロでしょ』『いいえ、トマトよ』『敢えて言おう、破裂したトマトジュース缶である』と

って、何新聞記事で会話してんだよ。しかも最後のはネタ過ぎ

ズドドドドーン

衝撃砲が炸裂する音が教室に響きわたる。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ」

怒りのあまりに肩で息をする鈴。

その姿はまるで毛を逆立てて怒るネコの様で　　って、あれ？

俺、生きてるぞ？

めそうになつたばかりの鈴も啞然としていた。

「お、お前は……お、お前を私の嫁にする！ 決定事項だ、反論は許さん！」

「……………嫁？」

俺の疑問百パーセントオーバーな様子にラウラが気付いたのか

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いたのだ。故に、私はお前を嫁にする」

誰だそんな局地的な常識、一般にとっては非常識を教えたのは。

ゾクリ、

「あ、あ、あ……………」

パクパクと口を開け閉めして声にならない声を漏らす鈴。

その様子はまるで金魚なのだが、俺にはどうしてもピラニア辺りが獲物を前に顎の体操をしているようにしか思えない。

その心は

「アンタねえッ！」

もうすぐ、牙をむいてくるだろうから

ジャキーン、と衝撃砲が再度展開される。

「ま、待て！今回に関しては俺は被害者サイドだ！」

「問答無用！どうせアンタが悪いに決まってる！絶対、全部、アンタが悪いっ！」

「なんて理不尽ッ！」

俺は生命の危機から脱する為に教室の後ろ側出入り口からの脱出を図る。

ハッ、！？

危険を感じて足を止めると目の前をレーザーが通り過ぎた。

恐る恐るレーザーの発振源の方向に顔を向ける

「あら、一夏さん。どこにお出かけですか？ わたくし、実はどうしてもお話ししなくてはならない事があります。ええ、突然ですが急を要しますの」

セシリアが、《スターライトMk・III》を手にゆらり、と立ち上がった。

ひいつ、笑顔になんだけどしっかり口元が引きつって血管マークが大量発生中だ。

しかもその背後ではビットが絶賛展開中。
もうすぐISアーマーも形成されるだろう。

コレはマズイ。

俺は廊下への脱出を断念して窓から飛び降りる事にする。

白式があるし、二階からなら飛び降りても受け身は取れるハズ

だん、と目の前に巨大な日本刀が突き立てられた。

あ、こら。刀で地面を刺すんじゃない。刃こぼれしたり、さびたりするぞ。

「一夏、貴様どついう事か説明してもらおうか……」

「待て待て待て！説明を求めたいのは俺の方で おうわあっ！
？」

聞く耳持たんと言わんばかりに薄紅色のIS《舞梅》という甲冑を纏った筈が展開したもうひと振りの刀で鋭い斬撃を放ってくる。

わあ、馬鹿！辞めろ！俺も死ぬし教室が廃墟になるぞ！

身を低くし、なるべく机を盾にできるような体勢で逃亡を図ったのだが…

ぼすっ

「ほへっ？」

誰かにぶつかった。

半ば自動化したぎこちない動きで顔を上げたら、シャルロットと目があつた。

「にこっ」

声にだしてまで笑うシャルロットに俺の本能が出した判定は『赤』

『危険、至急退避せよ。 間に合わないけどな』だ。

自分で言ってるのも何だがかなり悲壮だ。

「一夏って、他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしたな」

「あの、シャルロットさん？俺はされたのであって、した訳では無いし。そして、なぜISを展開させていらっしやるのですか？」

「なんでだろうっね」

シャルロットの言葉と同時に左腕のシールドがパージされる。

そして露わになるのは六九口径パイルバンカー《グレー・スケール灰色の鱗殻》。
通称『シールド・ヒアース盾殺し』。

「はは、ははは………」

人間は極限を超えると笑うしかなくなるらしい。

絶対的な死を前に俺は

「はい、そこまで」

パイルバンカーを俺に叩きつけようとしたシャルロットが止まり、衝撃砲を撃とうとしていた鈴が止まり、ビットを展開して俺に狙いをつけさせていたセシリアが止まり、刀を手に今にも飛びかかりそうな筈が空中で止まり、ついでにラウラも止まる。

「篠ノ之箒。」

「は、はいっ」

「セシリア・オルコット」

「な、なんでしょう」

「鳳・鈴音」

「ひいつ」

「シャルロット・デュノア」

「は、はい……」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「は、はっ!」

物凄く冷たく底冷えする声で一人ひとりの名前が呼びあげられる。それに対してそれぞれ、返事をする。ラウラに至っては最敬礼までした。

「授業終了後、副寮監室まで来る事。なお、それまで織斑一夏への接触を禁ずる。」

「」「」「」「は、はいっ!」「」「」「」

「…よろしい。それじゃあ席に戻るように。鳳さんも自分のクラスに戻る」

全員が大人しくEISアーマーを量子変換して席に、鈴は自分のクラスへと戻ってゆく。

「よし、それじゃあ気を取り直して出席を取るよ。相川さん」

「は、はいっ！」

始まった通常通りのホームルーム。けれどもいつものとは違った、緊張感に満ちたホームルームになってみんなドッキドキだっただろう。

俺も、ドッキドキだった。但し、別の意味で。

* * *

「side…」

階下でそんな騒ぎが起こっている頃、千冬は屋上で携帯電話を片手に色々と考えていた。

ルルルル、ルルルル……ガチャ

『も、もすもす、ひねもす終日っ？』

ぴ、っー、っー、っー…

ふざけ切った声に千冬は思わず電話を切る。

電話を切って、相手のふざけぶりに呆れかえり、やはり用件は果たさないとならないのもう一度かけ直す。

ルルルル…ガチャ

『はい、みんなのアイドル、篠ノ之束。ここに　　ああ待って待って！ちーちゃん！切らないで』

千冬が二度目の『通話終了』ボタンに指を伸ばしかけたところで電話相手…

幼馴染にして同じ義兄あにを持つ義姉妹きょうだい、そして共犯者でもある篠ノ之束が謝って来た。

「…その名で呼ぶな。いい加減」

『わかったよ、ちーちゃん』

全然判って無いな。

そう思いながらも千冬は用件を済ます事にした。

小学生時代からの古い付き合いだが、その頃から千冬にとって束は迷惑かつ自分が見張っていないとすぐに孤立する、手のかかる存在であり、数少ない友人であった。

「……まあ、いい。今日は聞きたいことがある」

『なにかしらん』

「お前は今回の件に一枚噛んでるのか？」

『今回？ はて』

その声色からして、本当に判っていないらしい。

「VTシステムと、舞梅の事だ」

『VTシステムね。 あんな不細工な代物、私が作ると思っかな。 あんな、想いを汚すような代物を』

「まあ、それは大体予想がついていたがな。 で、舞梅は？」

『アレについても、私は関わって無いよ。』

「そうか……」

千冬としては、まるで狙ったかのように幕の手に渡り、そのまま専用機と化してしまった事から束の仕業だと考えていた。

だが、どうやら違っらしい。

『ああ、あのシステムを作った研究所はつい二時間くらい前に閉鎖されてもらったから。 ああ、大丈夫。 物凄く性質タチの悪い風邪をコンピュータにひいてもらったただけだから』

物凄くタチの悪い風邪、そしてその対象がコンピュータである事から推測できるのは、コンピュータウイルスだ。

恐らく全てのコンピュータがウイルスに感染し使い物にならなくなっているのだろう。

当然、データは全損している筈だ。

『ちーちゃん』

「なんだ」

『舞梅を作ったの、ちーちゃんは誰だと思っ？』

「…私はお前だと思っていた」

『けど、違っていた。他に考えられるのは？』

「順当に行けば榎篠技研だろう。純粹に、箒の手に渡ったのは事故だった……お前はと思う」

『……実はね、私の所に舞梅の設計図と実機があるんだ。まるで、お前ならどう改良する？と言わんばかりに』

「…何？」

『いつくんの白式の時も、何処からともなく調達されてきた、汎用性だけは高い素体とナンバー001のコアが送りつけられてきた。』

「……………何が言いたい」

『これは私の予想なんだけどね……………』

「勿体ぶるな」

『白式の調達も、舞梅を作ったのもやないのかな』

あつくんじ

千冬な、思わず携帯電話を落としそうになった。

「バカな、アキト兄さんはもう」

『けど、考えてみて。ちーちゃんの暮桜、いつくんの白式、篝ちゃんの舞梅。全部、私に送り付けられてきた素体を私が改造したモノなんだよ？舞梅はこれからだけど』

消息不明になっている東にISを送りつけられるような人物は、千冬の心当たりにも一人しかいなかった。

『きつと、あつくんは生きてる。それも、凄く近くで』

「何故、そう言える。」

『榎篠技研』

「何？」

『何故か、榎篠技研に私の為の秘密研究室があって予算も付けられるんだ。おかげで色々助かってるんだけど』

「……それで」

『榎篠って、榎村、篠ノ之の略なんじゃないかって、思うんだ』

「榎村、篠ノ之……………それはつまり……………」

『あくまでも予想だけど、あつくんと私が、ちーちゃんたちの為のISを作るために用意された場所なんじゃないのかって』

「……………」

『そして、そのヒントの一端はちーちゃんが持つてる筈』

「……………ちーちゃん?」

『榎篠技研でテストパイロットをやってる子。今は学園で教師もやってるんじゃないのかな』

「ああ、千凧か」

『うん。空だからちーちゃん。　思うに、なんだかあつくんに似てるんだよね。』

「……………それは私も思った。一夏や箒も同じくな」

『でね、ちーちゃんは副所長さんが、所長がどこからか連れてきた』
『としか説明されてないし、過去の足取りも判らないんだよ?』

「お前でもか」

『悔しいけど。それに、所長は誰も見たことも無いし名前も知らない。ますます怪しいでしょ』

「…そうだな。私の方で千凧にはカマをかけてみる」

『なにか判ったらまた電話チヨウダイ。判った事なくてもいいけど。私は所長について調べてみるから』

「ああ。ではな」

『うん、篝ちゃんたちにもよろしくね。って篝ちゃんは昨日の夜に”専用機を持つ事になったからしばらく預かっててくれ”って電話くれたんだっけ』

ぷっつ

電話を切ってポケットに仕舞い、千冬は上を見上げた。

雲ひとつない、穏やかな大空。

だが、千冬にはそれが嵐の前の静けさにしか見えなかった。

「…さて、副担任に任せツきりになってしまった教室の様子を見に行くか」

と、受け持つ一年一組に向かったところ、教室の中はしん、と静まり返っていた。

ただ、ペンを動かす音のみである。

こっそりと様子を窺って見たら、教壇に立っているのは空だった。

物凄くイイ笑顔で、物凄い威圧感を放ちながら。

いつもは騒がしい生徒たちも委縮しているようだった。

「……………あいつら、あの千凧をあそこまで怒らせるなんて、なにをしでかしたんだ？」

頭が痛くなる思いだった。

#33：リ・スタート／修羅の降りた日（後書き）

予想以上に千冬さんと束さんの電話のシーンが長くなりました。

原作だとその後には簿が専用機を求めて電話をしますが、絶海の簿は『姉が用意してるであろう専用機』を受け取る前に専用機持ちになっちゃったので無くなりました。

#20で簿の言っていた『アレ』とは、原作よりも姉妹仲の悪くない篠ノ之姉妹の姉が用意しているであろう（というか、IS学園に入学した時点で用意されていた）機体でした

……………ちよつと無理矢理過ぎたかな？

#34：『力』と『心』（前書き）

書いてて『ぶっちゃけ無くても良いんじゃないのかな』と思いましたが、かき上げたので上げておきます。

#34：『力』と『心』

「side：籌」

授業が終わってすぐ、私たちは空の部屋、副寮監室へと連行された。なんとか逃げ出そうとした鳳はAICなのか空中に逆さ吊りにされた上での強制連行だ。

そして部屋に着くなりそれぞれの専用機が取り上げられ、この間はソバ屋と化していたリビングダイニングキッチンを通り過ぎたその奥にある空の私室で

「と、言う事から専用機を持つという事は一人で相当の軍事力を持つという事でありそれ相応に責任が出てくるという事でもある。故に」

説教&『専用機持ちに課せられる責任と義務、及び専用機持ちの心構え』についての講義を受けさせられていた。

当然正座で。

ちなみに説教はつい先ほどまでの二時間。

講義が始まると同時に一夏がやってきたのは一緒に受講する為だろう。

但し、向こうは被害者なので胡座が許されており、なお且つ机代わりに卓袱台、更には飲み物まで出されている。

確かに、私たちのやった事は少々やり過ぎだったとは思いますが、この

扱いの差は……

「と、言う事。判った？」

「おう」

「……はい……」「……」

判った？と聞かれて一夏は元気よく、私たちは力なく返事をした。

それを見て空はにっこりと、それはかわいらしく、まるで悪魔のように笑った。

「それじゃあ、正座を解いていいよ」

そう言われて、私たちを覆っていた力場が消える。

「……ひぐうっ！」「……」

実はA I Cで正座の姿勢を保持され続けていたのだ。

ただし、姿勢の維持以外の事はされていないので当然、足にクる。

姿勢保持の強制力が無くなり、微妙に体勢がズレた事であるの何とも言えない苦痛な感覚に襲われる。

その衝撃に四人とも前に蹲って、まるで頭を垂れた土下座に近い体勢になっている。

私は正座慣れしているし、『正座で説教 二時間』とかはアキトさんや父にされる事もあったからそれほどでもないが、他の四人は今にも死にそうな位になっている。

『動きたくても動けない』
そんな状況だ。

そこに、につこりと笑った悪魔は追いつちをかけた。

否、かけさせた。

「大変そうだね。マッサージしてあげるよ」

「え？ こう言う場合は放置が一番」

「マッサージ、してあげるから、一夏は黙って。」

「ハイ」

「ついでに箒は対象をしつかりと抑えておく事。いい？」

「…ハイ」

許せ、みんな。

おそらく、コレも含めての罰なのだろうから…

「それじゃあ、最初はボーデヴィツヒさんから行ってみようか」

「すまん、ラウラ。」

「き、気にするな…上官命令は、絶対だからな……」

息も絶え絶えなラウラが足を投げ出した状態で椅子に座らされる

そのマツサージ開始後に暴れ出さないように抑えるのが私の役目だ。

「それじゃ、いつくよー」

「ひゃぐうつ!?!」

空の手がラウラの足に触れた途端に物凄い悲鳴が上がった。

「だ、大丈夫か?」

思わず私はラウラに尋ねた

「こ、この程度…軍の拷問耐性の訓練に比べれば……………」

「どンドン行くよ〜」

「あぁっ!、あっ、あっ!、あぐうつ……………!」

抑える私は物凄い罪悪感に襲われる。

そして、その拷問まがいな事を『正座を崩してしびれを少しでも回復させる』事も出来ずに眺める残りの三人は絶望に満ち満ちた表情を浮かべていた。

傍から見てるだけの一夏も、なんというか『冥福を祈る』という感じの様子になっていた。

* * *

「side…一夏」

「 酷い目に遭いましたわ」

「 まったくよ」

鈴とセシリアがぶつぶつとなにやら呟いていた。

そうか、お前らにとって俺を殺しかけた事は『正座で説教され、痺れ切った足をもまれる』という罰を受けるほどの大事じゃないってことなのか。

「だが、あのマッサージのおかげで快復は早かったぞ」

「そうだね。すぐに歩けるようになったもんね」

その代わりに物凄い苦しんでたけどな。

で、そんな中で唯一平然としていた…というか正座慣れしていたせいでそれほど痺れる事なかった筈はというと…

「くっ」

「ほらほら、刀ばっかりじゃ削り負けるよ！」

空の教師権限で利用時間終了後のアリーナを開けての模擬訓練戦闘をやっていた。

相手は空で。

当然ながら筈は俺を含めた専用機持ち全員の中で一番操縦経験が少ない。

故に、こんなことしてるんだが……

箒、心が折れないといいなあ……

箒はさつきから、得意の剣術を生かす事も出来ず、ただアウトレンジからの射撃に封殺され続けている。

俺の白式とは違って箒の舞梅には腰にブラスター エネルギー砲が付いている。

それに拡張領域パスロットが空いてるからしてアサルトライフルなどの射撃兵装も量子変換されているので射撃戦もできるのだが……

「まだまだっ！」

箒は何とかの一つ覚えみたいに刀で勝負に出ようとする。

ああ、馬鹿。

イグニッション・ブースト・イグニッション・ブースト
俺が瞬時加速に短距離瞬時加速、スラスターの左右交互噴射といった回避・接近機動を駆使しても今だに一太刀入れられてないんだぞ？

そんなバカ正直に突っ込んで行ったら

キュポっ

「ひあっ!?!」

その直後、舞梅は爆炎に包まれた

「ああ、やっぱり」

せめて瞬間加速が無いと接近前にグレネードでドカン、とやられてしまう。
イグニッション・ブースト

「いつぞやのセシリアと鈴のやられ方と一緒にだね」

「あの時は二対一で足の引っ張り合いをするように誘導された結果で、アレは回避機動も自由な状況での直撃だがな」

冷静なシャルロットとラウラ。まったく容赦のない。

ほぼ同時に撃墜された舞梅がぐしゃっ、と墜落した。

……………大丈夫か？

そのすぐ後に篤は復活したが、『反省会』と称された国家代表候補生たち 要はセシリア、鈴、シャルロット、ラウラによる容赦ない指摘タイム（袋叩きとも言つ）に突入し凹まされていた。

ちなみに俺も凹ませる側だったりする。

一応、刀一本での戦闘は俺の専門分野だからな。

* * *

「side: 篤」

辺りが暗闇に包まれる中、私は寮の屋上で一人佇んでいた。

見つめる先は左手首にある、待機状態の『舞梅』。

「私は……」

降って湧いたチャンスによって専用機を得た。たとえそれが最新の第三代型ではないとしても、やや近接向きで堅実な性能は私にとって望ましいものだった。

だが、IS操縦者としてみた私はただの素人に毛が生えた程度。

今日の訓練でも、全く手も足も出ずに仲間たちから盛大に辛口な駄目だしをされてしまった。

あの、一夏にさえ。

「ああ、こんなところに居たんですか」

能天気な声が聞こえてきて、振り返る。

そこに居たのは、声ですぐ判る

「山田先生？」

「こんばんわ。篠ノ之さん。悩み事ですか？」

「まあ、そんなところです」

「ちょっと横、失礼しますね」

並んで、夜闇に埋もれた風景を眺める山田先生。

「
……」

ただただ、沈黙だけが続く。

「舞梅、良い機体みたいですね」

「はい。私なんかには勿体ないくらいです」

「じゃあ、私が貰っていいですか？」

「え
」

反射的に肯定の返事を返そうとして、留まった。

確かに、元は代表候補生だったという山田先生の手に渡った方がデータは良い物が集まるだろう。

元々舞梅は切ってあったハズのフィッティングが作動してしまっただが為に預けられたモノだ。

一度、イニシャルライズ初期化する事によって蓄積データこそ喪われるがその前に吸出しを行ってしまうえば問題は無くなる。

だが、

『舞梅のこと、よろしくね』

軽い一言ではあったが、私は舞梅を任され、託されたのだ。

教師相手とはいえ、舞梅を譲ってしまうのは『篠ノ之箒』を信用して託してくれた人に対する裏切りになるのではないだろうか。

「やだなあ、冗談ですよ。冗談」

私があまりに真剣に考え込んだからだろうか。

山田先生は苦笑いを浮かべながらそう言ってきた。

「篠ノ之さん。専用機を持って、一番最初に想った事ってなんですか？」

「？ 思ったこと……ですか？」

思い返してみる。

初めて舞梅に乗った時は、訓練機と同じくフィッティングが切られているのに『妙に馴染んだ』。

それは切られていた筈なのに働いたフィッティングのせいだとしても、妙にしっくりくる。

まるで、私の為に設えたかのような感覚に陥りそうになるくらいに。

そんな舞梅が私の専用機として託されると知った時、歓喜した。

これで、私も同じ位置に立てる…と。

「私の時は、これなら『何でもできる』って思ったんです。まあ、そのすぐ後に先輩にぼこぼこにされましたけど」

「山田先生も、ですか？」

「専用機を初めて持った人への洗礼…みたいなものですかね。専用機を持って、その力に溺れないようにするための」

「力に、溺れる……」

私の中で、何かがざわめいた。

あれは、何時だったろうか。

剣道の大会に出て、相手をぶちのめすだけぶちのめして優勝して、その後で千冬さんに叩きのめされたのは。

そうだ。小学一年生になってすぐのところだ。

一夏が道場に通うようになって、みるみるうちに強くなって、気がつけば追い越されて。

勝てない事が腹立たしくて、大暴れしたんだ。

単なる八つ当たり。

確かあの時、千冬さんはこう言っていた。

『力を全て振り絞るは良い。だが、振り回されるくらいならそんな力、捨ててしまえ』

その時はムカツときて、一戦やらかして、見事にボロ負けして。

後になって聞いた話だと千冬さんも小学生の時に同じ事をやらかして、アキトさんが同様に叩きのめして諭したらしい。

それ以来、剣を取る時は無心になるように心掛けた。

『そこに勝ちも負けも無く、ただ自分と相手が居る』

その心を、どこに置き忘れてしまっていたんだろう

「ありがとうございます、山田先生」

「はい？」

「吹っ切れました。」

私は深く礼をして、部屋に戻る事にした。

勝てないなら、勝てるように修練を積みばいい。
その為の格好の目標ならすぐそばにいる。

「先ずは、一夏。お前からだっ！」

ぐっ、と拳を握りしめ

「ん？呼んだか？」

「いいいいいい、一夏あつ！？」
一気に抜け落ちた

「何、そんなに驚いてんだよ」

「い、いや、突然出てこられたら驚くだろうが！」

「そ、そっか。悪い。で、どうしたんだ？」

「少し、夜風に当たっていた。あとは決意表明だ」

「決意表明？」

「すぐに追いこしてやるからな、首を洗って待っている。一夏」

そう、私が宣言したら一夏はキョトンとしたあと、獰猛な笑みを浮かべた

「おう、受けて立つぜ。俺も、そうやすやすと負けてやる気はねえぞ」

「当然だ。全力でなければ、意味が無い」

それに対して、私も笑い返す。

好敵手を前にした、武人としての笑いを。

一夏と別れ、すぐに私の頭は『いかにして、一夏に勝つか』を考え始めた。

やはり、零落白夜は凶悪だ。

『近づかない、近づかせない』を柱にしないと、如何に優勢でも偶然の一撃が命取りになる。

「……剣の腕は拮抗しているからな。やはり、銃か」

それなら、空はもちろん、シャルロットか簪、あるいはラウラでもいいだろう。

早速明日にでも、教えを請うとしよう。

一夏に、勝つために。

#34：『力』と『心』（後書き）

ホームルーム中に暴れた愚か者どもがどうなったか、と筈の決意表明の回でした。

実は山田先生に落ち着くまでに二度、千冬verで書いて、不要なフラグまで張ってしまったたりネタばれし過ぎになってたりしてました。

そう言う意味では割と苦労しました

次は、恐らく第三巻に突入すると思います

#35：乙女の心は晴れ時々曇り

「side…」

~~~~~

「悪いな、手伝わせてしまって」

「気にするなよ」

時刻は夕刻、場所は廊下。

放課後となり人気ひとけの失せたそこを一夏と箒は並んで歩いていた。

二人ともその手にはもうすぐやってくる学校行事『臨海学校』に付いてのプリントがある。

「だが、良かったのか？ 今日ハセシリア達と街へ出るハズだったのだろう？」

「いいんだよ、別に。鍛練に集中したいって断っておいたし」

「最近のお前は鍛練、鍛練。…鍛えてばかりだな」

「まあ、な。男が、好きな女よりも弱くちやかっこ付かないだろ」

少々顔を赤らめて言う一夏に、箒はむっとした。

「そうか。一夏は、好きな女が居るのか。どんな奴だ？」

「…そうだな。少し頑なで不器用だけど、芯が通ってて真っすぐで美人。おまけに強い」

「……………」

「何、不機嫌になってるんだよ」

「別に。で、誰なんだ？」

「……………きだよ」

「何だ、はっきり言え。男だろう」

言いにくそうにする一夏を箒は一喝する。

「箒、お前だよ」

「ッ！」

お互いに、赤く染まる頬。

それは夕日のせいだけでは無い。

「…一夏」

「…箒」

二人きりの廊下で、互いに相手のみをその瞳に映す。

そこに言葉は不要。

橙の世界で、二人の影が徐々に重なって

~~~~~

「わああっ!？」

余りの恥ずかしい光景に筈は夢の世界から、現実には逃げ込んだ。いうなれば『現実逃避』ならぬ『現実へ逃避』だ。

「はあ、はあ、……夢、か」

鼓動は激しく、バクバクと音をたてている。顔は真っ赤で沸騰寸前と言ったところか。

落ち着くために別の事を考えようと時計に視線を向ける。

現在時刻、午前五時。

少々早いが起きて朝稽古をしに行くにはまあ妥当な時間だろう。

隣のベッドにはルームメイトである簪がまだ夢の中なので静かに胸着に着替え、荷物を纏めて寮の裏へと向かう事にした。

(心頭滅却、明鏡止水、沈まれ私の心ツ！)

………なお、その一時間半後。

別の一室でも似たような光景が繰り広げられていたがそちら(仮称 S・Dさん)は二度寝という選択をし寝坊フラグを立てていたが蛇足である。

* * *

「side：一夏」

時は朝飯時、場所は一年寮食堂。

「うむ、うまい」

「そうだな」

俺は部屋に、更には俺のベッドにまで侵入してきたラウラに『常識』
についての語り合った後、こうして一緒に朝飯を食べていた。

実を言うと筭と同席（というか、隣）になったのだが、筭は俺が席
に着いた一分後には食事を終えて立ち去って行ってしまった。

顔が赤かったのは、風邪か何かだったのだろうか。
だとすれば余計にゆっくりと食べるべきなのだが。

そこに

「わああっ！遅刻、遅刻するッ！」

不意に聞きなれた声が珍しい調子で食堂に駆け込んできた。

声の主は慌てた様子で余っている定食から一番近くにあったモノを
手に取り、空いている席を探す。

「よ、シャルロット」

「あ、い、一夏。おはよう。　　ラウラも」

ちょうど筭の居た場所が開いていたので手招きして呼び寄せる。

それにしても珍しい事があったものだ。

時間にすっかりしているシャルロットが遅刻ギリギリの時間に食堂に駆け込んでくるだなんて。

「どうしたんだ？寝坊でもしたのか？」

「う、うん、ちょっと……その、寝坊……」

「珍しいな。シャルロットが寝坊だなんて。夜更かしでもしたのか？」

「う、うん。ちょっと……二度寝、しちゃったから……」

食べるので忙しいのか、シャルロットは妙に歯切れの悪い言葉で受け答えをしている。

しかも気のせいか、俺から少しづつ離れているような？

「シャルロット」

「うん？」

「なんか、俺のこと避けてないか？」

「そ、そんなことはないよ？ うん、ないよ？」

と、言葉ではそう言っているがどうも俺の方にシャルロットの注意が向けられているような気がするのだ。

先月、一ヶ月ほど同室だったせいかな、『なんとなく誤魔化そうとしてる』くらいは判る。

まあ、同じ事が筈にも言えるのだが。

「そうか？ならいいんだが…」

これ以上詰問しても無意味だし、鬱陶しがられるだろうからやめにしておこう。

それにしても……

「い、一夏？　ずっと僕の方をみてるけど、どうかした？　ね、寝癖でもついでる？」

「いや、特に変な処は無いぞ。ただ、先月はずっと男子制服だったから、改めて女子の格好をしてるシャルロットは新鮮だなあ、と」

「し、新鮮？」

「おう。似合ってるし可愛いと思っぞ」

「と、……言……、夢じゃ……子の服……くせに……」

ん？　なんか呟いてるぞ？

「夢？」

「な、なんでもないっ！　なんでもないよっ！？」

ぶんぶん付きだした手を振って否定してから、シャルロットは再び朝食に手を戻す。

俺はもう食べ終わったので食後のお茶を

ぎゅっ

「いてえッ！」

頬をつねられた。

「お前は私の嫁だろう。私の事も褒めるがいい」

そんなご無体な。

無理矢理引き出した褒め言葉は単なるお世辞だ

だが、この状況だといわない訳にはいかない。

ボタン連打とか、コマンド入力で抜け出せるなら抜け出したいが、そんな都合のいいもの存在するハズが無い。

…………アレしか、無いか

「えーと…………」

キーンコーンカーンコーン

言いだそうとしてチャイムが鳴った。

これは救われたのか…？

「って、予鈴だ！急げ　　って」

慌てて立ち上がったテーブルには俺一人。

ラウラもシャルロットも既に食堂を出て猛ダッシュしていた。

ぬわっ！？待て、お前ら。

「お、置いていくな！今日は確か空　　じゃない、千凧先生のS
HRだぞ！」

千冬姉と違い『遅刻即ち死』とまでは行かないが『逝かさず殺さず、
明鏡止水に至れる指導』を施される。

主に正座とマラソンで。

主に副寮監室の和間で行われるために、『一年寮副寮監室　和間』
は『生徒更生の間』の異名と共に恐れられている。

ちなみに、他学年への出張指導もあるそうだ。

一撃即死の千冬姉と真綿で限界寸前まで締め上げる空。

瞬時に楽になれる千冬姉の方が、まだマシという意見が大多数だ。

「私はまだ仙人になるつもりは無い」

「ごめんね、一夏」

おう、なんて奴らだ。

…まあ、犠牲と塩分は必要最低限が望ましいが、自分がその犠牲と
なるならば道連れは一人でも多く欲しくなるものだ。

そうこうしているうちに生徒玄関へと到着。
寮を出る時に外履きに履き替えて、校舎でまた内履きに履き替えて
と非常にめんどくさい。

できる事なら校内土足可にしてほしいモノだ。

もう人氣が殆どない。

「ほら、一夏っ」

上履きを履いて、誰かに手を握られた。

誰かと思えばシャルロットだった。

どうやら待っていてくれたらしい。

うん、一緒なら仙人修行も耐えきれぬ気がする。

「飛ぶよ」

「へ?」

聞き返そうとした瞬間、シャルロットの背中と脚に光の輪が広がり、
収束して弾ける。

専用機『ラファール・リヴァイヴ・カスタムEE』の脚部スラスト
ーと背部推進ウィングだけを実体化させた状態で

「おわっ!?!?」

ぎゅん、と体が引つ張られた。

本鈴間際の廊下には誰もおらず、ISの飛翔能力で俺とシャルロットはあつという間に教室のある三階に到着。

……しかし、その……なんだ。

ミニスカートで飛翔は辞めた方がいいと思う。

その…水色のアレが見えてしまった訳で…

「よし、もうすぐ　きゃん！」

あと少しで教室、と言つところで突然生えてきた黒い小さな壁にシャルロットは顔面を強打。

バランスを崩して転び俺は盛大に投げ出された。

一体何があつたんだ？

凄いい勢いで投げ出され、床に叩きつけられた俺は痛む体をおして状況を確認する。

シャルロットが顔面強打したのは、何の変哲もない出席簿だった。

物凄く嫌な予感。

それは、そう。

傘を持ってないのに雨が降りそう（しかも不可避）だった時の予感に凄く似てる。

「本学園はIS操縦者育成のために設立された教育機関だ。その為
どこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない。

が、しかし」

目を回すシャルルと投げ出された俺の間。

ちよつど一組の前扉の所に千冬姉が出席簿片手に現れた。

おいおい、待ってくれ。今日は空のSHRの日でまだ本鈴前だぞ。

すばぁんっ！

「きゃうっ」

すばぁんっ！

「痛ええっ！」

「敷地内でも許可されていないIS展開は禁止されている。意味は
判るな？」

「は、はひ……すいません……」

優等生のシャルロットが予想外の規律違反を犯したというのは中々
に衝撃的だったらしい。

みんな啞然としている。

ちなみにラウラは俺たちが怒られている後ろをすり抜けて難なく着
席した。

「デュノアと織斑は放課後、教室を掃除しておけ。二度目は反省文
提出と特別教育室で生活をさせるのでそのつもりで。ああ、当然だ
が千凧が監督だ。」

「はい……………」

なんとか回復したシャルロットと俺は意気消沈。

その後着席。

ちょうど座つてすぐにチャイムが鳴りSHRが始まった。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など、取ってくれるなよ」

そう、授業時間数としては少ないが一般教科：所謂『国数理社英』的なものも当然履修する。

中間テストこそないけど期末はあり、そこで赤点を取ると夏休みは連日補習となる。

教師にとつても生徒にとつても全くもって優しくない制度だ。だが、それはとりあえず置いておく。

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

そう、七月頭　　六日から八日の三日間の校外実習　すなわち、臨海学校があるのだ。

しかも三日間のうち初日は丸々一日遊ばせてくれるという。

もちろん海なのでそこは咲き乱れる十代女子。

先週から…早い人は告知されてすぐからテンションあがりっぱなし

で何人かはそれが原因で空に指導を受けた。

俺としては水着を買うのがめんどくさいというのが本音だが、それを素直にぶちまけたら鈴とセシリアに猛注意を受けた。その様子はマシガンの如く。

仕方なく買いに行く事になった。まあ、今週末にでも見に行けばいいか。

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生と千凧先生はお休みですか？」

クラスのしつかり者こと鷹月静寐さんのもつともな質問。

俺も実は気になっていた。

なんせ今日は千冬姉ではなく空のSHRの日だったのだから。

「山田先生と千凧先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。なので今日は二人の仕事を私が担当する。」

「ええっ！山ちゃんと空くん、一足先に海にいつてるんですか！？」

「良いなあ」

「ずるいつ！ 私にも一声かけてくれればいいのに！」

「あー、泳いでるのかなー。泳いでるんだろっな」

流石、咲き乱れる十代女子。

話題があればすぐに食らいつく。

「あー、いちいち騒ぐな。それに遊ぶ暇など二人には無いぞ。訓練で使用する海域にブイの設置、及びその海底に回収ネットの敷設」

人手は二人でも足りない位だと言っていたな。炎天下の肉体労働だ
がそれでもやりたいのか」

「
」

教室が一気に静かになった。

「よろしい」

鷹揚に頷いた千冬姉が教室を出て行くと同時に、一般教科の先生が入
ってきた。

さて、授業だ授業だ。

#36：夕暮れ、教室にて…

「side：シャルロット」

放課後の夕暮れ時…

僕は一夏と二人で教室の掃除をさせられていた。

朝の許可の無いISの展開の罰としてなんだけど……

「うーん、楽しいな」

なんて、一夏は鼻歌でも歌いだしそうな位に嬉々として掃除をやっていた。

「え？」

「いや、楽しいだろ、掃除は。特に普段使っている教室だと余計に」

「そ、そう？ 一夏って変わってるね」

掃除が楽しいだなんて………なんというか、ホントに変わってるなあ。

そんな事を思いながら手近にあった机に手をかける。

「ん、んん〜！」

それが、異様に重かった。

何が入ってるのだろうか？

「っと、無理するなよ。机運びは俺がやるって」

一夏が心配そうに声をかけてきた。

ちゃんと女の子として見てもらえてるといふ安心感と、頼りにされてないという悔しさが混ざる。

「へ、平気だよ。一応これでも専用機持ちなんだし、体力は人並みに」

なんとか持ち上げようとして、足が滑った。

いけない、と思ってバランスを取ろうとするけど、間に合いそうにない

「あぶねっ!」

背中が、あつたかい何かに触れた。

「…ったく、怪我したら元も子もないだろ。ほら、俺が代わるって」

「う、うん……。あ、ありがとう……」

背中から伝わってくる暖かさと、ちょっと堅い感触に僕の頭は過負荷のかかったPCみたいに発熱を始める。

いま、ぼく　　いちかにだかれてる。

嬉しいけどなんか落ち着かなくて視線がつい泳いでしまう。

「っと、わりい。離れる」

「あっ……………」

「夏がすまなそうに謝ってから離れる。」

思わず声が出てしまった。けど、『もっと』だなんて、恥ずかしくて言えない……………」

「…………別に良かったのに……………」

思わず想いがこぼれてしまった。

「え?」

「な、なんでもないっ!」

けど、面と向かって言うのはやっぱり恥ずかしい。だから誤魔化してしまう僕。

「?そっか」

不思議そうにする一夏。

けど、僕はそれどころじゃない。

心臓が驚くぐらいにバクバクいつてるし、たぶん顔にも出てる。
…変な顔になってないよね？

顔が赤くなるのは夕日の赤が隠してくれるはず。

そう思ったら、夢での光景が脳裡によみがえって来て、耳まで熱くなった。

きつと、隠しきれないくらいに赤くなってる

沈黙。

それが気まずくて、何か喋ろうと思うけど頭は空回りするばかりで言葉も出ないし話題も思い付かない。

「そういえばや」

「ひゃいつ!?!」

予想もして無かった先制攻撃に、咄嗟に返事をしたせいで声がおも
いっきり裏返ってた。

うつ
うつ……

「ど、どうした? 変な声出して」

「な、何でも無い。なんでもないよ？　ちょ、ちょっと考えごとしてたから、それだけ」

「ふーん、そっか」

特に疑問を抱いた様子も無く、一夏は机を運んでいく。

やっぱり、一夏って力持ちだな。

でも、運び終わったらこの時間も終わっちゃうんだよね……ちょっと勿体ない気がする

「で、気になっていたんだが」

「う、うん。なにかな」

「何かあったのか？」

「どきっ」

思わず口に出してしまうくらい、動揺した。

もしかして、一夏　判って言ってる？

「え、ええと、な、何の事？」

「ああ、悪い。言葉が足りなかった。先月のトーナメントの次の日にさ、あっさり女子に戻ってたからさ、何が有ったのかなと思ってな」

期待はずれだった。

やっぱり一夏は空の言う通り朴念神だよ。

「ええつとね、そもそもで男装は政府からの命令だったからね。それが撤回されたから僕も偽る事無く通う事になったんだ。」

あの日、政府がIS学園への編入届けを正式に再提出したからって言うのもあるんだけどね。

「へー、そうだったのか。それにしても急な話だよな」

「多分、偶然だよ。」

「成る程な」

なんか納得してる一夏。

でも、実はそれだけじゃないんだよ？

「あとは……………やっぱり、ちゃんと、女の子としてね……………一夏に見てもらいたかったから……………なんていうか……………」

「？」

「…ああもう！と、とにかく。一夏が原因なんだよっ！」

「そ、そうなのか？ そりゃすまん」

謝られた！？

「別に、謝られる事でもないけど……」

顔をそむけて、まだ赤い顔を隠そうとしてみたけど、きつと効果が無い。

「でも、なあ。ちゃんとシャルロットの事は女って見てるぞ」
「一気に、ときめいた。」

「えっ？ それって……」

もしかして……一夏は僕の事……

いや、待つんだ僕。

相手は『あの朴念神』にして『唐変木・ザ・唐変木』の織斑一夏、絶対に持ち上げたら落してくる。

さあ、シヨックに堪える。僕の心

「だって、男じゃないしな」

ヤッパリソウデスカ。ソウダヨネ。ダツテ、イチカダモン。

ホント、一夏ってわざとやってる訳じゃないから余計にタチが悪いんだよね。

『可愛い』とか冗談とかじゃなくて平然と言ってくるし。
その度に僕の頭は瞬間湯沸かし器、心臓はフル稼働。

でもまあ、その夕子の悪さが無ければ幼馴染だっという筈か、もしくは鈴と付き合ってたかもしれないからなあ……

期待させといて、そのまま放置だなんて……生殺しもいいところだよ。でも……言われるのは嬉しいしい、できれば僕だけに……って、思っ
のは、贅沢なんだろうか。

まあ、一夏だからなあ。

「ああ、あとさ」

「？」

「シャルロットの事、『シャル』って呼んで良いか？」

「えっ？」

突然の出来事に一瞬呆けそうになったけど、内容を理解できた瞬間に頭の中に一面のお花畑が広がった　　ような気がした。

「い、いいけど……どうして？」

「時々、つい『シャルル』って呼びそうになるんだよ。俺にとっては、『シャルロット』であった期間よりも『シャルル』だった期間の方が長かったからなあ。あとは、親しみをこめて、か」

まあ、理由（その一）は置いておく。

この際だからどっかに投げ捨てちゃおう。

けど、理由（その二）は……

「駄目か？」

「う、うん！いいよ！すごい！」

「そ、そうか。そんなに思い切り反応するなんて、気に入ってもらえたみたいでなによりだ」

「う、うん。……シャル、かあ」

思わず笑みが浮かんでくる。

脳内お花畑だと、三頭身のSD僕が四人くらい手をつないで踊ってる。

テロップは『しばらくおまちください』で。

ちよっとくらい、幸福感に浸らせてよ。ね？

「で、シャル。頼みが有るんだが」

「うん、なにかな」

今は物凄く気分がいいから、きつとよっぽどの事じゃなければきいちやうよ

「付き合ってくれ」

真面目な顔で迫ってくる一夏。

「えっ!?!」

僕は世界の止まる音を聞いた。

「それって……………」

「ああ、悪い。言葉が足りなかった。週末、買い物に付き合ってくれ」

止まった世界が、砕け散る音を聞いた気がした。

でも、待つんだ。僕。
絶望するのはまだ早いよ!

考えようによってはこれはデートのお誘い。
そう考えれば、まだ脈もある!

「う、うん。いいよ」

「そっか。ありがとな。ああ、なるべく言いふらさないでくれよ。
後が怖いし、大変だから」

「判ってるって」

『デートのお誘い＋二人だけの秘密』

そんな状況に、僕の気分は高揚しっぱなしだった。

#36：夕暮れ、教室にて…（後書き）

原作とは逆に『買い物だ』とこの時点で告げられたシャル。
ちよっとばかりプラス思考に頑張ってます

#37：休日、買い物、ドタバタ騒ぎ（前書き）

サブタイトルをH×H風にしてみた。

うん、思いつかなかったからなんだ

#37：休日、買い物、ドタバタ騒ぎ

「side：一夏」

「おー晴れたなー」

「そうだね。」

週末の日曜日。

天気は素晴らしいくらいの快晴という絶好の外出日和に俺は『ある女子』と二人で街に繰り出していた。

まあ、『ある女子』っていつでもシャルなだけどさ。

楽しそうに笑顔を浮かべるシャルは半袖のホワイト・ブラウス。その下にはライトグレーのタンクトップで、同色のふわりとしたテイアード・スカートの短さが健康的な脚線美を演出している。

なんとも、季節とシャルに合ったかわいらしい服装だ。

ちなみに俺はごく普通の薄い青の半袖Yシャツと長ズボンという服装だ。

流石に、制服で繰り出すのは中々にマズイものがあるからな。なんせ、『IS学園の制服を着ている男子』なんて俺一人だ。

悪目立ちしすぎるだろ。

「で、一夏。今日はどこに行くの？」

「ああ。臨海学校の水着と、ちよつとな」

「ちよつと?」

「まあ、適当に店を見て回るつもりだ」

「ん、わかった」

「よし、それじゃあ行くとするか」
俺は何気なくシャルの手を取り

「うん　　つて、一夏あッ!？」

「うん?　どうした?」

なんでそんなに慌てるんだ?

「ててて…手……」

「手?　ああ、駅前人が多いからな。はぐれたりしたら大変だろ」

「そそそ、そうだね。それじゃあ、仕方ないよね。それじゃあ、行
こっ!」

「お、おい、引っ張るなって」

急に歩きだしたシャルに引っ張られて俺も歩き始める。

「ん？」

ふと、なんだか見られてるような気がしてちょっと立ち止まる。

「一夏？」

……勘違いか？

まあ、シャルほどの美少女なら人目も引くし、一緒にいる俺に殺意のこもった視線の一つや二つは向けられるのは当然か。

「何でも無い。さ、行くぞ」

「うん！」

* * *

「side…」

「……………」

「……………少々、危なかったですわね」

駅前へと向かっていく一夏とシャルロット。

その姿を物影から窺うふたつの影があった。

一人は躍動的なツインテール、もう一人は優雅なブロンドヘア。

つまるところ、鈴とセシリアである。

ちよっとばかり勘が良くて（但し女性関係は除く）視線に鋭い一夏

に見つけられかけたがなんとか隠れていたのだ。

「……あのさあ」

「……なんですか？」

「……あれ、手え握ってなかった？」

「握ってましたわね。羨ましい限りですわ」

虚ろな目の鈴と若干引き気味のセシリア。

「そっか。 やっぱりそっか。 あたしの見間違いでもなく、白昼夢でも悪夢でもなく、やっぱりそっか」

握りしめた鈴の拳は既にISアーマーが部分展開していて準戦闘モードに入っていた。

「 よし、殺そう」

「り、鈴さん！そんな事したら空さんの拷も 着座説法（おしやめほう）が待ってますわよ！？」

なんとも恐ろしき十代女子の純情であった。

衝撃砲が砲身を展開。

衝撃砲発射まであと二秒。射線上に居る人は巻き添えにご注意あれ。

「あら、あれは……むぐっ？」

「し きゃ、むぐ」

いきなり物影に引き込まれたセシリアと鈴

ご丁寧に口まで塞がれもがもが、としか喋れない二人。

そして、二人をそんなふうにした犯人は何やら切羽詰まった様子だった。

そのまま一、二分ほどを緊張感と沈黙が支配し、ようやく犯人は「ふう」という溜め息と共に二人を解放した。

「い、いきなり何をするんですの!?!」

「一夏たちを見失っちゃうじゃない!　　って、アンタツ!」

「す、すまない。だが私の方も緊急事態だったのだ」

犯人は、ラウラだった。

だが、普段の怜悯な姿はそこに無く、なんとなくくたびれた様子だ。

「頼む、匿ってくれ」

素直にぺこり、と頭を下げるラウラに毒気を抜かれた二人は事情を聞く

「どうしましたの?」

「それがだな、「らーうーらーちゃん」「へうっ」
がっし、

「「あ
「

「駄目じゃない、突然いなくなっちゃ。さ、行くわよ」

「お、オルコット、ふ、鳳！助けッ
「

あっという間にラウラが拉致されてゆく。

その様子は売られに行く子牛 いや、狼に捕まった哀れな野ウ
サギだろうか。

「……なんだったの？」

「……さあ
「

鈴とセシリアは訳も判らず、とりあえずラウラの冥福だけは祈りつ
つ一夏の追跡を始める事にした。

「ちなみにその頃……」

タアン

「ヒット、右二〇。次弾込め」

「はいッ！」

筭は、空に観測手スポッターをしてもらいながら狙撃訓練をしていた。

* * *

「side：一夏」

「えーっと、水着売り場はここだな」

俺たちは駅前のショッピングモールの二階に到着した。

交通網の中心でもあるここは電車（地下鉄含む）、バスが通っておりタクシー乗り場も完備という、市内のどこからでも来れ、何処へでも行ける、そんな凄まじい場所なのだ。

そして、駅舎を含む周囲の地下街が全て地下通路で繋がっているショッピングモール　ここ、『レゾナンス』は衣食住すべてに通じる場所で衣は量販店からブランドまで、食は和洋中問わずに完備、住に關しても家具屋や電器屋などが入っている。

更に各種レジャー施設もあるので子供からお年寄りまで、幅広く対応可能という。

曰く『ここになれば市内のどこにもない』とか。

そんな複雑怪奇な場所だが、俺にとっては中学の頃はよく弾と鈴の三人で繰り出してきたので庭も同然、迷うことも無い。

「ところで、シャルも水着を買うのか？」

「そ、そうだね……一夏はさ、その……僕の水着、見たい？」

何故に俺に振る？

まあ、正直言えば 見たい。

シャルほどの美少女の水着姿だ。下手な雑誌に載ってるグラビアアイドルよりもキレイなんだろうけど

……後が怖い。

よし、ここは無難に行こう。

「そうだな…折角だし、泳ごうぜ。海は俺も久しぶりだから結構楽しみにしてるんだよ。それに、海に入らないと詰まんないぞ」

よし、これならば明言は避けてるから大丈夫なはずだ。

「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあ、折角だから新しいの買おうかな」
握る手にきゅっ、と力が入る。

まあ、痛くないが。

「それじゃあ、売り場が違うから三十分後にここでいいか？」

「あっ」

手を離すとシャルが物惜しそうな声を上げた。

まるで『欲しいモノがあるけど中々言いだせない子供』の表情を浮かべて俺をじいっと見つめてくる。

「ええと……どうかしたか？」

「えっ、あ、うん。何でもないよ」

「そうか？ それじゃあ三十分後に」

「う、うん」

こくん、と頷いてシャルは女性用水着売り場へと入って行った。

色とりどりの水着が飾られ雰囲気はそこだけ南国の様だ。

「っといけねえ。俺も選ばないとな」

と、言っても男物の水着は種類も多くないし色もそれほど多くは

「……随分と奇妙な色というか、奇抜な色が多いな」

色数は多いが、マトモなのがあまり多くない。

俺が選んだのは無難なネイビーのヤツだ。

それを買って、俺が待ち合わせ場所に行くと既にシャルはそこにいた。

「あれ？早いな。もう終わったのか？」

「あ、ううん。ちょっとね　その、一夏に選んで欲しいなって思ってた……」

そうか？

俺の意見は割と役に立たないと思うんだが…

だがまあ、シャルがそう言うならそうしよう

「それじゃあ、実物を見に行くか」

で、女性用水着売り場足を踏み入れた訳だが…うーむ、なんと
か別世界だな。

種類やデザイン、色数の多さに思わず尻ごみをしてしまう。

とはいえ、シャルに意見を求められている訳だから入らざるを得ない。

日曜日と言う事もあってそこそこに客（当然女性）がちらほらと見える。

当然、向こうも俺が入ってきたということですぐに気付いたようだ。

「そのあなた」

「ん？」

キヨロキヨロと周囲を見回してみたが俺とシャルくらいしかいない。

「男のあなたに言ってるのよ。その水着、片づけておいて」

と、名前もしらない相手からいきなり言われた。

ISが普及した　　というか、有名になって十年あまりで女尊男卑の風潮があつたという間に浸透した。

どの国でも女性優遇制度が設けられ、男はこうして街を歩いているだけで、見ず知らずの女性から命令される始末。

けど、俺は

「そう言うのは店員に頼むか自分でやってくれ。人にやらせてばかりいると、人間馬鹿になるぞ」

そういうのが大っ嫌いだ。

知り合いや手を貸さないとでき無さそうな人ならともかく、見ず知らずの相手に言われる筋合いはない。

それに俺にだって矜持プライドはある。

「ふうん、そう言う事言うの。自分の立場が判ってないみたいね」

そう言つて女性客は警備員を呼ぼうとする。

これで『いきなり暴力を振るわれた』とか言われたら問答無用で有罪確定。

冤罪である事も疑わずに刑務所行きだ。

……俺の場合は、研究所送りで生体標本の可能性も高いが。

とりあえず心配そうにしてるシャルにはこっそりとプライベートチャンネルを使って『他人のフリをしてくれ』と言っておく。

「どうしました?」

警備員がやってくる。

「こいつが私に暴力を」

「いいえ、水着を片づけておけと言われたのを断っただけです。みていたでしょう?」

と、俺はシャルに視線を向ける。

ハッ、としたシャルは

「そうです。彼は何もしてません」

と証言。

一時は身分を証明すれば何とかなるって言われてたけど、それだと証拠隠滅防止のために現行犯逮捕されやすいらしいな。

「それでも疑うというのなら、ちょっと連絡させてもらえますか？」

ついでにもうひと押ししておこう。

警備員は俺の願い出に頷いたので携帯電話を取り出して学園に電話をかける。

休みの日だけど、誰か居る筈だ。

ルルルルル、ルルルルル、ガチャ

『はい、IS学園です』

「あ、自分は一年一組の織斑です。織斑先生か山田先生、千凧先生は居ますか？」

『少し待ってね』

今日は休みだから先生方もいないのだろう。

内線に切り替わる。

程なくして

『はい、千凧です。』

「あ、一年一組の織斑です。ちょっと厄介な事になりました…」

俺はあくまで『先生と話してる』風を装う。

まあ、実際に空は先生だけど仲良しの先生だと庇ってるって思われそうだからな。

『判った。携帯、スピーカーモードにして。』

「はい」

ピ、とボタンを押すと声が全体に聞こえるようになる。

『IS学園、一年一組副担任の千凧です。うちの生徒がなにやら無礼を働いたようですが…』

「そ、そうよ！暴力を振るったのよ！」

まだ言うか。

『判りました。織斑。銃殺、電気椅子、斬首、縛り首、火あぶり、釜茹で、磔、切腹から好きなのを選びなさい』

空が、なんだか千冬姉に似てきた気がする。主に嗜虐的な意味で。

「え？ あ、あの…千凧先生。まったく俺が生存する可能性を見いだせないんですけど」

銃殺と電気椅子以外は江戸時代の処刑方法だ。

しかも、学園ならIS用の銃に近接用ブレード、工作用のバーナーと道具はあるか作れるのどちらかだ。

衝撃砲あたりで『銃殺』されたら俺は『床の頑固な赤いシミ』になるだろう。

『なら、研究所で検体になるってのも加えてあげるわ。』

「それ、確実に解剖されます」

『明日の朝刊の見出しは「世界初の男性IS操縦者、女性に暴行し極刑に処される」で決まりになりそうね……………」』

「えっ……………」

驚いた声を上げたのは警備員と言いがかりをつけてきた女性客だった。

『っていうか、空が『IS学園一年一組副担任』と言った時点で気付けないか？普通。』

『うちの生徒の不始末は追って謝罪させていただきます。処分の際はお呼びしますか？』

「え、えーと…一度監視カメラの映像を確認してみますので少々お待ちを　あれ？」

警備員があまりに事が大きくなりすぎた為に『確認する』と言った時、言いがかりをつけてきた女性客は姿をくらましていた。

「まったく……災難でしたね。先生もお騒がせしたようで」

「あ、千風先生。解決しました」

『あら、そう。折角介錯の用意までしておいたのに』

……酷い。

とりあえずスピーカーモードを切って、普通の状態に戻す。

「お騒がせしました」

『気をつけてよ』

「はい」

ピっ、と切って一件落着だな。

と、思ったら

「ああっ！いいところに、助けてくれっ！」

涙目になったラウラが俺の背後に回り込んで、隠れるように身を縮めていた。

「ど、どうしたんだ？ラウラ」

ガクガクブルブル

狼に睨まれた子ウサギのように震えるラウラは、なんとというか普段とのギャップが妙にかわいらしく見え、庇護欲をそそられる。

『よし、お兄ちゃん頑張るぞ』的な。

「ラウラちゃん」

「ひつ　隠れる場所は……あそこだっ！」

「ちょ、ラウラ？」

「わ、わあっ!？」

ラウラに引き摺られ俺とシャルは試着室に押し込まれた。

本来一人が入る事を前提にした半畳もないスペースに三人。

いくらラウラが小柄とはいえもつぎゅつぎゅだ。

「なあ、一体」「しっ、声を出すな。見つかる」

ラウラに口を押さえられ、俺は否応なく黙らされる。

「おっかしいわね。確かこっちに逃げてきたと思ったんだけど……むむ、流石代表候補生」

すぐ外から聞こえてきた声は聞きおぼえがある。

確か、榎篠技研副所長の榎村さんだ。

…でも、なんで榎村さんがラウラを追いまわすんだ？

むむむ、と唸りながら足音が遠ざかって行き、誰となく溜め息が漏れる。

と、その時…

「あ

「え

「ッ…

ドアが開き、山田先生と目があった。

「……何をしてるんだ、お前らは」

その後ろには頭がいたそうに額を押さえる千冬姉。
何故かその後ろにはセシリアと鈴もいる。

というか、二人は千冬姉に捕縛されていた。

「ラウラちゃん、みーつけたー！」

「ひいっ！」

そしてその現場に突撃してくる榎村さん。

「…やれやれ、千風が言っていたのはこつ言つ事が」

がっし、ぎりぎりぎりぎり

「あつちあつち、あつうううう！！」

突っ込んできた榎村さんの頭を千冬姉の手が捉え、しっかりと締め上げる。

そのアイアンクロの痛みに耐えかねての悲鳴があたりに沈痛な雰
囲気をまき散らしていた。

「ちよつどその頃…」

「ほらほら、もつとうまく使わないと。懐に飛び込まれるよ！」

「くっ……………！！」

「近接射撃戦と近接格闘戦の切り替えは思い切り良く！」

「でりゃあああッー」

「おおつ。イグニッション・ブースト 瞬時加速。でも、タイミングがあまり宜しくないかなあ」

箒は空相手に掛り稽古ならぬ掛り模擬戦をやっていた。

「その距離だと間合いが近すぎ…おおつとー」

緊急回避をする空。

ちょうどその場所を舞梅の右手に持つ鉄扇が通り過ぎた。

「おっとと。鉄扇の事忘れてたよ。危ない危ない」

概ね、空に翻弄される筈だったが、有効打に近い攻撃を何発か掠らせてその成長の早さを見せつけていた。

* * *

千冬姉と山田先生に事情を説明し、暴走しそうになっていた鈴を俺とセシリアが宥め、ラウラはシャルの背後に隠れるようにして拘束されている榎村さんから逃げようとした数分の後

「なるほど。そう言う事でしたか」

ようやく俺たち三人が試着室にぎゅうぎゅう詰めになっていた理由を理解してもらえた。

ちなみに鈴とセシリアは拳動不審に物影から様子を窺っていたので捕縛したとの事。

「ところで、先生たちも水着を買いに？」

「ああ、そんなところだ」

シャルが問いかけると千冬姉は柔らかめな微笑みを浮かべてそう応えた。

「すぐに済ませて退散するつもりだがな」

俺、その次にシャル、ラウラ、鈴、セシリアと視線を流す千冬姉。
どうしたんだ？

「あ、あー、私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。ちょっと量もあるのでオルコットさん、鳳さん、デュノアさん、ボーデヴィツヒさんについて来てもらえます？ 榎村さんは学校で千凧先生が『水着を頼む』と言ってましたのでそちらをお願いします」

そう言つて、有無も言わずに四人を連れて行ってしまふ山田先生。
ラウラだけはホツとした様子だったが。

そして榎村さんは目を輝かせて女性用水着コーナーへと突撃してゆく。

俺がそんな唐突な状況変化に啞然としていると

「まったく、要らない気を使う」

「え？」

「まあ、言つても仕方がないか。 一夏」

「な、なんですか、織む 千冬姉」

態々名前で呼んできてるってことは教師と生徒じゃなくて姉と弟で、と判断して言いかえる。

まあ、途中まで対教師用の口調だから嫌に丁寧になってるけど。

でもまあ、久しぶりの姉弟水入らずの状況だな。

「で、一夏。どっちがいいと思う?」

そう言っつて千冬姉が見せてきたのは専用のハンガーに掛けられた二着の水着。

どっちもビキニタイプで片方はスポーティーながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している黒水着。
もう片方は一切の無駄を省いたかのような白水着。

なんというか、対極だな。

「うーん、俺としては黒なんだけど、白も捨てがたいんだよなあ…

…」

「どうしてだ?」

「シンプル・イズ・ザ・ベスト」

あとは、白の方がストイックなイメージが湧くから下手な連中が寄りつきにくそうだな。

「なるほどな。では、こちらにするとしよう」

そう言いながら千冬姉は白い水着を元あった場所に戻す。

「え？　それで決めていいのか？」

「折角、弟が選んでくれたのだからな。」

そう言われると俺は何も言えない。

「それに、白を推す理由に『男が寄りつきにくいだろう』とか思っ
ていだろう」

「う、バレてたか」

「まったく。要らない心配をするな」

「そうだよな。千冬姉は昔っからアキ兄一筋だったもんな。」

それで何度も東さんと衝突してたっけ。

で、それを『仲がいいな』と眺めるアキ兄、ハラハラと見守る俺と
筈って光景がある種のお約束だった。

「……ふん」

誤魔化すような、それでもって寂しそうな表情。

まだ、十年も経ってないから、振り切るには時間が足りないか。

「で、お前の方はどうなんだ？」

「え？　俺？　何が？」

突然に切り返されて俺はイマイチ状況が読み取れずに素で返す

「何が、もなにも…お前は彼女を作らないのか？ 幸い学園内には腐るほどいる。より取り見取りだろう？」

まあ、確かにそうだけどさ……

「そうだな……ラウラなんかはどうだ？色々問題はあがるが一途だし容姿も悪くないだろう？」

「まあ、確かにラウラは可愛いけどさ……」

「ならデュノアか？オルコットか？それとも鳳か。…私の見立てでは篠ノ之や千凧、更識あたりもいいとは思うがな」

まあ、確かに筈なら一番付き合いが長いし気心も知れてる、ある種家族みたいなもんだっし。

空も……まあ。

更識さんというと簪さんの事だろうが、彼女は『友人の友人』あたりだからな……

「まんざらでもなさそうだな。まあ、つまるところ……」

「余計な心配する前に自分の方を何とかしろ、だろ。わかったよ、余計な心配はしない」

「それでいい」

にやり、と笑って千冬姉はレジへと向かってゆく。

俺はレジに同行すべきか、他の人を待つべきか迷い…結局、待ち合

わせの目印になる事にした。

千冬姉が水着を買い、山田先生たちが意外に少ない……というか小袋一個で終わりという量の買い物が終わらせて戻ってきたところで生徒組と教師組に別れた。

俺たち生徒組は中断されたシャルの水着選びやラウラの水着選びをしてから五人で昼食を取った。

その後も二、三の店を覗いて回ったほかは、わいわいとはしゃぐシヤルたち一行に付き従っていた。

まあ、なんだかんだでみんな楽しそうだったから充実した休みになったと言えるかな。

……そういえば箒はまったく姿を見なかったけど、どうしてたんだろうか。

「その頃……」

「おかわりは用意してあるから遠慮なくね。」

「はふはふ……ああ」

狙撃、単発射撃、連射、弾幕伸展と一通りの射撃訓練を終えた箒は空のところで昼食を取っていた。

ちなみにメニューはお手製の炒飯と卵スープであったとか。

(絶対に、負けないからなッ！)

「午後はゆつくりと体を休める事。あ、一緒にここ行く？」

「？　これはっ！何故、こんなものを？」

「ふふふ、ちよっとね」

「是非とも！」

「それじゃあ、出かける支度ができたらここにまた。」

「ああっ！」

先ほどまで鬼気迫る勢いで訓練をこなしていた女傑の姿は無く、ただ華も恥じらう、十代乙女がそこにいた。

「あれだけの運動量の後だ。カロリーなど、体重計など、もう怖くないっ！」

#37：休日、買い物、ドタバタ騒ぎ（後書き）

ぴーん、箒に強化フラグが成立しました。

ぴーん、箒に体重増（いろんな意味で）が成立しました。

次から、臨海学校に突入しますよ

#38：海に着いたら十一時！（前書き）

こーしんですよー

合宿中に大筋が完成してしまった畠

#38：海に着いたら十一時！

「side：箒」

バスに揺られること数刻。

トンネルを越えるとそこは………

「海っ、見えたあっ！！」

青く輝く、夏の海が待っていた。

「ほら、席を立たない。」

席から立ち上がって、海が見えてる側の窓をつかがう生徒わたしたちに苦言を呈する空。

けれどもその表情は『やれやれ、仕方ないな』と言わんばかりだ。

「やっぱ、テンション上がるよな」

「そ、そうだな」

バスでの隣の席は…一夏だった。

そのおかげで心拍数は上がるし、頭に血は上るしで、まったく落ち着くこともできなかったが。

ちなみに通路をはさんで反対側はセシリアでその後ろがラウラとシヤルロットだ。

三人とも、妙に機嫌がいいのはその手首やら首やらにある銀色のモ

ノの効果だろう。

ずっと、それを見つめては表情を崩しているからな。

そして、その様子を見る一夏が苦笑気味な処からしておそらく一夏がプレゼントしたものだろう。

……私はその日、空に稽古をつけてもらっていたから行ってない。そのことを後悔はしていないが、釈然としない。

もうすぐ、私の誕生日なのだぞ。

「向こうに着いたら泳ごうぜ。箒、泳ごうぜ」

「あ、ああ。昔はよく遠泳をしたものだな。」

不満と、緊張と、そのほか色々な物が混ざって私の拳動はかなりぎこちない。

一夏も不思議そうな視線を向けてくるから、おそらく『変な奴だ』と思われる。

きつと、おそろく。

そんな私の思惑や気持はまったく考慮されずにバスはどんどんと先へ進んでゆくのであった。

「side…ラウラ」

……つ、ついにきてしまった。

『うーん、似合ってるんじゃないか？かわいいと思うぞ』

混乱する私の脳裏に先日、水着を買いに行った時に一夏わたしのよめに言われたことが蘇ってきていつもなら制御できる感情がそのままに暴走する。

『かわいいと思うぞ』

脳内で反響するかのように繰り返される声に思わず呆け、はっと我に返って辺りをうかがう。

その繰り返しを数度。

気がつくともうなっているのだから始末が悪い。

ああもう、すべて一夏おみのせいだ！

……私をこんなにした責任、とって貰うからな。

「そろそろ目的地に着くから、ちゃんと席に座って」

空かあさまの声に周囲の生徒たちは『はい』と軽く返事をしてからめいめの席に戻ってゆく。

さすが母さま、配下せいごの掌握は万全だ。

それからほどなくして、私たちを乗せたバスは目的地に到着した。

* * *

「side…一夏」

目的地に到着したバスからわらわらと降り、旅館の方との面通しが済み、俺の部屋が千冬姉と同じということが伝えられその部屋に荷物を置いて、着替えに水着にバスタオルといった必要な物を持っていざ更衣室へ。

途中、何やら『ファンシーな世界の生き物』らしき影がちらつと見えただけ……たぶん気のせいだろう。

気のせいだと思いたい。いや、気のせいであってほしい。ぜひとも。主に俺と篤と千冬姉の平穏とおそらくそれのとばっちりを食らうであろう山田先生の為にも。

大丈夫だよな、もし気のせいじゃなかったら………とか考えてるうちに更衣室にたどり着き、着替え終わったのでその『ファンシーな不思議生物』の事は記憶の片隅に追いやって海を楽しむことにした。

「あ、織斑くんだ」

「う、うそっ！私の水着、変じゃないよね？」

「わー、体かつこいー。鍛えてるね〜」

「あとでビーチバレーボールしようよー！」

更衣室から出たところでちょうど同時に出てきた女子集団と遭遇。

「おう、時間があつたらな」

なるべく邪念や煩惱が浮かばないように気をつけながら対応し、さ

て懐かしき砂浜への一步を！

「あちち、あち」

七月の太陽がせつせと熱した砂の熱さに足の裏が灼かれる。けど、その感触がなんとも懐かしくて、楽しい。

到着して間もないというのに海岸では肌を焼いてる子、砂浜で遊んでいる子、さっそく泳いでいる子と様々だ。

そしてその身にまとう水着も様々である意味、夏の太陽よりも眩しい。

「さて、と。」

俺が準備運動を始めてせつせと体を動かしていると

「いーちかつ！」

オレンジと白のストライプで、スポーティーなタンキニタイプ（へそ出し）の水着を着た猫みたいなやつ 要は鈴が俺に飛びついてきた。

そういえば水泳っていうと俺に飛び乗ってくるんだよな、こいつは

「ほら、はやく終わらせて泳ぎましょーよー！」

「いら。しっかりやしないと溺れるぞ。お前、しっかりやったのか？」

「あたしは溺れたこと無いわよ。きっと前世は人魚ね」

そう言いながら俺の体を器用によじ登って首にまたがるように肩に座る鈴。

「おー、高い高い。遠くまでよく見えるわね。あんだ、監視塔になれるんじゃないの?」

「監視員じゃないのかよ」

「いいじゃん。人の役には立つわよ」

「で、誰が乗るんだ?」

「うーん、あたし?」

そんな懐かしくも漫才じみた会話をしていると

「あ、あ、ああっ、な、なにしていますの!?!」

ブルーのビキニ、腰に同色のパレオという格好のセシリアが現れた。その手にはパラソルとシートにサンオイル。

「何って…肩車。もしくは移動監視塔ごっこ」

「ごっこなのか」

「だってあたし、ライフセーバーの資格持ってないし」

「まあ、そつだろつな」

「溺れてるのが居れば助けるけどね」

「ミイラ取りがミイラになるなよ」

「ならないわよだってあたしは」

「前世は人魚、だったか？」

「よくわかってるじゃない」

「わたくしを無視しないで頂けます？」

おっと、いけない。

つい上下会話に熱が入りすぎてしまった。

「とにかく、鈴さんはそこから降りてください！」

「ヤダ」

「な、なにを子供みたいなことを…っ！」

ザクっ、とパラソルを砂浜に突き立てるセシリア。

その姿にはしっかりと怒りがこもっていた。

「だって、十五は立派な子供でしょうが」

「そついう問題ではなくてですね…」

ふと、俺は周囲からの視線に背筋がゾクリときた。

限りなく嫌な予感。

そしてそれは、たいてい的中する。

「あーっ！織斑くんが肩車してるー！」

「いいなあ……」

「きつと交代制よ！」

「そして早い者勝ちよ、先着よ！」

わらわらと集まり始める勘違いした女子たち。

「鈴、降りろ。誤解を招いてる」

「仕方ないわね」

『鈴によじ登られただけで肩車はしてないしする気もない』と説明する傍らで鈴は俺の肩から飛び降り、手のひらで着地。そのまま前方返りで起立。　すげえ、猫みたいだ。

なんとか集まってきた女子に解散してもらったところで鈴はセシリアに向く。

「で、アンタはどうしたの？一夏に肩車してもらいにきたの？」

「違いますっ！」

フーッ、とこれまた猫が威嚇するみたいにするセシリア。
なんだろう、猫と猫の喧嘩でも見てる気分だ。

「一夏さんっ！サンオイルを塗ってください！」

「……………え？」

セシリアの大声にやっとのことで散らせた女子が再び集結の兆しを見せる。

「その手があつたかつ！」

「それじゃあ私、パラソル持ってくる」

「じゃあ私はシート。」

「サンオイル持ってくる」

「それじゃあサンオイル落としてくる」

あーあ、ざぶざぶと海に入ってしまったぞ。

つたく……………

「コホン。それじゃあ、お願いしますね」

パレオを外し、突き立てられたパラソルの下に敷かれたシートにつ
つ伏せに寝そべるセシリア。

「ええと、背中だけでいいよな？」

ていうか、背中だけで勘弁してほしいというのが本音だ。

「一夏さんがされたいのでしたら、前もどうぞ」

「背中だけで勘弁してください」

「でしたら…」

セシリアは首の後ろで結んであったひもを解く。

「さ、さあ、どうぞ」

無防備な背中とか、パレオに隠されていたお尻とか、うつ伏せになったことでむにゆりと形を変えた乳房とか、けっこう露出度の高い下の方の水着から伸びる脚線美とかに無意識につばを飲んでしまう俺。

もってくれよ…俺の理性。

「じゃ、じゃあ、行くぞ」

適量を手にとってそれをぺた…と

「ひゃっ！ い、一夏さん、サンオイルは少し温めてから塗ってくださいな」

「す、すまん。なんせことうのは初めてなんだ」

「そ、そうですね。初めてです。それならば仕方ありませんわね」
ん？
心なしか嬉しそうな？

ともあれ、俺は言われた通りに手に取ったサンオイルを揉むようにして温めてからセシリアの背中に手を当てる。

その肌のすべすべとした感触で思わず反応しそうになるのを理性と気力で抑え込み、なんとかかする。

「ん……いい感じですね。」

「そうか」

なんだかマッサージをされているように気持ちよさげに目をつぶるセシリア。

「一夏さん、もっと下の方も……」

「せ、背中だけって話じゃなかったのか？」

「手が届きませんから、その……お尻の方も……」

「え、ええっ!?!」

さすがにそれは……マズイ。

俺の理性的にも、後々の生存的意味でも。

「はいはい、あたしがやったげる」

と、鈴が割って入ってきた。

俺の手からサンオイルを奪い取って、それを手に取り…

「ほれほれほれっ」と

「ひゃんっ！り、鈴さん。何を邪魔して…っ、冷たっ！」

そのままべたべたと塗ったくる。

そのあまりの冷たさに思わず上半身を起こすセシリア。

その結果、何が起こるかを瞬時に察知した俺はすばやくサンオイル塗りの場所から離れセシリアに背中を向ける。

「？　一夏さん、何故に背中を…って、きゃあああああ！？」

俺の奇行（わからなければそう見えるだろう）の理由を理解したセシリアの悲鳴。

そりゃあな。

シートの上に置いてあるも同然なのに上半身を動かしたらそりゃそうなるような。

「あー、ごめん」

鈴がまったく『申し訳ない』という様子を感じさせないで謝った。

「い、今更謝ったって許しませんからね！」

「うん。じゃあ、逃げる。またね」

ぐい、と俺は鈴に引っ張られる。

「すまん、セシリア。鈴には言い聞かせておく。あと……………俺は見
てないからな」

「なっ!?!」

ぼっ、と赤くなって固まったセシリアを置いて、俺は鈴に引っ張られるがままに海へと飛び込んだ。

「ぶはっ!鈴、お前なあ」

「一夏、向こうのブイまで競争ね。負けたら駅前アットの@クルーズ
でパフェおごんなさいよ。 よーい、どん！」

「こら、卑怯だぞ!ええい、待てっ!」

「あはは、ぼーっとしてるのが悪いのよ!」

「不意打ちにも程があるっ!」

こうして俺はなし崩し的に鈴を追いかける羽目になった。

……………ちなみに@クルーズのパフェは一番安くても一五〇〇円する、
なかなか財布に厳しい一品である。

いざはるかな

#39：オーシャンズ・イレブンよりはアフター（前書き）

ぶつちやけ海パートの続きと旅館イベント

#39：オーシャンズ・イレブンよりはアフター

「side：簪」

「簪、まだ躊躇ってるの？」

「し、しかた無いだろう」

更衣室でなかなかに着替えようとしない、往生際の悪いルームメイトに私はため息をついた。

「そんなんじゃ織斑くん、他の人に取られちゃうんじゃないの？」

「うっ……………」

「オルコットさんとか」

「ぐ…ぐさり」

「鳳さんとか」

「うっ…」

「デュノアさんとか、ボーデヴィットヒさんとか」

「うっう……………」

だんだんと簪が衝撃を受けたようにのけぞり、うずくまり、最後には床に手をついて打ちひしがれていた。

見事な「orz」状態。

そのうち床に縦線が生えてきそうなくらいに。

「ほら、箒はスタイルいいんだし」

「ううう……………」

「一か月、同じ部屋だったんでしょ？大丈夫だって、自信を持って
よ」

「うう、だが……………」

「だったら見せ慣れてる学校指定のヤツにすればいいんじゃないの
？」

個人的にはあの胸の大きさであの水着は逆に破壊力が高いような気
もするけど。

「持ってきてるんでしょ？」

「ま、まあ……………一応……………」

「だったら、ほら。着替えなよ」

それから数分かけて箒を着換えさせて海に出る。

「あー、かんちゃん、しののん」

「あ、本音」

「布仏か」

ちよつどそこに本音が居た。

本音の水着は…『水着?』と疑問になるキツネのきぐるみパジャマっぽい感じ。

「かんちゃんは、水着新しいやつだね」

「うん」

実は、そうだったりする。

私が今着てるのは競泳水着っぽいデザインの、黒に水色のラインが入った水着。

ビキニもいいんだけど、姉さんや箒みたいにスタイルが良くないと似合わないから妥協の結果こうなっただけ……まあこれはコレで。

「で、なんでしののんはスクール水着なの?」

「そ、それはだな……」

「白いビキニを用意したはいいんだけど、見せるのが恥ずかしいんだって。『誰に』はあえて言わないけど」

「あゝ、おりむーなら向こうに居るよ」

本音が指さす方向では織斑くんがボーデヴィツヒさんとデュノアさんの二人とチームを組んで、一組の人とビーチバレーを楽しんでいた。

あ、ボーデヴィツヒさんの顔面にボールが直撃して……織斑くんが顔を覗き込んで　　あ、逃げ出した

「ほら、箒。選手交代が必要みたいだよ」

「お、おい！箒。背中を押すな」

ぐいぐいと押してコートのおそばまで押しやる。

「織斑くん織斑くん。選手の交代は要る？」

「お、箒さん　　」

私が織斑くんに声をかけた途端に私の背後に隠れようとする箒。

もう、私よりもいろんな意味で大きいんだから、隠れられるわけ無いでしょ。

「　と、箒か？」

びくっ、と私の背後で箒が大きく身をすくめた。

やれやれ、と私はなんとか箒を振りほどいて織斑くんの眼前に立たせる。

「箒ったら、せつかく新しい水着があるのに見せるのが恥ずかしいからってスクール水着なんだよ?」

大暴露。

「かかかか、簪ッ!」

「へー、箒も新しい水着買ったのか。どんな奴なんだ?」

「……………」

「白いビキニ、だつてさ」

箒は黙ってるから私が代わりに全部バラす。

「織斑くん、見てみたいと思わない?」

「まあ、箒が嫌なら諦めるがな」

ふむ、つまり『見たい』ということね。

「箒ってスタイルいいから、ビキニが本当によく似合うと思うんだけどどう?」

「うーん、確かに……………」

織斑くんが箒を上から下まで眺めてからそういった。

その視線が恥ずかしいのか胸とかを隠そうとする箒。けどね……それって余計に強調しちゃうから。

「確かに、デザインとかは見てもないかわからないけど、きっと似合うと思うぞ？店員も似合わないと思ったなら勧めないだろうし」

「っ！」

見てわかるくらいに箒が赤くなってゆく。つま先から。

そしてそれが頭のとっぺんまで到着したとき、熱暴走を起こしたのか箒は海へと走って行った。

そのまま海に入り、泳ぎ始めるとあっという間に見えなくなってしまふ。

「おーい、準備運動はちゃんとしろよー！」

「……………そういう問題なのかな」

私としてはなんで箒が逃げたのかを問うべきなんじゃないかなと思うんだけど。

「みんな楽しんでるね」

「あ、空く　千凧先生」

突如として出現した空くんは七分丈くらいのズボンに半そでTシャツ

ツの上に袖無しパーカーを羽織った格好。

「さっき、ものすごい勢いで誰かがすっ飛んで行ったけど…あれは？」

「えっと、筭が織斑くんに」

「大体わかった。とりあえず一夏を絞めればいいんだね？」

「ちょ、空!？」

「千風せんせい！先生もビーチバーレーやりますかー？」

「見回り中だから、あとでね」

そさくさとその場を離れようとした空くん。 だけど……

「なんだ、まだそんな格好をしているのか」

「あ、ちふ　織斑先せ……………」

織斑くんが声に反応して、それに合わせて私たちも織斑先生の声が出た方向に向こうとして…思わず、固まった。

そこにいた織斑先生はいつものスーツ姿じゃなくて黒い水着姿だった。

鍛えられたスタイルのいい肢体かたを惜しげもなく陽光に晒している。

「ん？　なんだ。 なにかおかしいか？」

「い、いえ……」

同性だけど、思わず見惚れそうになった。

「まあ、いい。それよりも千凧だ」

がっし、と襟を掴まれて逃げられない空くんはなんとか逃げようともがいている。

なんだか普段教卓についてる時の凜々しい姿からは想像できない、悪戯がバレて逃げようとしてる子供みたいな姿。

「せっかく水着を用意したんだろう。教職員も多少はゆっくりする時間がある。少しは楽しめ」

にやり、と笑う織斑先生。

「こいつはお前らにくれてやる。好きにしろ。ああ、安心しろ。千凧先生は日頃の仕事量の多さゆえに午後は緊急事態が無い限り仕事が無いように調整してあるからな。」

まあ、確かに。

授業やって、書類仕事やって、一年寮の副寮監やって、他学年含む生徒指導おしきやって、相談乗って、整備まで見て、筈の特訓つひやって……と盛りだくさんだよな。

ぼい、と私たちに空くんの身柄が引き渡される。

うん、これはやるしかないよね。

「えっと……二人とも、怖いんだけど……？」

がっし、と腕を掴んだ私とデュノアさん。

「織斑先生。千凧先生の水着ってどこにあります?」

「ああ、同室が山田先生だから、そちらに訊くといい。山田先生の部屋は私の部屋の隣だから織斑に訊けばわかるだろう。」

「ありがとうございます」

「おい、一夏。行くよー」

デュノアさんが織斑くんを呼びつける。

「い、一夏っ、この二人を止めて!」

「……………すまん」

織斑くんは空くんの助けを求める声に対して合掌した。

「誰かつ、誰か、助けてっ!」

空くんの声はただ七月の青い海と大空にむなしく響き渡るのであった。

さーて、お着換えタイム。

* * *

「side…」

そのあと、結局空は出てこなかった。

一夏があとで聞いたところ、山田先生に水着を出してもらった時に逃げられてしまったとか。

その為、簪はしばらく不機嫌だった。

機嫌が直ったのは夕飯になってからだだったが、その夕飯で今度はシャルと箒の機嫌がやや悪くなる事件があった。

足がしびれてマトモに食事の進まないセシリアに一夏が食べさせてあげようとしたのだ。

その結果騒ぎになり、千冬の一喝を貰う羽目になったが。

そして不機嫌になったセシリアの機嫌取りに一夏は部屋へ誘った。そして、一夏が意図しない方向性で理解（正しくは誤解）したセシリアは半興奮状態で箸を進めるのであった。

と、言うのが時間を数時間ほどさかのぼった話。

先ほどまで千冬とセシリアの二人にマッサージを施し、千冬によって追いだされた一夏が二度目の風呂を満喫して脱衣所から出てきた時

「やつほー、いっくん。はろはろー、元気してたかな？」

背後からがばっ、と抱きつかれた。

「た、束さん!？」

一夏にとっては行方不明のハズのIS開発の立役者、天才にして天災、姉の友人(?)、幼馴染の姉であり義姉である篠ノ之束が、何故かそこにいた。

まあ、『どうせ束さんだから』で大体の事は納得できてしまうので一夏は突っ込む気も大分失せているが。

「そーだよー。あー、いつくん随分と鍛えたみたいだね。かつちがちだよ」

ぺちぺちさすさすと腕やら首やら背中やらを叩いたりさすったりする束に一夏は困惑せざるを得ない。

何故か。

それは束の腕は相変わらず一夏をホールドしているからである。

『一体腕が何本有るんだ?』

それが今の一夏の脳裏を埋め尽くす疑問である。

「んふふ」。榎篠技研謹製、本物そっくりな義肢の発展版なサブアームだよ」

そう言われて、確かに空も使っていた義肢は本物そっくりだったな…と思いつ返す一夏。

「で、今日は何しに来たんです?」

「んーとね、篝ちゃんと舞梅の様子見。あとはくーちゃんとお話
しに、かな〜」

「…くーちゃん？」

「そっだよ。おっと、見つかったら捕まってちーちゃんに絞め
られちゃうだろうから東さんは逃げるよ」

バイバイ、と走り去ってゆく東。

一夏はただ呆然と見送る事しかできなかった。

「い、一夏ッ！」

と、東の立ち去って行った反対側の廊下のつきあたりの角を曲がっ
て来た空。

「どうしたんだ、そんなに慌てて」

「篠ノ之博士、イイ歳してエプロンドレスにウサミミカチューシャ
っていうイタい格好の女の人、見なかった？」

「それならあっちいったぞ？」

「ありがとー！」

そのまま走り去って行き、一夏だけが浴場の入り口前に取り残され
る。

「……………なんだっただ？」

取り合えず千冬に報告する事だけは確定として、一夏は部屋に戻る事にしたのであった。

数刻後、なんとも痛々しい天災兎の断末魔^{ひめい}が響き渡る事になるのだが、この時点でそれを予測できていたのは一夏のみである。

「うみやあああああああああ」

#39：オーシャンズ・イレブンよりはアフター（後書き）

途中で『中略』状態がけっこう多いのは原作と大差ない（殆ど変わらない）からです。

さて、よじちやくこまで来たぞ！

#40：エマーゼンシー（前書き）

#39の最後で空が束を追いかけた理由

A・勝手に入ってきたら追い回すでしょ、そりゃ。

#40：エマーゼンシー

「side：一夏」

合宿二日目。

初日にたっぷりと遊んで、食べて…英気を養った俺たちは臨海学校のメインイベントに突入していた。

『各種IS用装備の試験運用データ収集』

特に専用機持ちは箒と簪さんを除いてみんな大変だ。なんせ、量が半端ない。

ちなみに俺も『量子変換可能かどうか』をチェックする武装が倉持技研からたっぷりと送られてきている。

あと、箒と簪さんが例外なのは、箒の舞梅は『次世代機のテストヘッド機の試作機』である為に装備の追加以前の機体であるから、簪さんの打鉄式式は倉持技研が匙を投げ、それを引き取った簪さんが個人的に作り上げたものだからだ。

「ようやく全員集まったか。　　おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬姉に呼ばれた遅刻者は意外や意外、ラウラだった。

珍しく寝坊したらしく集合時間五分遅れてやってきたのだ。

「そうだな……ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。ISのコアは」

滔々と始まるラウラの説明。

それにしても、よくもまあこんな代物を作り上げたよな、東さんは。

「 全容は掴めていないとの事です」

「流石に優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言われて、「ありがとうございます」と礼をするラウラ。

そんな教官と訓練兵のようなやりとりを終えたラウラはこころなしか胸をなでおろしているようにも見える。

……きつと、ドイツで本当に教官と訓練兵だった頃に嫌というほど恐ろしい目に遭ったのだらう。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用のパーツのテストだ。量が多い、全員迅速に行え。ただし、安全第一だ。」

はい、と一同が返事する。

流石に一学年全員がずらりと並んでいるのでかなりの人数だ。

ちなみに今いる海岸はIS試験用の場所として確保されている場所で四方が切り立った崖に囲まれている。

大海原に出るには一度潜行し、水中のトンネルを通る必要があると

か。もちろん、今は塞がれているし、外側の出入り口付近にはソナーブイが設置されているし、その周辺数百メートルは進入禁止にされ、ブイとネットが張り巡らせられているとか。

本来ならば青い空が見えるはずなのだが、ワイヤーが何かを骨組みにしてその上に『光は通すが中を見るのは難しい』透明のパネルで天井が作られている。

そして水中の海底部分には海底保護、落下物回収用のネットが敷き詰められているという。

これらの準備を下見に行つた山田先生と空の二人でやったというのだから頭が下がる。

それにしても、四方が崖で天井がある、ドーム状の場所というのがなんと学園のアリーナっぽいな。

ここに運び込まれたISと新型機材のテストとISの操作に慣れるが今回の合宿の目的。

当然、ISの稼働も行つので全員がISスーツ姿だ。海だと余計に水着に見えるな。

と、それはともかく俺と篤は苦い顔、他の生徒は不思議そうな顔をして千冬姉の斜め後ろにずっと視線を向けている。

「ああ、あと今回は少々特殊な事情から学園外がしむの者が来ている。一応紹介しておくが基本、気にしなくていい。」 束。

そう、何故か束さんがここに居るのだ。
しかもいつものエプロンドレスじゃなくて白地に肩や袖口とかが青
いジャケットに白いシャツ。首元にはリボンタイが付けられ、青い
タイトスカート。

どこか制服じみた格好だと思っただが束さんの事だ。絶対に裏があ
る。

その傍らにいる空と山田先生が疲れ果てているように見えるのでき
つと振り回され続けたんだろう。

「は「こちらが篠ノ之束博士だ。榎篠技研から申請があり、舞梅
のデータ回収、場合によっては改修^{アップデート}を行うとの事だ。」
ぶう」

束さんが何か言おうとした途端に千冬姉がかぶせて遮る。

榎篠って……………

「篠ノ之博士って、行方不明なハズじゃ……………」

「榎篠技研に居たの？」

「それってマズインじゃないのかな……………」

ざわめくみんな。

「おしゃべりはそこまでだ。試験を開始しろ。」

千冬姉が一喝してみんなはそれぞれに別れてゆく。

俺も倉持から送られてきた機材を一つずつ試してみるが、そもそも量子変換インストールが出来るかどうかが怪しい代物ばかりだ。

そもそも、零落白夜の為に拡張領域バススロットを使い切っているんだからどんな武装を用意しても駄目なんじゃないか？

文字通り、外付けで量子転送できない前提にしない限り。

学年別トーナメントの時の拡張領域バススロットの外付けは確かに便利だったけど、アレは使い捨てな上に高コストらしく現在量産化のための研究中だとか。

一早い完成と俺への提供を望むばかりだ。

そしてできる事ならあの時のライフルを…って、無いモノねだりしても仕方ないよな。

「射撃武装は軒並みアウトと」

「織斑」

量子変換しようとする時『Error』と出る事を確認し終わった処で千冬姉に呼ばれた。

「なんですか、織斑先生」

「舞梅の模擬戦闘の相手をしてやってくれ」

用件はどうやら幕が挑戦状をたたきつけてきたらしい。

「了解」

俺は機材を確認済みは一か所に集めておいてから多少消費したエネルギーを満タンまで補充しに行く。

元々、そんなに消費している訳ではないからすぐに補充は終わり。

白式を展開して箒の待つ空域へと上がる。

俺の白と箒の薄紅が対峙する。

激突の時は、もうすぐだ。

* * *

「side:簪」

「…すごい」

私は眼前で繰り広げられる箒と織斑くんの模擬戦の様子の記録をしながら見惚れていた。

記録というのは、空くんの舞風に装備されているセンサーユニットとかの予備を借りてやってるんだけど、その精度が高いおかげで物凄く近くで見てるみたいに見える。

その代わりに、管制室代わりをする事になっちゃったけど。

でも、先生たちに観測データを見せる代わりに同じデータを間近で見られたのは、凄く良かった。

ふと見回せばオルコットさんや鳳さん、ボーデヴィッツヒさんやシャ

ルロツトも二人の戦いを見つめてるし、訓練機で試験をしてた子たちもそうみたい。

注意すべき先生たちも見惚れてるし。

『やるじゃねえか!』

『ふん、呆けていたら置いてゆくぞ』

射撃兵装を攻撃手段の一つに加えた箒と、銃撃をかいくぐっての接近技能を持った織斑くん。

同じ近接戦闘型であったとしてもそれはまったく違う型の戦い方だった。

『勝負だ、箒!』

『来い、一夏ッ!』

織斑くんが非実体剣を振り被り、急接近を果たす

『貰ったッ!』

『甘いぞ、一夏ッ!』

箒はその柄に両手に展開した刀のうちの片方をぶつけてはじき、もう片方の刀が白式に向けられる。

けど、織斑くんは鎧に腕装甲をぶつける事で斬撃を回避する。

まさに一進一退。

総合的に見た実力が拮抗している故の接戦。

「どうだ、束」

「うん。これならば……。あとは箒ちゃん次第だよ」

「そうか。」

すぐそばにいる織斑先生と篠ノ之博士も満足そうになにやら話している。

二人とも、弟と妹の成長がうれしいのかな。

そのまま十分に及ぶ戦闘の後、箒の息切れのタイミングを狙った織斑くんの一撃が決まって舞梅のシールドエネルギーはゼロになった。降りてきた二人は、勝った織斑くんはもちろん、負けた箒も物凄くいい顔をしていた。

やっぱり、全力を出し切ったの勝負って、いいよね。

それでもって、空くんと

ばしいーん

「ふぎやつ!?!」

勢いよく頭をはたかれて私は勢いよくつんのめった。

ISを装備してるのにこの衝撃って一体…

「いたたたた……」

起き上って頭をはたいてくれた相手を睨もつとして、寸前で辞めた。

だって、織斑先生だったから。

「ぼやぼやするな。今の観測データを学園のメインバンクに送って
おけ」

「は、はい」

ISのシールドをぶちぬく打撃を生身で繰り出せるだなんて、織斑先生は軽く人間を辞めてると思う。

「さーて、篝ちゃん、いつくん。データチェックとかするから展開しといてね。」

篠ノ之博士が篝と織斑くんの舞梅と白式になにやらケーブルを刺す。

その後に出てきた何枚もの空間投射ディスプレイ。

「ええっと、その子…たしか篝ちゃんの友達の更識簪だからか
ちゃん、こっちおいで」

「か、かんちゃん!？」

本音と同じ呼び方に驚いた。

まさか本音と同じ感性の人がいるだなんて……

まあ、呼ばれたのでそっちに行く。

「さっきの試合のデータ、出してもらえっ?」

「はい」

空間投射ディスプレイに録画データを表示、二人に見やすいように向きを変える。

「むむむ……」

「あの試合、完全に武器の差だよな。ほら、ここ。もし筭のISに零落白夜があればここで俺は落されてる。」

試合を顧みる二人。

「うーん、やっぱり不思議なフラグメントだね。こんなの、見た事無いや。やっぱり、男の子だからかな。いっくんごとナノ単位で分解するか、あっくんが捕まれば判るかも」

一方で篠ノ之博士もなにやら呟いていた。

「ところでさー、いっくんに燕尾服って似合うと思わない?あるいはメイド服。」

ぴし、と固まる織斑くん

「姉さん、割烹着を忘れてますよ」

「あと、エプロンもな」

それぞれの仕事の手は休めずに返す筈と織斑先生。

…ちょっとだけルームメイトと先生の頭の中身が心配になった。

「ところでいっくん。白式、改造してあげようか？」

「え…と、俺が燕尾服とか割烹着とかエプロンとか、そういう格好になるんだったら遠慮しますよ」

「……………じゃあ、プランBは？」

あ、誤魔化した。

つまりはそういう格好になるような改造ってことなのか。
地味に凄い。

「どんなのです？」

「女の子になるの。いっくんが」

「な、なんなんですか、それ！」

「うん、この間見てたアニメにそういうのがあったんだよ。」

個人的にはそれが水をかぶるとなのか、腕輪が光るとなのかが気になる処。

「二次元^{アニメ}の話で俺で試そうとしないでくださいよ!」

「姉さん、流石にそれは自重してください」

「ちえー」

織斑くんと筭に止められ残念そうにする篠ノ之博士は、この人が本当にISを創り上げた人なのかと疑いたくなるくらい子供っぽかった。

いや、子供っぽいからこそなのかな。

「た、たった、大変です!、織斑先生!」

そこに、慌てた山田先生が走り込んできた。

「どうした、山田先生」

「こ、これを」

山田先生が持ってきた小型端末の画面を見た織斑先生の表情が曇る。

「特務任務、レベルA。現時刻より対策を始められたし……………」

「そ、それが、ハワイ沖で……………」

「しっ、機密事項を口にするな。生徒に聞こえる」

私や箒や織斑くんに視線を向ける織斑先生。

「す、すみません」

「専用機持ちは、全員いるな？」

「はい」

小さな声となにやら特殊な手話に切り替えて何やら話してる。

私たちが近くに居るからだろう。

「そ、そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡をしてきますので。」

「了解した。千凧先生は山田先生に随伴を。」

「了解です」

降りてきてISを解除した空くんも山田先生と一緒に走ってゆく。

「束」

キツイ視線を篠ノ之博士に向ける織斑先生。

けど、篠ノ之博士は首を横に振るだけ。

それで溜め息をついた織斑先生は大きく息を吸い

「全員、注目！」

パンパン、と手を叩き全員を振り向かせる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止、各班ISを片づけて旅館に戻れ。連絡が有るまで各自室内待機をする事。以上だ」

不測の事態にみんなざわつき始める、

「え？」

「ちゅ、中止？　なんで？　特殊任務行動って？」

「状況が全然わかんないんだけど……」

けど、それを織斑先生が一喝した。

「ぐずぐずするな！　以後、許可なく室外に出た者は我々で身柄を拘束する。いいな！」

「……は、はいっ！！」「」

みんなが慌てて動き始める。

その慌てる様子はまるで今までに見た事のない雰囲気纏う先生たちに怯えるかのように。

「……本音、姉さんに連絡『情報を集めて』って」

すぐ後ろに本音の気配がしたから、小声で伝えておく。

これで、何かあったら姉さんの方から『更識』を動かしてくれるはず。

「専用機持ちは全員集合しろ！」
おっと、呼ばれた。

「織斑、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、鳳、篠ノ之、更
識！」

「はい」

私たちは返事をして織斑先生の所に集まる。

「…ついでだ。東、お前も来い。 ふうふうと勝手な事をされ
てはたまらないからな。」

「いいよ、ちーちゃん」

私たち、七人の専用機持ちと篠ノ之博士は織斑先生に連れられて、
旅館の一番奥へと向かうことになった。

#41：ブリーフィング（前書き）

タイトルに捻りが無い……だってシリアスパートだから……

#41：フリーフィンゲ

「side：籌」

「それでは状況を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷間・風花の間では私たちが専用機持ち全員と教師陣が集められた。

証明を落した薄暗い室内に、ぼうつと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用IS『シルバリオ・コスヘル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域から離脱したとの連絡があつた」

思わず私は呆けそうになつた。

何故一介の学生に過ぎない私たちに連絡が来るのか。

連絡するのなら、軍や自衛隊、学園の先生たちへする筈だ。

軽い混乱に見舞われて、他の面々の様子を窺うとみんな落ち着ききつている。

ああ、そうか。空の授業で言つてたな。

専用機持ちは代表候補生であろうとも『一機当千』の戦力であるISを持つ以上、数限りあるコアを使用したISを与えられる以上、

有事の際は戦力として数えられる。

代表候補生となるとこの手の緊急事態の為の訓練もしているだろうし、ラウラのように本職が軍人である者もいる。

そう考えて、少し落ち着いてきた。

不安そうにこつちを見てくる一夏に、『覚悟を決める』と頷いてやれる程度には。

「その後、衛星と偵察機による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過する事が判った。通過予定時刻は五十分後。学園上層部からの通達により我々がこの事態に対処することとなった。」

淡々と続ける千冬さん。

その次の言葉はこの状況から予想は出来ていたがやはり驚いてしまうものだった。

「教員は学園の訓練機を使用して周辺海域の封鎖を行う。本作戦の要は専用機持ちを担当してもらう。なお千凧先生は専用機持ちとして数えているのでそのつもりで」

それはつまり、暴走した軍用ISを私たちで止めろという事だ。

「それでは作戦会議を始める。意見がある者は挙手するように」

「はい」

早速挙手したのは、セシリアだった。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただしこれらは二ヶ国間の最重要軍事機密だ。情報の漏洩があった場合、諸君らには査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました。」

イマイチ状況について行ききれない一夏と私をよそに、セシリアを始めとした代表候補生の面々と空を含む教師陣は開示されたデータを元に相談を始める。

「広域殲滅を目的とした射撃型……フル・ティアーズわたくしのISとおなじく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動、両方を特化した機体ね。しかもスペック上ではあなたの甲龍シムロンを上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この『特殊武装』が曲者って感じはするね。丁度、リヴァイヴ用の防御特化パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「そもそも相手は軍用。競技用のリミッターがかかって無いつて処が痛いね……」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも判らん。偵察は行えないのですか？」

セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪は活発に議論を交わしている。

「無理だな。日本領海に接近した時点で航空自衛隊の早期警戒機E.1.2と早期警戒管制機E.1.3が予想進路上に展開する予定だが相手は超音速飛行をしている。あっさりと振り切られるのオチだ。それに最高速度はマッハ2二四五〇キロ超とある。アプローチ自体、一度が限度だろう。」

「チャンスは一度きり……ということやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、全員が一夏の方を見る。

「え？」

「一夏、アンタの零落白夜で撃墜すのよ」

「それしかありませんわね」

「問題は一夏をどうやってそこまで運ぶか、だね。白式のエネルギーは全部攻撃に回さないと厳しいだろうし」

「目標に追いつける速度が出せるESでなければいけないな。超高度度ハイパーセンサーも必要だろう」

「あとは、超音速条件下での戦闘訓練もしっかりとやってないと厳しいかも」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ お、俺が行くのか？」

「「「「当然」」」」」

声が、見事に重なった。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。覚悟が無いなら無理強いはしない」

「別に、僕の雑風でも『一撃必殺』はできるからね」

数瞬の逡巡の後、一夏の表情が変わった。

「やります。やって見せます」

「…よし、それでは具体的な作戦の内容に入る。現在、ここにいる専用機持ちの中で最高速度を出せる機体はどれだ」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうど強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーも付いています」

全てのISはこの『パッケージ』と呼ばれる換装装備を持っている。純粋な武器だけではなくて追加装甲とか、増設スラスタなどの装備もこれに含まれ、種類は多岐に渡る。

特に専用機用の機能特化専用パッケージを『オートクチュール』と呼ぶらしい。

これによって機体特性や性能を大幅変更することが出来、様々な作戦遂行が可能になるという。

今の所、一年の専用機持ち全員が標準装備だ。

デフォルト

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二十時間です」

「なら、適任か……？」

そこに空がすつ、と手を上げた。

「千凧先生、何か？」

「薙風と、舞梅も換装すれば超音速下での戦闘は可能です…最高速度こそ、音速の^{マッハ1.7}一・七倍程度ですが……リミッターを外して、推

進系と操縦者保護機能に限定すればなんとか――九倍まで出せます」
マッハ1.9

「千凧先生の訓練時間は？」

「薙風自体では十時間ほど、高機動パッケージの試験運用も含めるなら倍以上やってます」

「換装にかかる時間は？」

「薙風は今すぐにでも。舞梅は十五分あれば」

「……………オルコット、高機動パッケージのインストールは？」

「まだですが、二十分ほどあれば」

千冬さんが黙って考えること数秒。

「……………よし、本戦は千凧先生と織斑、オルコットの三名による目標の追跡および撃墜を目的とする。篠ノ之は念の為に随行し、戦闘領域付近の警戒に当たれ。作戦開始は三〇分後とする。各員、ただちに準備に入れ。」

ぱん、と手を叩く千冬さん。

それを皮切りに教師陣はバックアップに必要な機材の設置を始め、私たちは出撃の準備を始めた。

* * *

「side…」

出撃準備と司令部設営にあわただしい部屋で千冬は空に声を掛けられた。

「織斑先生」

「なんだ、千凧先生」

「…念の為、全員に出撃用意をさせておいてください。最悪の場合、痛手を与えて足止めに切り替えます……生徒から殉職者を出さない為に」

「……………判った。準備させておく」

「お願いします」

そこで千冬は作戦準備に、空は超音速どころか高機動戦闘訓練すらロクにやっていない二人へのレクチャーに向かう。

作戦開始まで、残された時間は最初からそう多くは無い。

#41: プリーフィング (後書き)

補足説明

HQ = Headquarters 司令部

#42：福音の鐘は誰が為に鳴る

「side：一夏」

時刻、午前十一時半。

作戦開始時刻になり、戦闘要員の俺とセシリア、空と警戒要員としての篤が少し間を開けて一列に並んで立ち、視線をかわして、一度頷く。

「来い、白式」

「行くぞ、舞梅」

「参りますわよ、ブルー・ティアーズ」

気合いを込めて、ISを展開する。

見た目が変わらないのは俺の白式だけでセシリアのブルー・ティアーズはその名の由来ともなったビット全てが砲口を塞がれ追加スラストとして、腰部にスカート状に接続されている。

武装は大型BTレーザー兵器 スターダスト・シューター に変更され、バイザー状の超高感度ハイパーセンサー ブリリアント・クリアランス が追加された。

篤の舞梅は脛と腰に追加ブースター、背中にウイング状のスラストユニットが追加されている。

一番原型をとどめていないのは、空の薙風だろう。

回転式光学カメラ装備の可動式バイザーが備えられたヘッドギア、

装甲は前腕部の籠手状パーツと膝下のブーツ型パーツくらいしかなく、殆ど生身と変わらないサイズからすれば巨大すぎる背中のスラストーとウィングユニットが目を引く。更には腰や脛に箒の舞梅のものと同型のブースターまで装備している。

ついでにスラストーの上部にはレドームらしきものがあり武装は学年別トーナメントの前にラウラとひと悶着があった時に見た大型ライフルが一丁。

この姿から、元は打鉄やラファールに似たデザインの装甲を持っていたとは想像もできないだろう。

『それでは、作戦の最終確認を行う。』

オープンチャンネルで千冬姉の声が聞こえてきた。

『この作戦の要は一撃必殺だ。^{「コンアプロレツァツン」}短時間での決着を心掛ける。なお、戦域管制は千凧先生に一任する。各員は千凧先生の指示に従え。』

「了解」

「一夏さん、しっかりつかまっていないと、振り落としてしまいますわよ」

「わ、わかった」

振り落とされる事がないように俺はセシリアの背中にしっかりと掴

まる。

『……それでは、作戦開始ッ！』

千冬姉の声と同時に上昇を開始、地上五百メートルまで上がる。

『暫時衛星リンク確立、情報照合……完了。各機へ、目標の現在位置を送る』

表示された空間投射モニターには現在位置と予想進路、会敵予想地点が表示されていた。

『進路確認。一気に行くよ！』

空の声。

その直後に雑風のスラスタが盛大に火を吹いて加速を始める。

それに続いて舞梅も加速を始め、それに追従するような形でブルー・ティアーズも加速を始める。

周囲の風景が流れるように変わり、まるでイグニッション・ブースト瞬時加速を長時間続けているかのような感覚に陥る。

マップ上の現在位置と、シルバー・フォース・ユニット銀の福音の予想進路がみるみる内に近づいてくる。

『こちら千凧、目標を捕捉。位置情報を送る。箒はこのあたりで高度を下げ待機。以後、戦域に近づかないようにしつつ周囲を警戒。』

先頭を飛ぶ空から情報が送られてきてマップ上の点の一つ増える。

予想進路をなぞるように飛ぶ点が、福音だ。

『了解』

箒の舞梅が減速し、あつという間に追い抜く。

目視でも、点くらいだった福音がみるみるうちに大きくなる。

名の通り銀色で、頭部から一对の巨大な翼が生えているという特異な姿をしていた。

あの翼が、大型スラスタと広域殲滅用射撃兵装を融合させた新システムなのだとか。

『接触まであと二十。一夏、突入用意』

「ああつ！」

『一夏さん、スパートをかけますわよ』

手に雪片式型を握りしめた俺、巡航速度から最高速度へと叩きこむセシリア。

だんだんと距離が詰まってゆき、ギリギリまで接近しようとする福音を

追い掛ける。

『三、二、一』

ゼロ。

空のカウントと同時に、俺は零落白夜を発動させ、イグニッション・ブーストで最接近。

「うおおおおおッ!」

光の刃が福音に食らいつく

その寸前

「なッ!？」

福音は速度を保ったままこちらに反転、後退の姿となって身構えた。

一瞬、引いて体勢を整えるか、このまま強行するか迷ったが距離と速度の事を考えて強行に決めた。

斬撃のモーションを途中でやめるといのはかなり大きな隙を作る。

しかし

「敵機確認 迎撃モードへ移行、シルバー・ベル《銀の鐘》、稼働開始」

オープンチャンネルから流れてくる抑揚のない機械声。けれども明確な敵意なようなモノが感じられて、ぎくり、とした。言い方を変えれば嫌な予感がした。

* * *

「side:」

そしてその一夏の予感は、すぐに現実のものとなった。

福音はぐりん、といきなり体を回転させ零落白夜の刃から数ミリの精度で逃れきった。

ISが慣性制御機能を装備しているとはいえ、難易度はかなり高い、バッシュ・イナーシャル・キャンセラー技量が要求される技だ。

「くっ…あの翼が急加速しているのか？」

「一夏、離脱！オルコットさんの現在位置は三時方向。」

『重要軍事機密』の意味を改めて思い知らされるが、驚く暇もなく空からの指示が飛ぶ。

同時に離脱支援の援護砲撃がかけられ、一夏は高速飛行中のセシリアランデブーと合流を果たし、再び急加速からの強襲を試みる。

が、舞っているかのような動きで紙一重の回避をされてしまう。

空とセシリアが回避先を潰すように牽制射撃を繰り返しているというのに、だ。

繰り返す事数度。

『零落白夜の、白式の継戦時間の限界が迫ってきている』という現実が焦りを呼び、

一夏はその焦りから大振りの一太刀を浴びせようとしてしまった。

そして、それによってできた隙を見逃してくれるほど福音は甘くなかった。

スラストーでもある銀色の翼。

その装甲の一部がまるで翼を広げるかのように開き、一夏は『スラストー兼武装ユニット』である事を失念していた事に気付く。

一斉に解放された砲口を白式に向けるために翼が前にせり出す。

咄嗟に防御態勢を取ったその直後、幾重にも光の弾丸が撃ち出され、羽のように舞ったかと思いきや鋭角的に突っ込んできてISアーマーに接触、刺さったかとおもったら爆発した。

『爆発性エネルギー弾』

それが銀の福音の主兵装《シルバリオ・ユスベル銀の鐘》。

エネルギー弾には変わりがないので零落白夜で無効化する事は出来るが、高い連射性能が中々に脅威だ。

「ああもう、埒があきませんわ！」

セシリアの声の通り、こちらの攻撃は当たらず、ただただエネルギーを消耗してゆく。

そんな状況に焦りが生じてきた。

「……オルコットさん、援護は全部任せる。一夏、挟撃するよ」

空の声。

それまで使っていたランチャーをセシリアに押しつけ、レドームなどのユニットを収納。身軽になった処でアサルトライフルと接近戦用ブレードを展開し巧みに福音に接近してゆく。

エネルギー弾を放とうとすると翼に攻撃目標を切り替え、撃たせない。

そこに二丁の大型ライフルを持つ事になったセシリアの砲撃。

僅かながら、注意が外れた瞬間を狙って一夏は^{イケニッション・ブースト}瞬時加速を敢行。一撃必殺を狙ったが、その結果は福音の全面反撃だった。

「La………」

甲高いマシンボイス。

同時にウィングスラスターに仕込まれた砲口全てが開いた。

その数、三十六。

回転しながら全方位に放たれたが、空とセシリアの方に密度の高い場所が向いている。

(行ける。)

そう思った一夏だが、視界の端に飛び込んできたモノに絶句しかけ、目標を変更。

海面に向かってゆく一発に向かってゆき、零落白夜で掻き消す。

「一夏さん！折角のチャンスに、何をしてますのー！」

「船がいるんだ！先生たちが封鎖してる筈なのに……ああ、くそっ！密漁船か！」

「密漁船」

「こちら千凧。戦闘領域内に船舶が侵入、即時対応を。 箒、雲行きが怪しい」

セシリアは愕然とし、空は他の教員と箒に指示を飛ばす。

その、一瞬。

注意が戦闘領域内に侵入してきた船に向いた瞬間が命取りだった。

「ッ！ きゃああっ！」

瞬間的に肉薄されたセシリアに連打が入る。

それによって取り落とした>スターダスト・シューター<が空中で光と消えてゆく。

（マズイ、具現化^{リミット・ダウン}限界だ！）

元々燃費の良い方ではない第三世代型のブルー・ティーアーズに高

機動戦闘をさせてきた上、白式のSFSサブ・フライト・システム、外付けブースターの役割までさせてしまっていたのだ。

当然、消費速度は普段よりも早い。

そこに今の連撃。

確実にブルー・ティアーズは限界を迎えていた。

「ッ！」

再び一斉掃射をセシリアに放とうとする福音。

一夏は、全力で福音に襲いかかった。

アレ以上の攻撃を受けたら、いくら生体保護機能があると言っても重傷は避けられない。

故に、注意を自分に向けさせるべくの特攻を敢行したのだ。

そして、それは思惑通りに進んだ。

体当たりされた福音は『邪魔だ』といわんばかりに振りほどいた一夏に掃射を叩きこむ。

「ぐあああっ！」

元より、零落白夜とイグニッション・ブーストの使用で少なくなっていたエネルギーが底をつく。

シールドで打ち消せない分のダメージは一夏に通り、骨をきしませ、

筋肉に悲鳴を上げさせる。

「一夏さん！」

気を喪って落下してゆく一夏。

セシリアは悲痛な叫び声を上げる。

「篝ッ！」

『了解ッ！』

空の指示に、待機していた篝が動く。

いても立つても居られなかったらしくその動きは突然の指示にしては迅速で、まるでそうなる事が判って準備していたかのようだ。

指示が無ければなかったで、もう数秒後に飛び出していただろう。

「セシリア、退避ッ！」

空の怒鳴り声。

しかし、セシリアはその場で『イヤイヤ』をするばかりだ。

いくら代表候補生と言えど、目前で親しい人間が死にかける光景など見慣れるものではない。

ショックを受けるのは、ある意味で当然の事なのだ。

特にセシリアの場合、両親を事故で喪っている。

その時のショックが、『親しい人間を喪う事への恐怖』として刻まれているのだ。

茫然自失になって当然であり、それは致し方ない事である。

だが、セシリアは専用ISという戦力を持つ戦士^{たかろせの}としてこの場に居り、感傷に浸る時間を与えてくれないのが実戦と言つものである。

「くっ　　！」

空は必死になって福音の注意をセシリアから自分へと移すべく攻撃を加える。

その間に箒はセシリアに接触、強引に手を引いて福音から遠ざける。

何発か流れ弾が飛んでくるが箒は自身の舞梅を盾にしてセシリアを守る。

被弾、被弾、被弾、
爆発に装甲を灼かれ、砕かれても舞梅は己が主と共にただ耐える。

（作戦は失敗……………せめて一撃、大きいのを入れて片翼くらいはもがせて貰う）

「箒、一夏とセシリアを回収して撤退。　　作戦は失敗。第二フェイズに移行する」

第二フェイズ。

パッケージの量子変換^{インストール}が間に合わなかった、速力に劣る専用機持ち

達の投入、
そしてその為に福音の撃墜から、機動力と推力を殺ぐ事に目的がシフトする。

空が出撃前に『念の為に第二次出撃の用意を』と千冬に言っておいたのはこのためである。

…一夏の零落白夜による撃墜が失敗した場合の、全戦力投入という次の一手の為に。

「空、お前はどつする気だ！」

「福音は、僕が抑えておく。再出撃の用意をしてる筈だからそれまでは持たせるつもりだよ」

「くっ…」

筈とて、一夏が撃墜されて頭に血が上っている。

が、自分と舞梅では福音に手も足も出ずに一夏の二の前になる事も理解している。

舞梅も、所詮は第二世代型なのだ。

操縦者の質でも劣り、機体性能も相手の方が上。

更に言ってしまうえば舞梅はいわば『競技用』であるのに対して福音は『軍用』…『実戦用』である。

白式ほどの攻撃力も、ブルー・ティアーズほどの速力も無い。

一夏ほどのISにおける接近戦技能も、セシリアほどの経験も無い。

そんな舞梅と筈に、福音に刃を突き立てる事はまず不可能だ。

「早くッ！」

「わ、判った！」

篤は空の声に背中を押され、勢いよく海面へと向かいそのまま水中へと潜る。

センサーを頼りに撃墜され、海中に没した一夏と白式を探し出して抱え上げて待たせてあるセシリアの元へ戻る。

海中から引き揚げられた一夏はISの防御機構を抜けた熱波によって至る処に火傷を負っていた。

…… 幸か不幸か、海中に没した事ですぐに冷されはしたが、それでも火傷というものは十分に危険であり場合によっては命にかかわるモノである。

ブルー・ティアーズを牽引しながら戦域をのろのろと離脱してゆく舞梅。

重傷の一夏が居るために無理をさせられないのだ。

その姿を確認し、流れ弾がそちらに行かないように福音の攻撃方向を誘導する。

要は福音が舞梅とブルー・ティアーズに背中を向けていて全方位攻撃を使わせなければいいのだ。

その為に空がとった手段は

「!?!」

一瞬の隙をついて福音の腕にワイヤーロープが絡みつく。

そのロープをたどれば空の、薙風の右腕に接続されたウィンチ・ラ
ンチャーに辿り着く。

「捕まえた」

同時に薙風の右腕以外の部分が光に包まれる。

武装試験機故の、基礎フレーム以外全てのパーツが換装可能という
仕様。

それを生かした、戦闘中の仕様変更。

光が消え、姿を変えた薙風はそれまでの軽装甲ぶりから一転して全
ルッキン
身装甲となっていた。

ウィンチを巻き上げ、薙風自身も接近する。

そして、左腕で砲撃しようとした福音の片翼を掴む。

そのまま押し込み、福音に海面を背負わせ…福音ごと加速する。

上空五百メートル付近からの海面への急速落下。

その際の水面はコンクリート並か、それ以上の堅さを持つ。

抗おうと福音はエネルギー弾を乱射するが、重装甲と化し、ある理

由からエネルギーシールドまで展開されている装甲の前に弾かれる。

海面まであとわずか、と言うところで空はニヤリ、と笑う。

バクン、と次々と開いてゆく装甲。

胸部装甲、左右腰部装甲、左腕部装甲、両肩部装甲、両脚部装甲。

装甲という装甲が全て開く。

福音が、一瞬強張った。

「さて、我慢比べだ」

装甲に仕込まれていた数十ではおさまらない数のマイクロミサイル。本来は日本製第三世代型兵装 マルチロックオンシステムの試験用に用意された物であり、システム面が未完成な代物だ。

…だが、至近距離からならばロックオンすら必要ない。

一発一発が十分な破壊力を持つ、その全てが超至近距離から福音に襲いかかる。

ゼロ、セコンド。

海面に叩きつけられた福音にミサイルが殺到した。

* * *

ドオオオオン

盛大な爆音に箒は思わず振り返った。

見ると盛大な水柱が：そう、水中で大爆発を起こしたかのような水柱が立っていた。

「空　　ッ」

『戻りたい』

その心を懸命に押し殺す。

恐らく、空は嘘を言っていた。

だが、その嘘は戦力成りえない自分たち三人を下がらせるためのものであると箒は感じていた。

だから、戻らない。

爆発の影響か、センサー系は役に立たない。

福音の所在も、空の所在も一時的ながら攪乱されてしまっているのだ。

「……………無事で、居てくれよ」

師であり、友である少女の無事をただ祈る。

出撃地点であった浜に戻った筈たちに告げられたのは福音の健在と、
雑風の反応消失であった。

4 2 : 福音の鐘は誰が為に鳴る (後書き)

ちよつとぼつかり苦勞した上に眠い状況で書いてたのでちよつと変
かもしれないなと思つてたりする。

三回くらい読み直してるけど。

用語補足「2」

CP = Command Post 戦闘指揮所

4 3 : その境界線の上に立ち

「side :」

「作戦は失敗だ。以降、状況に変化があればまた招集する。それまでは各自、現状待機しろ」

福音の健在と、薙風の反応消失を告げられた箒とセシリアに向けられた千冬の言葉はそれだけであった。

行方不明となった空の搜索は一応行われていたが、あの水柱故に絶望視されていた。

千冬は一夏の手当てを指示し、すぐに作戦室に戻って行ってしまった。

セシリアはふらふらと、まるで死人のような顔色のまま運ばれて行く一夏についてゆく。

空は帰らず、一夏は重傷。

その現実には箒の心に無力感として押し掛かる。

（何が専用機持ちだ。友の一人、想い人の一人護れない、ただの十五の小娘と変わらないではないか。）

そんな思いが箒の心の底に漂う。

舞梅と、福音の性能差。

箒と、福音の操縦者の技量の差。

それがどちらにも覆し難いものである事は箒も理解している。理性に従って、感情を制御した結果であり『出来得る最善であった』と言える。

だが、最善がその程度である事を箒は許せなかった。無力な自分を、許せなかったのだ。

海岸で一人、拳を握りしめる箒。

その拳が白く色を喪うほどに強く、握りしめられたその拳は震えていた。

「箒ちゃん」

そんな彼女を背後から優しく抱きしめ、拳に手を重ねる人物がいた。

「姉さん」

束だった。

「どーしたの。こーんな怖い顔をしちゃって」

束が箒の表情をまねて見せる。

「……一夏と、空が撃墜おとしされて、笑顔じゃ居られませんよ」

「……そうだね」

沈黙。

まるで葬式か、通夜のような空気が辺りに漂う。

「篝ちゃんは、どうしたい？」

束の問い。

それは、篝が何をしたいのか、その為に何を欲するのかという問。

「私は……………」

篝が今欲するのは、『力』だ。

友を、想い人を護り、助ける事の出来る力。

ただ、それは同時に他を害することのできる力である。

故に、躊躇う。

だが、

「大丈夫。篝ちゃんならば、きっと」

束は知っている。

かつて、力に流された篝が”修正”を受けた事を。

そして、己を律する事が出来るだけの精神を手に入れている事を。

だから、『大丈夫だ』と言う。

そこに確証はなく、あるのはただの信頼。

箒は真つすぐに姉の、束の視線を受け止める。

いつもふざけているかのような態度をとる姉の、真面目な視線。

それに背中を押されて箒は決意した。

「私は……………力が欲しい。守れるだけの、力が」

律してみせる。信頼に込えてみせる。

それは、箒の決意表明でもあった。

それに対して、束は笑顔を浮かべる。

笑顔で、空間投射ディスプレイを箒の前に展開する。

「じ、これは……………」

「そう、私が改造した箒ちゃんの為の、白と並び立つ　　いっくん
と肩を並べるための機体。」

箒の視線は、ディスプレイに釘付けになっている。

そこに映し出された、真紅の機体に、目を奪われた。

そのスペックは、舞梅では比べ物にならないくらいに、高い。

「舞梅二号機改、その銘を

『紅椿』」

「あか…つばき」

衝撃を受けたような篤に対して、束は悪戯に成功した悪童のような笑顔を見せた。

「さ、篤ちゃん。お色直しの時間だよ」

* * *

「……………」

旅館の一室。

臨時に救護所となったその場所にセシリアはいた。

時計が示す時間は午前四時。

布団に寝かされた一夏は既に三時間以上目覚めないままだった。

膝を抱え、一夏の側で項垂れるセシリア。

彼女は、自分を責めていた。

(わたくしのせいですわ……………)

究極的な原因は暴走した福音であり、あの密漁船であり、侵入を許した教師たちであろう。

だが、その密漁船に気を取られて隙を作ったのはセシリア自身だ。

その為に撃墜されそうになり、庇った一夏が撃墜され昏々と眠り続ける。

ISの絶対防御、その致命領域対応によって、一夏は昏睡状態になっている。

全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の生命を守るこの状態は、同時にISの補助を深く受けた状態になる。

故に、ISのエネルギーが回復するまで、操縦者は昏睡状態が続くのだ。

そして、そんなセシリアを、負傷した一夏を帰還させるために、空はM・I・A作戦中行方不明になった。

叱責されていれば少しは違ったかもしれない。

だが、誰もセシリアを責めず、罵らず、見向きもしなかった。

それがいつそう自責の念を強くする。

更に『自分が原因で、人が死んだかもしれない』という事実。

それがセシリアの心を蝕んでいた。

認めたくない、けど認めざるを得ない。

だから 目を逸らす。

自閉して、自責して、自傷して、己を罰する。

誰も、罰してくれないから。

……『罰を受ける』という事は、その代償に『許しを得る』という意味である。

罰を受けられない。それは許されないという事と同義である。

だが、いくら己を罰しても許しを得る事は出来ない。許す事は、自分ではできないのだから。

漠然と、『もうISには乗れないかもしれない』と思い始めていた。それによって、誰かを死なせてしまう事が怖いから。

「……………こんなところに居た」

不意に、セシリアに声がかかる。

反応を返さないセシリアの事など意に介さずに、昏々と眠り続ける一夏の傍らまで、セシリアの目の前までやってきたのは簪だった。

「……………」

無言。

俯いたままのセシリアをよそに簪は一夏の様子を観察する。

呼吸こそ落ち着いて峠は越えている。

だが、目を覚ます様子は無く至る処に巻かれた包帯がなんとも痛々しい。

「なんで、こんなところに居るの？」

「……………」

「なんで、何もしてないの？」

「……………」

セシリアは、答えない。 答えられない。

そんな様子を見て、簪は落胆したような表情を浮かべる。

「……………そっか。オルコットさんは、二人の想いを無下にするんだね」

そして、決定的な一言を呟く。

「 臆病者」

流石にその一言は、セシリアも我慢ならなかった。

思わず起き上って簪に掴みかかる。

胸倉をつかみ、襟首を絞める。

「…何？ 凶星をつかれたからって、みっともなくない？」

苦しそうにしながらも簪は言葉を続ける。

セシリアは、そんな簪に視線を合わせない、合わせられない。

「……………い」

「だって、そうでしょ。織斑くんが目を離れた隙に死んでしまうのが怖いから、ここに居る。」

「う……ち……」

「空くんが……死んだかもしれないという事実を見ようとしな

」

「う……さい」

「だから、何度でも言っただけ。セシリア・オルコット、あなたは『ただの臆病者だ』って。」

「うるさいっ！」

目を逸らし続けていた現実を突き付けられたセシリアは掴み上げている手とは逆の手を振り振り

パン

振りおろした手を軽く受け止められ、逆に頬をはたかれた。

何が起こったのか判らずに呆然とするセシリア。

「あなたを助けたのは、空くんがそうすべきだと思ったから。だから、その事については何も言わない。だけど……」

セシリアの襟首を締めあげている手に簪の手が触れ、

「……空くんに何かあったら……帰ってこなかったら……私は、きつとあなたを赦さない」

ぎりっ、

思わずセシリアの手から力が抜けるくらいきつく握りしめる。

その瞳の冷やかさにセシリアは思わず身を竦ませる。

「ッ！」

数秒して投げ捨てるようにセシリアの手を離し、簪は部屋を出てゆこうとする。

「あ」

「っ、言っとくね」

敷居に足がかかった処で一度立ち止まった簪は振りかえらずに言う。

「諦めてないから。私も、箒も。あなた以外は、みんな。き

つと、織斑くんも。」

言い終えた簪はセシリアから興味を喪ったかのように振り返る事もなく立ち去ってゆく。

「わたくしは……」

今更になつて痛み出した頬を押さえる。

思い切りはたかれた頬は赤くなっていた。

* * *

夜の海岸。

外出禁止がかかっているにも関わらずそこには六つの影が動いていた。

一つ目は、箒。

中破した舞梅から、紅椿に乗り換えた彼女は慣熟の為にとにかく機体を動かし続けていた。

二つ目は、簪。

実戦仕様にし、昼間の戦闘を撮影する時にあずかりっぱなしだったセンサーユニットを含めての武装の調整と機体のチェックをした。

三つ目と四つ目と五つ目は、鈴とシャルロットとラウラ。

追加したパッケージの調整を終え、箒からもたらされた情報を元に福音をどうやって落とすかの方策を練っている。

六つ目は、束。

周辺を飛んでいる衛星をハッキングし、福音の居場所を探っている。

そして、箒が出撃に備えてエネルギーを補充し始め、
簪が入念なチエックを終え、
束が福音の居場所を発見した時

海岸に、七つ目の影が加わった。

「お待たせしました。…みっともない姿をお見せしましたね」

そう言うセシリアの表情は、先ほどまでの暗さを微塵も残していなかった。

「大丈夫なのか？」

ラウラが言う。

その意味は『使い物になるのか』という成分を多分に含んでいる。

「ええ。やられっぱなしは性に合いませんわ」

今度こそ、**撃墜**す。

そう、言外に言っていたのけた。

「更識さん、先ほどは失礼しましたわ」

「……………簪」

ただそれだけでセシリアは破顔する。

「判りました。簪さん。」

「……決まりね」

鈴が全員の中心に立って宣言する。

「作戦会議を始めるわ。今度こそ、確実に撃墜おちすわよ」

「ええ！」

4 3 : その境界線の上に立ち（後書き）

さて、原作とは違い六対一となるリベンジはどのような展開を迎えるのか！？

そして、空は…？

発破をかける役は最初は原作通り鈴にする予定だったのですが、流れる的に『ここは簪だろ』と思い立った為こうなりました。

#44：リベンジ

「side…」

「……………」

海上二百メートル。

そこで制止していた銀の福音はまるで胎児のような格好で蹲っていた。
シルバリオ・ゴスヘル

膝を抱くように丸めた体を、護るかのように頭部から伸びた右翼が包む。

機体の各所は汚れ、傷つき
左翼は、痛々しく焼け焦げ、半ば
からひしゃげていた。

？

不意に、福音が頭を上げる。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部と直撃、大爆発を起こした。

「初弾、命中。続けて第二射、行くぞ。」

福音から七キロ離れた地点でラウラは福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

通常装備とは異なり、八〇口径レールカノン《ブリッツ》を左右の肩に一門づつ、合計二門。さらに砲撃・狙撃対策として四枚の物理シールドが正面と左右を護っている。

それが砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲンであった。

(敵機接近、距離は…五〇〇〇……四〇〇〇……三〇〇〇……二〇〇〇……)

砲撃を繰り返すが福音は右翼から放つエネルギー弾と無事なスラストターで砲弾を撃ち落としながらラウラに迫る。

砲戦仕様は、大口径砲の反動を相殺する為に重く作られている。その為、機動力は標準装備デフォルトに比べて格段に落ちている。

故に、機動戦になれば幾らスラストターを損傷している相手とはいえラウラの不利は否めない。

一〇〇〇メートルを切った辺りで急加速をしてくる福音。

砲撃するには近すぎる、そんな間合いに入り込まれたにも関わらずラウラは余裕の表情を浮かべ続ける。

七〇〇、六〇〇、五〇〇、四〇〇、三〇〇　福音が急加速をかけ、
ラウラに手を伸ばす…その瞬間。

「今だッ！」

上空から垂直降下してきた機体に、福音の腕が弾かれる。

その機体の色は、青。

ステルスモードで待機していたセシリアのブルー・ティアーズが強
襲用高機動パッケージの推力に物を言わせて突撃をかけたのだ。

最高速度を維持したまま反転し射撃。

『　敵機Bを認識。排除行動へと移る』

セシリアの射撃を回避しながら、福音が砲口を開こうとして

「遅いよ」

福音の背後から、別の機体が襲いかかった。

それは先ほど突撃してきたセシリアの背中に乗っていた、ステルス
モードで身を隠していたシャルロットだった。

両手に構えたショットガンの至近距離射撃に福音は体勢を崩すも、
それでも反撃を試みようとする銀の鐘シルバークロウの射撃を開始する。

「悪いけど、その程度じゃこの『ガーデン・カーテン』は墜とせな
いよ」

二枚の実体シールドと二枚のエネルギーシールドがカーテンのように前面を遮る。

片翼がひしゃげ、攻撃力の減じた福音にそれを抜くだけの攻撃力は無かった。

防御の間にもシャルロットは武装をアサルトカノンに切り替え、攻撃の隙を縫って反撃を開始する。

近距離からの反撃射撃を行うシャルロット、高速機動射撃による一ト・エンド・ラン撃離脱を行うセシリア、距離を取って遠距離砲撃を行うラウラ。アウトレンジ・ショット

三方から、まったく異なったタイプの射撃に晒された福音はじりじりと追い詰められてゆく。

『優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先』

全方向にエネルギー弾を放って攻撃の手を緩めさせた福音は三機の砲撃網の隙間に飛び込んで離脱を図る。

生きている全スラスターを開放し、砲撃網の隙間を強引に突破する。

だが、突破を果たした福音を待っていたのは四十八発の高機動ミサイル。ハイマニューバ

図らずもミサイル群に飛び込む形になった福音を盛大な爆炎が歓迎

した。

ラウラ、セシリア、シャルロットが形成していた包囲網。そこに故意に開けられていた穴。

その先で待ちかまえていたのは戦域管制《CP》を担当していた簪の打鉄式式だった。

八連装×六基、最大で四十八発を同時発射できるミサイルランチャー
―『山嵐』。

本来は独立稼働型誘導ミサイルを使用する処を、第三世代技術『マルチロックオン・システム』の未完成故に通常の誘導弾を使用しているのだが、
それでも火力は十分。

爆炎から抜け出した福音が打鉄式式を発見する。

相手は単機。強行突破が可能と判断した福音は対複合装甲用超振動
薙刀『夢現』^{ゆめうつ}を構える簪の打鉄式式に突撃を敢行する。

「させるかあッ！」

突如として福音のすぐ背後の海面が膨れ上がって爆ぜた。

飛び出してくる、真紅。

それは不器用な姉が、不器用な妹に送った新たな剣^{ちから}。

『紅椿』

改造された舞梅二号機の武装と装甲を、損傷した一号機のフレームとコアに移植をして甦った翼。

背中と脚部の装甲が開き、過激なほどの加速を得た紅椿が福音へ吶喊を行う。

『展開装甲』

紅椿の両腕、両肩、両脚部と背部に装備された可変装甲。その一つ一つが自立支援プログラムによりエネルギーソード、エネルギーシールド、スラスターへと切り替える事が出来る。それは即時万能対応を実現する『答え』の一つ。

「！」

身構え、回避できる体勢を取る福音。

だが、箒は急激な方向転換で離脱する。

射線上から離脱した箒の背後から迫っていた赤い炎を纏った弾雨。

鈴の甲籠、その機能増幅パッケージ『崩山』によって強化された衝撃砲 『熱殻拡散衝撃砲』であった。

直撃。

箒の紅椿に対応する為の体勢だった福音は衝撃砲に対応しきれずに直撃を食らう。

「もうひと押し」

箒が二振りの刀『あましん雨月』と『からわれ空裂』を抜き雨月で刺突、空裂で斬撃を放つ。

突きに合わせてその周囲に展開した紅い光球からレーザーが放たれ、斬撃が飛ぶ。

「!!!」

それは『刀は近接戦闘武器』という常識を打ち破った一撃。

「墜ちろおおッ！」

レーザーによって体勢を崩した福音の残っていた右翼が空裂から放たれた斬撃によって損傷する。

さらにそこに加えられるラウラとセシリア、シャルロットからの長距離砲撃。

簪もセシリアに預けられ箒が回収していた空の、薙風の大型ライフルで上空からの砲撃に参加する。

どいう訳か、打鉄式式に対しても使用許諾が発行されていた為に。

六機のISからの集中砲火。

その火力をまとめて叩きつけられ、右翼も喪った福音は崩れ落ち海面へと墜ちてゆく。

誰もが勝利を確信し、水面に落着する水音を今か今かと待っていたが、

爆発。

突如として発生した水蒸気爆発の轟音に一齐に福音の落着地点に視線を向ける。

半球状に凹んだ海面。

その中心には青い雷を纏った福音が自らを抱くかのように蹲っていた。

「一体…何が……」

箒の眩き。

それに簷の悲痛な叫びが答える

「福音に高エネルギー反応！まだ生きてる！」

「ッ！ マズイ！ これは セカンド・シフト 第二形態移行だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、福音が確かに『敵意』を持った視線を六人に向けた。

「第二ラウンドってわけね」

「やるしか有るまい」

油断なく己が武器を取り、ポジションに着くべく動く。

『キアアアアアアア………！！』

福音が吼く。

それが第二ラウンドの開始の合図となった。

* * *

一夏は、何処とも判らぬ海岸で、純白の少女をただ呆然と眺めていた。

どれだけ経ったのか判らない。

ただ、さざ波の音を聞きながら。

とてもきれいで、とても元気な歌声を。

波打ち際で僅かにつま先を濡らしながら、踊るように歌い、謡うように踊る、その少女をただ眺める。

(……………あれ?)

ふと気付くと、その少女の歌は終わっていた。

踊りも辞めて、ただじいつと少女は空を見上げる。

それがとても不思議で、なんだか無性に愛おしくて、一夏はそれまで座っていた真っ白な流木から立ち上がり、少女の隣に向かう。

波打ち際、涼しい水の調べが一夏を濡らす。

「どうかしたのか？」

一夏が声をかけるが、少女はじい、と空を見つめたまま動かない。つられて一夏も空を見上げる。

ふと、少女のが呟いた。

「呼んでる……………行かなきゃ」

「え？」

一夏が少女に視線を向ける……………が、そこに少女の姿は無い。

辺りを見回すが、人影は見当たらない。

歌も、聞こえない。

ざあざあ、ざあざあと波の音だけが、世界を満たす。

仕方なく、先ほどまで座っていた流木まで戻ろうと背中を向けた時、新たな声が投げかけられた。

「力を、欲しますか……………」

「え……………」

慌てて振り返る一夏。

その視界には先ほどまではいなかった人物　膝下までを海に沈めた女性が立っていた。

その姿は白く輝く甲冑を身に纏った、騎士さながらの格好だった。大きな剣を自らの前に突き立て、その上に両手を預けている。

その顔は目を覆うガードに隠れて目許よりも下しか見えない。

「力を、欲しますか……………」？ 何のために……………」

「ん、んー……………難しい事訊くなあ……………」

波だけが女性と一夏の間であり、一夏は滔々と語る。

「そうだな。…友達を、仲間を護るためかな」

「……………」

女性は一夏の言葉を黙して聞く。

「なんていうかさ、世の中って結構色々戦わないといけないだろ。単純な『力』だけじゃなく、いろんな事で」

一夏は語る。

自分自身でも驚くほどに考えが溢れ出て来る。

「そう言う時に、不条理な事があるだろ。道理の無い暴力も多い。そう言うのから、できるだけ仲間を護りたい。この世界で一緒に生たきるたか仲間を。」

グツ、と拳を握る。

「…そう」

女性は静かに答えて頷いた。

「だったら、行かなきゃね」

「えっ？」

背後から声をかけられた。

振り向くと、歌っていた純白の少女がそこに立っていた。

人懐っこい笑み、無邪気そうな顔でじいと一夏を見つめている。

「ほら、ね？」

手を取られ、にこりと微笑みかけられる。

酷く照れくさくなりながらも一夏は頷く。

「ああ」

すると、いきなり世界が眩いほどに輝きを放ち始めた。

真っ白な光。

目の前の光景が徐々に遠くぼやけて行く。

（ああ、そういえば……）

一夏は思う。

あの女性は、誰かに似ていた。

『白い、騎士』の女性。

#45・白き翼のよみがえる時

「side…」

「うぐ……ぐうっ………」

「箒ッ！」

セカンド・シフト
第二形態移行を遂げた『銀の福音』を前に、箒たちは全滅寸前になっていた。

最初は、ラウラとシャルロットだった。

セカンド・シフトを遂げた直後に接近され、助けに入ったシャルロット諸共、破壊した砲口兼スラスターから生えた『エネルギーの翼』に包まれ、至近距離からのエネルギー弾を雨霰と食らって海に落ちて行った。

二番目は、セシリア。

二人が為す術も無く撃墜され、一瞬の呆けが生じた。

その隙に接近され、距離を取ろうとした瞬間に両翼からの砲撃に沈んだ。

これで撃破、三。

その後、三人が撃破された間に我を取り戻した箒、簪、鈴でなんとか抑えていたのだが、つい先ほど鈴が墜ちた。

鈴は翼から放たれたエネルギー弾を回避し、回避に成功して無意識に安堵したその一瞬にスラスタを全開にした蹴りを食らったのだ。腕で防御して胴体への直撃は防いだが、盾にした腕部アーマーは砕かれ、そのまま落ちていった。

そして残るは箒と簪。

箒は紅椿の性能に助けられて、簪は箒が前衛に立ち、管制と援護に徹している故に。それでも被弾は少くない。

紅椿の装甲はシールドに護られていたとはいえ軽度の損傷は少なくなく、一連の攻防の中でかすめたエネルギー弾によって髪を束ねていたりボンは焼き切られていた。それでも、箒は福音に食らいつき続けていた。

操縦者の力量差を機体の性能差で埋めていたのだが、それは長く続かない。

だんだんと押されるようになり、防御と回避の比重が高まってゆく。

そして、今。その前衛を務めていた箒が福音に捕まった。

福音に首を掴まれ圧迫されている箒は苦しげに呻き、簪は手出しができないでいた。

薙刀はともかくとしても、ミサイルも、連射型荷電粒子砲『春雷』も、福音相手に使えば必ず箒を巻き込む。

(せめて、マルチロックオンと独立稼働型誘導ミサイルが有れば……)
無い物ねだりと判っていても、思わずには居られない。

仮に有ったとしても、精密誘導が可能なほどに余裕をくれるとは思っていないので最初から作戦としては破たんしてるのだが。

(何か、一つでいい。状況が動く一撃があれば……)

簪が焦る心を押さえながら見守るしかない中、エネルギー翼と輝かせて紅椿を包み込もうとする福音。

最悪、紅椿が撃墜された直後にミサイルと荷電粒子砲の一斉射撃をかける。

その為に全武装をロックオンしたらすぐ撃てる様に身構える。

『一夏……』

オープンチャンネルで箒の呟きが簪に届く。

そして、紅が銀に覆い隠されそうになった瞬間、

イイイイイン!

閃光が走り、福音が吹き飛ばされた。

箒は解放され、福音との間に隙間ができる。

(今っ)

すかさず、簪は再装填しておいた高機動ミサイルを全弾発射。
爆炎でさらに箒から引き離される福音。

さらに追い打ちと言わんばかりに強力な荷電粒子砲が福音に叩きこまれる。

「荷電粒子砲！？ 一体、誰が……………」

簪の疑問。

それはそのすぐ後にオープンチャンネルで届いた声が応えてくれた。

『俺の仲間たちを、これ以上やらせねえッ！』

福音と箒の間に立ち、福音から箒を庇うように立ちはだかる白く輝く機体。

そこに居たのは、第二形態移行を果たした白式 第二形態・雪羅
を纏った一夏であった。

箒の危機に颯爽と現れるその姿は、正に 『ヒーロー』。

少なくとも、簪の目にはそう映った。

もっとも、箒が『ヒロイン』なんて枠に大人しくおさまってるタマにはまったく思っていなかったが。

* * *

「side：箒」

「い、一夏！本当に…一夏なのか！？ 体は…怪我は…ッ！」

「おう、大丈夫だ。見ての通りピンピンしてるぞ」

最初は、幻^{ゆめ}でも見てるのかと思った。

けれど、声を聞いてようやく現実だと理解できた。

理解できて、嬉しくなった。

一夏が、無事に目覚めた事が。

一夏が、私のピンチに駆けつけてくれた事が。

「よかつ……本当に、良かった」

「なんだよ、泣いてるのか？」

言われて、初めて私が泣きそうになっている事に気付いた。

「ばかつ！……心配、したのだぞ」

「悪かったな。」

一夏の手が、白式の手が頭に触れる。

強張った、機械の手。

だけれども、それが私に触れているという事実が、一夏がそこに居るんだと強く意識させてくれる。

「そついや、リボンはどうした？ イメチェンか？」

そう言われて、ハツと後頭部に手を回す。

そこに、リボンは無かった。

出撃の時はちゃんと有ったから戦闘中に落としたか、失くしてしまっただようだ。

……………思い入れのあるモノだったのだが……………

「まあ、丁度いいか？」

「どついつ事だ？」

「こんななら、持ってくりゃ良かったか？ まあ、後でな。」

「？」

よく分からない。

けど、一夏にとって私がリボンを失くしたのは都合が良かったらしい。

『……………』

「ん？ 簪、どうした？」

『甘酸っぱいラブコメご馳走様。もう結婚してしまえ、このバカッブルめ。…他にも色々と言ってきた事有るけど、一つだけにするね
今、戦闘中なんだけど』

「けけけ…結こ

ハッ！」

ハッ、と我に帰ってみると簪が必死になって薙刀と連射型荷電粒子砲で福音を牽制し続けている。

その機体は到る所に損傷が増え、今にも落ちそうなくらいに満身創痍だ。

「それじゃ、行ってくる。

さて、借りを返すぜエ、福音ッ

！」

雪片を右手一本で構え、獰猛な笑みを浮かべて福音へ突進してゆく一夏。

セカンド・シフトしたことで武装が増えたらしく、左腕から発振されたエネルギー刃のクロ、荷電粒子砲も織り交ぜながら着実に福音に食らいついてゆく。

四機のウイングスラスターが織りなす、強大な推力にモノを言わせ、機動戦闘型であるハズの福音に食らいついて離れようとしないう一夏。

まるで舞っているかのような姿に思わず見とれるが…私の武人としての血が騒ぐ。

生憎、私は『護られるだけのヒロイン』は柄では無い。

あの隣に立って共に刀を執ってこそ、私らしい在り方と言える。

……だから、もう少しだけ我儘に付き合ってくれ、紅椿。

一夏と、共に闘うために。

ぐっ、と手にした刀を強く握りしめた時、それは起こった。

展開装甲から紅い光にまじって金色の粒子が溢れだしてきたのだ。

「な、なんだ？」

そして同時に紅椿のシールドエネルギーが一気に回復している事が伝えられる。

『ワンオフ・アビリティ 単一仕様能力” 絢爛舞踏” 発動。 展開装甲とのエネルギー
バイパス構築 完了』
『ワンオフ・アビリティ 単一仕様能力” 絢爛舞踏” 発動確認 特殊防御装備” 鉄扇・
舞梅” 機能限定解除。』

「わ、ワンオフ・アビリティ単一仕様能力！？ 特殊防御装備！？」

突然の事で思わず慌てたが、シールドエネルギーは全快しているのは確か。

それが意味するのは…

「手を、貸してくれるのか。……紅椿。ありがとう。」

「すう……………はあ……………」

大きく息を吸い、ゆっくりと吐く。

「よし、行くぞ。紅椿」

紅椿は、スラスターを唸らせて白と銀が舞う戦場へと駆け出す。その音が、私に伝えてくれているように聞こえた。

* * *

「side：一夏」

『 エネルギー残量 二〇%。 予測稼働限界まで 三分』

大見得切って福音にリベンジを挑んだ俺だったが、見事に一回目の焼直しとなりつつあった。

相手はリミッターの無い軍用第三世代型。

エネルギー量の事もあるが相手は軍用機を持つ軍人。つまりその為の訓練をしてきている。

俺ら学生とは天と地ほどの差があると言い換えてもいい。

「くそ、このままじゃ……」
思わず漏れる呟き。

それは俺の内心の焦りが表に出たモノだ。

あと三分で、決着をつけなくては…

と、言っても箒も簀さんもマトモに戦闘できるほどのエネルギーは残っちゃいないだろうし……

「ッ、やべえ！」

福音の一斉射撃。

俺は一瞬だけ、ショート・イグニッション・ブースト短距離瞬時加速を使うかを迷った

その一瞬の遅れが、俺の逃げ道をふさいでいた。

「ッ、くー！」

せめてもの悪あがきに防御態勢を取る。

…耐えきってくれよ、白式

着弾を目前に身を強張らせる
刹那、金色の光を纏った紅が視界を埋め尽くした。

「無事か、一夏」

「ほづき？」

福音の攻撃に耐えきった紅の機体がこちらに振り向く。

そこに居たのは、無傷の紅椿…そして不敵に笑う、箒。

「こいつを受け取れ」

箒の、紅椿の手が白式の手に触れる。

その瞬間、全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、視界が揺れた。

「な、なんだ？ エネルギーが、回復してる！？ 箒、一体これは…？」

「詮索は後だ。今はコイツを片づけるのが先決だろう。行くぞ、一夏」

箒は右手に刀を、左手に扇を以って福音に対峙する。

「ああっ！」

エネルギーは満タン。

気力も溢れた相棒もいる。

不思議と、負ける気がしなかった。

「俺が仕掛ける。反撃の出端を潰してくれ」

「了解した」

簞の声を合図に、俺は零落白夜のエネルギー刃をギリギリまで収束させ最速の横薙ぎの斬撃を放つ。

「おおおおおッ！」

だが、それを福音は縦軸一回転で回避、反撃に光翼を向けてくる。

掛つたな。

「簞ッ！」

「任せろ！」

俺の方に向けられた翼を突撃してきた簞の紅椿が切断する。

「逃がすかアアッ！」

そのまま脚部の装甲が開きビーム刃が展開される。

刃付きの回し蹴り。

モロに入った福音は体勢を崩し、大きくよろめく。

その際に俺は振り抜いていた雪片式型を切り返し残った光翼も掻き消す。

物理装甲なら切断する必要があるが、エネルギー翼ならば零落白夜の刃が触れただけで掻き消せる。

「こいつで、とどめだあつ！」

最後の一突きを繰り出そうとする俺に、福音は全身から生やしたエネルギー翼 その全てからの一斉射撃を行ってきた。

だが、ここまで来て退けるわけがない。

ダメージ覚悟で突っ込もうとしたら目前に紅椿が割って入ってきた。

「弾幕は任せろ。」

箒が薄紅に輝く扇を振るう。

それに触れたエネルギー弾が、まるで零落白夜に触れたかのように掻き消され、一本の道が出来上がった。

「サンキュ、箒！」

エネルギー弾の処理を終えた箒が俺と福音の間から離脱。

同時に俺はイグニッション・ブースト瞬時加速で止めとなる突きを放つ。

苦し紛れにはなってくるエネルギー弾は気にせず、福音の胴体に零落白夜の刃を突き立てる。

「おおおおおおオオツ！」

エネルギー刃特有の手ごたえを感じながら俺はさらに全ブースターを最大出力まであげる。

押されながらも、俺へと手を伸ばそうとする福音。

その腕の装甲が爆ぜ無数のエネルギー弾が

「一夏ッ！」

「織斑くん！」

やべえ、なんて言ってる場合じゃ無かった。

深々と突き刺さったエネルギー刃、俺を掴んだ福音の手。

その二つのせいで俺は離脱も回避もできなくなっている。

こうなりや我慢比べだ、と身構えた時

『やれやれ、詰めが甘いぞ』

男の、声。

同時に真上から飛んできた閃光に福音が撃ちすえられる。

今にもエネルギー弾を発射しそうになっていた腕は無残に灼かれ輝きを喪う。

「えっ!？」

続いて物凄い勢いで『白い何か』が『青白く輝く刃』で福音を切り裂き、そのまま海の中へと消えてゆく。

ISのハイパーセンサーを使ってコレだ。
肉眼じゃとてもじゃないが認識できないだろう。

背後から斬られた福音は蓄積ダメージが限界を超えたらしく強制的にアーマーを解除。

操縦者は俺の方に倒れながら落ちてきたので位置を調整して受け止める。

「……なんだったの、一体……………」

遙か下にある島の影から打鉄式式が飛び出してくる。

それに続いて甲龍、ラファール・リヴァイヴ・カスタムIEI、シュヴァルツエア・レーゲン、ブルー・ティアーズも海中から飛び出してくる。

よかった…みんな無傷とは言えないが無事みたいだ。

「……………終わった、のか」

「…ああ。そうみたいだな」

俺は黙って『白い影』が去って行った方を見る。

そこには夕日に赤く染まった海だけが広がっていた。

46：月下の逢瀬

「side：一夏」

「作戦終了　　と言いたところだが、『待機命令を無視して独断専行』。これがどれだけの事か、判っているな？」

戦士たちの帰還は、それはもう冷たいものだった。

砂浜に帰還するや否や仁王立ちする千冬姉に迎えられそのまま冒頭の言葉を投げかけられた。

「……………は」と、普通なら言つところなのだが　　え？」

「『現場指揮官の判断で第二次攻撃を指示した』と千凧先生が報告してきた。故に、お前たちはお咎めなしになる。よかったな」

空が？

「せ、先生！そ、空くんは無事なんですか！？」

千冬姉に詰め寄った簪さん。

すげえ、あの千冬姉が引いてるよ。

「落ち着け、更識。」

「落ち着いています！」

そんな様子に『こりやだめだ』と思ったのか溜め息をついてから……
「千凧は領域外に流されていたらしく、監視海域外に居た船に救助され病院に搬送された。義肢の損傷以外は大した怪我では無かったから明日には退院する予定だ。」

「はあ……………よかった……………」

と、簪さんはその場にへたりこんでしまった。

「各員、作戦行動中のログを提出しろ。その後診断を受けたら部屋へ戻ってゆつくりと休め。よくやったぞ、お前たち。よく、無事に帰って来た」

スタスタと立ち去ってゆく千冬姉。

その顔はなんだかちょっと赤くなってるように見える。

「わたくし、織斑先生がそのような表情をしているところを初めて見ましたわ」

「僕も」

程なくして俺たちは作戦行動中のログデータを受け取りに来た山田先生に提出。

水分補給と軽い検診を受けた後に部屋に戻る事となった。

……………それにしても、アレは一体なんだったんだ？

* * *

ざあん、ざあん……

「ふうっ」

海から上がった俺は頭をトントン、と軽く叩いて耳から水を抜き、用意しておいたタオルで軽く拭いてから手頃な岩に腰をおろした。

夕食の後、俺は軽く休憩を取ってから夜の海に繰り出していた。

まあ、約束の、ちょっとばかり時間調整に泳いでいたのだが。

今夜は満月で真夜中であるのに結構明るい。

俺は穏やかな波の音を聞きながらぼんやりと輝く月を見上げた。

そういえば、夕方になんとか夢を見たような………どんな夢だっけ。

なんだか物凄く大事な夢だったような気がするのに、今じゃ全く思い出せない。

うーん、判らない事が幾つもあったもやもやしてくるぞ？

「…一夏」

お、来た。

呼ばれて俺は振り向く。

そこに居るのは水着姿の箒だった。

ただ、昨日と違う点が一つ。

「あ、あんまり見ないで欲しい……は、恥ずかしいから……」

「す、すまん」

そう、箒が着ている水着だ。

慌てて箒の方から視線を外したので数秒くらいしか見えていないが、月明かりに照らされた箒の姿は鮮烈でしっかりと脳裏に焼き付いていた。

白い、ビキニタイプ。縁に黒いラインが入った、かなり肌の露出面積が広いヤツ。

リボンを失くしている為にストレートなままの髪型と相まって凄く大人びて見える。

箒のスタイルの良さに物凄く似合っていて、そう、なんというか……物凄くセクシーな。

あ、語弊の無いように言っておくが普段の箒が子供っぽいという訳ではないからな。

俺としては幼馴染のそんな姿にドキドキしっぱなしなのだが、そんな事をきくと気にしてもいないであろう箒は俺から一メートルほど離れた処に腰をおろした。

「それで……用件はなんなのだ？」

「あ、ああ」

実は、ここに箒が来たのは偶然じゃない。

俺が、呼びだしたのだ。

なんで真夜中にわざわざ、と思うだろうがこれは仕方ない事なのだ。起きてる女子の目があるかもしれない場所でプレゼントなんか渡そうものならあつという間に無い事無い事が広がってゆく。

学年全員の誕生日にプレゼントを用意…なんて事になったら俺は破産確定。身売り決定な状態になってしまう。

と、それは置いておいて俺はタオルとかの簡単な手荷物に入れておいた鞆から小箱を取り出す。

「箒、誕生日おめでとう」

俺は箒の方にプレゼントの小箱を差し出す。

「あ、ありがとう………」

俺の手から小箱の感触が消える。

どうやらちゃんと受け取ってくれたようだ。

「あ、開けていいか？」

「ああ」

しゅるしゅる、とリボンを解く音。

がさがさと、包装を解く音。

その中に入っているのは……

「これは……リボン？」

そう、リボンだ。

白地に赤いラインの入った、髪を結う為のリボン。

誕生日のプレゼント選びの為にシャルに付き合ってもらったのだが
いいものは見つけれねずに、『なんとなく似合いそうだな』とコレ
を選んでしまった。

だけど、丁度よかったみたいだな。

『人間万事塞翁が馬』とはよく言ったモノだ。

「あ、ああ。俺は似合うと思ったんだが……」

「そ、そうか……」

それから少し、沈黙。

俺と篤は背中を向けあって、ちょうどその間に月が浮かぶ。

「ちらり、と箒の方を窺つと早速新しいリボンを使つてくれるようだ。うむ、ストレートもいいが…やっぱり、いつも通りが一番いいな。」

「ッ！？」

箒が身を強張らせた。

「どうやら思つてた事が口に出てたみたいだ。」

それにこっちが箒の方を盗み見た事がバレてしまった。

よし、ここは話を逸らす方向でいこう。

「あ、あと。コレもやるよ。」

と、俺はシルバーのブレスレットを箒に差し出す。

「こっちは誕生日とは別だ。」

「この間シャルにつきあつてもらつたお礼に買ったのだが予想外に鈴にラウラにセシリアにもプレゼントする事になつてしまつていた。折角だからと箒の分も買つておいたのでそれを今渡すでしょう。」

「これは……シャルロット達が持つていた……？」

「この間、ちよつと野暮用に付き合つて貰つた時にその礼でプレゼントする事になつてな。折角だから箒の分も買つておいたんだ。」

「そ、そうなのか」

きつと、後で機嫌が悪くなるだろうからな。

「じ、じゃあ、一夏」

「なんだ？」

「っ、つけてくれ」

！？

「お、おう。その代わり、そっち向くぞ」

「あ、ああ」

俺は箒の方に向く。

やや半身になって右腕を突き出してきているのだが、月明かりの中というのもあってすごく幻想的だ。

それにしても

「水着、似合ってるぞ」

「ッ、そ、そうか……」

「でも、なんで初日はそれじゃなくてスクールみすぎ学校指定だったんだ？」

「そ、それはだな……っ、っ、っ、勢いで……あの、合宿の始まる

直前の休みに、空と……でも、いざ着るとなると、恥ずかしくて……だな」

「へえ……」

俺としては空と篤という組み合わせで水着を買いに行った事自体が驚きだ。

「…よし、できた」

俺がそう言ったら右手が引っ込み、どうやらじっくりと眺めているらしい。

その横顔は何処となく嬉しそうな処を見ると気に入ってくれたようだ。

「改めて、誕生日おめでとうな」

「う、うむ、あ、ありがとう………とこるで……」

「ん？」

「怪我は、もういいのか？」

「ああ、そういえばすっかり治ってたな」

「え？」

「目が覚めて、ISを起動したらなんか治ってたぞ」

「なッ!？」

箒は驚いた様子で俺の肩を掴むとぐい、と月明かりの方へ俺の背中を向けさせる。

「あんなに酷い傷だったのに……」

そういえば箒が運んでくれたんだっとな。

「アレじゃないか？ 操縦者生体保護機能」

「それは生命維持だけだろう！ 傷が治るなど聞いた事がない！」

不意に、肩を掴んでいた箒の手が離れる。

「でも……」

箒の手が俺の前に廻ってきて背中にそれはもう立派な胸が押しあてられる。

当然心臓はフル稼働状態だ。

「……………無事で、本当に良かった……………」

俺を背中から抱いてくる箒。

その、色々当たっていて俺としては物凄く、いろんな意味で嬉しくも危ない状況。

でも、本気で心配してくれていた事がなんとも嬉しかった。

やっぱり、俺も篤も、千冬姉や束さんも『親しい人を亡くす』事が怖いからだろうか……

ふと、鉄の匂いを感じた。

どんなに真面目な雰囲気でも、体の方は正直らしい。

「あの、すまんが篤……ちょっと離れてくれ」

「むっ!?!」

正直、理性も限界に近い

篤の方も状況を理解したのか慌てて飛び退いて、少し距離をとってから胸を抱くように腕を組んで混じりっ気無しな抗議の視線を向けてきた。

「お、お前は、人が真面目な話をしてる時に……」

うん、正直すまないと思ってる。

けど篤さんよ、自分が持つてる凶器が異性に対してどれだけの破壊力を持つてるかはそろそろ自覚してくれ。

「……………その、なんだ……………い、意識するのか？」

「?」

「だ、だから……その、だな……」

しどろもどろになりながら、篝は俺の手を取りそのまま　ンな
ツ！？

胸の谷間に引っ張り込まれてしまう。

あ、あの…篝さん？

「あ、あ、あれだ……わ、私を、い、異性として、意識するのかと、
訊いているのだ」

耳まで真っ赤にしてぼそぼそ声で言ってくる篝。

向こうも相当恥ずかしらしい。

「あ、ああ…当然だろ。」

俺は、篝の間に肯定を返した。

正直に言って、篝は可愛いと思う。
ちよっと手が早い処もあるが、それを補って余りある魅力が、ちや
んとある。

寮で同室だった時はなるべく篝に負荷をかけないよう、『部屋で異
性と一緒』という緊張状態を作らないように常に賢者モードだった。

「そ、そうか。そう、なのだな」

咀嚼するようになんども呟く篝。

密着した腕からは、箒の体温が伝わってくる。

自分の鼓動の高鳴りが相手に聞こえてしまわないか、心配になるくらいに俺と箒の距離は近づいていた。

ふと、箒と目があった。

あ……………

心の底から、綺麗だと思った。

月明かりに照らされた箒が余りにもきれいで、見惚れてしまった。

そんな事を考えれば考えるほど胸の高鳴りは激しくなり

「せ、セシリア！？　なんでこんな処にいんのよー！」

「鈴さんこそ！か、勝手に旅館を抜けだして、怒られても知りませんわよー！」

「ちて、一夏は…と」

「え？　ラウラに、…………鈴とセシリア？　な、なんでここに居るの…？」

ドキィッ！

い、い、今の声は……間違いない……鈴にセシリアにラウラにシヤルだ。

声の大きさに距離はまだ多少あるが、ここに居たらすぐに見つかつてしまう。

しかも、箒とふたりつきり。

何を言われるか判ったものじゃない。

「ほ、箒…向こうに行こう」

「え？ きゃっ……」

近づいてくる声から逃げるように、俺は箒の手を引いて岬の方へと向かう。

当然ながら俺たちが居た痕跡となるような荷物とかは回収済みだ。

そして、丁度岩影になっている場所に身をひそめて、一安心だ。

ここで隠れていて、声が遠ざかっていって少ししたら旅館に戻ればなんとかなるだろう。

「い、一夏……い、いきなりだな……その、人気のない場所に連れて……私とて、困る……」

「っっ」

箒がなにやら言ってたようなので、そちらに顔を向ける。

「ん……………」

……………え？

ほ、篝サン、ナンデ目を閉じて、やや唇を上向きに突き出すんですかね、出すんですかね！？

静かに、少しだけ恥ずかしそうにして待ってる篝の顔は、やっぱり綺麗だった。

マズイ、これは　　引き込まれる。

俺の手が肩に触れると、ぴくん、と篝は震える。

それから、改めて身を預けてくる篝に、俺はゆっくりと顔を近づけて唇に唇が軽く触

「じらぁッー」

大声の怒声にびっくりして、思わず固まってしまった。

「その四人組ッ！深夜に宿を抜け出したりしてないでとっとと寝なさいっ！」

「えっ、空！？」

「な、なんでここに！？」

「入院している筈では……」

「まさか、脱走を!?!」

怒声を向けられた鈴、シャル、ラウラ、セシリアはそれぞれ驚きを隠せない様子。

「失礼な。ちゃんと手続きはしてるから。ほら、宿に戻る。」

「ですが、一夏さんの姿が……」

「そういうのは教師に任せなさい」

「ですがッ!」

「起床時間まで正座でお話して、部屋に戻って大人しくしてるの、どっちがいい?」

「……部屋に戻ります」「……」

慌てたような足音が遠ざかってゆく。

ふう、これで一安心か……?

「どっちら、行ったみたいだな」

「……………」

「ん？ どうした、箒」

ふと気付けば俺は身を隠す為にしっかりと箒を抱きしめていた。

そのせいか箒の顔は先ほど以上に真っ赤で湯気すら出そうなくらいになっていて……

「ふしゅー……………」

かくん、と箒が完全に脱力する。

「ほ、箒！？」

それから、箒が正気に戻るまで三十分の時間が必要だった。

続き？ そんなの出来る訳ないだろ。

蛇足

「せ、先生！ 脱走です！ 207号室の千凧さんが…部屋に居ません！」

「なにっ！？」

そんな、当直医と当直看護師の会話がほぼ同じ時間帯に行われていたとか…

#47: 日常への回帰 / Your Name is... (前書き)

ぶっちゃけ、解説回。

あと、我慢しきれなかった。

#47：日常への回帰／Your Name is…

「side…」

旅館のある一室……

最奥にある、つい数刻前まで作戦司令室であったその場所に千冬と束の二人は居た。

「……………」

「……………」

二人が黙って見つめる先にあるのは福音と戦った六人のログデータである。

そこから気になる部分を抽出した結果、この沈黙が出来上がった。

その原因は、白式、紅椿、打鉄式式のログに残っていた一機のISにあつた。

最後の最後で詰めのかかった一夏を救い、そのまま姿を消した白い機体。

使用された武装は高出力荷電粒子砲とエネルギー刃型のブレード。

そしてその外見は…

「白騎士……………」

千冬の初代愛機にして、全ての発端となった機体。

全てのISの始祖にして到達目標。

「『白騎士』かあ、懐かしいね。アレを組み立てたのもう七年も前なんだね」

東は敢えて『作った』ではなく『組み立てた』と言う。

「…そうだな」

「……………あの頃は、二人して情けない姉だったよね。篝ちゃんにも、いつくんにも心配をかけて」

「……………」

千冬は黙して語らない。

「私は引き籠ってISの研究とあつくんの秘密基地にあつた白騎士を組み立てて、ちーちゃんは木刀片手に夜な夜な町の不良狩り。いくつの不良集団を壊滅させたんだっけ？ 五つ？ 六つ？」

「……………三つだけだ」

「ああ、そうだったね。市内最大規模の所と町内最大規模の所と地域最大規模の所の三つだったね」

「……………昔の話だろう。今は『現れた白騎士』についてだ」

「もう、恥ずかしがり屋さんだなあ」

「東」

「はいはい」

仕方ないな、と東は空間投射ディスプレイを複数表示させる。

「ヒントになりそうなのはこのブレまくった画像と高出力の荷電粒子砲。あとは青白く輝いていたエネルギー系ブレード。そして

」

「あ の、一言か」

白式のログにのみ残っていた、『詰めが甘い』という一言。生憎『通信履歴』でしかないのでために声を聞く事は出来ないのだが…。

「まず、機体と荷電粒子砲は白騎士に似せる事は出来るよね。だって、白騎士ほど有名なISは居ない訳だし」

東が言うとディスプレイの一枚にチェックマークがついてゆく。

「問題はあの青白く光ってたエネルギーブレード。いくら損傷していてもエネルギーが残ってる限りシールドは展開される…けど、アシはそれが無かった。まるで……」

「…『零落白夜のようだ』か？」

「そう。けど……白騎士の『No.001』のISコアは

白式に使われているし、暮桜のコアも所在は判ってる。そもそもでワンオフ・アビリティ同じ単一仕様能力が発現するなんて、天文学的な確率の低さだよ？」

「……だが、現に白騎士のコアを使っている一夏の白式は、私の暮桜と同じワンオフ・アビリティーを発現した。コレについてはどうする」

「……………コア・ネットワークで暮桜と白騎士が情報のやり取りをしていた。だから、同じ操縦者を持つ機体同士、同じワンオフ・アビリティーを開発した　　なんて説はどう？」

「まあ、あり得ない話ではなさそうだな」

「そもそもで、ISのコアについては私も『作れるだけ』だからね。何があっても、『あり得ないはあり得ない』としか言えないよ」

「……………そうか」

「で、最後にいっくんに通信を入れてきた相手だけ……………こればっかりは声を聞きたいいっくんに訊かないと判らないね。今の段階じゃ『相手はいっくんの事を知っている』くらいかな」

「……………」

千冬は黙って考えてみる。

一夏の事を知っていてISに携わっていきそうな人物を。

「……………ねえ、ちーちゃん」

「……………なんだ」

「あの白騎士の正体は、何だと思う？」

なんとも突拍子もない問いに千冬は少し考える。

「……………どこかの誰かが『オリジナルの白騎士』に似せて新造した機体。もしくは解体された白騎士を復元した機体。そのどちらかではないのか？」

「そう、『白騎士を作れる』人物なんていないからね。……………たった一人を除いて」

その、最後の呟きに千冬は思わず目を見開いた。

「まさか……………」

「私はね、アレはあつくくんなんじゃないかって疑ってる」

「だが、アキト兄さんは……………」

「前にも話したっけ？ 篝ちゃんに舞梅が託された時に」

「ああ、舞梅の同型機が青写真せつけいずと一緒に送られてきたというアレか」

「うん。今回の件で舞梅の換装をしたんだけど、その時に使用されているコアを確認してみたんだ」

「……………で？」

「刻印されていたナンバーは、あり得ないナンバーだったよ」

「どづいう事だ？」

「『No.000』。私が作ったコアは『001』から『467』の四百六十七個なのに、だよ？」

「!？」

「『No.000』…『オリジナル・ゼロ』とでも呼べばいいのかな。世界で一個目のISCコア。それを持つてるのは……」

「アキト兄さん、か」

「少なくとも私が作ったものじゃない事は確かだよ。コアはブラックボックス化されているし、データは物理的にネットワークに接続されていない場所に保管かくれがされているし。さてと」

「わかった。どこに行く気だ」

部屋から出て行くこととする束を、千冬は呼び留める。

「んー、技研に戻ってちょっと色々調べてみよっかな」と

「……何か判ったら連絡を寄越せよ」

「りょーかい」

とたたた、と軽い足音を立てて束が去ってゆく。

ディスプレイに表示されていたデータを消し、そのものも電源を切る。

ほぼ真っ暗になった部屋で千冬は思う。

「一体、何がどうなっているんだ。アキト兄さん…」

その咳きは、闇の中でぼつりと消えて行った。

* * *

「side：一夏」

翌朝、朝食を終えてすぐにIS及び専用装備の撤収作業が開始された。

……のだが、みんな、ちらちらとある一点を窺っていて作業は遅々として進まないでいた。

昨夜の筈との一件で悶々として中々寝付けず、殆ど寝ていない俺としては作業が急ピッチに進まないでいてくれるのは有り難くも恨めしい。

ゆっくりやれるのは眠さと戦いながらもいいが、早くバスの座席で寝たいという思いもある。

そして原因たる一点と言うのが…

「う、う………」

「駄目ですよ。ちゃんとお披露目　じゃなくて、監督してください

さい」

満面の笑みの山田先生に連れられて現れた、空。

千冬姉の話に聞いた通り義肢は損傷してるらしく包帯でぐるぐる巻きにされている。

傍から見れば怪我をしているようにしか見えないう。

車椅子に乗せられていて、山田先生がそれを押している処から義肢の機能に何らかの障害は出ているようだけど。

義肢と生身の体の繋ぎ目の部分が僅かに見える程度なのが救いだらう。

これで機械と生身が痛々しく繋がっていたら目も当てられない。

……さて、ここで空をよく知っている人は『おかしい』と思う。

何故かというと、空は普段なるべく繋ぎ目を隠す格好をしているから繋ぎ目が見えるなんて普通じゃあり得ないのだ。

臨海学校の一日目、海で遊べるというのに空はTシャツに袖無しパーカー、七分丈のズボンという格好をしていたのが何よりの証拠。

では、何故そうなのかと言うと………水着を着ているからだ。

誰が？ 空に決まっている。

前から見るとスクール水着っぽいが背中側とわき腹部分が大胆にカットされビキニのように見える、

所謂モノキニと呼ばれるタイプの水着。色はなんとも鮮やかなオレ

ンジで空の色白さが際立って見える。

ところどころに見える傷痕は魅力を損ねるところか逆に妖しげな魅力を引き出している。

「うう…監督だったらわざわざ水着に着替える必要ないじゃないですかあ」

「病院を脱走して、その後始末に走らせられた迷惑料です」

「うう………」

半ば涙目になって身を縮込ませる空。

というか、脱走したんかい。

「ぶはっ」

どこかで限界を超えた誰かが喀血したようだ。 鼻から。

声からしてアレは

「か、簪いい！」

「な、なんて破壊力なの!？」

「これが、千凧先生の實力!？」

「てゆうーか、女装似合いすぎでしょ」

「男の娘ですね、判ります」

「……………アンタら、とりあえず鼻血拭いたら？」

なにこのカオス。

というか、空が女だと何故気付かない。

あそこまではつきりと胸が出てれば普通気付くだろ？

「か、」

ふと、近場で声が上がった。

その主は専用機用のパーツを片づけていたシャル。

「か？」

「可愛いっ！可愛すぎるっ！　シャルロット・デュノア、行きますっ！」

まるで戦場に出撃するかのような宣言の後、シャルが空の元に物凄い勢いで駆けてゆく。

「させるかぁッ！」

ソレを察知した簪さんが鼻から愛情を噴出した（決して鼻血では無

い) ままシャルへ突っ込んでゆく。

「わ、私も!」

「負けてられないわね!」

オドオド、ビクビク、はわわ、あわわ、な空に群がり始める女子たち。

簪さんはシャルに飛びかかって砂浜で肉弾戦キヤットファイトに突入し、そんな様子に目もくれずに他の女子たちが行動を開始する。

あっという間に車椅子の付近は囲まれて山田先生は弾き出されてきやつきやと声上がる。

千冬姉がなにやら用があるらしく海岸に来ていない事をいい事に騒ぎ放題だ。

そして五分くらい騒いでいると…ふと咳きが広がった

「……………あれ? この突起、なに?」

漸く気付いたらしい。

「ふにやつ!?!」

人垣の向こう側から聞こえる空の悲鳴つばい声。

「ええと、これって……………マッモ本物の胸?」

どうやら、誰かが揉んだらしい。

俺はなんとなく嫌な予感がして両手で耳を塞いでおく。

箒やラウラ、セシリアに鈴は不思議がりながらも俺に倣って防音体勢をとる。

「全員、その場に正座あッ！」

その瞬間、ざわめきが止んで群がっていた全員がその場に正座した。

その様子はまるで玉座に座る女王の如く。

それにしても良かったな。ここが雨曝しの海岸じゃなくて、雨曝しだったら物凄く熱いぞ、砂浜は。

「……………なんだかすごい事になってますわね」

「ああ、そうだな」

「あ、山田先生も正座してる」

「流石母さま。」

ふと、気になったから訊いてみた。

「なあ、ラウラ。なんで空が『母さま』なんだ？」

「ん？ 母さまは母さまだろう。」

いや、そうじゃなくてな…

「一夏は、ラウラが何故空の事を『母様』と呼んでいるかを訊いて
いるんだ」

そこに箒が参戦。

どうやら箒も気になってたようだ。

「無条件で愛情を注いでくれる者を母親と呼ぶと聞いた。」

「で？」

「母さまは……私に甘えさせてくれたのだ。ただ、私だというだけ。」

成る程。

「そう言えば、トーナメントの日に空の部屋に居たよな」

「そう言えばそうだな。あの時か？」

「う、うむ……あの晩、中々寝付けなかったのだが……」

「空と一緒にだつたらすぐ眠れたのか？」

「あ、ああ。なんだか、物凄く暖かくて……あんなに安らいで眠れたのは初めてだった…。だから私は敬意をこめて『母さま』と呼んでいるのだ。」

「そっか」

って、なんで俺納得してるんだ？

というか、空がラウラの添い寝してる姿がけっこう簡単に想像ついてしまった……

その微笑まじさにこっちまで微笑みたくなるくらいだ。

「何と言うか……空なら良い母親になりそうだな」

それは筈も同様のようで苦笑いというかどういつ表情をすればいいのか迷っている様子。

「自慢の……母さまだ」

なんかいい話にまとまったな〜と思ったら、

「全員、作業に戻るッ！」

「さ、サー、イエッサー！」

「声が小さいっ！あと、僕は女だっ！」

「あ、アイマムッ！」

それからというものみんなして物凄く迅速に片づけを始めた。

そりゃもう物凄い勢いで。

みるみるうちに片付いてしまい十時終了予定だけどこれは早まりそ

うだな。

うん、俺も早く終わらせてバスの席でゆっくりと寝るとしよう。

そうと決まれば、俺も作業あるのみだな。

* * *

「side :
」

空による発破であつという間に作業は終わり十時には生徒たちはバスへの移動を終えていた。

当然、全ての荷物の移送も完了済みだ。

で、一夏はと言つと

「zzz

」

バスの座席でぐっすりと眠っていた。

「……………」

そして、その隣の席を勝ち取った篤は、寄りかかれて瞬間湯沸かし器状態になっていた。

その様子を物欲しそうに見つめるセシリア、シャル、ラウラ。

「あら、ヒーローはお休み中なのかしら」

そこにブルーのカジュアルなサマースーツを着た女性がやってきた。

「ええと、あなたは？」

寝ている一夏の代わりに筭が尋ねる。

「私はナターシャ・ファイルス。『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』の操縦者よ」

「あなたが……」

「お礼を言いに来ただけ、その様子だとお邪魔だったみたいね」

「…え？」

「それじゃあ、彼によろしく言っておいてもらえるかしら」

「え、ええ……それくらいなら……」

「ついでにキスもお願いね。頬でいいから。」

「はあ………つて、ええっ!?!?」

「それじゃ、ね」

「あ、ちょっと!」

ナターシャは言っただけ言っただけからバスを出てゆく。

「ええと……」

困る篤、

「」「」……………」

ジト睨みするセシリア、ラウラ、シャルロット。

「……………」ワクワク

興味津々で様子を窺うクラスメイト達。

「篤さん」

「もしかしてする気なの？」

瞳から光が消えたセシリアとシャルロットが篤に問いかける。

「す、するかっ！」

「なら、私がしよう」

「なあっ!?!」

「ラウラさん、抜け駆けは許しませんわよ!」

「早い者勝ちだろう」

ラウラの襟首をセシリアが掴まえ篤をシャルロットが牽制する。

そんなドタバタ騒ぎの中でも、一夏はぐっすりと眠っていた。

* * *

バスから降りてきたナターシャは目的の人物を見つけて、そちらへと向かった。

「おいおい、余計な火種は残してくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ」

そう言ってきたのは、千冬だった。

ナターシャはその言葉にすこしはにかんで見せる

「思ってたよりずっと素敵な男性だったけど、お休み中だったし、どうやらお相手が居るみたいだから代わりを頼んだだけよ」

「やれやれ…余計に夕チが悪い。それより、昨日の今日でもう動いて大丈夫なのか？」

「それは問題なく。銀の福音（いのみこと）に護られていましたから」

「やはり、そうなのか」

「ええ。あの子は私を護るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト。それにコア・ネットワークの切断。あの子は、私の為に自分の世界を捨てた。」

言葉を続けるナターシャはさっきまでの陽気な雰囲気など微塵も残

さず、鋭い気配を纏ってゆく。

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのISを敵にみせかけたその元凶を必ず追って、報いを受けさせる。」

何よりも飛ぶ事が好きだったあの子が、翼を奪われた。相手がなんであろうと、私は赦しはしない。」

「…あまり無理をするな。査問委員会がこれからあるんだろう。しばらくは大人しくしておいた方がいい」

「…それは忠告ですか？ブリュンヒルデ」

IS世界大会『モンド・グロツソ』その総合優勝者に授けられる『最強』の称号。

千冬はその第一回受賞者であったが、その名で呼ばれるのはあまり好きでは無かった。

「アドバイスさ。ただのな。」

「そうですね。それでは、大人しくしていきましょう。しばらくはね」

一度だけ鋭い視線をかわしあった二人はそれ以上の言葉も無く、互いの帰路につく。

またいずれ。

そんな言葉が二人の背中にはあった。

「ああ、一つ伝え忘れていた」

突如、千冬は思い出したかのように歩みを止める。

それにつられてナターシャも立ち止まる。

「今回の暴走事件の真相解明のために、委員会は技研に調査を命じた。福音のコアは榎篠技研に預けられているコアと交換という形で送られる予定だそうだ」

「……いいんですか？そんな重要な話をして。私とその技研に押し入ってコアを強奪するかもしれませんよ？」

「何、そこは政府一つ傾かせた変態共の巣窟だ。案外、空に戻る時も近いかもしれないぞ？」

言うだけ言つて、千冬はバスへと乗り込む。

ナターシャはその場に立ち尽くし、背中でバスを見送る。

「……………マキシノ技研、ね」

呟いてから今度こそ帰路につくナターシャ。

その瞳には強い光が灯っていた。

#47：日常への回帰／Your Name is…（後書き）

東と千冬のやりとりは真面目に書いてたんですけど、

最後の方はつい我慢しきれずにギャグの方向に走ってしまいました。

そして空の性別が一年生の間に大々的に知らされたのと、若干女王様化。

このままだとIS学園の二強が千冬と空になっちゃいそうな気が…

……

あ、まったく関係ないですけど、今日思い付きで『age』が出してるチャリテイ・ステッカー『Operation Phoenix × ロゴ』を衝動買い。

印鑑ケースに貼ったらいきなり部隊備品ばく見えた。

IS学園のネクタイピン、買いたいなあ…けど、余裕がなあ……………

#48：帰って来た日常？（前書き）

大分やっつけ感が強いです。

けど、ここらで張っちゃけないと後で出来なく………

48：帰って来た日常？

あの『大事件』があつた臨海学校から帰って来たその次の日…

「まさか、空くん先生が女の子だったとはね〜」

「まさかね。男の娘かと思ったら男装少女だったとは」

「ああ、可愛い格好してくれないかなあ…」

「なんか大怪我してたみたいだけど、大丈夫なのかな」

「でも、最終日にフツーに出てきてたよね。車椅子だったけど」

と、まあ…合宿最終日に空が見せた車椅子＋水着姿の話題で持ち切りだった。

朝のショートホームルーム前の時間はこうしてざわめきに満ち満ちていて、つい壁の向こう側に気を向けずにいたせいで……

ガラッ

「ショートホームルームを始める。」

と、唐突に入ってきた千冬姉に慌てて自席に戻る者が続出した。

まあ、仕方ないだろうけどさ。

なんせあんだけ騒いでれば足音なんかには気付けないよな。

「先ず連絡だ。千凧先生は私用で数日ほど休暇を取られている。よって、その間は私と山田先生で代行する事になった。以上」

ほえ〜

また空が休みか。

「では出席を取る。相川」

「はい」

こうして、通常授業にちじょうに戻ってきた俺たち。

だが、この時はまだ『あんなこと』になるなんて誰も思ってもみなかった。

* * *

「side：一夏」

空が戻ってくると言われていたその日、教室は何時になく騒がしかった。

それだけ、空がみんなに好かれているって事なんだろうけど……

ワイワイガヤガヤ

「ねえ、これなんかどう?」

「あ、可愛い」

「絶対に似合うよね」

………なんだか、物凄く不安になるんだが。

と、俺の心配を余所に時間が進み………

ガラッ

「はい、ホームルーム始めるよ」

きゅりきゅり、という何とも不思議な足音と共に、車椅子に座った空が教室に入ってきた。

「え？」

と固まる事情を知らないクラスメイト達

「ッ！？」

思わず絶句する俺たち。

まさか、歩けなくなるような後遺症でも残ったのか！？

「さて、と。それじゃ、出席取るよー」

何事も無かったかのように立ち上がり、教卓の横に立つ空。

うっむ、タイトスカートから覗く腿が眩しいぜ

ーと？

………すか

俺は改めて、空の服装を確認した。

いつも通りのダークブルーのサマースーツ。IS学園の校章ネクタイピンでネクタイが白いYシャツに止められていても通りに決まっている。

そしてジャケットと同色のタイトスカート。

うむ、何処もおかしくない。

何の変哲もない、女教師の標準的な　　って！
それは一般論だ。空には通用しない。

「な、なん、だと!?!」

「空くん先生が、スカート!?!」

「い、一体、何が……」

「まさか、何かの事故に遭って頭を……」

「女装キター!」

「いや、空ちゃんセンセは女の子だから……合宿で見たでしょうに」

「　　ッ!」(うずうず)

「　　!」(キラキラ)

「一気にざわめき立つ教室。

中には何やら我慢している様子のシャルやら、目を輝かせてるラウ

「やら……うむ、中々にカオスだ。

「算やセシリアは俺と同じく空の心変わりに困惑しているんだろうけど。」

「で、一周見まわし終わって空に視線を戻すと盛大に爆発する寸前だった。」

「左手を握りしめ、壁に向かって思い切り殴りかかる。」

「ドゴッ！」

「大きな音にびっくりして雑談が止まる。」

「うん。とりあえずみんな、ホームルーム始めるからね。静かにしてもらえるかな。」

「とても丁寧な口調が逆に恐ろしかった。」

「はあ、まったく。そんなに僕がスカートっておかしい？」

「あ、いや……珍しいなって……」

「まあ、そりゃそうか。…見ての通り、義足あしがちよっと調子悪くてね。ズボン履くの一苦労だからこうした訳。長く歩くのも難しいから車椅子。納得した？」

「はい」

「それじゃ、出席取るよ」

この時、シャルの目が怪しく光っていたのを俺は目撃してしまった。
幸か不幸か、空はそれにまだ気づいていなかった。

* * *

「side: 篇」

どうして、私はこんなところに居るのだろうか。

「あーあー、マイクテス」

『運営委員長』の腕章をつけたシャルロットと『理事長』の腕章をつけた簪が大講義室の壇上で何やら集会の準備をしていたが…それももう終わったようだ。

モニターが点灯。

最初は『信号なし』の状態だったが、

「それでは、これよりSD協会の発足、及びSDプロジェクトの実行・決起集会を始めたいと思います。司会進行は一組、シャルロット・デュノアが行わせていただきます」

そんな、シャルロットの宣言と同時に『SD協会』と『SDプロジェクト』の二文が大きく表示される。

…………… 一体、何なのだ。この集まりは……………

「みんなあッ！可愛いモノは大好きかあっ!？」

「『大好きだ！』」

「可愛い娘は大好きかあッ!?」

「『大好きだあッ！』」

「可愛い娘を着せ替え人形にするのは大好きかあッ!?」

「『大好きだあッ！』」

……なにこれ。

「ありがとうございます。SDプロジェクト：『Sora Dress プロジェクト』はそんなみんなの思いを形にしようというプロジェクトです。具体的に言えば、千凧空先生をみんなの共有着せ替え人形としてしまおう…という、なんとも野心的な計画で

」

シャルロットの説明に目を輝かせ、テンションを上げてゆく周囲の同級生たち。

ノリについていけない私としては、物凄く居心地が悪いだけなのが……

「まったく、何バカ騒ぎしてるんだか…」

「同感だ」

ん？

同意見があつたから思わず同意してしまつたが…

声の主を探せば比較的近場に居た鈴だつた。

鈴もこのお遊びにはついていけないようだ。

「……………」

がし

背後から誰かに腕を掴まれた。

「何よ……………って、ラウラ？」

「どつしたんだ？」

「悪いが、任務なのでな」

ふと、ラウラの腕にあつた腕章に気付いた。

『親衛隊長』

……………そうかラウラもそつち側なのか。

「委員長、反逆者二名を発見。捕縛した」

「…誰？」

「……………等と、鈴だ」

簪の間に苦々しい表情で応えるラウラ。

「残念だけど、二人は……」

「判った。適切な処置をしておく」

「「!?!?」」

『適切な処置』って、一体何をされるんだ私たちは……

「何、安心しろ。命までは取らん。命までは、な」

そのラウラの言葉の意味深さに逆に恐怖感を与えられその後待っている『処置』が余計に怖くなった。

ばたん、と会合部屋から引き摺りだされた私と鈴はそのまま、目隠しをされた上でどこか別の部屋に連行されたのだった。

「………すまん、一夏。」

私はどうやらここまでの様だ。

49 : 火遊びは計画的に

空の教職復帰の翌日、一夏は不可解な事態に遭遇していた。

「ビクビクオドオド

どこか怯えている様子の筈。

隣、二組の教室では鈴も同様に怯えている。

そしてそのほかの一年生ほぼ全員が妙な熱気に包まれている。

そう、それは学園祭を前にハイになった集団のような……

ただ、何と言つべきだろうか。

一夏にとっては悪い予感しかなかった。

たとえば……そう、『一年生総^{ぜんめい}粛清フラグが成立』したかのような

……

そうならたらどうやって粛清対象からハズしてもらうか、一夏は考
える。

(とりあえず、空に訓練を見てもらって『関わって無いアリバイ』
作るか。)

そして、事件はこの数日ほど後……週末を目前に控えたその日に
起こった。

* * *

「side：篇」

あの日以来、私と鈴は『一夏の勉強を一緒に見る』という題目で一夏や空と行動を共にするようになっていた。

これには、シャルロット達が空を着せ替え人形にして楽しもうというバカげた計画に現をぬかしている間に一夏との仲を盤石にしまおうという打算と、あの集団から身を守る為という実利も含まれているのだ。

それに、あの連中の企みが成功しようとしまいと、どちらにしろ大粛清からは逃れられないだろう。

それなら『私は関わっていない』という証拠の為にもしっかりやっていた方がいい。

それに、その時間勉強しなくてはならないのは私も同じだからな。

専用機持ちの中で全てにおいて最も劣っているのが私だ。

機体性能だけは一番高いらしいが、私がいこなせねば意味がない。

そんなこんなで私は空に勉強を教わり、代わりに必要な時に手を貸すようにしていた。

そして今日も、私たちへの指導を終えて職員室へと戻る空に付き添い一夏に車椅子を任せて階段を降りようとしていた。

「…やはり、誰かに手を借りるかエレベーターを使うべきでは？」

「できる事はやっとなかないとね。あとでクセになるから」

なんでも、義足は損傷こそ軽いものの神経接続系にノイズが混ざっていて少し動きにくいらしい。

それが長時間移動になればなるほど動かなくなり易くなる為に車椅子を使っているのだが、空は階段だけは自力で歩こうとしていた。

空の言い分によると『不調も動かせば少しは改善する』だとか。

「さて、と」

空が階段の一段を降り、次の段に足を降ろす…その時だった。

「あ！居たッ！」

「確保ッ！」

「ついでの篠ノ之、鳳コンビも確保ッ！」

いきなり呐喊してくる十五名ほどの女子。

「あ、馬鹿っ！」

私は思わず叫んでいた。

一人が空の腕を掴み、それは丁度空が段を降りて重心を戻すところであった為に

「あ」

不自由の足を体全体でバランスを取って階段を下りていた空は、見事に足を踏み外した。

ついでに、腕を掴んだ女子も巻き添えを食って半分ほどある踊り場まで一緒に落ちる。

「きゃあっ!」

「うぐっ」

どたん、と盛大な音

「!」

「あいたたたた……」

掴んで巻き添えを食った女子はなんとか起き上る。

だが、庇ったのか下敷きになっていた空はぐったりとした様子だった。

「空っ!」

私と鈴は人だかりをかき分けて、一夏も車椅子を投げ出して空の元に駆け寄る。

「おい、空!しっかりしろ!」

「頭を打ってるかもしれないから動かさちゃダメよ。誰か、先生呼んでッ!」

「判った！」

その場は鈴と一夏に任せ私は職員室へと走る。

「篠ノ之、廊下は走るな」

「織斑先生！ いいところに！」

ちょうど職員室の側まで来た時、千冬さんにでくわした。

「どうした？」

不思議そうな顔になる千冬さん

「空が、千凧先生が階段から落ちました。頭を打ったのか、ぐったりしています。今は、一夏と鈴がついてます」

「わかった。案内しろ」

「はいッ」

急いで戻り、私と一夏で空を保健室に運ぶ。

外傷こそないものの、それ故に余計に心配が募るばかりであった。

* * *

保健室に空を運びこんだ私たちは職員室そばの一室に集められ、事情聴取を受けていた。

と言っても、私と一夏と鈴は『勉強を見てもらった後、職員室まで付き添いをする約束になっていて一緒に居た』としか言いようがない。

向こうは『確保』とか叫んでいたという証言が私たちから出たために大分萎縮させられているが…

と、その時

『トウルルルルル　ガチャ』

「はい、生徒指導室……ああ、下屋先生。それで

どうやら保健室からの内線らしい。

「　では…」

ガチャ、と受話器が戻され千冬さんはこちらに厳しい視線を向けてきた。

「千凧が、とりあえず目覚めたらしい。……が、少しばかり混乱が見られるようだ。この事は内密にしておけ。見舞いが来ても混乱させるだけだからな」

では、行くぞ。と千冬さんは立ち上がり私たちもそれに倣う。

行く先は数室先の保健室。

そこで待っていたのは、予想外の展開だった。

「失礼します」

そのままずかずかと入っていた千冬さんに続き、私たちも入る。

そこでは保健室の養護教諭の下屋先生とベッドに寝かされ、今は起きている空が居た。

「丁度いいから、あそこに居る先頭四人の名前をフルネームで言ってみて」

と、下屋先生が私たちの方を指差した。

先頭四人というと……千冬さんと私と一夏と鈴か。

確かに、クラスメイト時代から一番付き合っていたのが私たちだが……

「ええと……織斑千春さんと織斑かずあき一秋くん」

季節がずれてる!?

「で、篠ノ之はたきさんと、フヤン鳳鈴音さん」

なんか似てるけど違うぞ!?! 私は筭だ。………確かに、『はたき』も『ほうき』も文字数と最後の一字はあってるが………

そして鈴がホラー映画化した!?

「……………それじゃあ、六月に一組に転校してきた生徒の名前は?出身地も」

「えっと、フランスのシャールロット・デュノアさんと、ドイツのラウ・ラ・ボーデヴィツヒさん」

何処その名探偵みたいだな。

「……………なんかラウラが絶望して世界を滅ぼしそうになってるぞ」

一夏も思わず呟いていた様子。

こりゃ駄目だ、と言わんばかりに額に手を当てる下屋先生だったが…

「冗談です。」

にこり、と柔らかな笑みを浮かべる空。

「そちらに居るのが一組担任の織斑千冬さん、その隣が織斑先生の弟の一夏くん。篠ノ之箒さんに鳳鈴音さん^{フアゼンイン}。転校生はフランスのシャルロット・デュノアさんとドイツのラウラ・ボーデヴィツヒさん。ですよね」

むむむ……………

「なあ、箒」

「……………なんだ」

「空つて、あんな茶目っ気のある姿見せた事無いよな」

「夏が『信じられない』と言わんばかりに言ってきた。

…確かに

「そうだな。どちらかと言えばしつかり者で冗談の度が過ぎた物をたしなめる側だ」

そう、どちらかと言えば母親が長姉ポジションだ。

あんな『お茶目な悪戯っ子』なハズがない。

「判ったわ。それじゃあ少し休んでいて」

下屋先生が私たちに『外に出ろ』と身ぶりで伝えてきた。

それに従い、私たちは保健室の前の廊下に出る。

「…見てもらった通り、記憶には問題無いのだけど…ちょっとばかりね」

「頭を強く打ったから、でしょうか」

「まあ、考えられなくもないわね。当座は様子見が妥当かしらね」

「では、その方針で…お前らもいいな?」

「はい」

ううむ、まさかこんな事になるだなんて……

だが、本当に大事になったと気付いたのは翌日の事だった。

#50：一年生壊滅事件

「side：籌」

「はあ……………まさかこんな事になるとはな……………」

「全くだ」

私と一夏は寮の食堂で茶を飲みながら今日何度目かも判らない溜め息をついていた。

原因は、空の豹変。

今まではダークブルーのスーツをきつちりと着て、『織斑千冬式号』とか『IS学園最強にして最凶 その式』、『明鏡止水への最短ルート』、『仙人養成の専門家』スベシャルリストと呼ばれ恐れられてきた。

そんな空が可愛いエプロンドレスに機械的なウサミミメカニカルという服装をしていたのだ。

まるでうちの愚姉おねのように。

まあ、姉さんとは違って年齢的にも無理はまだないし似合ってる可愛らしいのは認めるが…

朝のホームルームでその格好を初めて見た時は思わず『その格好は…?』と尋ねてしまったくらいだ。

ちなみに答えは『シャルロットと簪が『是非に』と頼み込んできたので仕方なく』であるらしい。

その話を聞いた途端に先日『嬉々として空を着せ替え人形にすると
言っていた連中』の事が頭をよぎった。

簪を首魁としてシャルロット、ラウラ、セシリアその他：私と鈴以
外の一年生ほぼ全員が参加するその団体が表だって動き出したのだ
ろう…と。

…あの連中としては今の、疑う事無く『生徒を信じる優しいだけの
先生』状態な空は都合がいいのだろう。

まあ、元に戻ったら肅清の大鎌が振るわれる事になるだろうが。

「あら、織斑くん、篠ノ之さん」

「ん？ 千凧先せ」

空の声に振り向いて、絶句した。

そこに居たのは 裾の短い着物姿、まるで座敷童のような格好
の空が居た。

一瞬、完全に頭が真っ白になり、それから思った事は唯一つ。

『あいつら、またやったのか』

「えっと……自分でも似合わないとは思ってたんだけど、そんなに
変？」

私たちが絶句したのが『変だから』と思っただけらしい空がそう言って

きた。

むしろ似合いすぎて怖いのだが……

「お、俺は似合ってると思うぞ。可愛いし いッ！」

ちよっと慌てた様子で言う一夏に、ちよっとムカッと来たので思い切り足を踵で踏み抜いた私はきつと悪くない。

「あらあら。」

クスクスと笑う空。

その様子は『微笑ましい』と言わんばかりだ。

「そういえばデュノアさんたちからお願いされてた事があったわね」

「お願い、ですか？」

「そう。篠ノ之さんと鳳さんを見かけたら『部屋』まで連れて来てくれて。」

…この瞬間、物凄く嫌な予感がした。

「わ、私はこの後用事が……」

「もしかして、織斑さんとデートかな？」

「ち、ちが」

咄嗟に否定しようとしてしまっ、ふと思っ。

これは『その通りだ』と言う方向に持っていて一夏と外出してしまえばいいのではないだろうか。

外出申請は『今この場に居る教職員』つまり空に頼めばいい。

……………一夏とででで…でーと、できるし、な。

ならば、行動あるのみッ！

「ちが、わないです…。だから外出許可をお願い「あ、居た！」す……………」(かなり小声)

私の決死の行動を遮った声は空の背後から聞こえてきた。

そこに居たのは、簪。
まずいぞ……………

「簪も居たの」

「あ、ああ。」

「じゃ、織斑くん。簪、借りてくね」

「…へ？」

「空くん、行こ」

「…はいはい。でも無理強いは駄目よ」

「判ってるって」

「ちよ、待」

全く何もさせてもらえず私は簪に捕縛されて連行される事になってしまった。

* * *

「side」

「では、次は……セシリアの英国風メイド！」

一年寮のとある場所でSD協会の面々が用意した衣装をかわるがわるに着せてはお披露目撮影しては着替えを繰り返して、ファッションショー状態なイベントを行っていた。

一緒に連行された筈は黒い、フリフリフワフワなワンピースとドレスの中間みたいな格好にされた上で天井からつるされていた。
なお、制服は没収中である。

なお、鈴も同様にオレンジのに着せ替えられているがこちらは何故かネコ耳付きである。

吊るされた二人の前にタイトル題名通りに英国風のメイド服に身を包んだ空が出てきた。

ややぎこちないのは恥じらいからだろうか……と、思いきや。

(……………この状況、なんかおかしくないかな)

なんて、空が自分の置かれている状況に違和感を感じ始めていたからである。

先日、頭を打ってズレた歯車が本来の位置に戻りつつあるとえば判り易いだろうか。

そして、

ピシッ

「あ」

元々、『長時間負荷をかけると完全に壊れる危険性のある状態の義足』だったのだ。

その為の車椅子だったのだが、その事を忘れていたSDの面々は空を歩きまわらせてしまった。

ついでに、階段から落ちた時の衝撃もあり、
今さっき完全
全にイってしまった。

その結果待っているのは……………転倒。

余りに突然の事で頭から倒れる空。

ゴン！ と中々にイイ音が部屋に響いた。

「だ、大丈夫かなあ……………」
「けっこういい音したよね」

「空くん！」
「千凧先生！」

簪とシャルロットが倒れた空の元に駆け寄る。

それが、死亡フラグの入り口だと知らずに。

「大丈夫？」

「頭打つたみたいだけど……………」

うつ伏せに倒れていた空を仰向けにした時……………

がっし

「へ？」

二人の頭に、空の手が掛けられた。

親指と小指でしっかりとこめかみをホールドするようにして、空は
思い切り手を握りしめた。

「いたたたたたたたた！！！！」

「あがががががが！！！！」

突然の悲鳴にその場に居る全員が呆ける。

「二人とも、なにやってるのかなあ？」

呆けて、次の空のセリフに顔色が悪くなる。

「まったく　人が記憶の混乱起こしてるのをいい事に遊んでくれちゃって……………」

ぐっ、と力が入り、止めが刺された。

「「ぴぎゃっ！」」

くたり、と力を失くした簪とシャルロットの腕。

その二人を打ち捨てると空は声を張り上げた

「全員ッ、その場で正座あッ！」

『織斑千冬式号』にして『IS学園最強にして最凶 その式』。『明鏡止水への最短ルート』にして『仙人養成の専門家』スペシャリストが戻ってきた瞬間だった。

鈴と箒を解放させた後、空はその場で数時間に渡る説教を敢行。

多数の生徒＋山田先生を足のしびれで撃沈の憂き目に遭わせる事となる。

が、

「SD協会は……………永遠に、……………不滅」

起き上りかけた簪が宣言し、その直後にアイアンクロ で再度撃沈。説教も一時間の追加となったのは言うまでも無い。

この日、空の『最凶伝説』に新たなページが加わる事となったのだが、誰一人として語ろうとする者は居なかった。

* * * * *

「omake」

「はぁ……………大変な目に遭ったものだ」

簪は解放され返却された制服を抱えて部屋に戻る最中だった。

幸い、他の生徒はほぼ全員が現在説教中なので寮内に人気は殆どない。

鈴も鈴で別に戻って行ったので簪が出くわす可能性があるのは、一番見てもらいたくて、一番見てもらいたくない人物ただ一人。

「お、簪。 どうしたんだ、その格好」

「!?!?!?!?!?」

そう、織斑一夏 その人である。

「ああああああ、あの、これは、だな……………」

「どうしたんだよ、そんなに慌てて。安心しろよ。別に变なところは無いら、俺は似合ってると思うぞ?」

「そ、そうか……………」

予想外に褒められて筈はつい嬉しくなつて顔を赤らめる。

……………たまにはこつという格好を試してみるのもいいかな、なんて思いながら。

「いゝちゝか〜!」

「ん? 鈴?」

その直後、鈴が現れた。

「つて、お前もか」

「どう? 似合うでしょ」

「そうだな。でも、二人してどうしたんだ? そんな珍しい格好して」

「ああ、空のアレに巻き込まれただけよ」

「ふーん」

災難だったな、なんて二人の肩をポンポンと叩く一夏。

「そういえば、こんなのをのほんさんから貰ったんだが」

と、一夏が取り出した写真。

「大変だったな。」

そこには……

「「ッ!」!」

簪が、ラウラに撮らせた鈴と箒の『告げ口』封じのための写真。

衣服が乱れ、ロープで拘束されているという、いろんな意味で危ない写真。

「これも連中の仕業か。 ホント、大変な目に遭ったな…… って、どうした?」

「記憶を、」

「喪えッ!」

思い切り一夏の頭を強打する二人。

呆気なく気絶した一夏をよそに二人はその写真の処分に奔走したのであった。

……なお、起きた一夏は『写真の事』だけは忘れていたとか。

#50：一年生壊滅事件（後書き）

明日から（正確には今日 23日）から学校かあ……

***：(番外)『妄言夢想』(前書き)

思い付きの産物。

きつと賛否両論だと思っけど、一応上げてみる。

TS注意。

***：(番外) 『妄言夢想』

「Side：」

「どうした、その程度か」

そう、白き絶対強者が紅き挑戦者を嘲った。

いや、それは嘲りではない。挑発だ。

何故ならば白き絶対強者は紅き挑戦者を対戦相手として認めているからこそ、全力で潰しに掛かっている。

そこに侮りは存在しない。

それに、剣を交える相手を侮蔑するほど、武人として腐ってはいない。

「ま、まだまだっ！」

紅き挑戦者は奮起して己が愛刀を握りしめる。

幾人もの強者たちと交えた愛刀は最強たる白を打ち破るべく、その刃を輝かせる。

「さあ、来いッ！」

「おおおおオオオっ！」

白と紅が激突する。

そして……

唐突に、目が覚めた。

* * *

「む……………」

目を覚ました時、そこは寮の一室だった。

内装からして自分の部屋だと認識。

ここ、国立IS学園に於いて真剣を寮の壁に飾っている人間なぞ、彼一人だろう。

もう一人、教職員であり得そうな人物はいるが真偽の程は確かでないので割愛する。

そんな彼、IS学園一年一組所属、世界初の男性IS操縦者、『世界最強』の弟子、そして IS開発者の弟という肩書きを持つ少年の名を、篠ノ之箒と言った。

そんな箒少年はというと

絶賛混乱中だった。

(何故、寮なんだ?)

篝の記憶は五時間目の授業中に睡魔に負けた処で途切れている。
当然、教室で目覚める筈だ。

だというのに、何故？

その答えを探そうとして、篝はほんのりと香るセツケンの匂いと、
自身の右腕を包む暖かさと柔らかさに気付いた。

「……………やはり、か」

視線をそちらにやると案の定、篝の予想通りの相手が篝の腕を枕兼
抱き枕にしてあどけない、幸せそうな寝顔を晒していた。

彼女の名は織斑一夏と言った。

世界最強と名高いIS操縦者 織斑千冬の妹で、篝とは小学生時代
からの付き合いがある、所謂『幼馴染』であり想い人、ついでにル
ームメイトである。

藍色の、錦糸のような長髪に姉同様の整った顔立ちに同年輩からす
ればかなり豊満な胸にくびれた腰。

これでツリ目で『奇らば斬る』、厳冬のような雰囲気をもとえば『
織斑千冬・二号』の完成なのだが、一夏に与えられたのは優しげな、
つぶらな瞳であり、近場にいるだけで明るくなるような、正に夏の
ような雰囲気であった。

性格は天真爛漫で人懐こく、おまけに『趣味：料理』で『家事全般』は特技とは言わない、やれて当たり前『事』とくれば言い寄る男は数知れず、だ。

事実、一夏が『女の子』から『少女』に変わっていった中学時代は本当に凄かった。

その度に影で箒が拳で語り合い、お引き取り願っていたのだが。

数少ない例外は一夏を通じての友人、五反田弾と御手洗一馬くらいだろう。

もつとも、その二人とも箒は拳で語り合いをしているが今では人付き合いの苦手な箒の数少ない友人だ。

そんな非の打ち所が見当たらない彼女だが、実は運動神経に見放されている。

何もない処でつまずいたり、転んだりするのはよくある事で巷では『ドジっ娘』の肩書きと共に愛されてきた。

そのくせ妙にパワフルで、平然と大の男を運んで見せ、刀を持つと並みの使い手では勝てないような剣豪っぷりを発揮したりする。

なんというか、人体の神秘である。

だが、一夏の真価は剣を執った時ではなく銃や弓矢といった射撃武装を執った時に発揮される。

勘がいいのか、目がいいのか、スコープ無し補助なしで一キロ先の的の中心に的中させてみたり、乱射に見える位の速度で狙撃を成功させてみたり、弓でも十発八中くらいは難なくこなしてみせる。

それ故に『接近戦の千冬、射撃戦の一夏』、『リアルチート姉妹』、『戦闘民族 織斑』と影に日向に呼ばれてきた。

…そのせいか、頭があまりよろしくないのだが、それはそれで可愛い処だと、箒は思っている。

と、半ばノロケな説明はおいておく。

あえて言わせてもらえば『モゲろ、もしくは爆発しろ』あたりになるだろうか。

話が逸れた。

箒は想い人であり、万人が認める美少女（巨）に腕を抱かれている状態であった。

腕に伝わる生々しくも暖かく柔らかい感触に段々と血が集まりつつあった。

ドコとは言わないが。

箒とて、健全な十六の男なのだ。

勿体無い、もう少し今の状況を楽しみたい。

そう思う心を封じ込め、箒は一夏を起こす事にした。

「おい、一夏。起きろ」

「んー、むにゃむにゃ、ぐっー」

あまりのわざとらしさに『まるで子供だ』と思いながら箒は拳を握る。

そしてそれを、一夏の頭に落とした。

ゴッ

「あいたあー!?!」

イイ音と共に一夏は転げ回りベッドから落ちる。

「なにをするのさ、箒!これ以上ばかになったらどうするのさ!」

恨みがましい目をむけてくる一夏にベッドで胡座をかいた箒はため息をついた。

「起こしても起きないからだ。それにそれ以上バカになっても大差ないから大丈夫だろ。」

「うわーん、バカ認定されたー!これでも平均くらいはとれてんだよっ。」

「お情けだろ」

「容赦無く一刀両断!?!」

概ね、いつもこんな感じである。

「処で、」

「んにゃ？」

「なんで俺は寮の部屋にいるんだ？」

「あ、あたしが運んだ。やまぴー涙目だったよ？」

「そうか…」

いくら起こしても起きない生徒にあの気の弱い先生は負けたらしい。

「でも、ちい姉やくーちゃん先生じゃなくて良かったね。」

一夏の姉、千冬か春先は同級生だったはずの教師、千風空ならば出席簿が筭の頭にめり込み、別の意味で眠っていた可能性がある。

それが気絶によるものか、永遠とこしえの眠りかは定かではない。

少なくとも、無事ではないのは確かである。

「で、どーする？夕飯？シャワー？それとも、あた
ずいっ、と顔を寄せてきた一夏に筭は

ゴッ

「ふぎゃっ」

拳骨を落とした。

「うー、横暴だー！乱暴だー！ドメスティックバイオレンス、略してDVだー！」

「わ、悪い」

流石に今回は箒が悪かった。

なんせ照れ隠しにごっん、である。

「……………明日、休みだねー」

「…そうだな」

「と、言う事で」

「？」

じりじり、と一夏が後ずさる。

「大人しく据え膳に食べられちゃえー！」

勢いよく、ベッドの上で胡座をかく箒に跳びかかる一夏。

「あ」

半分ずらし、

「れ」

腕を取って表と裏を入れ替え

「れ

ベッドの上に寝転ばせる準備

「？」

ぼすっ

「何が、『ということだ』だ」

「あう〜」

あっさりと箒に避けられた一夏はそのまま箒のベッドに仰向けに寝そべった状態になる。

「据え膳について事は、一夏が据え膳ってことでいいんだよな」

「……………」

「それじゃあ、頂くとしようか」

据え膳食わぬはなんとやら、である。

「……………あれだけ誘っておいて、判らないは無しだぞ」

「う……………うん」

そして、箒は一夏にまたがるように膝立ちになり、肌蹴させた胸元に

* * *

「 × @ ¥ * # & ○ ! % \$! ? 」

声にならない奇声を上げて、箒は目を覚ました。

心臓が高鳴り、呼吸は過呼吸になりそうなほどに早い。

恐らく、顔は真っ赤だろう。

自分の胸に手を当て、しっかりとそこに女性の象徴たる胸バストがある事を確認して、ようやく落ち着きの入りが見えてきた。

（大丈夫。私は女だ。アレは全部夢で ）

「ッー」

夢だ、と思うと妙に生々しく思い出せてしまい、再度恥ずかしさに悶絶する。

「ほーき、うるさいよお……」

隣から悶えて立てた騒音に目を覚ました簪の抗議の聲が上がる。

「す、すまん……」

謝るがその時点で簷は再び寝ついていた。

「……………」

このままではどうしようもない、と簷は屋上に出て風に当たる事にした。

そうすれば少しでも落ち着けるハズ……………」

結局、屋上に出てもまったく涼む事は出来ず、気がつけば朝になり授業中に爆睡。

空と千冬の出席簿の餌食となったのは言うまでも無く。

「お前のせいだ！」

「俺が何したってんだよ」

「いや、むしろ私がしたというか……………ああ、もう！」

「？」

そんな、朴念神相手のひと悶着もあったのだが、IS学園はおおむね平常運転である。

***：(番外) 『妄言夢想』 (後書き)

ちなみに妄言夢想は『たわごと、ゆめ才子』と読んだり……

この篇くと一夏ちゃんの会話って篇 千冬、一夏 束 にしても
まったく違和感のない事に書き終わってから気付いた。

次は原作四巻相当の部分に入る予定

51 : ある夏の朝 (前書き)

原作四巻第二話『二匹の子猫のラプソディー』の辺りです。

第一話が飛んでる理由は後ほど...

51 : ある夏の朝

「side : シャルロット」

八月、IS学園も少し遅めの夏休みに入って少し経った。

長い休みと言う事もあって、世界各国から集まって来た生徒も約半分が帰省中。

そう言う僕も父さんの方の都合と諸々の準備ができたなら一度帰る予定なんだけどね。

そんなわけで学園の寮にとどまっている訳だけど……

「えへへえ……かあさまあ……」

「まったくもう……」

珍しく今だに起きてこない同室者^{ルームメイト}、ラウラを起ここそうとしたら何故か僕までベッドに引き摺りこまれて抱き枕にされていた。

と言っても、ラウラの方が小柄だからどちらかと言えば僕の胸に抱きついてる感じになってるけれど。

その物凄く幸せそうな寝顔と寝言に、どんな夢を見てるのがちよつと気になる処。

寝言からして空が登場人物に居るのは間違いない。

とはいえ、これ以上寝てると食堂の朝食の時間帯も残ってるメニューの選択肢も危なくなる。

よし、いつも通りのさっそく最終兵器投入っと。

一応動かせる手でICプレイヤーの再生ボタンをぼち、っと。

『起きなさい、ラウラ。何時まで寝てるの?』

びくっ!

空のなんとも母親チックな、ちょっと呆れてる感じのする声の流れる。

と、ラウラの肩がビクリと動き、慌てて飛び起きる。

キョロキョロと辺りを窺うラウラ。

………なんとなく小動物っぽくてなごむなあ。

「おはよう、ラウラ。」

「う、うむ………ええと………母様は…怒ってたか?」

「大丈夫。寝坊が心配で声かけに来ただけみたいだから。」

実は悪戯用に空にお願いして録音した声なんだけどね。

「ところでき、ラウラ」

「なんだ?」

「パジャマ、着ないの？」

同室になってから度々尋ねてる事。

それが『寝る時に服を着ないのか』だったりする。
いつも全裸。

それだからバスタオルを一枚、ベッドの傍に用意してある。

実は、ラウラもパジャマを一着だけだけど持ってる。

オレンジのチエック模様の、ラウラにはちよつと大きめなサイズの
上下セットのパジャマ。

前に聞いた話によると学年別トーナメントの時に、空が部屋着として貸し、部屋着と言える部屋着をラウラが持ってなかったからそのままあげた　というものらしい。

それ故にラウラはとても大事にしてて……中々着ようとしなないんだ
けど。

「替えない」

「だったら、買えばいいんじゃない？」

「だが、どのようなモノがいいのか、判らん」

「それじゃ、今日行こっか。僕が見てあげるからさ」

「ふむ…そうだな。助かる」

少し思案した後、ラウラは頷いてくれた。

「それじゃ、身支度して朝ごはん食べに行こ。」

「ああ」

* * *

やや後発組になった僕たちは少し空き始めた食堂でいつもよりちょっと遅めの朝食をとっていた。

メニューはマカロニサラダにトーストとヨーグルト。

だけど、ラウラはもう一品

「…朝からステーキって…胃がもたれない？」

なんと、そこそこの大きさのステーキが鎮座しているのだ。

「何を言う。朝に一番食べる方が体の稼働率がいいのだぞ。そもそもだな、『後は寝るだけ』の夕食を一番食べるという方がおかしいのだ。消費されないエネルギーは全て脂肪になるのだぞ。太りたいなら止めはしないが…」

なんたる、ちよつと違和感。

「ねえ、ラウラ。それ、誰から聞いたの？」

「一夏わたしのめからだ」

ああ、成る程。

確かに一夏なら言いそうだな。

「やっぱりね」

今の喋り、なんだかラウラっばくなかったからそうだなとは思っただけ
ど……

ラウラって、存外感化され易い性格なのかな。

なんて考えながら、フォークにマカロニを通して口に運ぶ。

「なんだそれは」

「『何だ』って…マカロニだけど…」

「それは判っている。どうしてフォークに通したのかを聞きたいのだ」

あまりに真剣に見つめてくる物だからつい、雰囲気にも呑まれそうになつて口の中のマカロニを飲みこむのがワンテンポ遅れた。

「なんでって言われても……なんとなく?」

まあ、クセみたいなものなのかな……

「む、なんとなく……」

「ラウラもやってみたら? 結構楽しいよ」

「…ふむ、そうだな。やってみよう」

早速、フォークを手にマカロニを弄り始めるラウラ。

するつと通して

「確かに、面白いといつかなんと…クセになるな。ふむ、折角だ。全部の先端に通してみよう」

どうやら本当に面白がってるみたいだ。

二個目をするつ、と通して三個目に悪戦苦闘するラウラ。

なんとなくだけど、昔飼っていた猫の事を思い出した。

…あの子って変なところで不器用で…毛糸をずっと追いかけてたりして、最後は毛糸玉がほどこちゃって不思議な顔してたっけ。

「む、むむ…お、できた！」

「おー」

マカロニを先端に通したフォークを軽く持ち上げて見せるラウラに僕は軽く拍手。

廻りに居る子たちから何事かと窺われたけど、まあこれ位なら。

「それで、買い物は何時に行くんだ？」

「十時くらいに出ようかなって思ってるんだけど。一時間くらい街

を見て、それからどこか良さそうなお店で昼食ランチにしようよ」

「そうか。 よし、折角だし、一夏お母と母様も誘っていいっつ」

「一夏はともかくとして、空は難しいんじゃないかな。一応、教職員だし」

「…そうか」

ちよつと落ち込んだラウラは、なんとなく突然の雨に遭ったネコみ
たいだなって思った。

さすがにかわいそうに思えたから『ダメ元で連絡してみたら?』と
提案した途端に一気に笑顔になった。

……………ぐふっ

* * *

食後、さっそく連絡を試みたところ

「case 1 空の場合」

「もしもし、千風先生?」

『ああ、デユノアさんか。ちよつどよかった』

「?」

『ちよつど試験装備の模擬戦相手を探「まだ俗世に未練たっぷりあるので失礼しますっ!」あ』ぶっ。

あ、危なかった……………

空の試験装備機相手にセシリアが色々と悟りを開きそうになったって話は一年生、特に一組じゃ有名だ。

それに、ISの武装試験があるなら外出は無理だろう。

相手することになった人は…冥福は祈るよ……………

「case2 一夏の場合」

「部屋には居ない、電話も出ない。あいつは何処に行っているんだ。浮気か？」

「いや、…まあ居ないならしょうがないんじゃないのかな」

「ISのプライベート・チャンネルなら繋がるだろう。よし」

「おおい!？」

「ちよ、ちよっと！それは『よし』『じゃないよ！ISの機能は一部分だけでも勝手に使うとまずいんだよ!？」

「知るものか。 嫁の所在の方が大事だ」

「……………織斑先生と千凧先生に怒られるよ。」

ぴしり、とラウラの動きがとまって肩が微かに震えだした。

そうだよ。空のお説教つて必ず畳に正座だからかなりキツイんだよね。肉体的にもじわじわ、精神的にもじわじわぼきり。

……おかげで『仙人養成講座』だなんて二つ名までついてたし。

「そ、そうだな。時には個人的な時間プライベートも大切だろう。よし、シャルロット。二人で出掛けよう」

「うん、そうしよ」

そうして、二人で出掛ける準備のために部屋に戻って身支度を整えたんだけど……

「あの、ラウラ。その軍服は何？」

襟章とか肩章とか、けっこうついてるし。

「これは公用の服だ。礼服と言い換えてもいい。」

「だからなんで……」

「いかんせん、私には私服がない」

「」

啞然。

でも、確かに。

同室になってから早一ヶ月弱たつけど、ラウラの私服姿は見た事が

ない。

「その服は勝手に着たら本国の人に怒られるんじゃないの？」

「ふむ、そう言えばそうだな。……と、なると…何を着よう」

考え始めるラウラ。

「SDの時に空に着せるつもりで用意したヤツから見つくるえば……
……って、アレは簪の部屋に保管されてるんだっけ。ええと、簪
はっと………」

簪に電話をかけてみる

けど、出ない。

……… 『空くんlove』を公言する簪の事だから………まさか、武
装試験につきあってるのか？

だとしたら、簪が部屋に戻るのはだいぶ遅くなるだろうから………

「学園の制服でいいんじゃない？」

「うむ。」

これはパジャマだけじゃなくて私服も買わないと駄目っばいね。

十代女子にあるまじき速さで着替えを終えたラウラと学園を出たの
はそれから十五分後の事だった。

* * *

「同刻」

「はあ、」

「アグレッサー 仮想敵役ですか？」

「そう。お願いできるかな」

剣道部の稽古を終えて涼んでいた一夏と箒の所にやってきた空はそんな事を唐突に言った。

「なぜ、私たちに？」

「二人の訓練にもなるし、専用機持ちに頼んだ方が色々と楽だからね。簪さんには先に第三アリーナに行ってもらってるけど……」

「そう言うことなら」

「良かった。技研から色々と武装が届いてるからデータ取りやらなきゃならなかったんだよ」

「……………えっ!？」

一夏と箒の脳裏によみがえるのは空がまだ生徒扱いだった頃、セシリアが精神を限界突破するまで弄られたあの一戦。

「お礼はするから、よろしくね。」

颯爽と第三アリーナへ向かってゆく空。

二人は訂正を入れて断る暇もなく、空の相手をする事が決定してしまい項垂れるしかなかった。

「俺たち、明日の朝日を拝めるかな」
「……知るか」

51 : ある夏の朝（後書き）

原作だと一夏は『緊急の用事』で詰めていましたが、その辺は空がしつかりと山田先生と二人で書類仕事を済ませていたので回避されています。

#52：ラウラのテリブルショッピング

「まずはバスに乗って駅前まで移動ね」

「うむ」

シャルロットとラウラが学園を出発し話しながら歩いていたら丁度、バス停に着いたところでバスがやってきた。

行き先が間違っていない事を確認してから二人は乗り込む。

夏休みの十時過ぎという事もあって車内はかなり空いていた。

(そういえば、街の方ってあんまりゆっくり見えた事なかったな。折角だし、今日は色々見に行っとこ)

夏らしい白を基調としたワンピースを着たシャルロットは窓から見える景色を眺めていた。

涼をとるために開けられた窓から入ってきた風がゆっくりと撫で、夏の日差しを受けて金色に輝くシャルロットの髪を揺らす。

(……あの建物は狙撃地点に使えるそうだな。それに向こうのスーパ―は長期戦時にライフラインとして機能させられる母様のきつねうどん食べたいそれといざという時の為に下水道や地下鉄測道などの地図も手に入れておくか。独立した発電機のある設備も確認しなくては)

つて最良でも最高でもない。歩兵の市街地展開でもされようものならばISの火力は逆に仇になる。そうなったら防衛側も歩兵による戦線を展開せざるを得ないだろう)

ラウラの脳内でシミュレートされている市街地戦でISを投入した場合、役立たずか、市街地の地均し作業のどちらかになるのが目に見えていた。

(市街地を無傷で制圧するつもりがなければ制圧前に空爆が行われる可能性もあるだろう。その対策にはやはり独立した移動可能な対空兵器(SAM)が必要だ。それとは別に歩兵携行式地对空ミサイル そうだな、無難に対車両にも使えるFGM-148カスターストリークHVMあたりが欲しい。もしISを投入するのならば母様の”薙風”のような戦域支配・指揮管制能力に特化したタイプを制空権確保とハイパーセンサーを生かした情報支援、必要ならば火力支援に回すのが)

「ラウラ、ラウラ」

「ん、なんだ？」

「駅前に着いたよ。」

「うむ、では降りるとしよう」

二人がバスから降りると少々強めな、目がくらみそうになるくらいの夏の日差しが出迎えてくれていた。

* * *

「side:ラウラ」

「うん、この順番で回れば無駄がないかな」

シャルロットが何やら雑誌やらを取り出し、案内図と交互に見ては何かを確認していた。

うむ、進路の確認は大切だ。

その途中の地形、状況も併せて確認できればより安全に進む事が出来る。

「最初は服から見て、途中でランチ。その後に生活雑貨とか小物を見に行こうと思うんだけど、ラウラはそれでいい？」

「良く分からん。任せる」

学園の、廻りの連中ならば判るのだろうが、いかせん私には初めての事だ。

少しは『十代女子』の常識とやらを学ばないといけないのだろうか……

……それにしても、なぜに私はシャルロットの言葉に抵抗なく頷いてしまうのだろうか。

他人に選択の決定を委ねるなど……以前の私では考えられんし今でもそうだと思っていたのだが……

教官や母様のような、人を引き付ける、無条件に信頼させるような何かがあるのかもしれないな。

「ラウラ、聞いている？」

「あ、すまない。聞いていなかった」

少々思案していたらその間にもシャルロットはなにか説明してくれていたらしい。

少し悪い事をしたか？

「も〜。私服はスカートとズボン、どっちがいいのって聞いたの」

「ん、どっ」

「どっちでもいいとか、言わないでね」

先を読まれてしまっている、だと？

「むう……………」

「…そう言うところ、一夏とそっくりだね」

「夫婦が似る事は良い事だ」
もちろん、親子もな。

「とりあえず、七階フロアに向かうよ。六階もレディースだから順番に見てこ」

「うん？ 何故上から見るんだ？ 下からでもいいではないか」

「上から降りた方がいいの。ほら、お店の系統から見てもそうでしょう？」

と、シャルロットは何やら本を開いてこちらに見せてくるが……………
「全く判らん」

「~~~~ツ！ あのね、下の方の階はもう秋物になってるの。上の方はまだセーラーで夏物も扱ってるから先にそっちを」

「待て、秋の服は要らないぞ？」

「え？ な、なんで？」

シャルロットが驚いた様子で目を見開いた

「今は夏だろう」

何故にそんな事を聞いてきたのだろうか。
当然ではないか。

「あ、あのね……女の子は普通、季節を先取りして用意するんだよ。」

「そうなのか」

確かに、行動を起こすには準備が必要。
時には準備が不可能になってしまう事もある。

「所謂、『備えあれば憂いなし』と言うヤツか」

「えっと……うん、それでいいよ」

ふむ。細かく言っていると違うが、あながち間違いではない、と言ったところか。

「とにかく、順番に見てくよ。判らない事があつたら何でも聞いてね」

「うむ。 シャルロットと一緒にならば心強い」

少し待ってやってきたエレベーターに乗り込む。
それで一気に七階まで上がる。

エレベーターから出たその先は、我々と同じく夏休み中なのである
う、十代の男女で溢れていた。

「手、繋いでいこっか。 ほら、はぐれるとまずいし」

「う、うむ」

ううむ、不思議だ。

何故私はシャルロット相手だとも素直に要求を飲んでしまうの
だ？

「じゃ、ここからだね」

「『サード・サーフィス』……変わった名前だな」

『Third Surface』 英語で『第三の面』か。

「結構人気のあるお店みたいだよ。 ほら、女の子も一杯いるし」
そう言われて見回してみる。

うむ、確かに居るな。

「さ、見てみようか」

「う、うむ……」

まずは適当に見てみるとしよう。
現地調査は重要だしな。

「ど、どっ、どんな服をお探して!？」

上ずった声を上げた店員がやってきた。

新兵でももつとマシだろう。さては新人………げんはじきかん店長、だと？

サマースーツを着ているが……正直、教官や母様の方が似合ってる
ような気がするぞ。

「えっと、とりあえずこの子に似合う服を探しているんですが、い
いのありますか？」

「こ、こちたの銀髪の方ですね！ 今すぐ見立てましょう！ はい
！」

言うなり、走ってゆく店長。

む、戻って来たぞ

「ど、どうでしょう。 お客様の綺麗な銀髪に合わせて白のサマー
シャツは」

「へえ、薄手でインナーが透けて見えるんですね。 ラウラはどう
？」

「わから」

「判らない、はナシで」
「むう……………」

何故、読まれた!?

仕方がない……………ううむ、

「白か……………悪くはないのだが、今着ている色だ」

「あ、はい……………」

む、これでは駄目なのか?

「ラウラ、折角だから試着してみたら?」

「いや、めん」

「面倒くさい、はナシで」

「……………」

だから、何故先読みできるのだ!?

そうこうしているうちに件の店長とシャルロットが和気藹々と色々な服に手を伸ばしては何やら騒いでいる。

「ストレッチデニムのハーフパンツに、インナーは……………」

「Vネックのコットンシャツ……………」

「あ、……………。色は同系色か、はたまた対照色か……………」

なんとも楽しそうだが、私にはいかなせん何が楽しいのか判らん。

それに何を言おうと、どう抵抗しようとも無駄な様だ。

これも先日、母様を着飾らせるとかなんとか言っていた計画に賛同した報いなのだろう。

私が箒や鈴にしたのと同じ目に遭う。

これが因果応報というヤツなのか……………

「さ、ラウラ。これに着替えてきて」

「…わかった」

「試着室はこちらになります」

連れられるがままに試着室に入ったはいいが……………

どうせなら、欲を言うなら、一夏か母様に見てもらいたかった。

まあ、そういくら想っても仕方がない。

それに今は試着、『試し』だ。

着替えねばならないから制服は脱ぐ。

鏡に映る下着姿の自分。

……………自分では判らないが、異性にとって魅力がないのだろうか……………

篝のような身長も、胸もなく、セシリアのような気高さや、自分に
対する自信も無い。

鈴のような快活さも無ければ、シャルロットのような親しみやすさ
なぞ対極にあるに違いない。

そんな私だから、一夏は

「……………馬鹿馬鹿しい」

母様が言っていたではないか。

『私』は『私』ラウラ・ボーデヴィッチ以外の何者にもなれない、と。

そして、そんな『唯一の私』だからこそその魅力が、気づかないだけ
で必ずあるのだと。

改めて、シャルロット達が選んだ服を眺めてみる。

どちらかと言えばイメージは教官の方に近いような気がする。

……………どうせなら可愛いのがよかったのにな。

それなら

……………「case 01…母様の場合」……………

「うん、可愛いね」

「そ、そうかな……………」

「うん、流石は僕の娘」

ぽふ、なでなで

.....「case02：「夏よめの場合」.....

「ラウラ、その服可愛いな」

「服だけか？」

「もちろん、ラウラが一番可愛いさ」

「ば、馬鹿者.....」

「下着も可愛いのが着てる？」

「え、あ.....」

「見せて、ラウラ」

「う、うむ.....」

.....

自分で妄想まやかししておきながらも、頭に血ちが上あってゆくのが判わかった。

だが、

「……………case 02はあり得んな」
相手は『あの』一夏だ。

シャルロットたちの愚痴を聞く限りではその領域までは足を踏み入れてこないだろう。

……………可能性はゼロではないとはいえ。

「どう、ラウラ。着替えた？」

ドアの向こう側から声をかけてきたシャルロット。

……………そういえば、母様が『もっとわがままでもいい』と言っていたな。

よし。そうとなれば……………

手早く制服を着直してドアを開ける。

「あれ？ どうして制服のまんま…？」

「シャルロット」

「う、うん。えと、もしかして気に入らなかった？」

「いや、そうではない。そうではないのだが……………」

「？」

「……………もう少し、可愛いのがいいな」

「
」

シャルロットが啞然としていた。

…やはり私にそう言うのは

「う、うん！可愛いのがいいんだね？　すぐ見つくるうから待って！　行きましよう、店長さん！」

「はいッ！」

売り場に駆け出そうとするシャルロット。

だが、すぐに立ち止まり戻ってくる。

「ああ、で、どんなのがいい？　色とか、形と、特徴とか。　希望は？」

「そ、そうだな」

ちよっとその勢いに負けて押されそうになった。

「それなりに露出度があるものがいいな」

「ん、わかった！」

それから、あの店長と一緒にあって店中を縦横無尽に駆け回っているらしく、声がいろんなところから聞こえてくる。

「まず、そっちの肩がでてるワンピースに、」
とか

「そっちのブレスレットと……」

「あと、」

「これと」

という感じに。

「露出度が高い服なら色は落ち着いてる黒のほづがいいよね？」
ウラの髪とも合うし」

幾つもハンガーとかを抱えてひよっこり現れたシャルロット。

「あ、あまり派手なのは困るぞ」

なんだか、力が予想以上に入ってるのが不安だ………母様の一件もあるからな。

「大丈夫だいじょーぶ！もう任せちゃってよ！」

果てしなく不安が残る。

普段はおとなしいだけに、なんだ…勢いに負けるといっか………

これが普段からやや高圧的になる相手なら負けないのだが………

それからしばらくして、シャルロットが店長と共に服を持ってきたので、改めて試着室で着替える事にした。

うむ、これならば……

着替えて出てみたら

「！」

「うわ、すっごいキレイ……」

「妖精みたい……」

驚いた者、目を輝かせる者、様々だった。

視線が集まってきて、ちょっとばかり恥ずかしい。

ところどころにフリルがついている、肩の露出したワンピースなど……いや、このような服など初めて着るのだ。

どこがおかしくないだろうか……

「あ、ラウラ。コレ履いてね」

「く、靴まで用意したのか。驚いたぞ」

「折角だもん。ミュール履かないとね」

このような踵の高い靴は初めて 「ッ」

「おっと」

バランスを崩して、すぐさまシャルロットが支えてくれていた。

「す、すまないな」

「どういたしまして」

シャルロットの手を借りて体勢を立て直すと、シャルロットは私の手を取ってお辞儀をしてきた。

むう………「こつ言つ事を自然とできるのも、シャルロットの魅力なのだろうか。」

「じゃ、写真とって いいかしら!?!?」

「わ、私も!」

「握手して!」

「私も、私も!」

「!?!?」

何故に群がってくる!?!?

その場から逃げたい気持ちでいっぱいになったが、人垣と慣れない靴が逃げさせてくれなかった。

* * *

「同刻 IS学園第三アリーナ」

「はあ、はあ、はあ……………」

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ、」

「も、もう駄目……………」

「まったく、だらしのないよ、三人とも」

武装試験から気がつけば訓練へとシフトしていたらしく、簀、一夏、
箒の三人はばてていた。

近接戦特化の万能型である一夏と箒、機動力重視の汎用型でやや砲
戦・戦闘管制向きな簀というバランスのいいチームではあったが、
空にはいいようにあしらわれたのだ。

まあ、そこには特例とはいえ教員である空と生徒でしかない三人の
差がある訳なのだが。

「でも、良いデータがとれたよ。ありがとう」

「どう、いたし、まし、て……………」

「それじゃ、片付けしたら僕の部屋でお昼にしようか。その時にお
礼も渡すよ」

「あ、ああ……………」

「…その前に、水分補給みたいだね。更衣室前で待ってて。スポーツドリンクを買ってくるから」

「あはは、……………イタダキマス」

その後、死屍累々と言った風にバテている三人を見た他の生徒が『千風先生との訓練で』という話を聞いた時

『仙人への道を手伝って、他の者に抗う事の愚かしさを伝えてくれたのだ』

と、語ったとか。

#52・ラウラのテリブルショッピング（後書き）

初めてのデパートで人に群がられたらきつと怖いに違いない

#53：史上最強のアルバイト

「ふう、疲れたな」

「まさか、最初のお店であんなに時間を使うとは思わなかったね」
ちょうど時計の短針が十二を過ぎたところで、ラウラとシャルロットはオープンテラスのカフェでランチをとっていた。

メニューはラウラが日替わりパスタ、シャルロットがラザニアである。

「しかし、まあ、いい買い物はできたな」

「折角だからそのまま着てればよかったのに」

「い、いや、その、なんだ……そう、アレだ。汚しては困る」

「ふうん。あ、もしかしてやっぱりお披露目は一夏にとっておきたいとか？」

「な、!？」

「それとも空に？」

「ち、違う！だだ、断じて違う、違うぞッ！」

顔を赤らめて取り乱すラウラにシャルロットは『的中』を確信しつつも敢えて知らないふりをする事にした。

「そっか。変な事言ってるよメンね」

「ま、ま、まったくだ」

けれども、シャルロットの目は見逃さない。

「ラウラ」

「な、なんだ」

「スプーンとフォークが逆」

「ツ~~~~!!」

シャルロットに指摘されて気付いたラウラはスプーンを放し、話を誤魔化す事にした。

「と、ところで午後はどうするのだ？」

「生活雑貨を見て廻ろうよ。僕は腕時計見に行きたいかな。日本製の時計ってちょっと憧れだったし」

「腕時計が欲しいのか？」

「うん。せっかくだからね。ラウラはそう言うのって無い？」

「そうだな……………以前、箒に見せてもらった日本刀は見事な物だった……」

「……………女の子的なモノは？」

「……………今まで、そのようなモノに縁がなかったからな。」

「そっか。それじゃ、これからゆっくりとみて見ればいいんじゃない？」

「うむ」

「……………どうすればいいのよ、まったく……………」

はあ、と深淵の色すら見えるほどに深々とした溜め息付きの愚痴が二人の所まで届いてきた。

その方にはかっちりとしたスーツを着た二十代後半くらいの女性。

何か悩み事があるらしく、そして悩み続けているせいで注文したであろうペロンチーノは冷めきってしまった。

「ねえ、ラウラ」

「おせっかいは程々にな。一夏よめの様になるぞ」

今度は逆にラウラがシャルロットの言葉を先回りした。

突然の事にびっくりしたシャルロットだが、すぐに嬉しそうな表情を浮かべる。

「僕の事、ちゃんと判ってくれてるんだね。」

「た、たまたまだ。 で、どうしたいんだ？」

「うーん、とりあえず話しだけでも聞いてみようかな。ほら、話すと楽になるって言うし」

「なら、やってみれば良い」

ラウラに背中を押され、シャルロットは行動に移る。

「あの、どうかされました？」

「え？ ！？」

二人を見るなり、『がたん！』と椅子を蹴倒さんばかりに女性が立ち上がり、シャルロットの手を握る。

「あ、あなた達！」

「は、はい」

「バイトしない？」

「はい？」

突然の事に、二人とも一瞬目が点になった。

* * *

「side…シャルロット」

「と、言う訳で、いきなり二人辞めちゃったのよ。辞めたって
いうか、駆け落ちしたんだけどね。はは……………」

「はあ」

「ふむ」

「でもね、今日は超重要な日なのよ！本社から視察に人間も来るし。
だからお願い！あなた達二人に今日だけアルバイトをして欲しいの！」

有無を言わずにつれこまれた場所は僕が声をかけた女の人が店長
をしている喫茶店だった。

まあ、ただの喫茶店じゃなくて執事&maid；メイド喫茶な訳だけ
ど。

「それは良いんですけど……………」

その話は制服に着替えさせた時点でやらせるの決定になってるから
まあ良いんだけど…

「なぜ僕は執事の格好なんでしょうか」

「だって、ほら！似合うもの！そこいらの男なんかよりもずっ
と綺麗でかっこいいもの！」

「そ、そうですね」

何だろう、褒められてる筈なのに全然褒められてる気がしない……………

だってねえ、男装を褒められても『女の子らしくない』って言われてるような気分になるんだよ

………僕もメイド服の方がよかったなあ………ラウラ、すっごく可愛いし。

自分の執事服姿を見下ろして改めて思う。

確かに、IS学園に男子生徒として編入する為に『男になりきる演技』は仕込まれたけどさ………女の子に戻った後もこうなるなんて………

やっぱり、こういう方向性なのかな………

ちよつとしょんぼりしてたらメイド服に着替えた店長さんが近づいて来て手を取ってきた

「大丈夫、すっごく似合ってるから！」

「そ、そうですか。あはは………」

ちよつとひきつってるかもしれないけど、なんとか笑顔と社交辞令くらいは返す。

でも、できれば声を大にして叫びたい。

『それが大問題なんだっ！』って。

特に、隣に居るラウラが似合いすぎるから。

うっ、羨ましいなあ……………
なんでラウラってこんなに可愛いんだろ。

きつと、ラウラなら男装しても『麗装の少女』になる。

…僕の場合は『可愛い男の子』になるけど。

あ、空もどちらかと言えば僕寄りか。

「店長、は、早く手伝ってくださいい〜！」

ヘルプを求める声に店長さんは身だしなみを整えてバックヤードの出口へと向かっていく。

あ、いけない。大事な事訊き忘れてた！

「あ、あの、もう一つだけ！」

「ん？」

「このお店、なんて言う名前なんですか？」

キョトン、とした後店長さんは笑みを浮かべながらスカートをつまみ上げ、大人びた容姿に似合わない可愛いお辞儀を見せてくれた。

「お客様、@クルーズへようこそ」

僕たちは店長の背中を追って、戦場へと足を踏み入れた。

* * *

僕たちがヘルプに入ってから二時間くらいが経った。

最初の頃はラウラが物凄い事をやらかして、でもそれが何故か大ウケしちゃって大騒ぎになったりもしたけど、店長さんの指示でだんだんと滞りがなくなっていった。

まあ、慣れない事をやってるからちょっと疲れたかな、って思った頃……

カラン

「いらつしやませ、@クルーズへようこそ。おひとり様で宜しいでしょか」

「ああ、後から連れが三人来るから、四人かな」

「かしこまりました」

新しいお客さんが……つて、空あ！？

何で空が……これはちょっとヤバそうな気が……だって、ね。空だって先生な訳だし、あと三人来ると言ってる事は他の誰かも来るって事だし、他の先生とか、箒とか簪とかセシリアとか鈴とかに見られたら、ああ、とくに箒と鈴には恨みかっているから何されるか判らないよどうしようどうしよう

いい感じに頭が沸騰しそうになっていると、

「全員、動くんじゃねえッ！」

ドアを破らんばかりの勢いでなだれ込んできた男が三人、大声でどなった。

一瞬、何が起こったのか判らなかつた店の中の人たちだけど、次の瞬間に発せられた銃声に絹を裂くような悲鳴が上がった。

「きゃあああッ！」

「騒ぐんじゃねえッ！ 静かにしろ！」

入ってきた三人組の服装はジャンパーにジーパン。覆面で顔を覆って手には銃。

背中の鞆からは紙幣が数枚はみ出している。

うん、なんとというか典型的な…『お約束』的な強盗の姿だよね。

まるで古い漫画から飛び出してきたみたいだな。

「あー、犯人一味に告ぐ。キミたちは既に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返し。」

流石に駅前だけあつて警察も素早く動いていたみたいだ。窓の外を窺って見るとパトカーが道路を封鎖、ライオットシールドを構えた対銃撃戦装備の警察官が包囲網を作っていた。

「……………なんか」

「……………警察の対応も」

「……………古」

二十代の後半くらいの人たちがなんか呟いていた。

僕たちには判らない、妙なクロニクルでもあつたんだろう。

「ど、どうしましょう、兄貴！このままじゃ俺たち全員」

「うるたえるんじゃないッ！焦る事はねえ。こつちには人質が居るんだ。強引な真似は出来ねえさ」

リーダー格らしき、ひときわ体格のいい男がそう言うのと焦っていた他の二人も落ち付きというか、自信を取り戻す。

「へ、へへ、そうですよね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツがあるし」

じゃきつ、と固めの金属音を響かせてショットガンの装弾。ポンプアクション

次は天井に向かっての威嚇射撃。

「きやああッ！」

蛍光灯が破裂して、パニックになった人が悲鳴を上げたけど、今度はリーダー格が拳銃を撃って黙らせた。

「大人しくしてな。俺たちの言う事を聞けば殺しはしねえよ。わかったか？」

そう脅すリーダー格に悲鳴を上げていた女性客がきつく口をつぐむ。

まあ、何かやるうにもきつと空がどうにかしちゃうんだろうけど……

……

「おい、聞こえるか、警官共！ 安全に人質を解放したかったら車を用意しろ！ もちろん、追跡の準備や発信器なかつけるんじゃないぞ！」

威勢よくそう叫んで駄賃だとばかりに拳銃を警官隊に向かって発砲。弾丸はパトカーのフロントガラスを割っただけだけど、周囲の野次馬がパニック状態になっていた。

「へへ、奴ら大騒ぎしてますよ」

「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当っすね」
「全くだ」

暴力的な笑みを浮かべる男たち。

ここまでで確認できたのはリーダー格が今までに五発撃った拳銃と、一発撃ったショットガン、あと何発残ってるか判らないサブマシンガン。

他にも何か持つてるかもしれないけど……今居る場所からじゃちょっと判らないかな。

……空から身を隠そうと思って奥の物影に入ってたけど、助かったかな。

さて、人の配置は………って！

思わず目を疑った。

店の真ん中でラウラがそのまま立っていた。

マジイよ。思いっきり目立ってるし。

「なんだ、お前。大人しくしているっていうのが聞こえなかったのか」

案の定、リーダー格の男がすぐに近づいてきた。

まあ、ラウラならなんとかなるかもしれないけど、その後がね。

「おい、聞こえないのか！？ それとも日本語が通じないのか？」

「まあまあ、兄貴、いいじゃないっすか。時間はたっぷりあるんすから、この子に接客してもらいましょっよ！」

「ああ？ 何言ってるんだ、お前」

それには同意。

「だってほら、すっげー可愛いですよ！」

うん、そうだよね。

「お、俺も賛成ッ！メイド喫茶って入った事無くて………」

二人してテヘへと嬉恥ずかしそうにする手下にリーダーは苦い顔しながらソファにどかっと腰をおろした。

「ふん。まあいい。ちょうど喉が渴いていた処だ。おい、メニュー持って来い！」

ラウラは頷くでもなく、スタスタとカウンターの中へと歩いていく。

よし、今のうちにこっちも準備をしておこうかな。

と、ラウラが出てきた？

持ってるのは……………氷の沢山入ったグラス？

「……………なんだ、これは？」

「水だ」

「いや、あの、メニューを欲しいんすけど……………」

「黙れ。　これでも飲んでいろ。　　飲めるものならな」

ラウラは突然トレーをひっくり返す。　当然、氷水（氷過多）が宙を舞う。

ラウラはその氷を回転するような動作で掴んで、指弾の要領で弾いた。

「いってええッ！　な、なっ、何しやが　」

トリガーを離れていた人差し指に、瞼、眉間、喉。
的確に氷をぶつけ身動きがとれない一人（サブマシンガン装備）の
懐に飛び込んでひざ蹴りを叩きこむラウラ。

「っざげやがって！ このガキっ！」

一早く痛みから復帰したリーダーが早速発砲。

六、七、八、と撃つていくけどラウラはソファにテーブルに観葉植
物に、ドリンクサーバーに 店内にあるありとあらゆるモノを盾
にして、その素性を知らない人だったら予想もできないだろう速度
で駆け抜けてゆく。

「あ、兄貴ッ！ こ、こいつっ」

「うるたえるな！ガキ一人、すぐに片づけて」

「はいはい、寸劇の続きは扉の中でね」

完全に呆れてるような声。

「ふごあッ!？」

ショットガンを持ってた方が突然白目をむいて泡を吹く。

何と言うか、見事としか言う事の出来ないアレを狙った一撃は男性
客や男性スタッフが思わず青ざめて前屈みになるほどの精度でつま
先が直撃したらしく完全に悶絶。

リーダーも思わず蹲りかけている。

折角だから僕も物影から飛び出して内また気味になってるリーダーの側頭部に跳び膝蹴りを叩きこんでおく事にした。

「ふっ！」

「ごあつ！？」

綺麗に決まってリーダー格もその場に崩れ落ちる。

一応、専用機持ちは必ずありとあらゆる場合 『ISが展開できない状況』も含めて『どうにかできる』ように訓練をされてるからね。

例外になるとすれば筈と一夏だけど、弾丸を切り払っちゃってるし、最近は空に訓練をしてもらってるらしいから、化物の意味での例外チートになりつつある。

「目標、制圧完了。二人とも、怪我は無い？」

「大丈夫です、母様」

見ればラウラも空を見習ってなのか気絶させたサブマシンガン男のアレを狙って思いつき蹴りをくれたところだった。

その容赦の無さにまたもや：外で見てる警官も青ざめていた。

「まったく、二人とも行動が早すぎ」

しん、とした店内で僕たち三人の声だけが妙に大きく聞こえる。

「えっと……………」

「助かった、のか？」

「一体、何が……………」

啞然としてたお客さんたちは呆然としてたけど『終わった』という実感がわいてきたらしく一気に湧き立つ。

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！ あ、ありがとう！メイドさんに執事さん、ありがとう！」

突然に店内が騒がしくなる。

その様子を見て外に展開していた警官隊も詰めかけてくる。

「ふむ、日本の警察は優秀だな」

「ラウラ、まずいって！ 僕たちは代表候補生で専用機持ちなんだから。ほら、空もIS学園の先生なんだし、公になるのは避けないと！」

「ふむ、それもそうだな。 母様もこの辺りで」

と、その時

「掴まってムシヨ暮らしになる位なら……………いつそ全部吹き飛ばしてやらあッ！」

どうやら極まりが浅かったみたいなりーダーはちょっとふらつきな

がらも立ちあがって叫ぶなり革ジャンを広げる。

そこにあっただのはプラスチック爆弾の腹巻だった。

起爆装置は　もちろん、その手に。

「わー、」

「最後まで古〜……」

誰ともなくそんな呟きがこぼれ、それを皮切りにさっきまで以上のパニックに陥る店内。

だけど……

「はいはい。散り際は潔くね」

無造作に床に落ちていたフォークを拾った空がそれを投げる。

的確に起爆装置を持つ手に突き刺さると、リーダーは起爆装置を取り落とす。

「ラウラ！」

「了解ッ！」

すぐさまラウラが起爆装置を傍らに落ちていた拳銃で撃ち抜く。

これで予備の起爆装置なんて代物がなければ自爆はできないハズ。

トドメと言わんばかりに空の金的がキレイに決まってリーダーは悶絶し崩れ落ちる。

「さ、偶然居合わせた教員が話しつけとくから」

「はいッ！ ラウラ」

「ああッ！」

空を残して僕とラウラは大急ぎで店の奥へと向かい、これまた大急ぎで着替えてから逃げるように店から飛び出して行った。

* * *

「ちょうどそのころ」

「なんか、大変な騒ぎになってるみたいだな」

「うむ………だが、空なら心配はいらないだろう」

「いざとなればISもあるし、簪さんも現場に残るって言ってたし」

「そうだな。……で、私たちはどうするのだ？」

「ん？ そうだな………貰った割引券は今度使えるみたいだから

お、クレープ屋発見」

実は、三人が『仮想敵をやったお礼』として貰ったのは@クルーズの株主優待割引券であった。

何故そんなモノが有るかと言うと、深いよつで浅い理由があるのだが、それはまた今度語る事にしよう。

(…そういうえば、簪が何やら言っていた気がするな……確か『城址公園のクレープ屋でミックスベリーを食べると幸せになれる』だったか?)

「折角だし、食べてこうぜ。簪さんと空にはあとで持つて行くか」

「そ、そうだな」

簪はそう言いつつ一通りのメニューに視線を流すがどこにも『ミックスベリー』がない事に気付く。

(幸せになれるというのは置いてある時と置いてない時があるという事なのか?)

「おじさん、注文いいかな。俺はブルーベリーで。簪は？」

「ううむ……迷うな。一夏に任せる」

「ん、それじゃあもう一個はイチゴで」

あいよ、と返事を返したおじさんに一夏はさつさと二つ分の代金を支払ってしまう。

だが、簪はおじさんの意味深な笑みに気をとられて気付かない。

「ほれ」

「あ、ありがとう……」

出来立てのクレープをはむっ、とかじる。

「お、旨いな」

「う、うむ」

箸としては一夏と一緒にクレープを食べてるといふ状況だけでもだ
いぶプラスアルファ成分が大きいのだが。

「ところで箸。モノは相談なんだが…」

「？」

半分ほど食べた処で一夏が切りだしてきた。
箸はなんだか判らずに首をかしげる。

「それ、一口貰えるか？」

「ッ！？」

あまりのことに箸はクレープを落としそうになった。

「嫌なら別にいいんだが……」

「い、いや。べつに、構わない」

「そうか。いや、ブルーベリーとイチゴで迷ったんだよ。二個買
う訳にもいかないしな」

笑いながら言う一夏に、箒は恐る恐る自分のクレープを差し出す。

「ん、うまい」

さっそくかじる一夏。

「ほれ、お返し」

「う、うむ……………」

箒も控えめながらに差しだされたブルーベリーのクレープをかじる。

(ブルーベリーも中々…………ブルーベリー?)

ふと箒は思い出す。

イチゴは英語だと『ストロベリー』だった事を。

思い出してしまえばここからは簡単な事である。

(こつこつ言う事かっ!)

メニューにない、隠しメニューでもなさそうなミックスベリーの噂。

確かに、意中の相手と『ストロベリー』と『ブルーベリー』を食べさせあえばそりゃ幸せになれるというものだ。

みるみるうちに赤くなってゆく箒の顔。

その紅さはクレープのイチゴのソースにも負けなくらいだ。

「箒？」

「な、なんでもないっ！」

残っていたクレープを一気に平らげ、

「先に帰るッ！」

箒はそさくさと学園行きのバスが出るバス停の方へと逃げるように立ち去ってゆく。

「……………俺、なにか悪い事でもしたかな」

取り残された一夏は一人、首をかしげるのであった。

#53・史上最強のアルバイト（後書き）

実は第の一人勝ちだったりする件

54 : 黒猫白猫観察記録 (前書き)

今回はずっと俯瞰視点から

54：黒猫白猫観察記録

「まったく、心配したんだからね！」

「やー、体が動いちゃったから仕方ないでしょ。デュノアさんとラウラも居たし」

夕陽が街を紅く照らす中を、空と簪はならんで歩いていた。

実は一夏と箒も居たのだが、先に店に行っていた空は強盗騒ぎに巻き込まれ、鎮圧に参加。

簪は現場に残り一夏と箒は別行動をとっていたのだ。

その後、鎮圧に参加した一人として聴取を受けたあと警察署まで一緒に来ていた簪とこうして歩いているのだが…

「だからって……はあ」

「？」

「ううん、なんでもない。それよりあそこの城址公園のクレープ屋に……って、あ」

「ん？ デュノアさんとラウラ？」

目的地のすぐ近くに二人の姿を見つける。

と、

「お？」
「わっ……」

遠目で見ている二人にはラウラがシャルロットにキスをした様に見える。

「んー、これは面白いかも」

空のそんな呟き。

簪はふとした事から空の背中の辺りに陽炎がゆらめいていることに気付く。

（まさか、ISを使って録画中！？）

一体何時から始めていたのか、怖くて聞けない簪だった。

少なくともラウラとシャルロットはしばらく空に頭が上がらないのはきつと確定事項だろう。
そんな予感が簪の脳裏には浮かんでいた。

* * *

「じ、これはなんだ……！？」

「んー　　かわいいーっ。ラウラ、すっごく似合ってるよ！　空もそ
う思うでしょ？」

「確かに、可愛いと思うよ。」

「ほらー！」

「だ、抱きつくな。動きにくいだろっ」

「ふっふー、ダグメ。猫は膝の上で大人しくしないと」

「お、お前も猫だろうが」

そんな楽しげな声が溢れているのはラウラとシャルロットの寮の部屋ではなく、空の副寮監室であった。

夕食時に偶然空に出会ったラウラとシャルロットは新しいパジャマを買った事を報告、お披露目を提案したところ、『副寮監室に泊りに来る？』と逆に提案された。

それをシャルロットがラウラには有無も言わずに決定にして、晴れて『お泊まり保育』と相成ったのだ。

食事と入浴を済ませてパジャマに着替えた二人は副寮監室に突撃を敢行。

今は普段は拷問部屋と恐れられている和間に敷き詰められた布団の上でじゃれ合っていた。

なお、空はまだお仕事中という事で机に向かっていている。

「これは、本当にパジャマなのか？」

「うん、そうだよ。寝やすいでしょ？」

「ね、寝てないから判るはずもないだろう」

ラウラが疑うのも無理はない。

確かに『パジャマ』ではあるが一般的にはあまり見ないタイプのパジャマなのだ。

袋状になっている衣服にすっぽりと体を入れ、出ているのは顔と腿の半ばから先だけ。

しかもフードにはネコ耳がついており、袖先には肉球、足にも肉球付きの靴下状のブーツまでついている。

要は猫の着ぐるみパジャマである。

「や、やはり寝る時は裸の方がいい。その方が楽だ」

「ダメだつてば。こんなに似合ってるのに脱ぐなんて勿体ないよ。空もそう思うでしょ？」

「そうだね」

机に向かって空は見向きもしていないで返事を返しているのだが、そんな空に背中を向けた状態で座っている二人はその事に気付いていないしシャルロットとしては同意が得られているので何の問題も無い。

今の格好はラウラが黒猫パジャマ、シャルロットが白猫パジャマ。空はいつも部屋着にしているジャージ姿である。

この部屋に来てお披露目してからというものの、シャルロットはラウ

ラを後ろから抱き締めるかたちで膝の上に座らせていた。
相当気に入っているらしい。

「ほら、ラウラ。せっかくだからにゃーん、って言うってみて」

「なッ!? こ、断る! な、なぜそんな事をしにゃければならぬのだ!」

焦って噛んでしまつラウラ。

「え〜、だってかわいいよ〜。可愛いのは何よりも優先されることだよ〜」

ぼわぼわという効果音が聞こえてきそうなくらいにハッピースマイルなシャルロットは、ラウラにとっていつも以上に強敵だった。

とにかく『可愛いからいい』『これを着ないなんてとんでもない』『残念ですがその要求は却下されました』『ほら、空も言ってるよ』という、いつもとは一八〇度逆の、理屈なし根拠なし交渉なし脅迫ありなやりとりで気付けばシャルロットの膝の上に座らされていた。

「ほらほら、言うてみようよ。にゃーん」

「にゃ、にゃーん」

照れくさそうに猫の手ぶりまでつける眼帯黒猫ラウラに、ポワポワ白猫シャルロットはここが他人の部屋である事も忘れて更に幸せのパーセンテージを上げる。

恐らく、すでに某銀河の果てを目指す宇宙戦艦の主砲充填率並の数値である事は間違いないだろう。

そして、完全防音でなければ隣の部屋の世界最強が『うるさい』と乗り込んでくる事は間違いない。

「可愛い〜！　ね、写真撮ろう！、ね、ねっ！」

「き、記録に残すだとツ！？　だ、断固拒否する！」

「そんな事言わずにさ〜」

「か、母様も何か言っちゃって　　」

「……………」

無言。

空は何も言わずに二人の前に空間投射ディスプレイを表示させる。

そこに映っているのは　　眼帯黒猫ラウラを抱きしめて幸せ一杯な笑顔を浮かべているポワポワ白猫シャルロット。

「こ、これは……………」

「…！」

ラウラの表情は絶望に、シャルロットの表情は更に嬉しそうに変化してゆく　　が、

「録画ついでに絶賛放映中だから。　　一夏の処と簪さんの処、あと織斑先生の処に」

「　　」

思わず啞然とした二人。

要するに今までの様子は全て一夏と簪と千冬、ついでに箒に見られているという事だ。

「にゃあああッ!?!」

「い、いますぐ放送中止にしてええッ!」

半狂乱になる二人。

それに対して空は

「フッフ、やだ」

と、黒い笑みを浮かべる空。

この間の着せ替え事件の恨みをこの場でしっかりと晴らしている最中なので、そう易々と許すつもりは欠片も無かったりする。

* * *

「一方：簪&箒の部屋」

「わー、二人とも可愛い事になってるね。折角だから空くんもあ
あいうの着れば良いのに。」

「ブツブツ」

(いろいろ、一夏とクレープの食べさせあいをしてしまった)

簀は中継されている部屋の様子を見ながらちよつとばかり興奮し、
筭は昼間の出来事（ミックスベリ―事件）を反芻しては赤面し、戻
つては反芻し、を繰り返していた。

* * *

「一夏の部屋」

「？ なんて空間投射ディスプレイが…？ 映ってるのは…シャル
とラウラ？ なんか随分と可愛い格好してるな」

* * *

「千冬の部屋」

「ッ………！！」

思いもしない教え子の姿に腹筋崩壊中でした

#54：黒猫白猫観察記録（後書き）

こっそりとドSモード発動中の空さんでした

#55：夏の日の一幕（前書き）

大分『ご無沙汰』になってしまってますいません。

学祭前の22時の終バス帰宅生活と、その後の混乱で中々に書き進める事が出来なかったのです、ここまで掛けてしまいました。

#55：夏の日の一幕

時は遡り数日前……………

* * *

「side：鈴」

「あつつう……」

八月の初旬、この国特有の夏の暑さに苛立ちながらも、あたしはある一室を目指して寮の廊下を歩いていった。

おおよそ半分の生徒がそれぞれの国に帰省しているから閑散とした廊下はクーラーが効いていないらしく嫌に暑い。

あいつ、いるんでしょね。まったく。

折角夏になったんだから誘いに来なさいよ！

ホント、昔っから甲斐性　　は、それなりにあったか。但し父性的な面で。

たとえば、クラスで孤立してそうな子がいたら積極的に声かけたりとか。

で、一夏自身が『人たらし』な面があったから結構大きなグループが出来上がっていて、孤立してた子も気付けばそのグループの一員になって楽しくやれてたりとか。

一夏って、気付いてないんだけど結構モテたのよね。

家事は得意だし、人当たり良いし、クラスの人気者だったし、ちょ

つとシスコンが酷いけどそれって家族を大事にしてるって事だし、運動も勉強もそこそこに来てたし。

そういえば、中学の林間学校の時は見物だったわね。

みんなでカレーを作ったんだけど、ウチの班は『主夫系』な一夏に、家が中華料理屋のあたしと定食屋の弾の三人が揃ってたから、他の班とはレベルが違ってたわね。

先生たちがこぞってウチの班のカレーを味見と称して食べるにこようとしてたっけ。

……一夏はルーが出来合いモノだった事が不満だったみたいだけど。

他にも

「つと、いけないいけない。思い出に浸って目的を忘れるところだったわ」

ふつと我に帰って到着した目的地に向き合う。

何の変哲もない、寮の一室。

けど、ここは特別な場所。

ノックする前に喉の調子と、ポケットの中のチケットを確認。

よし、喉はオーケー、チケットもちゃんと二枚ここにある。

ならば

「一夏、いる？」

ノックと共に声をかける。

………返事がない。

「一夏あつ？」

どんどんどん、

シーン、

むっ………居ない？

まったく、あたしが折角来てやってるっていつのに

「一夏のくせに生意気ね」

「悪かったな」

「へっ？」

声に振り返ったら一夏がそこに居た。

但し、ESスーツにジャケットらしきモノを羽織っただけという、
なんとも暑苦しい格好で。

「iiiiiiiiiiii、一夏ッ！？」

「おう。で、何の用だ？」

「え、？」

「だって、俺の部屋をノックしてたら」

「あ、うん……………」

どうした、あたし。

いつもの元気は何処へやった！

ほら、切り出しなさいっ！

「で、部屋入るか？ あんま時間は取れないけど」

あたしはだまってこくり、と頷き…ふと気付いた。

『あんま時間は取れない』…？

それって、どういう事？

「そういえば、なんでISSーツなんか着てるの？」

「ああ、倉持技研と榎篠技研の人が来て白式のデータ取りをやってるんだ。ほら、臨海学校でセカンドシフトしたろ。それだからだとさ。」

「大変ね」

まあ、あたしも他人事たにじだとは言いきれないけど。

「ああ。おかげで今日明日、もしかしたら明後日までカンヅメだよ」

「え？」

思わず、凍りついた。

「ん？ どうした、鈴」

「い、」

「い？」

「いちかの、ばかぁッ！」

「理不尽ッ!？」

一夏を思いつきり殴り飛ばして、あたしは逃げ出していた。

* * *

あたしが逃げ込んだのは、まあ、やっぱりけど自分の部屋だった。

「で、要は計画は最初から破たんしてた、と」

金髪碧眼なアメリカ人のルームメイト、ティナ・ハミルトンに身も蓋も無く要約されてあたしは余計に落ち込む。

「ま、こればかりは仕方ないんじゃないの？ 専用機持ちの宿命
ってヤツなんだし」

「う〜」

「今は落ち込むよりチケットどうするかの方が重要なんじゃないの？」

チケット。

あたしが一夏を誘うつもりで友達のキャンセル品を引き取った、『ウォーターワールド』というついこの間オープンしたばかりのプールの入場券。

その、『明日』の分の入場券

「良かったら私が買い取るけど？」

「……………二枚で五千円」

「ちょっとくらいまけない？」

「ビター文まけない」

「はいはい」

あたしの目の前からチケットが消え、代わりに五千円札が一枚現れる。

「それじゃ、誘いに行ってきますかね」

ティナが部屋から出てゆき、あたしは部屋に一人残される。

「……………一夏の馬鹿」

夏の厭味なくらいに澄んだ青い空。

けれどもあたしの心は土砂降りの荒天だった。

* * *

それから数日。

一夏と筈と簪が空にボコボコにされたとかいう武装試験から何日か経ったその日。

「鈴、一緒に出掛けないか？」

「」

あたしを、思わず思考停止フリーズするくらいの衝撃が襲った。

って、待ちなさいあたし。

こんな上手い話がある訳ないわ。

一夏から誘ってくるだなんて、絶対に裏がある！

「……………他のメンバーは？ 筈とか、シャルロットとかラウラとか、

」

たとえば、そう。

他にも誰か誘っているとか。

「ん？ 誰も誘ってないぞ」

「へ？」

驚いて、変な声が出た。

もしかして、正真正銘の

ふたりつきり？

「もしかして、誰かと約束でもあるのか？」

「う、ううん！ない！ないわ！」

「そ、そうか。で、どうするんだ？」

「行くに決まってるでしょ！ 何処で、何時待ち合わせ？」

「それじゃあ………十一時に門の所でどうだ？」

「わかった！ それじゃ！」

まさか、一夏の方からで、デートに誘ってくれるだなんて！

高鳴る心臓ハートの勢いであたしは一夏と別れて部屋に戻る。

『オンナノコ』の準備にはイロイロと時間がかかるモノだからねえ
〜。

「たっただいまあつ！」

勢いよく開けた自分の部屋のドア。

「お、おかえり……………」

ティナはなんかびっくりしたような顔をして、ポテトチップスをくわえたまま固まっていた。

「ふ、ふふ、ふふふ……………」

ああ、もう。

笑いが込み上がってきて抑えてられないっ！

「え、あの、鈴？ ついに暑さとショックで壊れた？」

なんか物凄く失礼な事を言われてるけど、そんな事気にならないぐらいにあたしの心は昂揚してる。

「我が世の春が来たアアッ！」

そう、思わず叫びたくなるくらいに。

「えーと、これは精神科？脳外科？それとも織斑先生か千凧先生を呼ぶべき？」

#55：夏の日の一幕（後書き）

『我が世の春が来たアアッ！』

これ、誰のセリフか判ります？

ちなみにヒント（CV：子安武人）

#56：優しい『悪戯』

午前十一時 約束の時間に鈴と一夏は校門のところで落ち合っていた。

「さて、行くか」

「うんっ！」

『太陽と見紛いそうになるくらい』と比喻すべきに思つほど満面の笑みを浮かべた鈴に一夏も笑みを返す。

歩き始めると鈴は猫のような身のこなしでするり、と一夏の腕に自分の腕を絡めさせる

「おい、あんまりくつつくな」

「いいじゃない、いいじゃない」

まったく、とこぼしながらも一夏も苦笑を浮かべそのまま歩き始める。

「…あら？あれは……一夏さんと鈴さん？」

そんな二人の姿を目撃した英国人が一人、興味本位での追跡を開始した。

「あらっ？」

……荷運びをしていた従者メイドを放置して。

* * *

「side:鈴」

ふふふ。

ついにあたしにも春が来たわ！

箒、セシリア、シャルロット、ラウラ、抜け駆けしちゃってごめんね。

でも、一夏から誘ってきたんだからあたしが責められる理由ないからね。

「そつえばさ、どっ行くの？」

「ん？ 俺んちだけど？」

「！」

ま、まさか………春をとっ越して夏の到来！？

まさかあの一夏が………で、でも夏って人を大胆にするって言うし……

い、今のうちに心の準備をしとかないと………

『鈴、俺に毎日酢豚を作ってくれ』

とか言ってきたりして。

そのあと、もしかしたら「以下、Z指定により検閲削除」なんて……きやー。

あ、あと見つめ合って、名前を呼び合っちゃったり。

『…鈴』

『…一夏』

『…鈴』

『…一夏』

「鈴」

「いちかあ……」

「おい、鈴！」

「はっ！」

ぐいつ、と手を引っ張られて我に返ったら電車は目的地の駅……一夏の家の最寄り駅のひとつ前についていた。

「え？え？え？」

「ほら、なにボサツとしてるんだよ。降りるぞ」

「え、あ、うん」

訳がわからないまま最寄りのひとつ前の駅で降りた。

…なんで？

「ねえ、あんたん家^ちつて次の駅が最寄り駅じゃなかったっけ？」

「ん、ああ。よく覚えてるな」

「当然でしょ。で、なんで一駅前で降りたのよ」

「ん。まあ、ちょっと寄り道だな」

「寄り道？」

あたちたちが通っていた中学校のそばを通りぬけ、なんとなくだけで懐かしくも見慣れた感じのする道を歩いてゆく。

……………この道って、確か……………

「よし、到着だ」

「……………やっぱり」

あたしの視界の真ん前にあるのは 一件の食堂。

店先にかけられた暖簾の文字は『五反田食堂』。

そう、あたしと一夏の中学時代の親友にして、一時は商売敵でもあった五反田弾の家だ。

……あ、ちよつとオチが見えてきた気がする。

約束した時の『誰も誘ってない』ってのは学園内の話で弾とは約束してたんじゃないんだろうか。

首謀者ならば、『誘う』とは言わないし。

そつよ、一夏のことだからきつと　いえ、絶対にそつに決まってる！

弾：か。

一夏と同じで、会つのは一年　あ、もう夏だから一年半ぶりかあ。

時間が経つので、早いわね。

「いらっしやい　って、一夏。久しぶりだな」

「おう、弾も元気そつだな」

「あつたぼつよ。」

つて、一夏はあたしを置いて先に店に入ってる！？

「っと待ちなさいっ！」

「うおっ!?! り、鈴!?!」

一夏のすねを痛打したところ、一夏はうずくまりちよつど背中隠れる形になっていたあたしの事を弾が認識した。

「何よ、いちや悪い?」

「いや、驚いただけだ。元氣そうだな」

「ま、色々あつたけどね」

ホント、色々あつたわね。

機密がついてくる大惨事予備群も二、三あつたけど。

…って、いつか濃過ぎる三カ月だったわ…………。

「どつしたんだ?」

「何でも無いわ」

振り返つたら少し黄昏てしまったらしい。

心配したのか弾が尋ねてきた。

まあ、答えられる訳無いので誤魔化すけど。

「弾! くっ喋ってないで席に案内しろ!」

と、蔵さんの怒声と杓文字が飛び弾に直撃。

かなり痛かったらしい弾はうずくまったかと思えばがばつと立ち上がり、敵さんに怒鳴り返した後、あたしたちを席に案内して自分も向かい側に座った。

「で、どうなんだ？　一夏の学園生活は」

詳しく聞かせると言わんばかりの弾にあたしは周囲の人間関係を思い浮かべてみた。

「んーと、担任が千冬さんでしょ。廻りによくいるのは箒にセシリアにラウラにシャルロットに　ああ、あとは空と簪か。」

ひいふうみ、と指を折りながら名前を挙げてみる。

「な、七人も困ってるだど！？　こうしちゃいれん。ちょっと待ってろ！」

『異端審問じゃあ！』とか吼えながら奥へと去ってゆく弾。

ぼかーんとした一夏の横顔にあたしは溜め息をついた。

この無自覚タラシの朴念神め。

程なくして弾は妹の蘭を連れて戻ってきて、さらにその少し後に呼び出した中学時代の友人（悪友？）である御手洗数馬が合流。

昼食を取り終えた後、弾と数馬が詰問し一夏が誤魔化そうとしてあたしが答え、二人に絞められかける。

そんな様子を蘭が目輝かせて見つめるという中々にカオスな空間

が出来上がった。

『一夏と二人つきり』では無かったけどまあ、久しぶりに会った友人たちとの時間もけっこういいものだって思った。

「あ、そうそう。弾、例の物はちゃんと取ってあるよな？」

「ん？ ああ、当然だろ。今出す」

唐突にじゃれ合っていた一夏が弾になにやら言っただけで弾は奥に戻ってゆき、程なくして嚴重に梱包された包みを持ってきた。

何よアレ！なんであんなに中身が見えないくらいに嚴重なの？

ま、まさか、あたしが居るのについていうか店で『検閲削除』なシロモノのやりとりをする気ッ！？

少しは配慮というか、あたしの事も考えろ！

とか思っていたら、

「ほれ」

「へ？」

あたしの前にそこそこに大きな包みが差し出された。

「開けてみるよ。きつとびっくりするぜ」

何が飛び出してくるのか、不安に想いながら包みをそつと開いてみる。

そこにあっただのは

「あ……………」

あたしと、一夏と、弾と、数馬と
みんなと過ごした中学校の
卒業アルバムがそこに有った。

「懐かしいだろ。開けてみるよ」

弾に促されてページをめくる。

開けて一ページめ。

本来ならば空白の表紙裏に『これでもか』と言つくらいに色とりどりのペンでいろいろと書き込まれていた。

全て、『鳳さんへ』とか『鈴音へ』とかから始まる
あたし宛のメッセージが。

「これって……………」

「お前の分の卒業アルバムだよ」

あたしの？

「で、でも、あたしは三年生になる前に転校したのよ？」

普通、転校した人の分なんて用意されるはずが

「ああ。本来ならば用意されないハズのシロモノだ」

数馬がうんうん、と頷きながら言ってきた。

なら、何故？

「なんというか、編集長が頑張った結果ってヤツか。な、一夏」

えっと、どういう事？

あたしは答えを求めて一夏に視線を向ける。

すると、

「俺は別に何もしてないぞ」

とそっけなく視線を外してきた一夏。

「はいはい。そうだったな。校長とPTA会長を説得して、転校していった連中の分の用意と寄せ書きの手配をして送り届けた以外は何もして無かったよな、編集長」

「……………うつせえ。あと、ちゃんと編集長の仕事はしたぞ」

バツが悪そうに呟く一夏。

不意に、寄せ書きのメッセージがぐにやりと歪んだ。

あれ、おかしいな。

物凄く、目じりが熱い。

袖が無いから手の甲で「しし」と目をこするけど、ちっとも治りやしない。

あたしの涙腺、こんなに緩かったっけ？

泣きだしそうになるのを必死になって我慢する。

けど

「おい、五反田。いきなり『五反田食堂に集合』って何事
っ
て、鳳^{ファン}!？」

「あ、鈴ちゃん、久しぶり〜！いつこっちに来てたの!？」

続々と集まってくる元クラスメイトたち。

「お、懐かしいな卒業アルバム」

「ああ、織斑君が暗躍しまくったアレね」

「そっぴやIS学園に通ってるんだってな。……………一夏、今すぐ爆
発しろ」

昼時を過ぎて閑散としていた店の中があっという間に埋まってゆく。

まるで、あの頃の教室のような喧騒。

懐かしさと、嬉しさがあたしに止めをさしてくれた。

「ッ！」

頬を伝う、熱い涙。

もう、泣かすにはられない。

「ああ、言い忘れてた。

『おかえり』」

「ただいま！」

泣き笑いのあたしを『またね』と別れたかつての仲間たちはそうそ
クラスメイト
う変わらない、けど少しばかり大人びた笑顔で迎えてくれた。

「よし、まずはIS学園での一夏の所業についての審問から始め
るとしようか。鳳審問官、罪状を全て読みあげてくれ」

「ちょ!?!」

「ええ。判ったわ！」

なし崩し的に始まったクラス会は厳さんに怒られて追い出されるま
で楽しく騒がしく続けられたのだった。

5 6 : 優しい『悪戯』 (後書き)

最初のは単なるフラグ立てですよ。ええ。
特に意味はありません。

5 6 では。

#57：未知との遭遇（前書き）

お待たせしました。

ちよつとばかりクオリティが低いかもしれませんが、鈴&セシリア
編はこんなオチになりましたよ〜と。

#57：未知との遭遇

「side…」

「ううん………」

セシリアは唸っていた。

鈴と一夏の後をつけてきたは良いのだが、日本ではよくある住宅街の中に迷い込み右往左往していた。

……ぶっちゃけてしまえば土地勘の全くない場所に迷い込んで、そのまま迷子になったのだ。

「困りましたわね」

携帯電話は運悪く電池切れ、ISのネットワークを使えば連絡を取れるものの本国と学園から大目玉。

何よりもセシリアの僅かながらに残っているプライドが『迷子になったから助けて』とISを使ってまでして助けを求める事に抵抗している。

まあ、そんな事したら本当に唯ごとじゃ済まないので最後の手段もいいところだが。

そのまま、当てもなくふらふらと歩きまわる事幾星霜

「………しかたありませんわ。最寄りの駅までの道をどこかで訊く

事にしましょう」

とはいえ、道行く人の姿は無い。

となれば、どこかの家の人に尋ねるほがなく、セシリアは手近にあった一軒の（セシリア基準では）こじんまりとした、『榎村』という表札のかかった民家を選んでインターホンを押した。

すぐにとつとつとつ、と足音がだんだんと近づいて来た。

こほんこほん、と喉の調子を整えて、ドアが開くと同時、

「すみませんが最寄駅までの道を」

「おう、セシリア。どうしたんだ、迷子か？」

「え？」

思わず固まったセシリアはきつと悪くない。

悪いとすればきつと間が悪かったのだろう。

応対に出てきたのは、一夏だった。

（な、な、な、なんで一夏さんが！？）

「表札には榎村とありましたのに、何故に一夏さんが？」

「ああ、ここはアキ兄ん家だったんだよ。行方知れずになってから俺たち姉弟が使わせてもらってるけど。確かポストのそこには

『織斑』って書いてあったと思うけど？」

「み、見落としてたようですね」

「まあ、とりあえず上がってけよ。冷たい飲み物くらいは出すぞ」

「
！」

何の用意も考えも無くふらふらと出てきてしまったセシリアからすれば二つ以上の意味で嬉しい申し出だった。

一つ目は喉の渇きと疲れを癒せそうであること。

二つ目は学園まで帰る時の道案内を見つけたこと。

三つ目は 彼の誰も上がった事の無いであろう一夏の家に上がれること。

まあ、時間を遡ってみれば幕は引越前によく入りびたっていたし、鈴に至っては現在進行形でいるのでセシリアの早合点なのだから。

「そ、それではお邪魔しますわ」

(ふふっ、これで一歩リードですね)

浮かれるセシリア。

だが、現実はそう甘くは無い。

「おい、鈴。セシリアが来たぞ」

「えっ？」

「はあっ!?!」

玄関からリビングへ繋がる廊下で二人の視線がぶつかった。

* * *

「で、何で来たのよ」

「鈴さんこそ、なんで居るんですの?」

弾と数馬、セシリアの三人の間の紹介が終わった後、その険悪な雰囲気は唐突にやってきた。

ちよつど一夏が『夕飯の支度を始める』と言ってリビングを出て行ったのをきっかけに。

「…何、この修羅場」

「…だいたい一夏のせい、ってのは確実なんだけどな」

弾と数馬は部屋の片隅で二人が放つプレッシャーに冷や汗をかきながら呟き合う。

「あたしは一夏に誘われて中学時代の友達に会いに行ったのよ。で、そのままの流れで織斑^{オリハ}家に来たの。あんたこそ、どうしてこんなトコに来たのよ。駅前からも遠いし特にめばしい施設は無いつて言っのじ。」

鈴の攻撃。

確かにこのあたりは住宅地で最近では珍しくなっているが何処にもあるような商店街と住宅地が広がっている他はコレと言って商業施設も博物館みたいな施設も殆どない。

そんな場所に何故居る、と鈴は攻める。

「そ、それは」

対するセシリアは『出掛ける一夏と鈴を見かけたから後をつけていた』とは流石に言えず答えに困る。

「ま、どうせあたしらが外出するのが見えたから後をつけてたんでしょうけど」

「うぐっ!?!」

(な、何故にバレてますの!?!)

正解を言い当てられてうるたえるセシリア。

その様子を見て鈴は自分の言った答えが正解であった事を確信する。

「臨海学校の前に一夏がシャルロットと買い物に行った時だって後を追ったじゃない。一度やったら二度目を疑うわよ」

「そんな、人をストーカーみたいに言わないでくださいます」

「だって、事実じゃない」

修羅場というか『痴話喧嘩の似たようなヤツ』についていくのが馬鹿馬鹿しくなった弾と数馬は、

『一夏って愛されてるな』とか言いながらコントローラーを手に取

る。

プレイするソフトは当然の如く『インフィニット・ストラトス
ヴァースト・スカイ2』なのだが……

「さて、協力プレイでもやるとするか。」

「そうだな。」

我関せず、とゲームを始める二人だったが、不運はそこに有った。

「んーと、相手は『飛龍』と『タイフーン』か。」

よりによって、と言っべきだろうか。

長い時間プレイし、強化を繰り返した二人の愛機の前でデフォル
トのCPU操作機はいとも簡単に堕ちてゆく。

そう、イギリス製第二世代型『タイフーン』と中国製第二世代型『
飛龍』が。

鈴はいい。

中学時代に一度盛大に騒ぎ、喧嘩し、弾の駆る打鉄ベースの機体を
ゲーム環境を一夏から接收して鍛え上げた飛龍フェイロンで接戦の末に打ち負
かして和解している。

だが、問題はセシリアの方にある。

これはゲームと割り切って考えても自国の機体がボコボコにやられ

て行く姿は見て居られなかったのだ。

「な、なんですの！我がイギリスの第二世代型はこんなタイフーンに弱くはありませんわ！」

いつの間にか、鈴とセシリアの険悪な雰囲気は霧散していた。

というか、セシリアの関心が画面上で機能停止したタイフーンに向けられた事で終了になっていた。

「このゲーム、プレイヤー相手だったら殆どが弱いわよ。まあ、やってみるのが一番じゃない？ ほら、弾。ちよっと代わってやってよ」

「ん、まあいいが……とりあえずはチュートリアルからだな」

「その辺は任せるわ」

あれよあれよといううちにコントローラーを渡され、画面の前にセシリアが押し込まれチュートリアルモードが始まる。

「とりあえず機体はタイフーンにしといたぞ。」

「ええと、このボタンで……」

気付けば、和気藹々とした雰囲気タイフーンに包まれていた。

そして、ある程度操作に慣れてきた処で

「それじゃ、まずは」

鈴がきしし、と悪い笑みを浮かべて敵の設定を済ませる。

セシリアもタイフーンに装備させる武装を決定して画面がバトルフィールドに変わり

『ready、Go!』

開始と同時に桜色のナニカが突っ込んできて一撃のもとにタイフーンを斬り伏せていた。

「、あ」

間の抜けたセシリアの声。

弾と数馬は『あー、』と困惑の表情を浮かべ、鈴は爆笑しないように必死になって堪えていた。

「な、なんなんですよ、アレは！」

「このゲームの唯一のプレイヤーキラー、隠しボスの『暮桜』よ。

コマンド入力に合わせてフレーム単位の隙をついてカウンター入
れてきたり、今みたいに開始と同時の連打イグニッション・ブーストダッシュで急接近した上
にガード無視攻撃入ってくる鬼畜設定のAIを積んでるわ。ただし
射撃兵装一切無し」

「な」

「安心していいわよ。あたしが知る限りじゃ勝った人見た事無いか

「ら

「び、初心者相手に酷過ぎますわ!」

「次はちゃんと勝てる相手にしてあげるわよ。ほら、『飛龍』よ。」

「……また、とんでもない設定になんてなっていませんよね?」

「ちゃんとデフォルトのままよ」

「…本当ですわね?」

「本当に何もしてないわよ。ほら、始まるわよ」

「くっ…何かあつたら酷いですわよ」

とはいえ、ちゃんとデフォルト設定の機体に最弱設定のNPCならばビギナーのセシリアでもシールドゲージを半分消費するくらいでなんとか勝つ事は出来たのだった。

……普段、実機を動かしている故のクセか回避の時に体がピクピク動いていたりして見てる三人の笑いも誘ったりしていたが。

「よし、それじゃあベテランの実力をみせてあげましょ。弾、デフォルトの打鉄であたしに付き合いなさい」

「りょーかい。そんじゃあ数馬は向こうのチームな。当然デフォルト機で」

「わかった。 そんじゃあ、頑張るとしますか」

そして、打鉄&タイフーンVS打鉄&飛龍という戦いが始まること
していた。

- - -

「あの様子だと、セシリアもハマったんだろうな」

鈴、弾、数馬の三人と仲良くゲームをやっているセシリアの姿をちらりと見て一夏は呟く。

勝てば楽しそうに再戦^{リベンジ}を受けて立ち、負ければ悔しそうに再戦^{リベンジ}を申し込む。

そんな無限ループを形成し楽しげに騒ぐ四人を見て一夏はふと思う。

ちゃんとセシリアと仲良くやってくれてるみたいだな…と。

「……………これって子供の友達が遊びに来てる家の親の気持ちに似てるよな……………」

そんな事言っても今更だが。

「……………うん、気のせいだ。さて仕上げに取りかかるるか」

現実逃避先となった夕飯のクオリティが上がる事が確定した瞬間だった。

それから程なくして対戦に熱中する四人に夕飯にするから、と中断を命じテーブルにつかせる。

その日の夕飯はトマトの冷製パスタ。

一夏が千冬のトマト嫌いを直す為にアキトから教わったメニューの一つだった。

夕食後、片付けを終えた一夏は受話器を取りとある番号を押す。

「あ、もしもし一年一組の織斑です。ちょっと帰れそうになるので外泊申請したいんですけど…。はい、一組のセシリア・オルコットと、二組の鳳鈴音もお願いします」

学園への外泊申請の為に。

そんな電話をする一夏の視線の先では戦闘再開と相成った四人組が居た。

「はい、お願いします。」

かちゃ、と受話器を置いてから再び取り上げ次の家へ。

「あ、五反田さんのお宅でしょうか。おお、蘭か。弾はウチに泊ってくみたいだからその事をな。ああ、厳さんにも伝えておいてくれるか？ 頼むな。」

と、同じ事を数馬の家にも行い漸く一夏は『はあ』と溜め息をつく。

(俺はあいつらの保護者じゃねえぞ！)
飲み込んだ、『叫びたい気持ち』を吐きだす為に。

後日、この一件で鈴とセシリアが幕ほかの一夏Loversの面々に羨ましがられる事となるのだが些末な事である。

泊ったと言っても一晩中戦って戦って、戦い抜いたのだから。

翌朝残っていたのは寝不足で目の下が大変な事になっている面々、

「うーん、やはり高機動ミサイルは欠かせませんがコストが高いのが難点ですわね……………」となるとサブマシンガン辺りが妥当でしょうか……………」

そして一人の廃人候補の誕生であった。

そして、それから毎晩のように寮の一室で電子的な戦闘音が鳴り続ける

#57：未知との遭遇（後書き）

蛇足説明

「インフィニット・ストラトス ヴァースト・スカイ2」

原作で出てきた（恐らく）アクションゲームの続編。

榎篠技研監修の元、全ての機体のデータを正確に測定しスペックをデータ化した事により『実際の性能』が再現されていたりする。

最大の特徴は『ISエディット』で素体に好きな装甲と武装を取りつけて組み上げ、その機体を使って対戦やアーケードができる。裏ボスの『暮桜』はフレームレベルの隙についてカウンターを入れたり、開始同時の速攻防御無視攻撃を叩きこんでくるといふ鬼畜設定。

それでもきつと現物（千冬＋暮桜）よりは優しいであろう設定になっている。

『武装神姫』あたりをイメージしてくれればいいのかも。

「トマトの冷製パスタ」

千冬さんはトマトもダメでした。

それを矯正する為の一品。めんつゆや鰹だしなどを使い和風に仕上げられている。

-
-
-

学園パートではちょっとばかり大人びたセシリアさん。

折角なので中身をちょっとばかり子供っぽくしてみたら一気に廃人

化の道をたどってくれました。

でも、これの方が可愛げがあっただけいいかもなあ…と思ったのでそのまま採用に。

今回の時系列は

- 1．鈴と一夏、出掛ける。 セシリア、後を追う
 - 2．鈴と一夏、五反田食堂に着く。 セシリア二人を見失ってうろ
 - 3．鈴と一夏と弾と数馬、一夏の家に移動する。 セシリア、うろ
 - 4．セシリア、榎村家（織斑家）に突。
- って感じになってます。
- 公式イベントは残すところあと二つ。
- そっちは原作というテンプレートがあるので多少は楽に行けそうです。

…大学で中間決算の書類提出待ちしなきゃならなくて時間持てあましそうだし。

説明にも出したけど、友達から進められた『武装神姫』、見て思った事

『まんまISやん』

どっちが先なのかは知らないけどさ。

58 : 真夏の日の宵 (前書き)

お待たせしました！

原作準拠の夏休み編第三弾、ようやくの完成です！

#58：真夏の日の宵

「side：箒」

八月の半ば。

世間が盆休みを迎えた頃。

私は『とある神社』を訪れていた。

まあ、『とある神社』と言っても大層なものではない。

『篠ノ之神社』

私の生家であり、転校する前の家であり、一夏と千冬さんと姉さんと アキトさんの思い出の詰まった場所だ。

…………… 本当に、変わってない。

板張りの剣道場は今でも昔のままだった。

聞くところによると定年退職した警察官の方が善意で剣道教室を開いてくれているらしい。

「今では、結構な人数がいるのだな」

壁の木製名札を眺めながら少しばかり昔に想いを馳せる。

昔は私と千冬さんと一夏、それにアキトさんだけだった。

アキトさんと千冬さんは私などとは隔絶した実力を持っていたから、歳の近い対等な相手は一夏だけ。

そんな一夏も気付いた時には私よりも強くなっていた。

『今日こそ勝つ!』

『受けて立つぜ!』

- - -

『ぐぬぬぬ……』

『すげーな。また強くなった』

『お前に勝てんのでは無意味だっ!』

『おう、それじゃあまた明日だな』

- - -

そしてようやくの事で勝ったらその数日後にはさらに強くなった一夏に負けて……

生徒手帳を取り出しそこにはさんである写真をそつと覗く。

剣道着を着た私と一夏。

道場の全員で写真を撮った後に撮ってもらった、二人だけで写っている思い出の写真だ。

「篝ちゃん、ここにいたの」

「あ、はい」

後ろから声を掛けられて私は手帳をポケットに押し込み振り向く。

そこに居たのは四十代後半、落ち着いた物腰で柔らかな笑みを浮かべた女性　私の叔母である雪子さんだった。

私たち一家がここを離れなくてはならなくなった後の神社の管理を受け継いでくれている。

「懐かしくてつい……すみません、雪子叔母さん」

「あら、いいのよ。元々住んでいた処だもの。誰だって懐かしくて見て回るわよ」

うふふ、と微笑む姿には唯の一つの裏も無く、純粹に楽しそうな顔だった。

昔から私が悪い事をして雪子叔母さんにだけは叱られた事がなかった。

父さんやアキトさんからは盛大に怒られるのだが……
それでも二人も『必要だと判断した時』以外は叱りつける事は無かった。

「それにしてもよかつたの？　夏祭りのお手伝いなんてして」

「め、迷惑でしょうか？」

「そんな事無いわよ。大歓迎だわ。でも篝ちゃん、折角の夏祭りなんだから、誘いたい男の子の一人もいるんじゃないの？」

「そ、そんなことは……」

一夏の姿が脳裏に浮かんできて思わず顔が赤くなる。

だが、誘ってない。

『他の誰か』と来るかもしれないのが、怖いから。

それがたとえ、恋愛感情を抜きにした『善意』だけのモノだとしても。

だから、誘えなかった。

「まあ、折角だから厚意に甘えましょうか。六時から神楽舞だから、今のうちにお風呂に入って頂戴ね」

意味深な、どこか納得したような笑みを浮かべた雪子叔母さん。

「はい」

なんだろうか。

あの笑顔はどこか見覚えがあるような……

そう、アレは姉さんが『皆まで言うな』と言わんばかりの時の笑顔に似てる気が……

まあ…親族なのだから似ているのも当然だが……

そんな事よりも今は神楽舞の事を考えなくては。

とにかく楔ぎを済ませてしまおう。

……この家の風呂も久しぶりだな。

思い出に浸り、つい長風呂をしてしまったがそれ以外には特に問題も無く、私は神楽を舞う舞台に立った。

心を無にして、舞う。

気がついた時には舞を終え舞台を降りていた。

* * *

「よっ、おつかれ」

「

突然の事態に、私は思わず思考停止フリーズしてしまった。

いや、散々させられた戦闘訓練で思考停止しても頭のどこかが動き続けるようになったらしくどうしてかここ数十分の行動を振りかえっている自分が居る。

当然のことながら、この状況の原因に繋がるような事は一つも出てこないのだが。

「いいいいい、一夏ッ!？」

「そんなに驚く事か？」

甚平を着た一夏が、そこに居た。

ううむ……やはり一夏には和服が似合うな。

じゃなくて！

「今の巫女姿も似合ってるけど、神楽舞の方は別格だった。うん。なんつーか、うまく言い表せないけど」

「あ、う……」

「うん、月並みだけど……綺麗だった」

「きききききき」

『綺麗だった』

その言葉が脳裏でやまびこのように繰り返され、思わず顔が赤くなる。

なんでこんな時に限って誰もお守りを買いに来ないのだろうか。

来てくれれば『巫女としての役割』に没頭できるのに。

「あ、織斑センサー！」

びくっ！

千冬さん！？

「おう。お前ら、元気してたか」

……ん？

「一夏。なんでお前が『織斑先生』と呼ばれているんだ？」

「ん？ ああ、ここの道場でやってる剣道教室に顔出した時は指導の手伝いしてるんだよ。」

初耳なのだが…

「まあ、その辺は後でもいいだろ。雪子小母さん、箸を借りてっていいですか？」

「じゃあちよつと待っててね。」

「了解つす。」

ぐい、と背中を押された

「え、え、へ！？」

雪子叔母さん、何時の間に私の背後に！？

「ほらほら、早く早く」

「え、あ、ちよつと」

「あんまり待たせちゃつのも悪いでしょ。ほらほら」

「それじゃ、俺は鳥居の辺りで待ってるぞ」

そのまま私は雪子叔母さんに母屋へと押し込まれる事になってしまった。

……『綺麗』……か。

#59：真夏の夜の、刹那の夢

「side：箒」

ちよつと汗を流すだけのハズが三十分も悶々としてしまった。

雪子叔母さんに手伝ってもらってもあれから一時間が経ってしまった。

呆れられないだろうか、それとも帰ってしまったているかもしれない……

約束の場所 神社の鳥居の所に向かうが、そこは祭りにやってきた人でごった返して立ち止まるだけで邪魔になってしまいそうな状態になっていた。

ううむ……いくら一夏が長身な部類に入るとはいえこの状況では見つけるのは難しいぞ。

それに、待たせ過ぎて帰ってしまったというのもあり得る。

…どうするべきか。

それから暫しうろついてみるけれど、中々見つからない。

これは、もしかや……

「待たせ過ぎた…のか…」

これだけ探して居ないのだ。
きつと愛想を尽かして帰ってしまったに違いな

「おー、居たいた。悪かったな。待ち合わせ場所に居なくて」

急に手を掴まれ、振り返ったらそこに一夏が居た。

「さて、この人ごみから脱出するでしょう。こっちだ」

「あ、ああ」

勝手知ったる何とやら。

一夏はすすいと私の手を引きながら人ごみの中をぬって奥へと進んでゆく。

そこで、私は一夏に手を握られている事に気がついた。

……………気がついてしまった。

気がついてしまったが最後、意識してしまう。

意識してしまうと、唐突に顔が熱くなる。

落ちつけ、私。

今更、手をつないだ位で舞い上がるな。

「よし、この辺まで来れば大丈夫だろ」

程なくして、縁日の出店から少し離れた、人の少ない場所に私たちは辿り着いた。

とはいえ、なんとか立ち止まれる程度なのだが。

「悪かったな。剣道教室の子供連中に捕まっちゃまってさ」

「そう、だったのか」

安堵、なのだろう。

気がついたら少しばかり頬が緩んでいた。

…だが、折角の祭りで、折角の二人きりだ。

こんな時まで顰め面をしている必要もあるまい。

「それにしても」

まじまじと私の事を眺めてくる一夏。

少々どころでは無く恥ずかしくて思わず身を抱いて隠す。

あ、あんまりジロジロ見るな、馬鹿。

「ホント、似合ってるな。」

「う」

やっぱり、面と向かって言われると嬉しいけど、恥ずかしい。

「い、一夏も、似合ってるぞ」

「そうか？」

「ああ。」

やはり、和服の一夏は様になる。
朧着然り、甚平然り。
きつと浴衣や紋付袴も似合うだろう。

「……………」
「……………」

ふと、会話が止まった。
視線が交差し、なんとなく見つめ合う。

居心地の悪い、それでもってなんだか心地よい沈黙。

まるで、お互いに言葉無しで判り合えているかのような錯覚に陥る。

「そ、それじゃあ、行くとするか！」

居心地の悪さが勝つたらしい一夏がそう、視線を外しながら言ってくる。

「ああ、そうだな」

ふとその横顔に紅が差している事に気付いた私はクスリと笑みを浮かべ、『ぐい』と手を引く一夏に続いて歩き始めた。

* * *

気がつけば花火の開始時間が目前に迫っていた。

色々と屋台を廻り、遊び、食べ、飲み、時には冷やかした。

飲み物を賭けた金魚すくい勝負（結果は引き分けでその後に買ったラムネは一夏が奢ってくれた）をしてみたり、モノは試しで射的（私は何も落とせなかったが一夏が落とした一頭身ペンギンのぬいぐるみをくれた）をやってみたり。

途中、小学校時代の知人に遭遇してからかわれたりもしたが、この地を離れて久しい私としては嬉しくもあった。

そんなこんなで久々の生家の夏祭りを満喫した私と一夏は神社の境内の奥にある針葉樹林の中へと入って行った。

その林を抜けた先に一角だけ天窓のように開けた場所がある。

春の朝焼け、夏の花火、秋の満月、冬の雪。

四季折々の美しい景色を見せてくれる秘密の場所だ。

なんでも、アキトさんが千冬さんと姉さんの三人で境内探検をした時に見つけた場所らしい。

そしてその場所の事を知っているのは見つけたその三人と私と一夏。その五人だけだ。

「変わって無いな。 二つも」

「ん、そうか？ ああ、そういえば筈はここに来るの六年ぶりだっ

たな。」

虫の音色と、時折吹く風に木々が揺れる音。
祭りの喧騒すら遠く離れた、六年ぶりのこの『秘密の場所』に立つて私は過去を思い出す。

「昔は五人でここから花火を見上げたっけな」

「その帰りに寝てしまった一夏をアキトさんが抱えて帰った事もあったな」

「……………俺の記憶に間違いがないなら寝た筈を背負って帰った事もあったぞ」

「昔の事だ」

バツが悪そうにする一夏に私はしれっと返す。

「あの」

「いち」

サアアアアアア

風に揺られた木々の音。

互いに言葉の出端をくじかれる形になって言葉を飲みこみ、黙る。

丁度、花火の開始時刻直前である事もあって、私たちは黙ったまま夜空を見上げる。

「……………」

月明かりに照らされ、人気も喧騒も遠く、完全なる、二人きり。

その情景がまるで臨海学校の『あの夜』の情景の焼直しに見えて思わず赤面する。

慌ててその妄想に近いソレを頭から追い出す為に私は、

「一夏」

「ん、どうした？」

「今日は、何で一人で来たんだ？」

「一人で来ちゃダメか？」

一番気になっていた事を、無意識のうちに尋ねてしまっていた。

「そんな事はないが……セシリアや鈴、ラウラにシャルロット。幾らでも『一緒に来る相手』は居るではないか」

「まあ、それもそうなんだけど」

「だったら。何故」

何故、私を選んだのか。

その問を一夏にぶつけようとした時、丁度一発目の花火が空に輝いた。

「始まったな」

「……………」

私は黙るしかなかった。

この花火大会は百連発で有名。

一度始めれば一時間は止まらない。

当然、音も。

私は問い詰めるのを諦めて一緒に空を見上げる。

パツ、パパツ、と花火がまたたく。

そのたびに少し離れた場所から歓声が上がリ、それに応えるかのよう
に次の花火が打ちあがってゆく。

「お前は、誰が好きなんだ。一夏」

きつと花火の音にまぎれて掻き消されてしまつてあつてあるつ。

「なあ、篤」

そう思つて呟いたら花火の音に負け微かに聞こえる程度の声が返つて来た。

「……………なんだ、一夏」

「俺さ、ずっと昔から気になってた娘が居るんだ」

「なっ!?!」

突然、何を言い出すんだ？

「けど、『特別』になるまでは行けない。行けなかった。」

「……………何故だ？」

「……………怖いんだ。喪つのが。だから、俺は強くなる。守りたいモノを守るように。だから……………」

そう言った一夏の背中は何んだか大きく見えた。

何時の日にか見た、アキトさんの様な……………。

私は黙って一夏の隣に立ち、そっと腕をからめる。

「……………判った。その答えを聴ける日を待ってる」

「……………ああ」

それから、私も一夏も黙って空を見上げ続ける。

煌々と月が輝く空にまた、大輪の花が咲いた。

【おまけ】
-
-
-
-
-

ひゅるるるる

どーおーん

「おお！　これが日本の”花火”か」

『黒地に月を見上げる兎』という、なんとも『らしい』浴衣に頭には狐のお面、右手に綿菓子、左手に水風船という完全装備のラウラが興奮を露わに歓声をあげた。

「ラウラ、あんまりはしゃいでると廻りの人の邪魔になるわよ」

そう、鈴がラウラを窘める。

「う、うむ、気をつける」

言われて気付いたのかラウラはちょっと慌て気味だった。

「にしても、この神社の夏祭りは相変わらず人が多いわね」

「む？　鈴は何度か来た事があるのか？」

「まあ、ね。…こつちに暮らしてた頃は毎年来てたわ。」

毎年のように祭りに参加する一夏に連れられて、だが。

「だから、今日夏祭りがあると知っていたのか」

「そんなとこよ。　ラウラは何処で知ったの？」

「うむ、嫁が筭と話しているのを聞かせてもらった。本当は母様を

誘うつもりだったのだが…」

「まあ…あの状態じゃ来れないわよね」

鈴は出る前の空の様子を思い返す。

………千冬が休暇を取るための仕事天国デスマーチに真耶同様に巻き込まれて大変な事になっていた。

それでも、ラウラが『夏祭りに行きたい』と言った途端にあれこれ手配して浴衣とかを用意したりはしたのだが。

「ま、何かお土産でも買ってって、話してあげれば良いんじゃないの？」

「うむ。」

丁度、その時だった。

「おう、鈴じゃないか」

「あ、弾。それに蘭？」

「こんばんは」

挨拶を交わす中、ただ一人面識の無いラウラは鈴に尋ねる。

「…鈴。この二人は？」

「ああ、あたしや一夏の中学時代の親友ともだちとその妹。こっちが五反田弾で向こうは五反田蘭。」

「ふむ。嫁の友とその妹か。
ろしく頼む」

ラウラ・ボーデヴィツヒだ。よ

「…嫁？」

一瞬、弾と蘭は固まった。

が、聞かなかつた事にして先に進める事にした。

「ま、まあ。よろしく頼む」

軽い自己紹介の後に四人組となつた一団は地元民であり祭り参加の先輩に当たる弾と鈴の先導で境内内の比較的人の少ない、花火を見易い場所に移動してから空を彩る刹那の華を見上げるのだつた。

時折、『お』とか『おおー』とかの歓声を上げるラウラとそんな様子を微笑ましげに眺める三人という構図が出来上がるまでそれほど時間はかからなかつたが。

(来年は、一夏と

鈴は、空に咲く大輪の花々はなびを見上げながら心の中で呟いた。

59 : 真夏の夜の、刹那の夢（後書き）

基本方針は『一夏×箒』になってますんでかなり優遇されています。

今の所、ヒロイン的な意味では箒と鈴がツートップに立っています。

作者的には『これでよし』、一個人としては『爆ぜろ』ですけど。

#60：恋に騒がす五重奏 「来訪編」(前書き)

大変お待たせしました。

原作準拠の夏休み編最後の話です

#60：恋に騒がす五重奏 「来訪編」

「side：一夏」

夏休みも残り少なくなった盆明け間も無いその日、俺は墓参りに来ていた。

正確には、俺と篤と雪子小母さんの三人で、だ。

墓石とその周りを軽くだが掃除し、用意した花と線香を手向ける。

カナカナカナ……………

「……………」

少し離れた処にある広葉樹林から聞こえてくるヒグラシの鳴き声。俺たちは黙って手を合わせ暫し佇む。

『槇村家之墓』と彫られた墓石に向かって。

何故、俺たちがそんな場所に来ていたのか。

それは今日がアキ兄の親父さんの命日だから。

俺たちは絶対に『アキ兄の命日とされている日』には来ない。

あのアキ兄の事だから、きつとどこかで生きているだろう。

そう信じているから、せめてもの無事を会った事も無いアキ兄の両親に祈ってる。

……………正直言つて、不安が無い訳じゃない。

本当に死んでしまっているかもしれないという思いは拭いきれないけど生きているって信じ続けても居る。

長くも短くも無い、黙祷を捧げるには十分な時間が過ぎたところで合わせていた手を離す。

「それでは、また来ます」

声をかけてから、俺たちはその場を後にする。

来年は、アキ兄と来れば良いんだけど……

そう、想いながら。

* * *

「side…シャルロット」

「1111で、あつてる……よね……」

僕はドキドキとしながらその表札と住所表記を見つめる。

鈴から聞きだした住所と、『榎村』と書かれた表札を何度も確かめながら深呼吸を繰り返す。

もちろん、郵便受けの所に『織斑』と追記されているのも確認済み。

大丈夫、大丈夫。さっきメールで確かめた時は家に居るって
いってたし、あの一夏の事だから迷惑がったりしない……………
ハズ。

ええと、こう言う時はなんて言えばいいのかな。

『本日はお日柄もよく』…？はなんか違うし……

インターホンのボタンを押しそうになってはなんて言えばいいのか
判らなくて手を引っ込めを繰り返していたら、

ぼち「あ」

『ピンポーン』

なんて言うのかも、覚悟も準備も全くできていなかったのにインター
ホンを押してしまった。

どうしよどうしよ出てきたらなんて言えば良いんだろああ足音が近づいてくる!?!?!?!?!?

無慈悲にもガチャン、という音と共に鍵が開けられて

「ええとあの、本日はお日柄もよく　　じゃなくて、」

恥ずかしさに顔が上げられず、パニックに陥った僕の頭の中では何かいい言葉は無いかとSDシャルロットちいさいほく総勢二五六人が大慌てで頭の中の語彙録を検索する。

「き、来ちゃった」

顔を上げて『えへ』なんて気の抜けた笑みを添えて　　言った後、とてつもない後悔をした。

う、うわあああ、ぼ、僕の馬鹿あ!

「　　...?」

ふと、気付いた。

一夏って、こんな髪長かったっけ?

それに一夏の髪ってこんなつややかな漆黒じゃなくてちょっと青みがかつてるような感じの黒だったハズだし、夏の日差しに眩しい白いYシャツの胸の部分の膨らみは僕なんかよりもずっと大きいし、それに顔つきからして完全に別人というかこれって……

「あー、まあ…なんだ。一夏は少々買い物に出てる。とりあえず上がって待っていてくれ。もうすぐ帰ってくるハズだ。」

「
何で、箒が一夏の家に住るの？」

しかも、朝見た時と服装違うし、髪とかなんか湿気てるしこれじゃまるでシャワーから出てきたばかりみたいじゃないか。

そういえば朝に出かける時も一夏と一緒にだった。

一緒に出かけて行って、箒はシャワー後これってもしかして、まさかの事後！？

「ええと、シャルロット？」

ううん、そんな事あの一夏に限って…

でも、夏は人を積極的にするって言っし、一夏はなんか最近箒と仲いいみたいだし、ああもう訳が分からないよ。

「おーい」

ハッ！？

「大丈夫か？」

訝しむような憐れむような、なんかいろんな成分の混ざった視線を向けてくる箒。

やめて、そんなイタイ子を見る目で見ないで！

「だ、大丈夫！それじゃあお言葉に甘えて」

ええい、こうなったら出たとこ勝負！

「おじゃましまーす！」

敷居を跨ぐと、なんとというか無条件に安心感を与えるような不思議な匂いがしているような気がした。

…そういえば僕、男の子の家上がるのって初めてだ。

ふと思い出して少しばかり心拍数が上がり始める。

何の事は無く『勝手知ったるなんとやら』な筈が少しばかり恨めしいけど。

キョロキョロと辺りを見回す。

結構な年数使われたような『深み』みたいなモノがあるのにあまり痛んでない事にちょっと驚いた。

あと、インターホンじゃなくて呼び鈴だった事も。

程なくして…というか、廊下の突き当たりのドアの先がリビングだった。

その奥にはダイニングキッチンがあるから、リビングとダイニング

キッチンが一緒になってると言えない事も無い。

「そのこのソファーに掛けていてくれ。今、茶を出す」

「あ、うん、ありがとう」

「何、気にするな」

手慣れた様子で食器棚やら戸棚やらを開けては何かを出してゆく筈。

なんだろ、この敗北感。

「そういえばさ、筈」

「ん、なんだ？」

「一夏と一緒に出かけたみたいだけど、何か有ったの？」

「……………ああ。」

僕の問題に少しばかり遅れて返事が返ってくる。

その様子はまるで言うべきか躊躇っているみたいに。

「今日は……………アキト兄さんの父上の命日なんだ。」

「もしかして、お墓参りに？」

「ああ。転校して以来、来る事が出来なかったからな」

「そう、なんだ」

それを区切りに僕たちの間に沈黙が横たわる。

その状態は一夏が帰ってくるまで続いていた。

* * *

「side :」

「ここで間違いありませんわね」

ナビ機能付きの携帯電話と目的地を何度も確認しながらセシリアはその表札の隣にある郵便受けにつけられた苗字を見る。

『織斑』

二度見どころではなく三度見、四度見と繰り返してまでして目標点到達を確認したセシリアの脳内はというと、ピンク色に染まりつつあった。

（ふふふ、今日、一夏さんがご在宅なのは情報網から得ましたわ。そしてそこに訪れれば二人きりになれるのは……………なれます、わよね？）

だが、セシリアの脳裏に今では親友であり、戦友である少女たちの顔が浮かんでくる。

（篝さんは最近仲が宜しい様ですし、鈴さんともこの間外出なさられていたし……………クラスの情報網に乗るといふ事は抜け目の無いシャルロットさんの耳にも届いているでしょうし……………矢張り、時間との勝負……………）

『終日二人きり』は無理でも、『二人きりの時間』が過ぎせればい
いかなあゝ、なんて目標の下方修正をすると同時、咳払いをして喉
の調子を整え、いざインターホン（正しくは呼び鈴）のボタンに指
を伸ばし

「あれ、セシリア？ どうしたんだ」

「ぴいつ！？」

押す前に、背後から声を掛けられて奇妙というか、普段では絶対に
出さないような声で悲鳴を上げる羽目になった。

うろたえまくったセシリアは慌てて振り向く。

そこには、持参の買い物袋を肩に掛けた一夏が居た。

「いいいいい、一夏さんっ！？」

「おう。それでなんか用か？それともまた迷った？」

「迷ってません！」

「そりゃ何より。で、どうした？」

『どうした』と聞かれても突然の奇襲に頭の中がごっちゃになっ
ているセシリアは気の効いた事を言おうとして余計に混乱が酷くなっ
てゆく。

「ええとですね、これはその、」

そんな混乱しまくったセシリアの脳が出した結論は

「所謂、『来ちゃった』 ということころでしょうか」

どーにもな〜あれ
思考放棄と言わんばかりの行為だった。

それでも『来ちゃった』と言った時にはちょっと悪戯っぽく笑って
見せる位には思考力も残っている。

セシリアと一夏は知らないが、似たような会話をシャルロットもや
っている。

詳しくは80行目付近参照。

但し、その時は焦りまくっていた為に対応に出てきたのが筈だった
事に気付けていなかったが。

「そうなのか？ とりあえず上がってけよ。」

「あ、ええと、それではお邪魔させていただきますわ」

セシリアの脳内に『MissionComplete』と金色に輝
く文字が現れる。

だが……

「箒、ただいまー。」

「え？」

「ああ、早かったな」

「おかえりー、お邪魔してまーす」

「ええっ!?!」

何とも自然に居る箒と、箒に来客対応されているシャルロットが居る事にセシリアは計画の頓挫を理解し、がっくりと肩を落とした。

(まあ、結局はこうなると予想はしてましたが…)

幾らなんでも早すぎる。

二人きりだったのが玄関前だけだったという事に抗議したい気持ちでいっぱいになるセシリアだった。

まあ、シャルロット同様に『家に遊びに来ただけで十分』と割り切る事にしてリビングに足を踏み入れた。

#61：恋に騒がす五重奏 「来訪編 part2」(前書き)

どちらかと言つと織斑家周辺よりももう片方がメインだったり…

61：恋に騒がす五重奏 「来訪編 part 2」

丁度、セシリアが一夏と遭遇した頃……

IS学園一年寮では……

「はぁ………漸く『暇』を実感できる………」

空が、副寮監室で机に突っ伏していた。

その様子はまさに『ぐったり』という擬音を体現しているかのよう
に。

と、いうのも今日この日という千冬の休暇日と後々の余裕の為に群
れなす書類の山を真耶と共に崩し、千冬の分を優先して片付け、よ
うやく終わったのだ。

そして千冬は悠々と休暇に入り残されたのは真っ白に燃え尽きたサ
ポート組。

見かねた学校側の配慮でもう一人、休暇を取れることになったのだ
が、他の職員が『学園最強』の双壁を同時に休ませるハズも無く、
真耶が休暇入りとなった。

そして、少しでもゴタつけば空が解決と鎮圧に呼び出され奔走し、
場合によっては他学年生を一年寮副寮監室…又の名を『明鏡止水へ
の直通路』に招待して指導する。

『織斑教諭が休暇に入った』という噂を聞きつけ騒ごうとする者が

多くて中々に大変だ。

潰すだけ潰したら多少大人しくなったのでこうしてだらけられているのだが…

「…………でも、こう言う時に限って面倒事が起こるんだよね、経験上」

それは、言ってしまったが故にフラグが立ったのか、正確な予知だったのか…

数刻後、

「空くん、勝負よ!」

元同室の少女が遊びにやってきたと同時に学園生最強が勝負を挑んできたのだった。

「…………はいはい」

がた、と音を立てて椅子が動く。

空は憂さ晴らしの生贄が自分からやってきてくれた事を感謝する事にした。

当然、散々にいたぶってからぼつきりとやる予定である。

『ヤ』がどんな字を当てられているかは推して知るべし。

* * *

「side :」

それは、丁度セシリアが手土産に持ってきていたケーキを皆で食べていた時の事だった。

ケーキの数は六個でなんだかんだで全員集合を見越した数が用意されていたりする。

ピロロロロ

突如として鳴る電話。

一夏に食べさせてもらった余韻に浸っている三人をよそに一人電話機の元に向かって受話器を取り、

「はい、織斑です」

『あ、一夏……助けてくれ』

電話の相手は、ラウラだった。

しかもちよっと泣きそうな感じの声で。

「ら、ラウラか？ どうした？」

『 った』

「え？」

『…道に、迷った』

呟くような声に一夏は一瞬脱力して転びそうになった。

とはいえ、一夏もこの家に引越してきたばかりのころは何度か迷いそうになった経験がある。

なんせ一昔前に計画的に作られた住宅地なのだ。

似たような光景、似たような公園が多数有り間違えやすい要素盛りだくさんだ。

いくら住所を知っていても迷うのは仕方ない　そんな場所なのだ。

初めてなのに住所だけで来れたシャルロットの方が逆に珍しい部類に入る。

「わかった。今、迎えに行くから廻りに特徴のある建物とかないか？」

『ええと、今は公園に居る。巨大なタコが居る公園だ』

「ああ、あそこか。割と近いな。それじゃあすぐ行くからそこで待ってる」

『う、うむ』

ガチャリ、と音を立てて受話器を置く。

「ちょっとラウラを迎えに行ってくる。」

「どうしたのだ？」

「ウチに来ようとして迷ったんだとき。近場までは来れているらしいから迎えに行ってくる」

ふと、篝たちの脳裏に迷子になって泣きそうになってるラウラの姿を浮かぶが『そんな筈ない』と頭から追い出す。

「それじゃ、ちょっと待っていてくれ」

ガチャリ、と玄関を開けたら

「あっ！」

「お、鈴も来たのか。」

ちょうど、呼び鈴のボタンを押す寸前だった鈴が居た。

「ちょっと上がって待っていてくれ。迷子になったラウラを迎えに行ってくる」

「はあ？ どういう事！？」

「詳しい事はリビングに居る篝たちに聞いてくれ」

「ちよ、一夏！？」

「それじゃ、行ってくるぞ」

「ああ、もう！後で説明してもらうつからね！」

それから十分もしないうちにラウラを連れて一夏は帰って来た。

手をつないでいたのだが、その様子は『まるで兄妹だった』『妬ましさよりも微笑ましさ』が勝った』と目撃した彼女達は言う。

ともかく、IS学園一年生における専用機保持者の大半が一ヶ所に集まるという戦力過剰な状況が今ここに完成した。

* * *

「一方 IS学園」

とある一室、畳敷きの和間に敷かれた布団に一人の少女が寝かされ、瓜二つの それでいて印象は真反対な少女が少々心配そうに様子を窺っていた。

…早い話が空に勝負を挑んでいたぶられてから撃墜された楯無が寝かされ、簪が付き添っている。

「……………ううん…」

「あ、気がついた？」

「簪ちゃん？ ……それに、ここは…………？」

「一年寮の副寮監室だよ。 まったくもう、余計な心配かけさせないでよね。お姉ちゃん」

「あはは、耳が痛いわ」

何かと言って簷が頼り、慕う相手 空に対する嫉妬心からこうして食ってかかる事が度々あったのだが、大抵空の方が多忙で相手を出来ないか、楯無の撃墜で終わっている。

ちなみに今回は雑風に装備されていた『試験運用中の特殊兵装』に散々にいたぶられた後に楨篠技研製造距離戦用銃による不意打ちと福音戦でも用いられた『至近距離からのマイクロミサイル掃射』によって撃墜されている。

ちなみにこの『試験運用中の特殊兵装』の被害者リストには一夏たちの名も載せられていたりする。

「そろそろ諦めたら？」

「そうはいかないわよ」

「…空くん、最近は織斑先生と互角に近い模擬戦闘やってるって聞いているけど？」

「……………それでも、よ」

一瞬心が折れそうになった楯無ではあったがなんとか自分を保つ。

楯無はよいこらしよ、と起き上がるうとする…が、簷によって遮られまた寝かされてしまった。

「とりあえずは軽い脳震盪だけみたいだって言ってた。でも、放っておいたらまた無茶するでしょ」

「ま、まあ……必要ならば？」

そこで『しない』と断言できないのが楯無の『らしさ』ではあるし、簪も姉の性格は良く知っている。

「だから、今日は付きつきりで監視しろって言われちゃった。」

そう『教師として言いつけた』のは空である。

ついでに『楯無の行動の理由は簪に構って欲しいから』という事も添えて。

「そう」

「うん。だから大人しくしててね」

「…わかったわ。その代わりに、最近の簪ちゃんの事、色々聞かせてもらっていい？」

「うん。そのかわりお姉ちゃんも」

「それくらいならお安いご用」

今度は簪の手を借りながら起き上る楯無。

夏の昼の日差しが差す部屋で久々の姉妹の語らいが始まるうとしていた。

#62：恋に騒がす五重奏 「探検編」(前書き)

何処を探検するかは推して知るべし。

#62：恋に騒がす五重奏 「探検編」

「side：一夏」

夏の日の午後、

昼食を終えた後片付けを終えて人数分の飲み物と共にリビングに戻ってきた俺の眼前には

「くっ、やりますわねッ！」

「ホント。…あつという間にパイルバンカーパイルバンカー狂になるところがシャルロットらしいけど。」

「ふふっ、逃がさないよー！」

「ふむ……………ではここで王手だ」
ばちっチェック

「…ラウラ、それは『打ち歩詰め』と言って反則だ」

「……………むっ」

TVの前でコントローラーに握り白熱するセシリア、鈴、シャルロットの三人とソファアの辺りで将棋に興じる筈とラウラ。

うん、仲が良いってのは、ホントいい事だよな。
編入したてのころのラウラは孤立しそうだったからちょっとばかりハラハラしてたけど、うん。中々に馴染んでる様だし……………

うんうん。それは良いんだけどさ…

「俺、完全に母親ポジじゃね？」

そう、遊びに来た子供の友達を『あらあらつふふ』的に見守ってる
ような…

「ん？ ああ、一夏。片付けは終わったのか」

「ああ。ついでに冷茶も用意したぞ」

箒がこつちに気付いて声をかけてきた。
すると将棋のルールブックを片手にうんうん唸っていたラウラも「
ちらに視線を向けてくる。」

「ふふ、まるで母親だな」

「うむ、空かまろまのようないい母親になるだろう」

「ぐあっ」

箒とラウラに言われて俺の心に大ダメージ。

「冗談だ。おい、そっちの三人も一度中断だ。一夏が戻って来
たぞ」

「あ、それじゃああと四十秒待つて。決着着くから」

画面から顔をそむけずに鈴が言う。

カチャカチャとボタンを操作する音と共に画面上でパイルバンカーによる一撃必殺を狙うラファールと手堅く銃撃を繰り返す飛龍が激しく動き回っていた。

そして画面上部に表示されている時間は残り三十数秒。

確かに、あと四十秒もすれば制限時間になる。

「ふむ、中々いい動きをするな」

「まあ、ゲームだからな」

鈴対シャルの対決は残り時間がゼロになると同時にパイルバンカーとグレネードが同時に互いのシールドをゼロにして相打ちという結果に終わった。

「で、これからどうする？」

今までのまま　ゲーム三昧でもいいのだができれば多人数モノにしていたきたい。

じゃないと俺が入れないし。

「そうだな……たしかアキトさんが色々なボードゲームとかを持っていたはずだったな」

「あ、今も俺の部屋に保管される。ちょっと待っていてくれ、今持ってくるから」

俺が自室のある二階へ向かおうとリビングを出ると

ぞろぞろ

「……なんでみんなついてくるんだ？」

何故か全員が後をついてきた。

「うむ、所謂『家内探検』というヤツだ」

「日本のこのような家を見る機会は中々有りませんからね」

代表してかラウラとセシリアがそう言ってくる。

まあ、アキ兄が集めてたボードゲームは結構な数が有るし、運ぶ手間を考えれば丁度いいか。

「それじゃあ、簡単に案内するぞ」

俺はそう言ってから一足先に階段をのぼりはじめた。

その後ろを『へー』とか『ふむ』とか言いながら付いてくるみんな

シャル、セシリア、ラウラは珍しそうに、篝と鈴は懐かしそうな表情で。

そついや、前にセシリアが来た時は二階に上がってなかったつけな。途中で九〇度曲がった階段を登り切ると、そこには部屋が幾つか並んでいる。

「ええと、向こうの突き当たりが千冬姉の部屋でその隣は昔、東さんと篝の部屋と化してた客間。で、こつちの突き当たりが俺の部屋。そつちは元千冬姉の部屋で今は空き部屋だな。」

「ああ、懐かしいな。確か、今の一夏の部屋がアキトさんの部屋だったか？」

「良く覚えてるな」

篝の懐かしむような声に俺も昔の光景が目には浮かんできた。

俺も千冬姉も部屋を貰ったはいいけど結局何かと言ってアキ兄の部屋に入り浸ってたな。

「ええと、その『アキトさん』という方はどんな方だったのです？
一夏さんは『兄』と呼び慕っているようですけど」

そこにセシリアの疑問の声。

まあ、ここに居るメンツでは俺と篝、あとシャルが少し会った事があるだけだから当然か。

「んー、簡単に言えば千冬姉や東さんが小さい頃から面倒見てもらってる人だな。」

両親に棄てられた俺たち姉弟からすれば育ての親とも言える筈の両親　篠ノ之の小父さんと小母さんに並ぶ『親』と言っても過言ではない人だ。

「一緒に暮らしてたの？」

「というか、俺たちがアキ兄の家に厄介になってたつて言うべきかな。」

シャルの間に俺は簡単に答えると筈が続いた。

「元々はアキトさんの父上の持ち家だったんだが、早々に亡くなられてな…アキトさんが成人するまでは榎村家と親交のあった篠ノ之家が代理人として預かる事になっていたんだ。」

そのアキ兄も成人前に行方知れずになり、そうなる前にとられていた手続きの結果千冬姉が成人と同時に相続する形になった。

どんな手続きしたのかは全く分からないが。

「さて、ここで立ち話してるのもなんだし、とりあえず俺の部屋に入るぞ」

木目調の引き戸を開けると机のある処だけ板張りになっている、畳敷きの部屋が現れる。

ここが俺の部屋であり、かつてはアキ兄の部屋だった場所だ。

部屋の広さとしては一人部屋としては広め、二人部屋にするには狭め…位だろうか。

当然、六人も居るとけっこう手狭になる。

ふと、俺は机の上に有るモノが気になった。

俺は机の上にモノを出しっぱなしにする事は殆どない。

『出したら仕舞う』が昔からのお約束だ。

だが、それは机の上に出しっぱなしになっている。

下手人は恐らく…

「また、東さんか？」

「ん？、姉さんがどうかしたのか？」

名前に反応して箒が俺の方に寄って来た。

「いや、どうやら東さんが入り込んでアレを見てみたいだ」

俺は机の上にあるアルバムを指さす。

「ああ、なるほど」

納得顔の箒。

「ん、どうした？」

「何か有りました？」

と続々と集まってくる。

「それは……………アルバム？」

「見てみるか？」

答えは返事ではなくて伸びてきた手が物語っていた。

どうやら、これからはアルバム鑑賞会で決まりみたいだな。

「それじゃあ、俺の部屋こゝじゃ狭いしアルバム持ってリビングに降りるぞ」

* * *

「一方、IS学園」

寮のとある一室はある種異様な空気に包まれていた。

…とある一室と言っても簪 & amp; 箒の部屋だが。

「十三」

「一」

「二」

「やん」

続々と増えてゆく場のカードたち。

楯無と簪は己が従者である虚と本音を呼んでダウトに興じていた。
ちなみに順番は『楯無 簪 虚 本音 …』である。

「四」

「五」

「六」

「七」

そして、その時は来た。

「八」

簪が楯無の独占する『八』に当たったのだ。

「簪ちゃん、それダウ『お姉ちゃんは私のことが好き』　　ッ！」

絶妙なタイミングで入った簪の言葉に『嘘だ』^{ダウト}と言えなくなってしまった楯無。

次のプレイヤーである虚が次のカードを出してしまい楯無は絶好のチャンス逃してしまった。

その次に待っているのは楯無が一枚も持っていない『11』。

「九」

「十」

「十一」

順番が回ってきた処で楯無は務めて『持ってます』という顔で適当なカードを出す。

けれども、それが演技である事くらい妹と従者は気づいており…

「姉さん、ダウト」

「簪ちゃん、お姉ちゃんの事嫌いじゃないでしょ？」

これでダウト、と言われたら多分楯無は泣く。

そんな両刃の剣を振ってみた楯無ではあったが、

「それは否定しないけどダウトだよ」

「……………判ったわ」

最早立て直し不可な位に手札が増えることが決定した。

実を言うと楯無の次に出すのが簪であるためにこの『ダウトと言えない状況を作って先に出させる』は成立しないのだが。

渋々と山を成す捨て札を集めて手札に加える楯無。

そしてまたゲームが再開される。

そこでは和やかで微笑みの絶えない時間が流れていた。

#63：恋に騒がす五重奏 「過去と今とこれから」

「side…」

「うわ、一夏って小さい頃こんなに可愛かったんだ」

「あ、懐かしいわね。中学の制服。これって入学式の時のヤツ？」

「ふむ、確かにこれは何と言うか庇護欲がそそられるな。その

せいで余計に隣に写っている筈が無愛想に見える」

「うるさい」

「なんとというか、あの織斑先生の幼少時代は…写真を見ても想像できませんわね…」

etc etc。

数冊のアルバムを時代を遡って行く形でわいわい騒いでいると時計の針は早くも午後四時を指そうとしていた。

「ねえ、ふと思ったんだけどさ」

「どうした、シャル」

「勘違いかもしれないけど、アキトさんてなんか空に雰囲気似てない？」

シャルロットの指摘に一夏は息をのんだ。

……その指摘は一夏が春に初めて空と出会った時に抱いたモノと同じようなものだったから。

「顔立ちとかも、性別差とか年齢差を考えれば許容範囲なくらいに似てるわよね」

『会った事無いから良く分からないけど』と付け足しつつ同意する鈴。

「まさか、親子なのでは!？」

「それは　「そんなこと、あつてたまるか」　へ?」

ラウラの『親子説』に一夏が『それは無い』と言おうとしたら別の声が割って入ってきた。

その声はそこに居る全員がなじみ深い、聞きなれた声。

その主は

「あ、お帰り。千冬姉」

「ああ、ただいま」

すぐさま一夏は立ち上がり、千冬の側まで行って鞆を受け取って片付けに入る。

「あ、お茶は熱いの、冷たいの?」

「そうだな、冷たい方で頼む」

「了解」

「ああ、部屋にスーツとか秋物とかを出して鞆に入れてあるから
「判った」

あつという間に身一つになった千冬はアルバムに群がる一団に混ざり込んできた。

「で、何を根拠にアキト兄さんと千凧が親子だというんだ。ラウラ」

「は、え、ええと、」

がっし、と肩を掴まれ、かつ詰め寄られてどもるラウラ。

その一方でシャルロットは箒にこっそりと尋ねる。

「……織斑先生は、どうしてあんな反応を？」

「……まあ、判り易く言えば私たちと一夏の関係のようなモノだからだ。」

「……成る程」

聞けば納得であった。

「……まあ、いい。他人の空似という事もあるからな」

ふと『空だけに空似』という非常にくだらないギャグを思いついてしまった一夏だがぐっと飲み込み、淹れてきた冷茶を千冬の前に出す。

それを一気に、何とも雄々しく飲み干した千冬はすっと立ち上が

る。

「この件について、何か知り得た事が有ればすぐに報告しろ。いいな」

「ハッ！」

「はいッ！」

条件反射で直立敬礼をしてしまうラウラ。

他の面々も自然と姿勢が伸びてしまう。

満足げに頷いた千冬はそのまま部屋のある二階へと引っ込んでゆく。

「な、なんだっ たんですの？」

「…織斑先生も恋する乙女だったって事だよ」

「？」

シャルロットの答えに首をかしげるセシリア

ほどなくしてスーツ姿に着替えた千冬が再びリビングに現れた。

「あれ、千冬姉。この後は？」

それを一夏は呼びとめる。

「少し出掛けてくる。夕飯は要らん。泊っていくなら節度と申請を忘れるなよ。」

過ぎまで帰ってこないと……あ、はい。それじゃその間はこちらで寮監と担任の仕事は代行しておきます。せつかくの休みですからゆつくりしてください。……はい。ではお疲れ様です」

ガチャ……

「……山田先生と織斑先生は明日の昼ごろまで不在……っと」

寮監室の並びにある寮管理室（配電盤とか共有スペースにある照明などの電源スイッチがある『文字通りの管理室』）のホワイトボードにメモを書き足す。

「……休み、か……」

夕刻に差し掛かったというのにまだまだ高い夏の太陽を見上げる。その目は十五の少女の物ではなく、仕事に疲れた会社員サラリーマンの様であった。

* * *

「お待たせしました」

「いや……突然呼び出して悪かったな」

「いえ、休みと言っても部屋で通販カタログ眺めながらゴロゴロしてるだけでしたし……」

駅から少し行った商店街の一角の地下にある店『バー・クレッツェンド』。

初老のマスターが一人で切り盛りするその店はフランス製の調度品で統一されたまさに『大人の社交場』と言うような店だ。

呼ばれてやってきた真耶がカウンター席にかけると、千冬が真耶の分のノーマル&ブラック・ミックスのグラスビールを注文する。

「千冬さんも新しいのを御出ししましょうか？」

「そうですね、頼みます」

「かしこまりました。」

マスターが奥のサーバーの所へ行っている間に千冬はグラスに残っていた黒ビールを一気に啜る。

既に二杯の黒ビールを飲んでいる千冬は控えめの照明もあって目立たないが僅かに赤い。

程なくして戻ってきたマスターは空になったグラスを下げ、真耶のビールと千冬の黒ビール、それにサービスのキューブチーズを出して、二人から少し距離を置く。

『人は間近に人がいては落ち着いて話せない』と言う事を長年の経験から良く知っているが故の気配りだ。

「乾杯」

グラスを鳴らし、真耶はちびちびと、千冬はゆっくりとだが長くグ

ラスを傾ける。

そこに新たな来客を告げるドアの音。

「いらっしやいませ」

千冬はグラスを傾けたまま一瞥しまた正面に向き戻る。

その新しい客　スーツ姿の女性は真耶とは逆隣…千冬の右側の力
ウンター席に掛ける。

「マスター、チェリー・ブロッサムお願い」

「かしこまりました。」

少しばかり離れていたマスターが注文を受けて奥へとゆく。

「……………何の用だ、東」

隣に座った客　東に千冬は視線も向けずに問いかけた。

「えっ」

思わず声を上げた真耶。

「もう、つれないな。」

対して束は苦笑に近い笑みを浮かべつつスーツの内ポケットから取り出した封筒を千冬の方へと差し出した。

「今日の用事はこれだけ。すぐに退散するよ」

「……そうか。で、それはなんだ？」

「招待状」

それ以上言わないのは『見れば判る』と言う事だろうと辺りをつけてグラスを置いて受け取る。

会話が終わり、口を出せない真耶はただただ時間を稼ぐかのようにゆっくりとビールのグラスを乾かす事しかできなかった。

「お待たせしました」

注文していたカクテルが出てくると束は一気に呷って席を立つ。

「おいおい、大丈夫なのか？」

「篝ちゃんと違って結構強いからね」

「……そうだったな」

束は言った通りに勘定を済ませ席を立つ。

「それじゃ、また近いうちに。今度はゆっくり飲むのも良いかな」

「……一応、楽しみにしておいてやる」

「ふふつ、素直じゃないなあ。それじゃ」

まるで一陣の風のように束が去って行き、漸く真耶は口を開く事が出来た。

「えっと、織斑先生。それは…？」

「招待状、だとさ」

「招待状…ですか……。なんの招待状なのでしょうかね」

「さあ。見るまでは判らん。……が、一つだけは言える事がある」

「一つだけ、言える事？」

「何にせよ、タダでは終わらなそうだ」

「……また、忙しくなりそうですね」

「…そうだな」

グラスに口をつけて僅かに残っているビールを飲む。

「……………」

空になりおかわりを注文したところでそれをきっかけに真耶は話を
変える事にした。

「そついえば、今日はどうしたんですか。確かお休みだから帰省
されたんじゃない？」

「ああ、そのつもりだったんだがな、家に女子が居た。」

千冬が話に乗ってきた事に内心でガツポーズする真耶。

正直言つて重苦しい話はもう勘弁願いたい処だ。

「女子　　というと……いつもの篠ノ之さんたちですか？」

「ああ、いつもの五人組だ」

「……専用機持ちが六人ですか。　今すぐ戦争が起こせる戦力ですね」

「冗談にならないぞ、それは」

そう言いながらも、千冬は笑いながらチーズを頬張る。

「姉としてはやっぱり気になりますか？弟さんがガールフレンドといるのは」

「それなんだがなあ……」

グラスを傾け喉を湿らせてから千冬は話を続けた。

「……あいつは、臆病だからな」

「臆病、ですか？」

真耶は不思議そうに尋ね返す。

真耶からすれば正体不明のISだろうと自分より格上の相手だろうと臆せずに挑みかかる一夏と『臆病』という単語がどうも結びつかなかった。

「親しい人を亡くするのが怖いなら、最後の一線を越えなければいい。……そう、心のどこかが思ってるんだらうな」

「誰か、亡くなっただんですか？」

「……七年前にな、一夏にとっては父親代わりだった。」

「……織斑先生にとっては何？」

「……私や東の兄分で、保護者代わりで 初恋の相手だ」

だいぶ良いペースで飲んでいるせいも、千冬の口の滑りは何時になく良かった。

「成る程。……どんな人だったんですか？」

「ふむ……簡単に言えば今の一夏か、千凧のような人だったな。」

「成る程。少なくとも面倒見が良い人だって事は判りました」

「それだけでは無いぞ。アキト兄さんは」

酔った勢いか饒舌に惚気だす千冬。

真耶はそれに相づちをうちながら聞き手に廻る事にした。

「おい、聞いているのか？」

「はいはい。朝まで付き合いますからゆっくり語ってください」

「ふん……」

年下の真耶がお姉さんぶった笑みを浮かべている事が悔しいようなもどかしいような…それでもってどこか可笑しい気持ちになって千冬は残っていたビールをぐぐつと一気に飲み干す。

「そういうセリフは男に言ったらどうだ？」

「そうですねえ。目の前の人よりも男前な人が現れたらそうします」

「ではマスターだな。お勧めだぞ」

「千冬さん。年寄りをからかうものではありませんよ」

言いながらマスターがおかわりのグラスを出してくる。

だが、それは黒ビールではなくソルティードッグだった。

「……まだ、頼んでない」

「そろそろ飲みたい頃だと思ひまして」

「…ふん。私の周りはお節介焼きばかりだ」

今度は憎まれ口を叩くが満更ではないような千冬だったが、先読み

されているムードに少しでも抵抗したくて唇を尖らせてから一口味わう。

まるで子供が拗ねているかのような顔だったが、真耶もマスターも何も言わない。

「愛されているって事ですよ。ね、マスター」

「そうですね」

お節介ついでに何か作りますね、と言ってマスターは奥のキッチンへと引っ込む。

まだ子供じみた様子で拗ねている千冬は残っていたチーズを一気に口へと放り込んだ。

「色々やって、色々あって…みんな成長するんです。一夏くんもきつと…だからきつと大丈夫ですよ」

優しいな笑みを浮かべて真耶が言う。

千冬は小さく『そうか……』と呟いてもう一口、グラスを傾ける。

「ところで、真耶」

「なんですか？」

「今のセリフ、年寄りくさいぞ」

くくく、と笑いながら千冬に言われ

「な、なんですかっ。笑うなんて酷いですよ！」

真耶はむすーっと頬を膨らませる。

「くく…悪かった悪かった。」

千冬は笑いながらグラスを掲げる。

真耶もそれに倣ってグラスを掲げ

「みんなの成長を願って」

グラスがカチンと鳴り、氷がカランと軽やかな音を立てた。

夏の夜は、まだまだこれからだ。

#63：恋に騒がす五重奏 「過去と今とこれからと」 (後書き)

千冬&真耶という一年寮寮監が二人とも休暇〓空一人に
緊急の仕事が集中

結果として空が悲惨な事になってます。

きつと、寮に戻った一夏たちや千冬たちを迎えた空の目は死んでい
るハズ…。

そして千冬&真耶の話の部分に入った途端に筆が進むって

……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5136u/>

インフィニット・ストラトス 絶望の海より生まれしモノ

2011年12月9日02時55分発行